

Re:ちよろすぎる孤独な吸血女王

虚子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

リゼロにスバルの軽口にすぐなびいてしまうようなキャラを入れたらどうなるかなと思って書こうとした。

吸血鬼の女王様ですが、だいたい黒髪血眼幼女です。

リゼロはアニメ版から入り、アニメ版以降のWEB版を読んだ感じ  
です。

著者の知識不足注意。

誤字脱字、原作設定無視があれば訂正する也。

一章一話の一部を削除・変更（2017/01/12）

二章四話の一部を削除・変更（2017/01/19）

## 目次

### 第一章 血の滴る一日目

第一話 『ちよろいん』 1

第二話 『幼女拳炸裂』 7

第三話 『心の闇』 17

第四話 『現れないスバル』 25

第五話 『天敵、剣聖、世界に愛された男』 50

第六話 『幼女は遅れてやってくる』 59

第七話 『清算の約束』 79

第八話 『嫉妬の幼女』 92

第九話 『正義もまた遅れてやってくる』 109

第十話 『一日の終わり』 124

おまけ 『風呂問答』 134

### 第二章 血にまみれた一週間

第一話 『嫌な朝』 141

第二話 『ふて寝で終わる一日』 153

第三話 『絵本とシャトランジ』 160

第四話 『絶望の音』 167

第五話 『遅すぎたスバル』 185

第六話 『血の力、愛の力』 194

第七話 『三周目のスバル、そして四日目』 201

第八話 『ささやかれる愛』 215

第九話 『化け物の愛の中で』 227

第十話 『コウモリの牙』 240

第十一話 『世界の終わり』 258

第十二話 『ひとりぼっちのスバル』	269
第十三話 『五周目の朝』	281
第十四話 『決戦前日』	290
第十五話 『スバルむそう』	298
おまけ 『夜伽話』	319
おまけ 『百合風呂』	325
おまけ 『真面目な話』	333
おまけ 『けーたい』	336

# 第一章 血の滴る一日目

## 第一話 『ちよろいん』

——死ねえ！ 死ねえッ！ シネシネシネッ!!!  
両手両足を磔にされてなお、ラルトレアは牙をむき出しにして目の前のニンゲンどもに食らいつこうとしていた。

よだれを垂らし、彼女の真紅の瞳がにじむように白目まで真っ赤に染まっている。

だがその怒りをもともせず、突っ立っているニンゲンどもがいる。

—— 教皇の犬どもがア!!

そう叫ぼうとした瞬間、彼女の豊かな胸部の中心に白銀色の槍がぶつ刺さっていた。声ではなく、噴き出す血の塊。肺から胃へ、胃から食道を伝い、口の中を血でいっぱいになる。飲み込めず、吐き出した。

ベチャツ、ベチャチャベチャツと、生々しい音とともに、急速に力が抜けていくのを感じる。

——……ここまでなのか、我は……

人間ではありえないほどの血液量。おびただしい血の匂いとともに、石の床を赤色に満たしていく。

もう、何も“力”を使えない。

滑らかな男の声が地下室に残響する。

「貴様の罪は重い、吸血鬼よ」

ピクリとも動かなくなり、うつむいた彼女を見下ろす人間の男たち。

皆が皆、白銀の鎧と槍を持ち、先頭に立つひと際大きな男が口を開いていた。右腕に十字を刻み、赤いマントを纏っていた。その威風堂々たる態度の前で、彼女は顔を上げる余裕さえなかった。

「時のままに死に絶えるがいい」

それだけ言って、踵を返してニンゲンの集団が立ち去っていく。

ガチャガチャと鎧の関節部分がこすれ合う音だけが聞こえた。  
そして——あとには彼女だけで、なにも残らない。

この廃城には、彼女以外に動けるものがいなくなってしまった。  
ズタズタにされた吸血鬼の戦士たちや、灰となったゾンビたち。誰もその主のもとに駆け付けることができない。

廃城の主である彼女が声を出しても、誰もやってくることはない。  
それがわかっていただけに、彼女は十年はずっと壁に磔にされたままになっていた。だが二十年、三十年と過ぎても、誰も訪れることはない。

わかっている。

悪事を企む者が彼女を呼び起こさないように、あのニンゲンどもが何かしたのだ。

「うとうう……」

ついに、彼女の感情が限界に達しようとしていた。ホコリにまみれた床を舐めるように、うめいた。磔の魔法は解けても、もうここから動けない。

随分、血の力を消費してしまった。

力が無くなるにつれて、体が縮んでいくのがわかる。

——我は……間違えておらん……

絶望的な現実がある。されどそれが自らの過ちであると認めることはできなかった。そんなことをしてしまえば、彼女は自らの全部を否定してしまうことになる。辛く苦しい幼少を乗り越えたあのときの自分さえ、なかったことにしてしまう。それがとてつもなく恐ろしかったのだ。

吸血鬼の女は過去を思い返す。

この廃城に移り住んでからというものの、彼女の回りには必ず三人がいた。元ニンゲンの執事・アルベルト、ヴァンパイアハーフのメイド・クリス、そして自ら造り上げた理想の騎士・ボルフオーン。

だがそんな彼らも、今はここにはいない。

「……く、ふ……ふ……終りだ……終わりにしよう……」

あきらめしかなかった。精神が生きることをやめた途端、彼女の肉

体がみるみるうちに小さくなっていった。

身長は縮み、両手両足もその丈を短くしていった。

その豊満な胸も、お尻も、幼子のようになってゆく。

気づけば七歳ぐらいの女の子の姿になっていた。

変化の反動で記憶さえも曖昧になっていく。視界がぐらつき、目ま  
いと頭痛がおそってきた。

「われは……あたし、は……」

このままいくと赤ん坊となり、果てには受精卵にまで戻って死んで  
しまうだろう。

彼女の意識はもう保たれていない。

そこに声が降ってきた。

——こちらへ来るがいい、吸血の娘よ——

それは黒い手でも魔女でもない。まるで龍のような神秘的なオ  
ラをまとったものだった。



混濁した意識のなから、彼女は浮き上がっていった。そして彼女は  
うつ伏せに倒れた地下室から、彼女は薄暗い裏路地へと移動している  
ことを知る。

「……あた……われは………。………はえ？」

視界がぐにやぐにやに歪んでいた。

音が聞こえる。すぐそばにある大通りを複数の何者がか行き交っ  
ている。土ぼこりを巻き上げ、ドシンドシンと地面を鳴らしている。

耳を石畳にくっつけていた彼女にはそれがよく聞こえた。

意識が鮮明になって、音が聞こえるようになっても長年光を浴びてい  
ないせいか、うまく視覚情報を獲得できない。

ぐにやぐにやに歪んだり、ぼんやりとピントがずれていた。

それでもわかる。

「何が起きたのだった？」

まるで何が何やらわからない。

自分の見知っている城の中ではない。ましては城から見える風景とも180度異なっている。一体ここはどこだ、異世界に来てしまったのかと彼女は考える。

そしてそれは当たっていた。

ぼんやりとした景色のなかに、猫とか犬、トカゲみたいな顔を持つ巫人たちを認めることができた。

そんな彼らが大通りを白昼堂々歩いているではないか！

彼女が知る限りでは、あのような生物は吸血鬼同様に迫害され、聖騎士団に狩られていったはずだ。

それなのに。

不思議で不思議で仕方がない。

彼女はぼやけたまま、壁を伝ってゆつくりと立ち上がった。そうして近くで彼らを見ようと大通りから顔を出してみると。

「お？ んん？ どうなっているのだ？ 何がどうなっているのだ？

——へぶっ」

キョロキョロと見まわしていた彼女は、誰かに顔面からぶつかってしまう。

「ぎ、きさまー！ 何をするのだー！」

「おうすまんすまん、ちっこくて見えんかったわ！ ガハハ！」

さっさとどこかへ行ってしまう犬の獣人。

変なイントネーションで話す失礼なやつだ。と、考えて気づく。彼女は小さくなっていたのだ。

まるで幼女のような背丈、胸、両腕、両足、お尻。

一つずつ自分で触って確かめた。

「どうなっておるのだ……」

化けた覚えはまったくなかった。戻そうと“力”を使おうとして、『血の蓄え』が底を尽きていることを知った。

これでは彼女は本当に非力な幼女でしかない。

「……………」

言葉を失ったまま、裏路地に戻った。

石畳の階段に腰かけて、ぼーっとあたりの風景を見ていた。

どうすればいいのか分からない。

自分の手元を見ても、幼稚な自分の肉体しかない。

いつものダークドレスも体に合わせて収縮している。レースのついた薄布の黒手袋もそのまんまだ。

でもそれだけだ。

着の身着のまま、というのはまさにこのことだろう。

食料も非常食も、酒もワインもない。

趣味だったチェスも、財宝類もない。お金もない。財宝類があれば換金できたかもしれないというのに。

あるのは、服と肉体だけだ。だが血のストックはゼロ。

今ここで殺されれば本当に死ぬ。今すぐにも血を吸わなければならぬ。

——しかし。

「……………むやみに殺さないでください、か……………」

メイドの言葉が思い出される。

……………あまり、殺しをする気にはなれなかった。

目の前に居る全員、獣人を殺してしまえばすぐとはいえないものの、万全の状態に戻れるかもしれない。

されど、それをする気にはなれなかった。

彼女の心は傷ついていたのだ。

と、そこに。

「——お、いたいけな幼女発見。どうした？ 何だか落ち込んで体育

座りしてるけど」

「え……………」

いきなり変な男が話しかけてきた。

大通りから裏路地に入ってきて、仁王立ちしながら胸を張っている。見たこともない黒装束を着ていて、手にはこれまた変な白い袋を持っている。

男は額に汗をかいており、平静を装っているだけで焦っているのだとわかった。

「そ、そんな目で見ないでくれ……………いや、なんか困ってるぽかったから

さ。無一文だけど話だけは聞いてやれっから！ あと、今俺もパニクってて現状把握したいから話し相手が欲しいんだよ。三人寄れば文殊の知恵？ とか言うだろ——あ、これ通じねえか」

「く、くふふっ」

よくしゃべる男だ。初めの印象はそれだった。しかし聞いていると意味が分からずとも妙に面白く、その出で立ちからして興味がわいた。

そしてなにより、男と話していると落ち着くのが分かった。

ようやく眩暈も収まってきて、男の顔が鮮明に映った。

「やっぱり女の子は笑顔が似合うな！ 可愛さ百万倍！」

「…………ふふ」

鋭い目つきに三白眼。

自分と同じ黒髪だが、彫は浅く、瞳の色も真つ黒だ。もつと東の方にこんな顔の人種がいると聞いたことがあるが、実際には見たことがなかった。

そんな変な人間と出会って、彼女はうかれていた。

思わず笑みが漏れてしまうのが抑えきれない。この男は、彼女の成人状態を見たときどんな反応をするだろうか。

こうして、昼のひとときの裏路地で、異世界から来た少年と吸血鬼の少女とは出会ったのだった。

## 第二話 『幼女拳炸裂』

「ラルトレアだ。よろしくな、スバル♪」

「お、おう。思いのほか好感度高くてびっくりだぜ。ラルたん」  
「たん？」

「愛称ってやつだ」

くふふつとつい笑ってしまいうラルトレア。

この口が達者なお調子者のことを完全に気に入ってしまった。  
スバルもまた、ラルトレアの幼い美貌、その赤い瞳に目を奪われていた。血のように赤く、その光彩は幼さに反してドロドロと濁っている。

そのアンバランスさにスバルは引き込まれていた。

「ああ、そうだ。スバル、そういえば異世界がどうのと言わなかったか？」

「あ、いや、あれはその、あれでして！」

「今さら誤魔化さなくていいだろう？ 私も同じだ。気が付けばここにいた」

「マジで?! ラルたんが俺を召還した美幼女魔術師とか?!」

「いや私も呼び出されたのだ。誰か、とかは分からない」

「そっかー。でもよかったぜ、一人でどうしようかって不安だったんだ。ラルたんとお出会えたのは運命だな！ デステニー！ 間違いない！」

ナツキスバル。

黒い短髪に、鋭いつり目のお調子者。

とても愛嬌のある青年。

「そうだな、運命だ」

「おう、そうだぜ。でもただの運命じゃない！ きつと赤い糸だな！」

だからたぶん能力無双じゃなくて助っ人無双なんだろう。ラルたんつてもしかしてめちやくちや強かったりして?！」

「紅い糸とはスバル本当に……。いや、私の力か？ 私は弱いぞ、なにせ幼女だからな」

ああだこうだとスバルと話しているうちに、いくつか分かってきたことがある。

スバルの出身は日本だということ。

しかしラルトレアは日本という国を知らない。

それはつまりラルトレアの世界とスバルの世界は違うということになる。

「スバルは元居た世界に戻りたいのか?」

「そうだなあ、でもこっちの世界が楽しければそれでよし！ ラルトらんに出会えたしな！ これでこの世界に居る価値はある！」

「……スバル……。私も、ぐすつ、元の世界には戻りとうない」

「おいおい涙は似合わないぜ！ せっかくの可愛いお顔が台無しだ」

くふつ、とラルトレアは泣きながら笑った。

元の世界にこうやって会話ができる存在なんていない。城に居た彼らだって、ラルトレアを本当に童女扱いしてくれることはないだろう。

彼女は吸血鬼の女王なのだ。

絶大な力を持つ不老不死の化け物である。

しかし今はただの幼女だった。血を吸わなければ弱体化するだけだ。

だがこのまま放置してしまうのは危険だった。だから――

「スバル……」

「ん？ お、マジマジ何ですか?!」

ラルトレアは両腕を広げてスバルに真正面から抱き着いた。その薄い胸板をスバルに押し付ける。

スバルの短い髪先、襟足のところ、その日差しを浴びていないような首筋にくちびるをくつつけた。その柔らかい感触にスバルがビクンとふるえる。

がぶっ。

なるべく痛くならないように、幼女の犬歯をスバルの肉に突き立てた。その小さな傷跡から漏れ出るごく少量の血液を吸う。

甘噛みをしたあとは、ペロペロと優しく舌を使ってなめてやる。

これで“吸血衝動”は抑えられる。最低限の吸血だ。幼女並の肉体能力を維持できることになる。

「ああお父さんお母さん息子は今から幼女と超えてはならない一線を越えそうです……」

「何を言っているのだスバル」

「あ、あれ？」

「契約だ。紅い糸のな」

契約だなんて嘘だった。

眷属をつくるための吸血もすることができた。それをすればスバルはラルトレアの言いなりだ。でも、それはしたくなかった。

「スバル、行くぞ。まずは情報収集だ。情報は戦において命だからな」

照れを隠すように、ラルトレアはスバルの手を引いて歩き出した。それになされるがままに、ついてくるスバル。

騎士とも執事も違う。

スバルは一体自分にとって何なのだろうか。

家族だろうか、友人だろうか、それとも。

考えることは尽きない。



「次はこっちだ」

目つきの悪い黒髪の少年が、高貴そうな振る舞いの少女の手を引っ掛けて連れまわしている。そんなふうには、周りからは見えるだろう。実際はその正反対。

黒髪の少女が黒髪の少年を引っ張りまわしているのだ。一見兄妹にも見えそうな彼らだが、身なりも違えば力関係もちがう。

口だけが達者な少年と違って、少女の行動力と頭の回るスピードは凄まじい。

まずスバルがあしらわれた果物屋の主人に対して、情報収集。「自分とはある遠方の国の貴族であり情報が欲しい。リングを買うから何でも話せ」というような意味のことを、わざと長ったらしくそれっぽく言って、世界の情勢を聞き出した。

ここが親龍王国ルグニカということ。使われている通貨のこと。などなど、日常的なことなどだ。

「感謝するぞ主人、この礼は必ず返す。我は恩を忘れぬ王なのだ」  
「おう嬢ちゃん元気だな」

果物屋の主人に別れを告げて、次に街中を歩くことにした。  
歩いている人々、使っている道具とか食べ物。

「できれば警察の詰め所とか交番みたいなのあったらいんだけど  
な」

「ふーむ。衛兵の詰め所ならありそうなものだがな。——ん、少し混んできたな」

雑多な人々が通りを行きかっている。

腕を組んで考えていたラルトレアはその人ごみの中へ突っ込んでいき——

「スバル？ スバル？ どこだ？ スバル！」

呼びかけても人々の声、馬車の音でかき消されていくのがわかる。背の低いラルトレアは見つかりにくく、見つけにくい。

さらに吸血を最低限しか行っていないために、察知能力さえ幼女並みだ。

もともと心の弱いラルトレアは、迷子になった不安からか、じんわりと涙が浮き上がってきていた。

いつからこんなに自分は涙脆くなってしまったのだろう。

その頃スバルといえば。

「やべえ、強制イベント発生だ」

まさかの幼女との仲良しイベント後に、チンピラトリオとの仲良し(?) イベントがあるとは思ってもよらなかった。

ラルたんと歩いていたら人混みに突っ込んでしまい、無事はぐれしまい、一旦裏路地に抜け出したらこの有様である。

手汗を気にして手をつなぐのをやめたのが運の尽きだ。

「いやいや異世界召喚だぜ。俺無双パターンからすれば、ひよつとし

たら俺はこの世界じゃメチャクチャ強いかもわかんねえ。ラルたんとこの契約がここで力を発揮する可能性も……そう考えたら体が軽い気がしてきた！ いけるかもわかんねえ！」

「なーんか、ぶつぶつ言ってるよ、アイツ」

「状況がわかってないんだろ。教えてやればいいんじゃないか」

もしかして、という考えがスバルの気分を盛り上がらせる。

これで弱かったら、ラルたんに示しがない。

「おっと、調子づいてられんのも今のうちだぜ。言つとくが、俺みたいなタイプはこうやって路地裏でチンピラに絡まれたパターンの妄想も日常茶飯事だ。ラルたんパワーでバツタバツタなぎ倒して、明日の俺の糧にしてやんよ、経験値どもめ」

「なに言ってるのかわかんねえけど、俺らを馬鹿にしてんのはわかった。ぶち殺す」

「そりゃ……こつちのセリフだ！」

しかし現実はその甘くない。

土下座。

チンピラの一人がキラんと光るナイフを取り出したのを見たとき、全身がすくみあがり、すぐさま土下座態勢へと移行。

「すみません俺が全面的に悪かったです許してください命だけは——！」

土下座プラス命乞いの合わせ技。

和を尊ぶ日本人らしい行動でこの場を乗りきろう、そうしよう。

「へへっ、動けないようにしてから身ぐるみ剥いでやるよ」

「か、金目の物が目的ならばつちやけ無駄だぜ。なにせ俺は一文無し

……！」

「なら珍しい着物でも履物でもなんでもいーんだよ。路地裏で大ネズミの餌になれ」

つまりはパンツとシャツだけになり、金もケータイもスナック菓子も全部奪われた挙句、この路地裏に放置される、と。

そんな醜態を晒しながら、あの頼りになる幼女様が見つけてくれるまでガクガク震えて待っていると……。

——それだけは絶対に避けたい!!

★★  
★★  
★★

「スバル！ スバルはどこだ！ くそつ、こんなとき鼻が効けば……」

完全にはぐれてしまった。

血を吸っていない自分の弱さが嫌になる。これでは本当に迷子の童女ではないか……！

ここで無理やりに人を襲い血を吸うという選択肢がある。

だがそれをするのは躊躇われた。

この世界の住人たちにラルトレアを殺すほどの強者がいる可能性がある。

こんな弱体化状態で襲われて死ぬわけにはいかない。どうにか生きて生き抜いて、スバルと合流しなくては。

それに——

「スバルに嫌われてしまうかもしれないしな……ん？」

人混みを避けて、壁際を歩いていたらルトレアは裏路地から逃げ出すように飛び出してきた三人組を目にした。

三人ともが汚い身なりをしていて、粗悪な顔つきでおそらくは善人と言えないタイプの人間である。それが必死の形相で何やら話している。

「くそつ、精霊使いとはついてねえ！」

「あの女はともかくつり目男の方はカモだったのによお！」

「きつと女に絞られてんぜあの黒髪！」

駆けていくチンピラトリオ。

彼らが話していたワードのなかに聞き捨てならないものがあつた。

つり目、黒髪、精霊使い。

もしかしてスバルは今襲われているのか——？

「待っておれスバル！ この私が助けてやるぞ！」

スバルのプライドをずたずたにするようなセリフを叫びながら、一体の幼女はチンピラトリオが通つた思しきルートを突き進んでいく。

大通りの曲がって、裏路地へとぐんぐん突き進んでいく。

そこで何度目かの角を曲がったところで——

いた。

スバルだ。

毛むくじやらの獣に膝枕されている。その隣にいる銀髪の女が精霊使いだとすれば、あの毛玉の方が精霊か。

「貴様らあ、スバルをどうするつもりだ——？」

銀髪の女と毛玉がこつちを見る。

ラルトレアはすぐさま臨戦態勢へと移行した。血のストックはごく少量だ。

吸血鬼として最低限の能力を保つための、『血霊器具』を作動させているだけ。

一つは『弱点解除』。銀の弾丸、十字架、にんにく、太陽などのあらゆる弱点を完全に無効にする。もともと耐性の強いラルトレアにとっては補助でしかないが。

二つ目は『吸血存在』。吸血鬼としてのオーラをかき消すものだ。感知にするどい奴をも人間だと騙すことができる。

そして最後に。

「リア、気をつけて。たぶんただの女の子じゃないよ」

「え、パツクそうなの？ でもどうしよ、あんな小さな女の子に」

ズズズ、とラルトレアが影に潜った。

「舐めるなよ——！」

『ダーク・スワンプ暗黒沼』。

太陽の遮られた路地裏は彼女の狩場だ。

影の中を潜って移動し、毛玉と女の背後へと出現する。そしてまずは厄介そうな毛玉の方から攻撃だ。

怒りを込めた『幼女拳』が炸裂する!!!

「あ、目覚めたみたい」

ひゅつと、毛玉が上体を横にずらして、『幼女拳』を軽々とかわす。勢いがついた拳はそのまま前方へと進んで――

「これが美少女膝枕か……ってそんなわけ――ほへぶしつ!!」

起き上がったスバルの左ほほに幼女の拳が突き刺さった。

「――あ」

幼女は幼女でもただの幼女ではない。

意外と威力の高いパンチで、スバルはもう一度意識を吹っ飛ばされた。

### 第三話 『心の闇』

「――あ」

ラルトレアはぎゅっと握りしめた拳がスバルをぶん殴る感触を感じていた。

やってしまった。

――この毛玉、私の必殺炸裂拳を読むとは……！

「す、すばる?! す、すまない。お前を殴るつもりは……あれ、しつかりしろ意識を保つのだ!」

ラルトレアはぐったりとしたスバルを抱き起し、毛玉と女をそっこのけにしてスバルのほつぺたをベシベシ叩いて起こそうとしている。そんな様子を観察するように見るひとり一匹。

「ふふふ、君が殴ったせいだよ？ それより君、この子の知り合いかな?」

「パツク?! 大丈夫なの？ この女の子、妙な技を使ったけれど」

「心配いらぬよりア、敵意はない。ぼくには普通の女の子に見える。けどうまく隠しているんだらうねきつと。でも今のこの子じゃぼくにもリアにもかなわないよ。だから平気さ」

「そう、なの。パツクがそういうならいいけど……」

数分してようやくスバルの目が覚めた。うーんうーんとうなされてから、辺りを見回してようやく現状を理解したようだった。

「ふむ、美少女と美幼女、モッフモッフに囲まれる状況……ここはハーレムか?」

「打ちどころが悪かったようだね」

「モッフモフやでモッフモフ……なんてものを生み出したんや神よ」  
「いやあ、こんなに喜ばれるとボクもわざわざ巨大化した甲斐があるよ。ね?」

照れた仕草で頭を掻きながら、媚びを売るように片目をつむる巨大猫。

「ということとは、お前はさっきのミニmamサイズ猫?」

「ふふふ、大きさ自由で持ち運びに便利。さらにユーモアあふれるトークで退屈な日常を彩ったりしちゃう。ひとりに一匹! 生活のお共に。詳しくは精霊議会に問い合わせてみてね」

「ってあれ、俺なんで二回失神してんだ?」

スバルが首を傾げていると、申し訳なさそうに股をすり合わせ、両手の人差し指をつんつんと突き合わせているラルトレアを発見した。

「その、すまない。スバルがてつきり襲われているものと思って……それで攻撃しようとしたら……」

「間違つて俺に当たつたつてこと?」

「そうだ……」

「マジかよ……情けないな俺。幼女パンチで気絶しちゃうなんて。いや、気にすんなラルたん。俺の方が地味に傷ついているくらいなんだ。殴られたくらいで気を失つた俺の方が悪い!」

「スバル……」

ラルトレアを気遣うようなスバルの優しさに、彼女の涙腺がまたもや緩くなってしまう。だがしかしここはぐつと堪えた。

スバルは話を進めようと、銀髪の女へと視線を移した。

「なんか目が覚めるまでしてもらったみたいだな……」

「勘違いしないで。聞きたいことがあるから仕方なく残つたの。それ

がなかったらあなたのことなんて置き去りにしたわ。そう、してたの。だから勘違いしないこと」

念を押すように何度も言う銀髪女。

スバルもさすがにそれ以上は突っ込めないのだろう。

だが、スバルの顔がほのかに赤いのは気のせいだろうか？ まさか強い語調で美少女が迫るように言うのが気に入っているのだろうか。

「だから私があなたの体の傷に治癒魔法をかけたのも、目覚めるまでパックの腹枕を堪能させてたのも、全部が全部、自分の都合のため。だから、その分に応えてもらおうわ」

「なんか恩着せがましい感じを演出しつつも一周回って普通の要求だな」

スバルの返答に対し、少女は厳しい顔つきのままで首を横に振って、

「そんなことない、一方的よ。——それで、あなたは私の盗まれた徽章に心当たりがあるわね？」

銀髪女はどこことなく声をひそめて問いかけた。

その問いの内容にスバルはまた首を傾げている。

「えーっと、あの……心当たりとか、ないかなあなんて。ラルたんはどう？..」

「いや我も無いな。というか、徽章とは何だ？」

「あれだろ、弁護士や検事、自衛官などが身分を証明するためにつけるバッジみたいなもん」

「……ベンゴシ？ 違うとは思うがそれは食べ物か何か？ スバル」

「いやまあ食べ物じゃなくて法の番人というかこれは裁判官の方か。」

まあいいや。とにかく、小さいアクセサリーだ」

「ほお、小物類か。我は集めるのは好きだが身に着けるのは嫌いだな」

ラルトレアとスバルの会話を聞いていた銀髪女は落胆した様子もなくうなずいて、

「そう。それじゃ仕方ないわ。でも、あなたは何も知らないという情報をもたらうことができたわけだから、ちゃんとケガを治した対価は貰っているわね」

——何も知らないという情報？ この女は馬鹿なのか？

訝しむラルトレアと、あつけにとられるスバルを置き去りに、少女は吹っ切るように大きく手を叩き、

「じゃあ、もう行くわね。悪いけど急いでるの。ケガは一通り治ってるはずだし、脅したから連中ももう関わってこないと思うけど、こんな時間に人気のない路地にひとりで入るなんて自殺志願者と一緒だから。あ、これは心配じゃなくて忠告よ。次に同じような現場に出くわしても、私があなただを助けるメリットがないから助けなんて期待されても困るから」

早口でまくしたてる銀髪女。

黙るスバルの沈黙を肯定と受け止めたのか、「よし」と満足そうに呟いて無防備にも背中を見せた。

長い銀髪が女の仕草に合わせて揺れ動き、薄暗い路地の中ですら幻想的にきらめく。その光景にスバルが目を奪われていた。

そのスバルの横顔を見たとき、ラルトレアが抱いたのは嫉妬だった。まぎれもなく、ラルトレアは目の前の銀髪女を妬んだ。だが吸血鬼の女王はそれを自覚していない。

ラルトレアは下手くそなのだ。自分の感情に気づき向き合うとい

うことが。

銀髪女の毛玉——掌サイズの猫がふよふよと、風に漂う風船のように浮遊して少女の背中へ向かう。

「ゴメンね。素直じゃないんだよ、うちの子。変に思わないであげて」

毛玉は銀髪女の肩にやわらかに着地する。女の手がその感触を確かめるように猫の背を一度撫で、その姿は銀髪の中にもぐるように消えた。

それをラルトレアと同じように見ていたスバルが、唐突に口を開いた。

「そんな生き方、メチャクチャ損するじゃねえか」

言いながら立ち上がり、スバルは砂埃で汚れたズボンを叩いている。

体の調子を確認するように肩を回し、足腰を動かしていた。

そしてスバルは動いた。

その行動にラルトレアがイライラしてしまう。

「——おい、待ってくれよ！」

路地の入口へ繋がる場所で首をめぐらす女、その背中に声をかけている。

長い銀髪を手で撫でて、わずらわしげに女は振り返る。

媚びるような女の仕草にまた苛立ちが募る。

「なに？　話ならもう終わったわ。もう私とあなたは無関係の他人です。ほんの一瞬だけ人生が変わっただけの、赤の他人」

「そんな心にくる言い方すんなよ!?!　それにそっちは終わったつもりでも、こっちは全然まだまだ丸つきし終わったなんて思ってない」

冷めた視線の少女に縋るように駆け寄るスバルは、両手を広げて彼女の進路を阻み、

「大切なもんなんだろう？ 俺にも手伝わせてくれ」

「でも、あなたは何も……」

「確かに、盗んだ奴の名前も素姓も性癖もわからねえけど、少なくとも姿かたちぐらいはわかる！ 八重歯が目立つ金髪のプリティーガール！ 身長は君より低くて胸も小さかったし、歳も二つ三つ下だと思うけどそんな感じでリアリー!?!」

早口でテンション上がっているスバル。

そのスバルの焦り具合も、スバルが女を追いかけるという構図もラルトレアには腹立たしい。

「——変な人」

口元に手を当てて、小首を傾けた女、その声。

女はスバルを値踏みするように見据えて、

「言っておくけど、なんのお礼もできません。こう見えて無一文なので」

「丸ごと持ってかれたからね」

「安心しろ。俺も無一文みたいなもんだ」

「安心できる要素が何もないね」

スバルはドンと自分の胸を叩いた。

「それにお礼なんていららない。そもそも、俺が礼をしたいから手伝いたいんだ」

「お礼をされるようなことしてない。傷のことなら、ちゃんと代価は

貫ってるから」

あくまで頑なな姿勢を崩さない女。

——そのまま突っぱねてしまえばいいのだ。

スバルがこんな面倒臭そうな女に構う必要はない。

——我でいいだろう！

だが。

そんな女の頑固な態度にスバルは苦笑して、「それなら」と前置きし、

「俺も俺のために君を手伝う。俺の目的はそう、だな。そう、善行を積むことだ！」

「善行？」

「そう、それを積むと死んだあとに天国に行ける。そこでは夢のくつちやね自堕落ライフが俺を待っているらしい。だからそのために、俺に君を手伝わせてくれ」

やり切った顔のスバルに女は思案顔。しかし、そんな女の頬を肩に乗る灰色猫がその肉球でつつき、

「邪気は感じないし、素直に受け入れておいた方がいいと思うよ？」

まったくの手がかりなしで探すなんて、王都の広さからしたら無謀としか言いようがないし」

「でも……私は」

「意地を張るのも可愛いと思うけど、意地を張って目標を見失うのは馬鹿馬鹿しいと思うよ。ボクはボクの娘が馬鹿な子だと思いたくないなあ」

女は数秒、「あうー」「ううん」「でもっ」と変に色っぽく悩んでいる様子だった。

——憎い。

スバルに言い寄られて助けると提案されて、その挙句に、

「——本当に、なんのお礼もできないからね」

そうスバルの提案を受け入れた。

——羨ましい憎い羨ましい憎い憎い憎い。

そんな複雑な感情を前に、ラルトレアは顔をうつむかせた。前を見ることができずに、下ばかり見てしまう。

長い前髪が彼女の表情を隠す。

「よかった。なあ、よかったらラルたんも手伝ってくんね？ この子のお世話になったしさ。一日一善、良いことすると気持ちいいいぜ！」

「……スバル……。そ、そうだな。わたしも手伝う、か……」

「おうその意気だぜ！ じゃあさっそく最初はどうっすかな——」

テンパっていたスバルはこのとき気づけていなかった。

ラルトレアの心に闇が差したのを。

## 第四話 『現れないスバル』

ラルトレアがいるというプレッシャーもあつてか、スバルは何とか人見知りを抑え込んで聞き込みに徹することにした。

スバルは文字も読めなければ王国のことを何も知らないのだ。だから、スバルが覚えているという犯人の特徴を頼りに聞いて回ってみることにした。

しばらくして日も傾きはじめてたころ。

「盗品をさばくならスラムか貧民街って話だったけど……」

「場所と相手の姿かたちはわかってるんだし、あとは警察……じゃなくて衛兵とかに任せるんじゃないか？ 人海戦術が使えれば一発だぞ」

二本ほど離れた通りの店主から聞いた、スラム街へ繋がる細い路地。

夕暮れ時というのもあるが、通りを一本隔てただけの空間にも関わらず、それを踏まえてもなお雰囲気は薄暗い。

湿った空気とすえた臭いが漂ってきていて、スバルとラルトレアは思わず顔をしかめる。

「空気と雰囲気と、たぶん住んでる人間の性格も悪い。人呼んだ方が確実だ」

「確かにそのほうが良いのだ」  
「ダメよ」

スバルの提案にラルトレアも十分賛成できた。だが、それを銀髪女はぴしやりと切って捨てられる。

その断言ぶりに目を白黒させるスバル。

銀髪女は少しだけ申し訳なさそうに、

「ごめんなさい。でも、ダメなの。こんな小さな盗難なんかには衛兵が動いてくれるとは思えないし……そもそも、衛兵には頼れない事情があるから」

きゅつと唇を結び、女は「理由は言えないけど」と媚びるようにスバルを見た。

——あまり媚びるような顔をするなよ銀髪……！

銀髪女の視線にスバルは手を上げて応じていた。

「さて、それじゃどうする？」

事情は聞かないスバル。

今後の方針を女へと問う姿勢に、ラルトレアは苛立ちを隠せない。

「優しいのだなスバルは」

「ん？ 何のことだラルたん」

「いや何でもない」

スバルは優しい——誰に対しても。それは女だからだろうか。

女なら誰にでも優しくするのか。

ちよつと可愛い女なら誰でも——！

理由を追及しないのと、女への協力を打ち切るかどうかは別の話だ、などと考えているのだろうスバルは。

その優しさを向けられた銀髪の女は、てっきり協力してくれないとも思っていたのか、スバルの提案に小さく眉を上げて驚いている。その肩の上で猫が軽くステップを踏み、

「ね？ 言ったでしょ。悪気はまったくないんだって」

相変わらずとぼけた様子で、ひどく楽しげに肉球でスバルを指していた。

しかし、それから猫はふいにその表情を真剣なものに引き締め、

「でも、判断は慎重にね。——そろそろ夜になるから、ボクは手を貸せなくなる。暴漢ぐらいが相手なら心配はしないけど……慎重さも必要だよ」

「そう、よね。……うん、考える。考えるけど」

毛玉の提案に少女の答えは煮え切らない。

「今の話だと、なに？ お前って夜だと出てこれないの？」

「出てこれないっていうか、ボクはこんな可愛い見た目だけど精霊だからね。常に顕現してるだけでもけっこうマナを消費しちゃうんだよ。だから夜は完全に依り代に戻って、マナを蓄えるのに集中するんだ。まあ、平均的には九時から五時が理想かな」

「九時五時とか公務員みてえだな……精霊の雇用形態も案外シビア……！」

「ゴウムインとは何だ？ スバル」

「ラルたんは知的好奇心にあふれてんな。公務員ってのはあれだ、国の役人っていうか国が運営してる機関の従業員みたいなもんか？ ちよつと難しかったか」

「国の機関か。ふーむ、我の知っておる国の機関の奴らは四六時中働いてる頭のおかしい奴らだったぞ」

「こえええ!! 異世界の公僕さんやばすぎ!!」

「なにしろ命を懸けておったからな」

「ボクもできることならずっとリアについてあげたいんだけどね」

ラルトレアの頭にあるのは聖騎士団たちだ。国に忠誠を誓い命さえ捧げた狂人たちの集まりだった。

異端の極致である吸血鬼のラルトレアを死にも狂いで殺しにかかってきた。あのイカレっぷりは人間を辞めている。

「そういうば、まだ名前も聞いてないね。自己紹介とかしてないんじゃないかな」

「そういや、そうだな。んじゃ、俺の方から」

こほんとスバルは咳払いして、その場で一回転、指を天に向けてポーズを決める。

「俺の名前はナツキ・スバル！ 右も左もわからない上に天衣無縫の無一文！ ヨロシク！」

「我はラルトレアだ。スバルと似たような状況にある」

「それだけ聞くと二人とも絶体絶命だよ。うん、そしてボクはパツク。よろしく」

スバルが差し出した手に、毛玉——パツクが体ごと飛び込んできてダイナミック握手。まるでスバルがパツクを握り潰しているように見える。

それからスバルの視線は傍らの銀髪女へ。女はひとり一匹のやり取りを白けた目で見ながら、

「なんでそこまで不必要に馴れ馴れしい態度なの？」

「焦ってるのと責任感があんだよ！ こちとら養わなければならん幼女がいるんだ！ クソ、絶対逃がさないぜ、この出会い……生きるために依存してやる……っ」

「スバル……今のは格好いいのか悪いのか分からんぞ……」

「ラルたん?! くそっ、必死すぎるのもいけないというのか！ 神よ

俺はどうすれば!？」

「すごくくしようもない決意。……そもそも、今、あなたがどういう名目で私たちと同行してるのか自分で覚えてる？」

「もちろん。探し物転じて探し人のためだな。そしてその尋ね人の特徴を知っているのは俺ただひとり! お払い箱にされてたまるか、絶対に口を割らないぜ!」

「聞き込み中に大声でしゃべるから特徴は割れてるけどね」

「俺のお馬鹿さんめっ!!」

頭を抱えてその場にかがみこむスバル。

そんなスバルを見ながらパツクが苦笑して、

「ま、お互いに事情はあるよね、事情は。スバルとラルトレア——の方の事情はあとで聞くとして、こつちの話を先に片付けちゃおう。それにしても、スバルって珍しい名前だ。いい響きだね」

「そうね。ラルトレアの方は北方の出身っぽいけど、スバルの方はこのあたりだとまず聞かない名前。そういえば髪と瞳の色も、服装もずいぶんと珍しいけど……どこから?」

「テンプレ的な答えだと、たぶん、東のちっさい国からだな!」

「ルグニカは大陸図で見て一番東の国だから……この国より東なんてないけど」

「嘘、マジで!? ここが東の果て!? じゃあ、憧れのジパング!」

「自分のいる場所もわかってなくて、無一文で小さな女の子を連れてる。……なんか色んな角度からこの人の将来が心配になってきた」

「スバルはまあいいとして、ラルトレアの方はどうなんだい?」

慌てふためくスバルに対して、銀髪女はそわそわ落ち着かない目を始める。

世話焼きつぽさが端々からにじみ出る銀髪女。

イライラがまた一つ、つい女のことを恨みがましくにらんでしま  
う。

それを見られたのか、パックがラルトレアに話を振ってきた。

「我か？ 我も分からん。たぶん西の方の出身だとは思うが。なにせ  
地図なんて見たことないからな」

——そもそもここは異世界だ。我の知っている世界とは違うだろ  
う。いやそれとも、我が世界を知らぬだけということもあるのか。

だがラルトレアの世界は、この世界とは違う。空気、人、種族その  
他もろもろがすべて違っている気がするのだ。

「二人も困ったもんだね」

と、パックはその頬のヒゲを肉球で弾き、

「とりあえず、そのあたりはおいおい詰めよう。今はとにかく奥へ  
……といっても、ボクが顕現できるのはあと一時間もない。決断を求  
めるよ」

「——行くわよ。どの道、今を逃す気なんてない。手の届かないとこ  
ろへ持っていかれてからじゃ遅いんだから」

パックの求めにそう応じて、それから銀髪女はスバルに向き直る。

「じゃあ、行くけど……この先の路地からは今まで以上に警戒して。  
暗くなるからよからぬことを考える連中もいるだろうし、もともと荒  
事慣れしてる人たちが住んでるところだから。怖いようならここで  
待ってるか、さっきまでと一緒で私の後ろについてきて」

「ここで待ってるとか言い出したら俺ただけチキンだよ！ 行くよ  
！ 背後霊のように！」

「前に出る選択肢はないのね……その方がこっちも余計な気をつかわなくていいけど」

銀髪女のため息。

そのため息が、ラルトレアの口を開かせた。

「我が前に出よう。精霊使いは後ろで引っ込んでいるがいい」

「ちよつラルたん?! 幼女に前を歩かれるとか俺の情けなさゲージががんがん上昇しちゃってるんですが?!」

「そうだねラルトレアの方が頼りになるよたぶん。リアも彼女の後ろについていたほうがいい」

「そうなのパツク? あんまりそうは見えないけれど」

「スバルが前を歩くよりは早く進むしまシだからね」

「うーん、すつごーく不安だけどパツクがそう言うなら……。確かにスバルよりは良いかも。スバル、後ろを歩いて」

「……あ、はい……」

ということだ。

ラルトレア、銀髪女、スバルという何とも男のプライドをズタズタにされる並びになってしまう。

スバルはこっそりと最後尾で顔を両手覆って流れ出す情けなさをこらえていた。

「……やべえ。俺、超かつこ悪い……」

そのつぶやきに、ラルトレアは申し訳なく思っていた。

銀髪女に意地を張ったせいで、スバルに一番恥をかかせる形になってしまったかもしれない。

ちゃんと前も見ながら、チラチラと背後を盗み見しながら聞き耳を立て居ると、

「おんぶにだっこはかつちよ悪い。せめて、後ろ歩くぐらい自分でやれよ、俺」

顔を両手で叩いて気合を入れているようだった。

そんな小さな勇氣にも、ラルトレアはすこしときめてしまう。

「そういえば、なんだけどさ」

スバルの声にふりかえる。銀髪女は流し目をむけて、その白い横顔にスバルは問いを投げていた。

「けつきよく、飼い猫の名前は聞いたけど、君の名前は聞いてないなと思ったり」

その問いかけに、女はしばし沈黙。

ラルトレアの位置からでは銀髪女の表情はよく見えない。

「——サテラ」

「おっ？」

銀髪女の眩きに、葛藤にまみれていたスバルは驚く。

女は振り返ることもなく、そんなスバルに無感情にもう一度だけ、

「サテラとでも呼ぶといいわ」

名乗っておきながら、そうと呼ぶのを拒絶するような態度だった。

その拒絶するような態度に、スバルも押し黙る。

そんな二人のやり取りの背景で、銀髪に埋もれるパックがふと一言、

「——趣味が悪いよ」

とだけ呟いたのは、スバルはおろか女にすら届かなかったが、ラルトレアにだけは聞こえていた。



貧民街に入り、スバルは活躍を見せていた。幼女の期待の眼差しとプレッシャーに押しつぶされそうな、幸運がスバルを救っていた。

焦りと見栄を張っていた疲れがほどよく癒されていく。

「なぜか不自然なほど周囲が優しい。どうしたことだ……」

「たぶん、って頭につける推測の話になるけど……」

「聞こう！ このモテ期に魔法的根拠があるなら聞いてみたい」

「期待と違う答えだと思うけど、たぶん身なりが原因ね。薄汚れてて血の跡も残ってるし、ここの人たちも苦労してそうだから、見るに見かねてじゃないかしら」

「我也貧しき者は嫌いではないぞ」

「なんだこの生暖かい眼差しは?! くそつ、疑問が氷解して納得いきましたよチキショウ！」

富める者がいれば貧しき者がいる。

逆に、貧しき者がいるから富める者がいるのだ。

ラルトレアは自分が王であり、強者でいられるのは、貧しく弱き者のおかげということを知っていた。だから好感も持てる。

スバルに好意的にするのは、彼らは強い心を持ち、仲間意識があるからだろう。

ラルトレアはスバルを決して弱いとは思わないが、優しくしてやりたいという気持ちはわかるのだ。

ある老婆はスバルに「これでも食べて強く生きなよ」と小さなドライフルーツみたいなのを差し出していた。スバルが試しに口に含むと、悶絶していた。

——毒ではあるまいな？

毒だったなら老婆を吸血し殺してから、その血で蘇生させるだけだ。ラルトレアに焦りはない。

「ふおおおおー！ 思いやりかと思ったら毒だった！ 毒だった！ なんか全身が燃えるように熱い！ ヤバい！ 死ぬかもしれない！ あるいは脱いで社会的に死ぬかもしれない！」

「なんか貰ってると思ったらポッコの実ね、これ。食べると体の中のマナを刺激して、傷の治りとか早めるの。効果は個人差あって、だいたい気休めなんだけど……」

発熱と発汗で呼吸の荒いスバル。

銀髪女——サテラは「ううん」と唇に指を当てた。

「見た感じだと、スバルってかなりマナの循環性が高いみたい。過剰摂取すると死ぬかも」

「食べる前に言ってほしかったかなあなんて！ どうすりゃいい!？」

「落ち着けスバル、我が何とかしよう」

ラルトレアはこの世界には詳しくない。

ポッコの実がどんなものかなんてさっぱり分からない。

もしかしたらサテラに任せ方がいいのかもしれないが、それでもラルトレアはスバルを癒してやりたかった。

なによりラルトレアはポッコの実は知らなくとも、“人間の肉体”については知りすぎているほどに詳しいのだ。

「腕を出すがいい」

「こう、か？」

スバルが上着の袖をまくって、白い腕をむき出しにした。ちょうどラルトレアの頭くらいの位置にぶら下がっているそれを、両手で掴み

「がぶりっ」

噛んだ。今度は強めに。甘噛みはしてやらない。

「い、いてててっ!? 痛い痛いっす! ふつうに痛いっす! 歯が食い込んだりゃってますよラルたん?!」

「これで良いだろう」

おそらくはボツコの実で、スバルの体内は活性化されていた。

その分の血液を吸っただけだ。

瀉血というやつだ。吸血鬼のラルトレアが吸う分、精度は上がっている。

吸いすぎず吸わなすぎずを維持した。

——ああ、美味しい血だ。やはり血は良質な人間のものに限る。それに……

スバルの血を吸っていると、体が熱くなるのだ。これは初めての経験だった。

「おお、おかげで体が冷めてきたぜ、サンキュー、感謝するぜマイエンジェル」

「我が天使とはな……くふふ」

「いったい何をしたの? ラルトレア。マナドレインとか魔法を使っているようには見えなかったけれど」

「ただの瀉血だが、マナというのが魔力であればマナドレインに近いものだな」

魔力、という単語を出したときにスバルが妙に驚く。

「魔力?! マジで? ラルたんってやっぱり魔術師なのか?!」

「魔術師ではないぞ?」

「なんだ……ただの幼女か……」

がつくりと何故かうなだれるスバルと、苦笑するサテラ。ラルトレアが首を傾げ、改めて貧民街の奥へ向かおうかと気持ちを切り替えたときのことだ。

「ごめん、ボクもう限界だ」

サテラの肩の上のバックが彼女の首に弱々しくもたれかかる。

その灰色の毛並みは光を帯び、今にも消えてしまいそうだった。

「なんか死にそうな消え方するんだな」

「けっこう無理してるからね。マナ使って実体化してるから、消えるときは霧散するよボク。——ごめん、宝珠お願い」

「わかった。無理させてごめんね、バック。ゆっくり休んで」

サテラの懐から取り出されたのは、掌に乗るサイズの緑色の結晶だ。

——あれが精霊の依代ということか。

ラルトレアは冷静に分析していく。

バックは肩から腕を伝って辿り着き、小さな体で依代を抱きしめるとサテラを振り返る。

「わかってると思うけど、くれぐれも無茶はしないように。いざとなったらオドを使ってボクを現界させるんだよ」

「わかってます。子どもじゃないんだから、自分の領分くらい弁えてるもの」

「どうかな。ボクの娘はそのあたり、けっこう怪しいからね。頼んだよ、スバル、ラルトレア」

視線を向けられたスバルは、水を向けられてドンと胸を叩き、

「オーライ、任せろ。俺のビビリセンサーに期待してなよ。危険が危ないデンジャー！　と思つたら即引き返すぜ」

「なんか半分くらい何言ってるのかわかんないけど、お願いね。——それじゃあ、おやすみなさい。気をつけて」

最後にサテラを見て、パックの姿が世界から消失する。

その像が光の欠片となって霧散して消えていくのだ。

そしてパックがいなくなると、サテラは掌の上のクリスタルを大切にそうに撫でて、しっかりと己の懐の中に仕舞い込んだ。

「二人きりになるけど……変なことは考えないでね。魔法は使えるんだから」

自分の胸の内を覗き込まれていたと思つたのか、サテラの警戒を帯びた発言。

まるでスバルがサテラに欲情したかのような言いぶりに、ラルトレアは青筋を浮かび上がらせる。

——この女……！  
どこまで自意識過剰なのか、とヒステリックに叫びたくなってしまう。

だが、そんなラルトレアの意味には気づかず、スバルは手を掲げて首を振り、

「そんなバカな！　女の子と二人きりなんて小学生以来のシチュエー

シヨンだ。とてもじゃないけど何もできねえよ。これまでの俺の人間力を見てなかったのか？」

「なんかすごくしろうもないのにすごく説得力がある。……いいわ、進みましょう。ただしパックスの警戒がないから今まで以上に慎重に」

「心配するな。我に任せるといい。サテラは下がっていいぞ」

「ラルトレアの威勢のよさにはすこし安心するかも」

少し刺々しいラルトレアの言葉に、サテラは気づかない。サテラはローブのヒモを締め直すと前に出て、

「私とラルトレアが前衛で、スバルは後ろの警戒。何かあったらすぐに私を呼んで。自分で何かしようとか思っちゃダメよ。別にあなを傷つけないわけじゃないけど……弱いんだし」

「その前置きしちゃうから憎めねえんだよなあ……」

物言いたげな顔のサテラを促して、搜索を再開する。

といつても、やることは特に変わらない。貧民街の住人を見つけては尋ね人の特徴を話し、心当たりがないか聞いて回るだけだ。

聞き役はスバルが担当していた。

「ひよつとして、フェルトの奴かもしれないな。金髪のはしっこい小娘だろ？」

その有力情報にぶつかったのは、聞き込みを始めてから十番目の男。スバルが「よう、兄弟、景気はどうよ？」などと声をかけた相手だった。

フレンドリーなスバルの様子に男はいたく同情した顔で、

「もしフェルトの奴なら、盗んだもんは今頃は盗品蔵の中のはずだ。札付けてその蔵に預けて、あとでまとめて蔵主が余所の市場でさばい

てくんのさ」

「変なシステムだな……その蔵主って奴がまとめて持ち逃げしたらどーすんの？」

「それをしないと信用されてるから蔵主なんだよ。ただまあ、盗まれたもんだって言っても『はいそうですか』とは返してくれんだろうけどな。うまく交渉して買い取りな」

盗まれた方が間抜けなんだから、と好意的ながらもそこだけは当たり前のように、貧民街のルールを押しつけて男は笑った。

盗品蔵の場所は彼から聞き出せたので、ほどなく盗られた品と再会は叶いそうだ。

ただし、三人そろって無一文であるが。

「買い取りって言ってもな、どうする？ こっちに弱味がある以上、かなり吹っかけられるってイベント的な臭いがするけど」

「盗まれた物を返してもらっただけなのに、どうしてお金払わなきゃいけないのかしら……」

「何を言っているのだ？ 盗まれる方が間抜けなのだ。盗品蔵からまた盗めばいい話だろう？」

「おお！ えげつねえラルたん！ だが案外と良いアイディアかもしれないな！ 金がないのはどうしもねえんだ」

「ダメ。盗まれたからといって盗んだら私たちも泥棒になるわ。それだけはよくない。事情を話して頼んでみましょう」

「ふんっ、話を通じる相手だとは我は到底思えぬがな」

サテラの言うことは正論に違いないが、正論で生きていけるほど世界は甘くない。

ラルトレアの言うように、正論が通じない輩がいるのもまた事実。穏便に事を、しかも確実に済ませるには男のアドバイスに従うのが賢明だろう。とスバルは考えていた。

とはいえ、

「その盗まれた徽章って見るからに高そうな感じなのか？ 吹っかけられるにしても相場がわかんないからアレだけど」

「……真ん中に小さいけど、宝石が入ってるの。私もお金でどのくらいの価値になるのかはわからないけど、安くないのは確かだと思う」

「宝石かあ……そら厄介だ」

「自分の宝物の価値も知らぬとはな」

パックから居なくなってからというものの、ラルトレアがちよくちよくサテラに嫌味を言っていることにスバルはようやく気づいていた。

だが、お腹でも空いて疲れているんだろうくらいにしか考えていなかった。

ラルトレアの言っていることはもつともだしな、とスバルは考えを巡らせ、

「とりあえず、盗品蔵ってところに行ってみてから考えよう。こつちの交渉次第じゃマシな値段で譲ってもらえるかもしれねえし……」

資金繰りをどうするか、スバルが考えあぐねて歩くことおよそ十分。

——盗品蔵、と呼ばれているらしき建物の前に着いた。思っていた以上に大きい建物だ。ラルトレアは立ち止まって外観を見て、扉に視線を移す。

そこで、気づいた。

「……………」

「なんか思った以上にでかいな」

「小屋でなく蔵、と言った意味がわかるわね。……この中にあるのが全部、名前の通りに盗んだ物ばかりなら救えないわ」

スバルとサテラが話しているときにも、ラルトレアは会話に入らず、嗅ぎなれた匂いを判別していく。

「さて、噂通りなら中にたぶん盗品をまとめてる蔵主つてのがいると思うけど……こちらの立場としてはどんな感じで?」

「正直にいくわよ。盗まれたものがあるから、中を探して見つけたら返してって」

——馬鹿な女だ。勝手にそうしている、我とスバルを巻き込むな。

「あー、わかった。じゃあ——」

スバルが何を言い出すかは、ラルトレアには予測できていた。

優しいスバルのことだ、自分が行くと言うに決まっている。こんな世間知らずで、脳みそがお花畑なサテラに交渉なんて務まらない。

そう思つてのことだろう。  
だから。

「ダメだ。我とサテラで行く」

「いやいやさすがにここまで情けないことはできねえつて! ラルトらん!」

「断じて許さない。そもそもサテラが盗まれた徽章なのだ。奪われた本人が交渉しに行くのがふつうであろう。スバルはここまでサテラを連れてきた、それで十分ではないのか?」

「それもそうね。私が直接話をつけにいくわ」

「え、いやマジで?」

「ええ、いくら盗まれたからといっても私の不注意だもの。ありがとうスバル」

「いや一人は危ないつて! せめて一緒についていくから!」

「スバルは優しすぎるのだ。このままではこの娘はずっとこのままだぞ。一人でやらせてみるのがサテラの為ではないのか?」

「ぐっ……そう言われると……!」

「なんかすごく馬鹿にされているような気がするけど、ラルトレアの言うとおりにね。わたしでもできるってこと見せてあげるんだから」

何とか屁理屈をこねて、ラルトレアはサテラだけで盗品蔵に行かせることにした。スバルを行かせてはならない。

——ちよつと驚かすだけだ。生意気な小娘が、スバルに媚びるから悪いのだ。

ラルトレアには分かっていた。

盗品蔵からただよう、血の香りが。濃厚な血だ。大柄な男の血と、少しばかり匂いは薄い少女の血も混じっている。

盗品蔵で殺しでもあつたんだろう。

サテラは盗品蔵の入口へと向かう。

足取りは決して軽くないが、サテラはサテラなりに頑張ってみるつもりのようなのだ。

不安そうなスバルは手の中——これまで一度も話題に上がらなかったビニール袋を見ていた。

「やばそうだったら行くからなラルたん。それに、実は金に換えれそうなものもあるんだ」

「わかったのだ」

サテラが扉の前に立ち、とりあえず木造のそれをノックした。

「どなたかいますか?」

サテラが取っ手に手をかけると、あつさりと扉は開いた。

その奥には真っ暗闇が広がっており、サテラは恐る恐るといった感じで突き進んでいった。

室内は何も見えないからおそらく手探り状態だろう。

「なんか誰もいなさそうだな? トイレ休憩って可能性もあるか?」

ちよつとして扉からかすかな光が漏れ出した。それはサテラが取り出したラグマイト鉱石の光だったが、スバルはそれで少し安心したようだ。

だが、サテラは戻ってこなかった。

数十秒、数分。

刻々と時間だけが経っていき、あたりは暗闇に包まれていく。

スバルの足が小刻みに上下しているのがわかった。

「サテラ……戻ってこないな。やっぱり一人で行かせるべきじゃないか。戻ったんだよ！ 今からでも——」

「ダメだ。行くなスバル」

「どうしてだよラルたん！ サテラに何かあったかもしれないだろう！」

「もう遅いのだ」

「遅い？ 遅いつてどういうことだよ！」

「待っておれ、我が確かめにいく」

「今だけは絶対ダメだ！ 俺が行く！」

「なら我はすぐ後ろをついていく。そして確かめたらすぐに逃げるのだ」

「逃げるつて何を……いや、時間がもつたいないすぐ行くぞ!!」

強引にラルトレアの制止を振り切つて、突き進んでいくスバル。

微妙に開け放たれた扉から、暗闇に入つていった。

スバルは、入口に立った。ぼんやりと確保された視界の中、入口をくぐつたスバルの目の前にあったのは小さなカウンターだ。もともとは盗品蔵は酒場かなにかの建物だったのかもしれない。

カウンターのの上に、いくつかの小箱や壺、刀剣の類が無造作に並べられていた。

「サテラ？ サテラ！ どこにいるサテラ！」

呼びかけには何も返ってこない。スバルの額を冷や汗が伝う。嫌な想像をしながら、スバルの足はさらに建物の奥へ。無意識に逸る足取り。——そんなときだ。

「ん？」

ふいに靴裏に生じた違和感にスバルは立ち止まる。

スニーカーと地面が張り付くような、粘着質な何かを感じたのだ。

「スバル！ 逃げるのだ！ サテラはもう死んでおる！ 助からない！」

ラルトレアが叫んだ。

サテラが死んでいる、そんな簡潔な文章をスバルはうまく呑み込めない。

振り返った。

「は……？」

スバルは見逃していた。暗闇の壁際、ラルトレアが立つその近くに、サテラは横たわっていた。首と胴体が分かれており、その首は地面を転がってスバルを見ている。

完全にスバルの腰が砕けた。逃げることも立ち去ることも、ここから一歩動き出すこともできない。振り返ったまま、背後へとゆっくりと脱力していった。

だが、地面に尻もちをつくはずだったスバルの臀部が、太く肉感のある何かの上に落ちた。

「……あ？」

思わず間拔けな声が出て、スバルはようやく『それ』を認識した。

『腕』だ。

指先が何かを求めるように開かれたそれは、不思議なことに肘から上が存在しない。その腕の付け根のあたりをたどっていくと、見つかった。

——首を大きく切り裂かれ、片腕を失った大柄な老人の死体が。

サテラの死体を見たとき、まるで現実感がなかった。

だが老人の死体を見たとき、血を触ったとき、腕を尻でふんだ感触が、どうしようもない現実であることを教えてくれる。

このとき、スバルを支配したのは圧倒的なまでの空白だった。

空白が『思考』の全てを奪い取っていた。

逃げるか、とどまるか、といった選択肢さえない。

そしてそれはスバルの運命に、致命的な結果をもたらした。

「——ああ、見つけてしまったのね。それじゃ仕方ない。ええ、仕方ないのよ」

女、の声だったと思う。

低く冷淡で、どことなく楽しげな女の声が響く。

「スバル!!! 後ろだ!!!!」

「ぐあ——っ!」

スバルに振り返る暇はなかった。

声が出た方に顔を向けようとした瞬間、スバルの体はふいの衝撃に吹き飛ばされていた。

背中から壁に叩きつけられるスバル。

「ぐううう……あ、熱ッ」

「あら、可愛いお嬢さん。逃げてもいいのよ? 逃げさないけどね」

うめくスバルに、ラルトレアは駆け寄りたかった。  
しかし、ククリナイフを持った女に、今のラルトレアではどうすることもできない。

スバルから吸った血の量では、吸血衝動を抑えて最低限の『血霊器具』を発動させるだけで精一杯だった。

——『吸血解放』さえ使えば。  
肉体能力を5倍にも100倍にもすることができるというのに。

「ラル……たん……」

スバルが最期に見たのは、自分を慕ってくれる少女が殺人鬼に飛びかかり、その胴体を横に切り裂かれるシーンだった。

首に噛みつきこうとしたラルトレアは腹を切り裂かれて、地面に倒れ伏す。

「サ……テラ………っっている」

腹を切り裂かれたラルトレアは、地面に倒れながらも、殺人鬼の注意がサテラとスバルに向かっているのが分かっていた。

成功するかは分からない。  
だが、それでも——、

「死ぬがいい……」

血霊器具、十式『ダーク・スワンプ暗黒沼』。

影に潜ったラルトレアが殺人鬼の背中から顔を出し、その首元に噛みついた。

吸血を行い全身の血を吸い取ってからスバルを蘇生させる。

だが、その瞬間。

スバルがうめいた。

「俺が、必ず——」

ラルトレアが吸血を始めた瞬間、ナツキ・スバルは命を落とした。  
世界が、ぐるぐると渦を巻き、ラルトレアの視界が歪んでいく——

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「……………はっ？」

ラルトレアが目を開けると、そこは広場だった。  
中央には噴水があり、石畳らしき道路があり、自分はそこに突っ  
立ってる。

——自分は今、何をしていた…………？

血の匂いがする盗品蔵にサテラを行かせ、死んだサテラを確認して  
から、それでスバルが斬られて、我はそいつを殺そうと飛びかかって  
……

「罰が当たったというのか…………？ 我が危険と知ってサテラを行かせ  
たのがそんなに悪いのか？ 何が神だ！ 何が精霊使いだ！ くそ  
め！ くそめ！」

怒りに狂いながら、ラルトレアは石畳を踏みつけた。  
だが今ここは盗品蔵でもなければ、日も暮れていない。  
今は昼だ。

獣人たちが闊歩している。妙な地竜と言われる生物が馬車のように動き回っている。

「スバル？ スバルはどこだ？」

時間が遡っている。そう気づくのは簡単だった。

この世界に召還された状況に、あまりにも似すぎているのだ。

それなら、と。

噴水のでっぱり部分に腰かけて、ラルトレアはスバルを待つことにした。

何が起点になって時間逆行が行われたかは知らない。そもそも時間逆行でない可能性もあるし、自分だけが記憶を保持していること自体おかしい。

——何が何やらさっぱりだ。

ただ、分かっていることはある。

こうやって座っていると、スバルが声をかけてくれるはずだ。

時間が巻き戻っているのは間違いないのだ。

それなら、スバルはラルトレアのもとにやってくる。

その、はずだった。

「スバル？ スバル……なぜ来ない？ もう来ていい時間だろう？  
もしかして時間逆行ではない？ いやそれはありえない……」

刻々と時間が過ぎていく。

そして時間とともに、抑えてきた『吸血衝動』がどんどん大きくなっていく。血を吸いたい、人にかぶりつきたいという欲求。

「スバル……スバル………」

だが、ラルトレアの祈りもむなしく、日は傾き始めた。  
スバルは来なかった。

「血を……血を……ハアハアハア……もう我慢できん……!」

我慢が限界を超えた。そんな興奮気味の童女に、一人の男性が心配して声をかけてきた。こういうことは幾度かあったか、全て冷たくあしらってきた。

だが今となつて、好機でしかない。

「お嬢ちゃん大丈夫かい？ 両親は？ 家はどこ分かる？」

「ハアハアハア……うまそうだな……」

「え？」

がぶりっ。

歯を思いつきり屈んだ男の首元に突き立てて、勢い血を啜った。  
『血霊器具』の一式、『吸血之牙』を発動させるに十分な量を。

次の瞬間、ラルトレアの犬歯が男の肩を貫いた。勢い良く伸びた牙は、一気の男の血液を吸い取った。

ばたり、とミイラ化した男性が石畳に倒れた。

「ヒヒヒ、まだ足りん、まだ足りんぞ!!!」

## 第五話 『天敵、剣聖、世界に愛された男』

「ヒヒヒ、まだ足りん、まだ足りんぞ!!!」

ついに防波堤が崩れて我慢が限界を超えた。

そもそも吸血鬼という存在はその“吸血衝動”にあらがうことはできない。今まで耐えていたのは、ひとえにラルトレアの精神力である。

「――『吸血解放I』」

蓄えた血のストックを一段階だけ解放し、その血の力を肉体能力に回していく。まだ余りはある。この低い背丈、短い手足だと戦いづらい。

だから。

『ブラッティ・サイス吸血之鎌』、さああて早く逃げた方がよいぞお、逃げねば喰われるのみだ!」

一振り。

禍々しいほどの赤く濁った死神が持っているような鎌が振るわれた。その一撃がいと簡単に一人、二人、また一人と切り裂いていく。

「――キャアアアアッ!!!」

「逃げる逃げる!!!」

「化け物だ!!!」

「化け物が現れたぞ!!!」

「衛兵を! 誰か衛兵を呼べ!!!」

鎌に少しでも触れた者から物凄いスピードで全身の血が抜かれていき、その血は大口を開けたラルトレアの中に吸い込まれていく。

そしてまた一振り。

半径二メートルの範囲内、逃げ遅れた獣人、恐怖で腰の砕けた少女、ラルトレアの威圧に耐え切れず突っ込んできた地龍がみな死んでいく。

一撃でも掠っただけで血を抜かれていった。

「ア、アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ!! ヒヒッ……………」

高笑いのもとに訪れたのは、空虚感だった。

「……………くだらぬ、くだらぬ……………我はまた何を繰り返しておるのか……………あれほどまでに悔いてもなお、止められないのだ……………」

ある程度吸血したことで、一時的な猛烈な“吸血衝動”が冷めていく。スバルがいたなら、賢者タイムだと評したことだろう。

「なぜスバルは現れぬ……………スバルが現れぬ以外、人の動き、空気感、日の差し加減、全て同じはずだ……………時間遡行ではない？ なら強力な『地点蘇生』<sup>リスボーン</sup>に巻き込まれたか？ ありえん……………」

周囲から一斉に人が逃げ出し、物が散乱するなかでラルトレアだけで広場に居た。噴水だけがその動きを止めずにいる。

思案に暮れ、そしてある一つの仮説に行きついた。

もしかすると。

「もしかすると、この現象を起こしたのはスバルではないのか——？

我ではない。私の『地点蘇生』も聖騎士の劣化に過ぎん……………我は記憶を保ち、スバルだけが行動を変えている」

ということとは。

「そうか。それならば全てに筋が通るが、はたしてスバルにそんな異

能が——」

そうラルトレアは結論を出そうとして。

「——そこまでだ」

思考がぴたりと止まる。

巡らしていた考えを邪魔したのは誰か、振り向いた先にいたのは、赤髪の青年だった。燃え上がるような赤だ。ラルトレアの瞳に込められた血のような赤とは違い、透き通っている。

「……何だ貴様？」

青年の放つ神秘的ともいえる雰囲気には、ラルトレアは以前一度出くわしたことがある。

聖騎士団長、カイザー・クロムウエル。

あのキザつたらしい男もまた、この目の前の好青年と同じオーラを持っている。

——天敵だ。

「ラインハルト・ヴァン・アストレア、君を退治する人間だ。それ以上、君の狼藉は認めない。そこまでだ」

「我を退治するだど……？ 昔、似たようなセリフを我を吐いた大馬鹿者がおったわ。結果はこの有様よ」

会話しながらもラルトレアは周囲の様子を観察していた。

完全に四方八方を衛兵らしき、いや騎士といふべき男たちに囲まれていた。

さらには、ラルトレアの背後から一番から近い裏路地からは、紫髪の男が顔を出している。突破はすこし難しそうと判断せざるをえない。

「剣は抜かぬのか、ラインハルトとやら」

赤髪の青年はその腰に差した騎士剣をいまだ抜いていない。それを疑問に持つラルトレアにたいし、その蒼い双眸を細めた。

少し笑っている。

「君はここまでのことをしておいて、まるで戦う気がない。戦意の無い相手に、この剣は振るえないようだ。どういふことだろうか？ どうしてこんなことをしたんだい？」

「腹が減ったからだ」

この問いもまた過去に言われたことがある。あのときは、「貴様が飯を食らう理由は何だ？ 我も、同じだ」と答えような気がする。

「そうか。君は人間ではないんだね」

「ああ、我は吸血鬼だ。——『吸血変化』」

血のストックがごっそり減っていく感覚がある。

ラルトレアの肉体が急激な成長を始めたのだ。それに合わせてダークドレスもサイズを変えていく。

七歳の童女から、十四歳の少女へと変貌していく。身長が伸び、体重が増え、胸がふくらみ、お尻が少し大きくなる。

「驚かないのだな、ラインハルト」

「十分驚いているよ」

「どうだ。美しかろう？ 我は美しく強いのだ。我が他の女に劣っているはずがない!! そうだろう!! なぜだ！ なぜあんな銀髪女にばかり!!!」

ラルトレアはその長く流れるような夜に溶け込む黒髪を振り乱し、

その赤くどろついた双眸を憎しみに歪ませた。

『吸血之鎌』を肩に掲げ、上体を前へ傾ける――

『吸血解放Ⅳ』――ストレス発散に付き合ってもらおうラインハルト  
！』

ダンツと石畳を踏み砕き、叫んだラルトレアは『吸血之鎌』を大きく振りかぶった。その範囲内にラインハルトは収まっている。

だがラインハルトはすぐさま後ろに飛びずさり、その途中に地面に落ちた剣を拾う。武器商人が落としていったものだ。そこらじゅうに散らばっている。

剣を構え、ラインハルト一步を踏み出した。その一步に、大気がふるえる。ラルトレアには、空気中の魔力がラインハルトに味方しているように見えた。この光景も一度見たことがある。

こういう輩は世界に愛されているのだ。忌み嫌われ生まれ落ちた自分と違い、祝福される側の強さなのである。

――！』

ラルトレアは慣れない少女の肉体がビクついているのを感じていた。力の差だ。この戦い、必ず負ける。いや完全体になったとしても勝てるかどうか分からない。ただ、その過程でこの王国ぐらいは滅ぼせるだろうか。

だが、ラインハルトもラルトレアの技は初見のはずだ。ラルトレアが見るに、ラインハルトは小細工を弄して戦う手合いではない。ならば、こういう変則技が効く可能性もある。

ラルトレアは突っ込んだ。そこにラインハルトが振りかぶってくる。頭から真つ二つにする斬撃だ。

それを。

「――『暗黒沼』」

ラインハルトの剣先がラルトレアの額に触れようというとき、いきなりラルトレアが地面に沈んだ。斬撃はそれを追うように、地面に突き刺さる。

周囲の騎士どもが息をのんで驚いているのが分かる。だが、これはラインハルトは予測している、いや、わかってゆっくり斬撃をそのままにした。きつとどんな攻撃をされても反撃できるとわかっているのだらう。

なら、

「油断していると足をすくわれるのだ」

ラインハルトの股下に、ラルトレアが出現する。両足をくるぶしで掴み、影中から大振りの鎌が射出される。角度からして避けることはできない。

その、はずだった。

影から飛び出した鎌はラインハルトを一つも掠めずに勝手に逸れていく。

「つくづく嫌なやつだ」

「次はこちらの番だ」

ラルトレアはすぐに両足から手を放し、影の中をもぐって距離を取る。

しかし。

「そこだ」

ラインハルトが向きを変え、右方向に一直線に剣を振り下ろした。その斬撃を空気を切り裂き、地面をも割っていく。

斬撃を放った剣は粉々となり、風に流されて消えていく。

「おっと、危ない危ない。貴様こそ人間ではないな」

「吸血鬼に言われるだなんて光荣だよ」

ラインハルトの斬撃を間一髪で避け、地上に飛び出すラルトレア。振り返り、ラインハルトにまた突っ込んでいく。ラルトレアは剣術が得意ではない。どちらかといえば肉弾戦の方を得意としているが、ラインハルトには通用しないだろう。

ならば、もう吸血鬼らしく血を吸うしかないだろう。

ラインハルトがいつの間にか拾っていた剣を振り下ろしていた。またこの形勢だ。屈んで肉体能力に任せて突撃するラルトレアはまるで獣で、ラインハルトはそれを狩る狩人だ。

だが狩人はその獣の特性を知っているだろうか。

「——『吸血化身』」

ラルトレアの肉体が、千羽のコウモリへと変貌する。斬撃を避けるように、コウモリはあちこちに飛び上がり、いくつかは斬撃の風圧に巻き込まれていく。

だが、そのうちの数十羽が斬撃をよけ、右から左から、上から下からと四方八方からラインハルトへと牙をむき出しにして食らいつこうとする。

このとき——ラルトレアの本体は影に潜りこんで、建物の上に移動していた。だがあのコウモリたちもラルトレアの一部なのだ。コウモリたちの牙がラインハルトに食い込んだ瞬間、一気に血を吸うことができる。

だが。



これで疑念が確信に変わる。問題はスバルが来るかどうかだ。

うつむいたまま、ラルトレアがいつもの定位置に腰かけることにした。このまま待ってればいいのだろうか。自分から動くべきではないのか。

いや自分が動いたらなおさらスバルと出会えないかもしれない。それだけは避けたいが……しかし、ここに留まるのも嫌だ。

なら、どうするか――

## 第六話 『幼女は遅れてやってくる』

「待つばかりが女ではない。我は動く女なのだ」

噴水の縁からラルトレアは立ち上がった。時刻は真昼間、日差しが少々ヒリヒリする時間帯だ。ラルトレアには自負があった。

ただの吸血鬼ではないという自負、平凡ではないという自負。

自分は平凡ではない、女としての自分もまた平凡ではない、優れているというロジックだった。

「スバルが力を発動させているのは間違いない。スバルもまた巻き込まれている可能性もあるにはあるが、それは考えても無意味だな。スバルだと仮定して行動しよう」

さて、とラルトレアは周囲をぐるっと見まわして腕を組んだ。

「——どこに行けばいいか……スバルが現れるポイントはどこだ。あのリングゴを売っている八百屋、サテラと出会った裏路地、大通り、貧民街、盗品蔵……」

場所はいくつか候補がある。だがそのどれも確証がない。

スバルに『力』があつたとして、スバルはどこへ行くだろうか。それに。

「……刻限もある。スバルが『力』を使ったのは日が落ちてからだ。時間の制限もあり、きつとスバルは絶えず移動しているはずなのだ……くそっ、わずらわしい……!」

簡単に答えが得られず、むしゃくしゃしてしまふラルトレア。

「くっ、……スバルめ、我をこんな気持ちにさせおって……」

むしように胸を掻きむしりたい気分なのだ。

こうやって腹を立て、悩んでいる間も、刻々と時間が過ぎていく。早く選択しなければならぬのだ。それがラルトレアを焦らせる。

「こう考えるのは癪だが……スバルがああ銀髪に力を貸そうとしている、のだからな。ぐぬぬ……なぜ我に振り向かぬ……いつそのことあの女を殺してしまいたい……だがそうすればスバルが……歯がゆい！ ああ!!」

思わず、整った長髪をぐしゃぐしゃにしてしまう。一度冷静になるために思い切り感情を発露させ、深呼吸して呼吸を整えていく。ぼさぼさになった髪も、ゆっくりと元の形へと戻っていった。

「盗品蔵だ。盗品蔵だろう。あそこに行くのが一番手っ取り早いだろう。サテラが徽章を盗まれるかどうかは分からない。ただ、あそこに居ればおのずと結果がわかる。追うように辿っていても結局間に合わないのでは意味がないのだ」

現在時点で移動しているスバルを探しに、大通りや八百屋、裏路地をうろついているのは埒が明かない。出会う可能性よりも、すれ違う可能性の方が高そうだ。

それなら、最初から最終目的地に行っていた方が楽だし効率的だ。

「待っておれスバル」

盗品蔵へと少女は駆けだした。

この肉体的能力、歩幅ではあそこに到着するまでに結構な時間が経ってしまうだろう。ならば急がなければならない。

人混みをかき分けるように、大通りを突き進んでいく。低い視点で

は周囲の状況を確認する余裕はない。

あるときは爬虫類の肌を持つ長身の股下をくぐり抜け、また、あるときはラルトレアと同じくらい背丈の獣人の横を通り――

肉体が持てる限りの、童女の身体能力すべてを使って走り抜ける。途中、さまざまな者たちが目に入る。

桃色の髪の若い踊り子や、六本もの剣をぶら下げた剣士。妙な人だかりができていたところもあったが、今は無視。気にしては時間を無駄にする。

そうしてようやく、三十分くらいで貧民街へと入ることができた。貧民街の入り口から、盗品蔵への道順を思い出していると――

ぐにやり。

視界がぐにやぐにやと、とぐろ巻くヘビのように渦巻きはじめた――

「――は？　どうしてだ――？」

★★★  
★★★  
★★★

「……………早まったのか？　一体どうすれば良いのだ…………」

目の前にあるのは広場だった。

中央には噴水があり、石畳らしき道路に自分は突っ立ってる。もう四度目だ。

今一度、「戻る」前の状況を思い出す。猛ダツシュして貧民街へ着いたかと思えば、すぐこれだ。

あのときまだ日は暮れていなかった。

ならば。

スバルが巻き戻す。" タイミング" を早めた、ということだろうか。

「……盗品蔵に行く選択肢は無いか」

時間的にどうあがいても、今の肉体では間に合わない。力を得るには誰かから血を吸わなければならない。

どしんどしん、と目の前を地竜が歩いている。

「あまり獣の血は好かないが……いや……面倒なことになるだろう」

地竜を襲うと暴れ出しそうで怖い。小動物の方が良いが、見かけたものといえれば貧民街のネズミくらいか。

——ドブネズミか、あんなものを……。

この際仕方ないのかもしれない。

だがネズミを狩るには貧民街にたどり着かなければならない。

他にネズミが居そうなところ——

「裏路地か。裏路地ならすぐに行けるのだ」

行動を決めたラルトレアは早かった。考え込んでいた頭を持ち上げて、ついていた頬杖を離す。勢いよく立ち上がって、

きゆるるう……。

ラルトレアの小さなお腹が悲鳴をあげていた。

色々と考えることが多くなりすぎて、頭を使いすぎたかもしれない。「戻される」たびに、考えることが多くなるのだ。疲れもしよう。

「お腹が減ったのお……早く血を吸わねば……」

空腹でお腹と背中がひっついてしまいそうだ。早く血を吸いたくてたまらない。“吸血衝動”が抑えられなくなったらお終いなのだ。無意識のうちに良い匂いにつられるようにして、大通りへとラルトレアは駆けだしていた。

その頃スバルといえば。

「つまり、これはアレか」

顎に当てていた手を前に向けて、指パツチンする。

「——死ぬたびに初期状態に戻ってる、ってことだな、神よ」

馬鹿馬鹿しいと除外していた考えを、ようやく結論としていたところだった。

「死に戻り、もっとまともに言うと……『時間逆行』ってやつになんのか、これ」

つまりスバルは限定的タイムトラベラー、ということになる。

『死に戻り』してたって考えると、どうにもこれまでの不自然さの辻褄がきつちりかっちり合っちゃうんだよな……」

一度目の死は、ラルトレアと二人で盗品蔵に入ったときだ。

ラルたんの説得でサテラを一人で行かせてしまい、その挙句踏み込んだら殺人鬼とこんにちは。サテラは首を斬られており、ラルたんとスバルも腹を切り裂かれる最悪エンド。

そして二度目の死は、ロム爺とフェルトが殺され、その後の抵抗もむなしくエルザに惨殺された。

三度目の死はほんの十数分前に体感したばかりだ。

これこそまさに、犬死というのを体現した死に方だった。

まさかトン・チン・カンに殺されようとは。

「二回目と二回目から考えて……俺はたぶん二回、エルザにやられてるな」

一回目、盗品蔵に居たのはエルザだったのだろう。

倒れていた大柄の老人の死体はロム爺で正しかったわけだ。

「二回も同じ相手に殺されてんだな。単純に考えて、エルザはエンカウトすると死亡が確定する死神キャラってことだろ。それに……」

エルザと遭遇した場合のことなど、考える必要があるか？

遭遇する可能性があるのは、『盗品蔵』のみだ。

そしてそこに赴く理由は『徽章』であり、それを取り戻すという目的は『彼女へ恩を返す』という理由だ。

しかし、『死に戻り』によって巻き戻ったスバルにとって、その恩義は存在しない。

『誰だか知らないけど、人を『嫉妬の魔女』の名前で呼んで、どういうつもりなの!?!』

三度目の状況がそれを物語っている。  
スバルとサテラの関係はリセットされている。  
いやサテラだけではない。この世界の住人たち全員だ。

ならば徽章のことなど綺麗さっぱり忘れて、エルザと遭遇するとい  
うBAD ENDフラグを回避する。

「ラルたんは、どうなんだろうな……」

ラルたんとは一回目以降、一度も会っていない。あの広場に行かな  
ければスバルはあの少女と出会うことがないのだ。

ラルたんが居たからといって、あの惨劇になつたわけじゃない。

「でも今考えれば、盗品蔵に入るときラルたんはすこし様子が変わ  
った」

明らかにラルたんはサテラを一人で行かせたがっていた。

これは一体どういうことだ？

ラルたんもまた、スバルと同じく異世界召喚されている。スバルが  
『死に戻り』の力を持っているのだから、ラルたんも何かしらの力を  
持っている可能性が高い。

「ラルたんは味方……だよな？　なら、また広場に行くか？　いや、で  
もわかんねえ……誰が味方か、敵か、もう全然わかんねえぞ……」

あんな可愛い幼女に見えて、実は、ということもあるかもしれない。  
暗い顔をして座り込んでいたのも、そのあと見せた笑顔も演技かも  
しれない。

現にエルザは完全な異常者だが、外見から分からない。

ニコニコ笑っていても、どういう人間かなんて分かりっこないの  
だ。

「とにかく今は……」

避けられる地雷は避けて通る。少しでも怪しい道は通らない。それが正しい。

「ま、ケータイが金になることはわかってるしな。ロム爺に頼らなくても、適当に信用できそうな店を見つけて売っ払えば軍資金は作れるだろ」

―聖金貨二十枚以上だ。

いまいちわかり難いが、適当な宿に何泊かできるぐらいの金額ではあると思う。

「売り払ったら、その金がなくならないうちにどっかの店に下働きとして雇ってもらうとかしかねえよなあ……」

かなり不安だが、少しくらいブラックでも殺されるよりはマシだろう。

「そうなれば話は簡単だ。とつとと行動しないと日が暮れちまう。なあ、オッサン」

「さつきからブツブツ言ってると思っただらなんだネ、急に。なあ、とか言われても知らないヨ」

隣で露天商をやってる主人が迷惑そうな顔で答える。

頭にターバン巻いて、壺や皿を売ってる露天商だ。

「俺もこうやって持ち物売ったらいいのかな……でも、この残念な壺とかと一緒に感じて売って儲かんのかなあ。どう思うよ、オッサン」  
「他人の売り物見ながら残念とか言わないでヨ！ なんなの、チミ！」

「いずれ富豪として名を上げる男だよ。ケータイ成金とでも呼んでくれ。……それって巻いてると頭とか痒くなんない？　なんで巻いてんの？　ハゲてんの？」

「意味わからない上に失礼極まりないヨ！　どっか行ってよ、商売にならないじゃない！」

露天商の主人の態度はかなり冷たい。

——ただすれ違う他人に接する人間の心なんて、どの世界でも一緒だよなあ。

「でもさ、自分が切羽詰まっても人のこと助けちまうお人好しもないんだよ」

大切なものが盗まれたあとで、それを盗んだ相手を追いかけてる途中なのに、役立たずの自己満足に付き合っつて、ひどい最期を迎えてしまっお人好しが。

「三回も繰り返してみると、色々とわかってくることもある。いや、それでわかってこなかったらだいたい頭可哀想だけど、俺の頭はそこまでじゃない」

「なにを言い出したのヨ、今度は」

「たぶん、パターンがあんだよ。運命って言い換えてもいいな。——何度やり直しても、この展開は必ず起こるって運命が。たとえば……」

必ず、サテラはフェルトに徽章を盗まれる。

ならば、二回目も盗品蔵の現場に到着しただろうサテラはどうなった。

足手まといはいないが、あのエルザに勝ち得たのだろうか。

「それはわからない。わからねえまんまだ。だけど、わかることもあ

る」

このままだと、間違いなくフェルトとロム爺は殺される。そして、サテラとエルザは一戦を交えることになる。

フェルトは盗人の業腹な娘で、ロム爺は盗品を裏で買いつけて売りさばく小悪党だ。二人とも居なくなれば清々するところだ、が。

「あー、こんな気持ち、パソコンの前じゃすつげえバカにしてたくせによお」

同情とか慈悲とか馬鹿馬鹿しいと、そう振舞っていたはずだ。

自分は情が薄い人間だと思っっているし、現代人は誰もがそんな感情が希薄なものだ。

だからどんな事態に陥っても、知っている人間が死ぬ、くらいの情動は淡々と受け止めると思い込んできた。

「なのに、嫌なんだよ。気持ち悪いんだ。善人とは程遠いよ、二人とも。——でも、いつペン知り合った奴らが殺されるって知ってて、見過ごすのは無理だな」

けつきよくは、そう振舞っていただけという話なのだろう。

バーチャル感覚で皮をかぶって、いざリアルになればこのザマだ。

「それにやっぱサテラ……ってか、あの子も見捨てられねえ。でも、ラルたんはこの事件に巻き込めないな。だからといって俺に匿う家なんてないし、衛兵に頼るしかないか。そうだな、今はサテラだ。サテラの方が危ない気がする」

同じく異世界の召喚されて右も左も分からないはずの少女、ラルたんだが案外と根が強いところはある。というか、スバルよりもっさりしているのだ。

差し迫った危険はラルたんにはないはずだ。途中衛兵に声をかけて保護してもらう方がいいかもしれない。

「となると、サテラは……」

名前をつぶやいて、偽名なのだろうなとスバルは思う。

思い返せば一度目の世界で、彼女はその名前をあまり口にしなかった。それで三度目の世界のやり取りだ。

つまり信頼が足りなかったということだ。好感度不足だったため、名前獲得イベントで失敗判定を食らったということだ。

「んならば、今度は名前くらい、ちゃんとして教えてもらえるように頑張りますか」

その場で屈伸して、スバルは「うーん！」と体を大きく伸ばす。

「男にはやらなきゃならねえときがある。——そうだろ、オッサン」

「そうネそうネそうヨその通りヨ、だからとつと行つてヨ」

おぎなりの手振りで背中を押されて、スバルはすたこらと露天商からひとつ走り離れた。

しばし人込みをかき分け、二百メートルほど走つたろうか。

「さて……どこに行つたら会えっかな」

考えてみると、偽称サテラとの接触はかなり偶然に頼つた部分が多い。一度目、三度目に彼女と遭遇しているが。

……場所は、どちらもこの最初の大通りから離れていない、ということしか覚えていない。せめて時間を確認する癖があればよかった

のだが、出会えたタイミングを記録するというストーリーカー行為はしていない。

「うなれ！ ささやけマイレージャー！ 銀髪美少女はどっちだ！」

奇異の視線を浴びるスバルは、なんとなく感じるものがあつたような気がして、しばし誘われるままに行軍を続行。

次第に周囲が見覚えのあるような雰囲気になり始め、「案外、俺のセンサーの感度も捨てたもんじゃなくね!」とか思い出して、ふと気付く。

——どうもいつの間にか、通りから外れて細い路地に入っているらしい。

「ここって、一回目の路地か……?」

自信はない。

この異世界の路地はどこも似たような造りをしているのだ。

そもそも一回目の路地だとしても、二回目では出会っていないのだ。

しかし二回目とは少し状況が違うだろう。出会えるかもしれないし、出会えないかもしれない。

そう考えて、スバルは自分がミスを犯していることに気づいた。

一つ、重大ともいえないが、降りかかる不運を忘れていたのだ。

ここにいれば、二人と遭遇できるかもしれない。

しかし、それは別の再会をも意味するのである。

つまり、

「もうとんだだけ俺のこと好きなんだ？ さすがのスバル君も困っちゃ

うぜ」

両手を挙げて「やれやれ」というアメリカ人のポーズ。スバルの視線の先、路地を塞ぐようにチンピラトリオが立っていた。

服装も人も同じなら、その目的も装備も変わり映えがない。

「あの二人にはなかなか会えねえってのに」

彼女らに会えないのは、彼女らの行動がさまざまな要素に左右されているからだろう。

逆説的に考えると、この頓珍漢三人組とスバルが遭遇するのは、彼らが最初からスバルに目をつけているからに他ならない。

だから一回目も二回目も、そして三回目も、どこの路地に入ろうと、彼らとはエンカウントする運命にあるのだ。

それはまさに星の下で神が定めし共通ルートということである。

「なんで銀髪美少女と会うのが共通ルートじゃないんだ？ 神よ、どうして俺にこんな酷い仕打ちを？」

「さつきつからブツブツと、何を言ってるんだ、あいつ」

「状況がわかってないんだろ。教えてやったらいいんじゃないか？」

彼らとの掛け合いも定型文から離れることはない。

うんざりする反面、舐めてかかっているとは思えないと思う気持ちがあるのも事実だ。

トンチンカンとの遭遇はクリア条件としては緩めだが、三度目の死因は彼らだ。

一回目のように美少女が助けしてくれるか、二回目のように自力の奇襲かで突破できると思うが、それも万全ではない。

この先のイベントを考えると、手傷を負うのは避けたい。

「かといって、交渉手段の荷物を渡して逃げるのも違うしな」

二回目のおきのように、こちらに何の損失を出さずに切り抜けられるのが理想。

時間を余り掛けないのが最善だ。

どうにか彼らを避けることができないものかと、スバルは腕を組んで頭をひねる。

一方、そんなスバルの態度に無視されたとても思ったのか、優位のはずのトンチンカンの表情は険悪に染まるばかり。

——ふと、三回目の死の瞬間を思い出した。

あのときに、トンチンカンが最後に話していた内容はなんだったか。先に死んだ脳が理解していなかったが、今ならば理解できるはず。

——確か、そう。

「衛兵さああああああん!!!」

スバルの救命信号に、トンチンカンが思わず飛び上がる。

路地裏の静寂を打ち砕き、大通りにまで割り込んだらう声量。

助けを求めるなど、幼女の前でなければ、プライドに些かの傷もつかない。

——スバルお兄ちゃん、かっこわるい……

そうつぶやくような幼女は、今いない！

「誰かあああああ！ 男の人呼んでええええええええええ!!!」

「てめ……っ。ふざけんなよ!?! ここで普通、いきなり大声出すか!?!」

「状況的にこっちの命令きかなきゃ痛い目見る流れだろうが！ 要求

も聞かずにこれとかやんねーぞ、普通は！」

「黙れ!! なにが普通だ! お前らの相手なんぞしてられっか! こっちや黒金銀美少女とキャツキャウフフに命賭けてんだよ!」

地面を踏み鳴らし、逆上するトンチンカン目掛けて怒鳴りつける。開き直った風で口撃するスバルだが、その内心は表に出ないだけで焦燥感が募りまくっている。

叫びは大通りまで間違いない届いたはずだが、そちらからのアクションは見られない。

「やっぱ、失敗か……」

「おどかしやがって……ほんの少しばかりだが、ビビっちまったじゃねえか」

「ほんの少しだけな!」

「ほんのちよびつとただけだけどな!」

息の合った連携で、小者ぶりを否定する小者ぶり。

男たちは一度、深呼吸をして気を落ち着かせ、各々が獲物を手に握り始める。

ナイフ、錆びた鉈。そして、

「ひとりだけ素手って(笑)」

「うるっせえな! 俺は武器ない方が強いんだよ! あんま舐めた口きいてつと、本気で殴り殺すぞクソがッ!」

一応馬鹿にして挑発してみるが、状況は悪いままだ。

武器が抜かれてしまった以上、突破が厳しくなってしまった。

無傷の突破どころか、五体満足でいられるか怪しい。

「勘弁してくれよ。……痛いのはごめんだ」

死ぬというのは何度やっても慣れるものではない。

刃物で激痛に溺れて死ぬだなんて死に方は二度とごめんだし、何より――。

「今まで『死に戻り』してたからって、今回もできるとは限らねえ……」

回数制限付きでないとどうして言える。

体のどこかに数字が刻まれている形跡はない。

だが、コンティニュー回数の打ち止めという意味で形跡が消えているとしたら、ここでむぎむぎと犬死すれば、それきりでスバルの異世界生活はBADENDを迎える。

「……つまり、傷を負ってでも逃げるのが正解ってことか」

歩み寄ってくる三人組を見ながら、スバルは腹を決めかねていた。いざとなってみると、思考がうまくまとまらない。

――ちよつ、やばいやばい、どうするどうするよ！

「――そこまでだ」

その声は圧倒的な存在感だけを叩きつけきた。

スバルが顔を上げたその先、ひとりの青年が立っている。

目を惹くのは、燃え上がる炎のように赤い頭髪。

その下には真っ直ぐに輝く青い双眸がある。異常なまでに整った

顔立ちは凜々しさを完璧に演出していた。

すらりとした長身を、黒い服に包み、その腰にシンプルかつ威圧感を放つ騎士剣を下げている。

「たとえどんな事情があろうと、それ以上、彼への狼藉は認めない。そこまでだ」

カツンカツン、と青年は悠々とチンピラトリオの隣を抜けて、彼らとスバルの間に割って入る。その堂々とした行為に、誰もが声を上げられない。

だが、彼らとスバルでは沈黙を選んだ理由が違うようだ。

「ま、まさか……」

「燃える赤髪に蒼色の瞳……それと、竜爪の刻まれた騎士剣」

トンチンカンを確認するように指差して、最後に息を呑んで、

「ラインハルト……あの『剣聖』か!?!」

「自己紹介の必要はなさそうだ。……もつとも、その二つ名は僕にはまだ重すぎぬ」

★★★  
★★★  
★★★

「し、しまった……道に迷ったしもうた……」

例の裏路地を探しているうちに、ナチュラルに迷子になってしまったラルトレアはきよろきよろと首を回して、壁伝いに大通りを進んでいくと――

「剣聖とかどんだけついてねえんだ！」

「つり目男の方はカモだったのによお！ アレはわりに合わねーよ！」

「あの黒髪、いきなり叫び出すとか頭おかしいだろ!!!」

どこかで見たようなチンピラ三人組が建物の合間から飛び出して、一目散に走っていく。なにか恐ろしいものでも見たように、顔が恐怖に引きつっていた。

そして、黒髪、つり目。

ピンときた。この三人組はスバルとはぐれた時に出会った男たちだ。

「その路地か！ スバル！ 我を置き去りにした仕打ち、忘れはせぬぞ！ パンチかお尻ぺんぺんだ!!!」

スバルへのお仕置きを考えながら、一体の少女はチンピラトリオが通った思しきルートを突き進んでいく。

路地をぐんぐん突き進んでいく。  
見覚えがある。この道だ、このルートだ。この先に、スバルと銀髪、おまけで毛玉がいたのだ。

そこで二度目の角を曲がったところで――

いた。

「つと、ラインハルトさん……でいいんスカ？」  
「呼び捨てで構わないよ、スバル」

キュウウウ——と、猛スピードで前へ進もうとする足を止めるように踏ん張ると、石畳から摩擦で煙がもくもくと出ている。  
ラルトレアは見た。

天敵だ。赤髪の男——腰に騎士剣をさした、最強の男。ラルトレアが本気を出しても殺せないであろう相手。

「——ラインハルトオオオオオオオオオオオオ!!!」

呐喊していく幼女。

一滴も吸血していない今は、一つも『血霊器具』を発動していない。吸血鬼のオーラをぶんぶん発するだけの、ただの幼女である。  
身体能力さえも幼女並み。

酷使した足が悲鳴を上げ、ついにはそのふくらはぎに電撃が走った。

筋肉が痙攣——つまり、足が攣っていた。

だが、それでもラルトレアはくじけない。

「おっ、うっ、いつ、く、くらえ、渾身のつ、ごぶしっ！」

へにやへにや〜つと、路地裏にただよっていく『幼女拳』は——  
ぽすん。

ラインハルトの腹部にやらかく突き刺さった。そこで力尽きたラルトレアは、まるで餅のようにぐにやりと地面へと突っ伏した。

「もう、力が出ない……のだ」

## 第七話 『清算の約束』

「ラルたん?! ちょっと、えっ、なに? 俺SOSを聞いて駆けつけてくれたとかそういうの?!」

「スバル……」

「ど、どうしたラルたん!」

崩れ落ちたラルトレアは、ラインハルトの手を払い落としつつスバルへと寄りかかって、何とか力を振りしぼろうとしているような感じだった。

「あとで……」

「いやもうしゃべるな! なんでこんなボロボロに……一体誰が。今はもう眠っていいんだぜ、ラルたん……」

「スバル……あとで、お尻ぺんぺん百回だ……がくっ」

力を使い果たしたのか、スバルの腕の中でスースーと寝息を立て始めるラルトレア。それはまさしく?寝であるのだが、スバルは全く気付いていない。

「お尻ぺんぺん……一体どういことなんだラルたん……」

「スバル、彼女は?」

「いやなんていうか、あれだ。親戚の女の子みたいなもん、かな? 知り合いの女の子だ、そうとしかいせん」

ラインハルトに問われて、いまいち正しい答えがわからない。

ラルトレアに関して知っていることといえば、日本人でなく、スバルとは違う世界の住人であり、幼女であるということだけだ。

暗い顔をして落ち込んでいる彼女をスバルが見つけ、知らずに異世

界に迷い込んだ幼女だとスバルは考えていた。

「とにかく大事な女の子なんだ！　って、あれ、ラルたんさつきラインハルトの名前呼んでたよな？　もしかして知ってる？」

「いや、記憶力は良い方だと思うけど、あいにくと初めて見る子だね」「そっか。まあラインハルト有名そうだしな、ラルたんが知っててもおかしくない、のか？　『剣聖』とか呼ばれてたよな？」

「生まれた家が少し特殊だね。かけられる期待と責任に日々押しつぶされそうだよ」

肩をすくめて薄く笑いながら言うラインハルト。

「それで彼女の名前はなんていうんだい？」

「愛しのマイエンジェル、ラルトレアちゃんだ」

「ラルトレア、ね。スバルとは少し名前が違うようだね。出身は同じじゃないのかい？」

「出身か、答えづらい質問なんだよなあ。ラルたんは、俺とはちよつと違うな。ラルたんは西の方って言うてたかな。俺はもつと東だな、東の方」

「ルグニカより遙か東方、まさか大瀑布を超えて、かい？　それは冗談にしか聞こえないね」

「大瀑布う？」

まず、瀑布という単語が分からないスバル。

必死に脳みそのタンスを引っ張り出して中身をひっくり返してみるのがさっぱり出てこない。もしかして仕舞ってすらいないかもしれない。

「くっ、ここで地理知識が問われるとは！　なぜ俺は教科書を持ち歩く癖をつけなかったんだ！」

「誤魔化しているわけでもないのかな？　とにかく、ルグニカは今は

少しややこしい状況にある。そんな王都に何の用だろう？ 僕でよければ手伝うけど」

「王都に来た理由はうまく説明できないが、そうだな、悪いけど頼みたいことがあるんだ。ラルたん、この子をの面倒を少しの間見てやってくれないか？」

「この子、のかい？」

「うん、そうだけど。あれ？」

スバルは腕に抱いたラルトレアをラインハルトに渡そうとしたが、一向に離れない。それどころか眠っているはずのラルトレアは物凄い力でスバルのジャージを引っ掴み、顔をスバルの胸板に押し付けていた。

「どうやらスバルの所が良いようだね」

「え、ちよつ、マジ？ はい、いい子いい子おく、いい子はラインハルトさんの所へ行きましようねえ——あべぶつ」

スバルがラルトレアをなだめようと頭を撫でていると、くすぐったそうにしてから、いきなり頭を跳ね上げた。

必然的にラルトレアの頭がスバルの顎へとクリーンヒットする。

「あまり無理強いはいけないよスバル。それで、この子の面倒を見る以外に、何か手伝うことはないかい？」

「いてて舌噛んだ。てか優しすぎんぜラインハルト……頼るのが心苦しいくらいだぜ。頼みたいっていうか、聞きたいことが一つあるな。真っ白いローブを着た銀髪の女の子を見てない？ 俺らくらいの年の」

「ローブに銀髪……」

「すっげえ美人でちっさい猫を連れてるんだけどな。心当たりはない感じ？」

「……見つけて、どうするんだい？」

「彼女が落し物をしてな。それを届けてあげたいだけだよ」

ラインハルトはその瞳を細め、しばし考え込んでから、

「すまない。心当たりはないな。もしよければ、探すのを手伝うよ」

「探すの手伝ってもらったら心苦しきで死にそうだわ。大丈夫、これは俺がやらなきゃいけないことなんだ。がんばって探すさ」

「そうかい。なら、僕はこれで失礼するよ」

「おう、ありがとなラインハルト！」

颯爽と去っていく赤髪の騎士。良い人な上にイケメンとかもう文句のつけどころが無さ過ぎて逆に怖い。

きっとモテモテなんだろうな、とかスバルがくだらないことを考えていると。

「スバル……」

「おわつ、ラルたん起きてたのか？」

「何か言うことはないのか？」

黒髪の幼女が上目づかいでスバルを見上げてきた。スバルはポリポリと頬をかいて、何か上手い言葉はないかと考えていたが、一つ違和感に引っかかった。

「あれ、そういえばラルたん……なんで俺のことを……？」

なぜ、ラルトレアがスバルのことを覚えているのか。

この四回目の世界では、スバルはラルトレアに声をかけていないのだ。

「我が……全て覚えているからに、決まっておろうが!!!」

ゴゴゴゴ——と、腕の中から、ぎゅつと逃げられた幼女パンチが発射された。その丸っこくて柔らかいパンチは発射二秒で、目標地点であるスバルの右ほおに到達。

ぐりぐりと、振じるようにこぶしをぶつけるラルトレア。

「ひふへっ、いはいいいはいいい！ 痛いであふ！ ほぶっ、いたいであふしんでしまいまふ！」

「私の心の痛みはこんなものではないわ！ 我をずっと放置しよって！！ やはり貴様か！ 貴様が原因なのだな！！」

「はひ、すびばせん！ ほへであふほへがやりまひた！（俺です俺がやりましたー）」

「わかった。どうして、どういうふうになんかあつて、何をしようとしているか言え！！ すべて言うのだ！！ さあ吐き出すのだ！！」

「わふありまひた、わふありまひたからもうやふえてくたはい！」

両側のほつぺたぐりぐり攻撃に観念したスバルは、痛みで少し涙目になりながらもようやく解放された。ほつぺたをさすりながらスバルは正座させられ、仁王立ちする幼女を前にして話を切り出した。

「スバル、貴様は自ら『三回』、力を使った。そうだな？」

「……ああ、そうだけ。それに気づいてるってことはラルたん——」

「こらああああ！！ 誰が余計なことを喋っていいと言った！！ この口か、この口なのだな！！」

今までのイライラを晴らすように、ラルトレアはスバルの顔面を素足で踏んづけていた。右足の指でスバルが目つぶしされているからいいものの、見えていたらそこにはあんよを持ち上げた幼女の見えてはいけない部分があっただろう。

「よし、次の質問だ。力の発動条件はなんとなく分かっているのだ。スバルが死んだら自動的に発動するのだろうか？ スバルからはあま

り力が感じないからな」

「——はひそうです」

「それで？ 我を放置して、一体何をしていたのだ？」

「い、一回目に、一緒にいました銀髪の女の子、を、です、ね……」  
「……………」

銀髪、という単語が出た瞬間、スバルを絶対零度の眼差しが襲った。  
これ以上言おうと殺される。そんな予感さえある。

「ほお、それで？ サテラと言ったか、その銀髪媚び売り女を、どうしたと？」

「い、いやサテラは偽名だったといえますか……とにかく、盗まれた徽章を——」

「——偽名か、やはりな」

「気づいておられたのですか……ラルトレア様」

「ああ、性根のひん曲がった女のやりそうなことだ。それで、徽章がどうした。盗まれて、盗品蔵に持っていかれるのであろう？」

「はひ、フェルト、という女が徽章を盗み、それで、盗品蔵で依頼人のエルザという女が受け取りに来てですね……結果、フェルトも、徽章の持ち主もエルザに殺される運命にありまして……ええ、はい」

「まったく、女ばかりだ。エルザ、というのは一回目の盗品蔵にいた女でいいのか？ スバル」

「お、おう。そうだけ。たぶんエルザだ」

ラルトレアの怒りが和らいだのを感じ取ったスバルが、ふうつと安堵のため息をはきだす。明らかに自分より年下の小さな女の子がこんなにも怖いとは思ってもよらなかった。

「エルザか。厄介そうな相手ではあるが、勝てないことはないのだ」

「えええっ?! マジで？ ラルたん、そんな強かったん？」

「当たり前だ。隠しておったが、我は最強なのだ」

シュツシュツ、と短い手足でシャドーボクシングを繰り広げるラルトレア。闇のように黒い長髪が体に合わせて揺れ動き、汗でほつぺたに髪の毛が張り付いた。

本人は大真面目なのだが、スバルには喧嘩を真似する小学生二年生にしか見えない。

「ラインハルトにはさすがに負けるがな」

「負けちゃ最強じゃないんじや——いや違う、最強です最強です！  
ラインハルトにも引けを取らないラルたんさいつよ!!」

ラルトレアが一睨みすると、スバルがすぐさま言葉を訂正する。お仕置きは効果抜群のようだ。

——これからはちよつとずつ調教が必要だな。

ラルトレアはもうすでに次にお仕置きを考えていた。

「スバルはどうしてあの男と？ 我は二回目にあやつと会ったのだ」  
「俺は助けてもらったんだよ。ここでチンピラトリオに絡まれた所に、ラインハルトがご登場っていう。ま、俺の頭脳プレイってやつだな！」

「そういうことか。あの男は恐ろしく強い。敵にすべきではないのだ。仲間に取り入った方がよいな」

「俺もそう思うぜ。ふつうに良い奴だったし友達になっておきたいところだ。で、さて、ラルたん、俺はあの子を助きたい。ラルたんがどう言おうとやめやしない」

「………意思是固いのだな」

「ああ、一回目俺はあの子に助けてもらった。あんないい子がエルザに殺されるのを黙って見てられねえ。助けていんだ。それにフェルトもロム爺も、小悪党でもむぎむぎ見過ごすっていう選択肢は取りたくない」

「くふふっ、良い顔をしておる。勇ましい漢の顔だ」

微笑むラルトレアに、スバルは立ち上がって親指を立てる。

「おう、そうだぜこの不肖ナツキィスバル！ 受けた恩はなるべく返す！ 困った女の子を見つけたらすかさず助ける！ それが男つてもんだ！」

「ほお、そうか。なら、まず我を助けてもらおうかの」

「…………へ？」

「まあここに座れ」

裏路地の段差に疑問符を浮べるスバルを座らせ、ラルトレアはその正面に立った。歩み出て、スバルの膝に両足を開いて座る。

「ちよっ！ なになににどういふことですかラルたん?！」

ラルトレアは短い足でスバルの腰をがっちりホールド。

もう逃げることはできない。

そのままラルトレアは両腕をスバルの首の後ろに回しつつ、薄っぺらい胸をスバルに押し付けていく。

「…………スバルの鼓動が聞こえる」

つぶやきつつ、ラルトレアはさらにスバルへと体を密着させた。もう隙間を残さないとというぐらい力強くハグしながら、両足でスバルを締め付けた。おのずと、ラルトレアの下腹部あたりがスバルの同じ部位に押し付けられる。

「ラルたん？ いやマジでどういう状況？ 小さいとはいえ女の子、いやでも相手は幼女だ相手は幼女だ、静まれナツキィスバルここで少しでも興奮したらあれだ、逮捕だ牢屋行きだ、人として終わりだ」

「かぷっ」

「ひよおほほっ!!」

スバルの首元に熱い感触が生まれる。スバルは思考がうまくまとまらなくなった。

ラルトレアの黒髪がスバルの頬をさわさわと、鼻につくたびにいい匂いが、幼女の薄い胸、ダークドレスのサラサラとした肌触り……

そしてなにより、溶けてしまいそうなほど熱い熱い、口の中の感触。やわらかい唇が、白い歯が、ねっとりとした舌がスバルの皮膚の薄い部分にふれている。

「ふう——」

「つつうううう!!  
?!!」

「いってええええ!!」

突然耳に息をふきかけられたかと思えば、次の瞬間、皮膚の引き裂く感覚がスバルを襲う。まるでぶつとい注射針を首に刺されたような。

鋭利な刃物とはまた違う。ラルトレアの成長した犬歯が思いつきり突き刺さっていた。一回目よりも深く、大きく穴を開けている。

その傷口から、どつぷりと鮮血があふれだした。その血潮を、スバルの命の源をラルトレアは吸い取っていく。

「え、飲んでる?」

スバルは聞いた。ごくり、ごくり、と密着した幼女が喉を鳴らしているのを。

そんな捕食されるというシチュエーションに、スバルは言い知れぬ興奮を感じていた。心臓が爆発してしまいそうなほど脈打っている。

しばらくして。スバルの視界がややクラクラとしてきた頃に。

「くふふっ、美味しかったぞ。スバル、限界ぎりぎりまで吸わせても  
らったぞ」

「……………」

「ん、スバル？ 吸いすぎたか？ スバル！ おいスバル!! ……何  
か固いものが当たっておる……何だこれは？」

白目を向いているスバルをユツサユツサと揺さぶってやるが反応  
はない。ラルトレアは立ち上がりうとして、下腹部に当たる何かに気  
づいた。

それを足で踏んづけてやると。

「あだだだだ!! やめて！ もうやめて!! 死んじやう死んじやう  
から!! もう恥ずかしさとあれやこれやお嫁にいけない！ とい  
うか、なんかもう人として終わっちゃったよ?!」

裏路地にスバルの絶叫がいつまでも響いていた。

★★  
★★  
★★

「……………おっちゃん……聞きたいんだけどさ……ここらでスリ騒ぎ  
とかなかった……?」

「なにも買わずに、と言いたいところだが、お前……どうした。なんか  
人生終わったみたいなの顔してるぞ」

「いや……まあ、色々、ね……で、どうなの……」

「スリか、悪いが珍しくもなんともない」

「……マジで!？」

「うおっ、いきなり元気になるなよな」

裏路地から抜け出したスバルとラルトレアはまた大通りでウロウロしていた。スバルとしては、どうにかして銀髪女かフェルトという盗人に出会いたかったところだった。

後ろで聞いていたラルトレアが、露店が立ち並ぶなか、細い路地につながる壁を指さして、

「八百屋の主人よ、あの穴はそのときのものではないか？」

「ん、ああそうだ。よくわかったな。見ていたのか？ いきなり魔法ぶつ放すんだからびっくりだ。氷柱が矢みたい飛んでいつてたぞ」

主人の言葉にスバルは思わずガツツポーズをした。追う形にはなるが、証拠は掴めた。

「あの子だ!」

「スバル、あの銀髪女だとなぜわかる？」

「氷魔法っぽいのを使ってたんだ、一回目の裏路地で。ってことは、出遅れたか。もうフェルトは徽章を盗んだ後だ」

「では、どうするのだ？」

「フェルトと合流するしかねえ。徽章を返してもらおうよう交渉するんだ」

「ということは盗品蔵ということか？」

「いや、フェルトが盗品蔵へ行く前に徽章を取り返しておきたい。貧民街だ。たぶんフェルトは貧民街に暮らしている。あいつの住み家に行くしかない」

「そうか、では行くか」

「ラルたん……ここからさき本当に危ないんだ。また痛い思いして死ぬかもしれない。できれば、連れていきたくない。ここに——」

「それは我が小童だからか？」

ラルトレアは分からず屋のスバルへ問いかける。気づかいはあ  
りたい。だが、いつまでも子供扱いするのは許せない。ここでそう答  
えればさらにお仕置きをするつもりだったが。

「いやちげえよ。ラルたんが大事だからだ。傷ついてほしくない」

「放置したくせにの」

「うぐっ！ それはまあ、俺もこんがらがってたんだ。気が動転して  
て……いや、言い訳はよくねえな。ごめん、気が付かなくて。自分の  
ことで精いっぱいだった。俺はあまり器の大きい男じゃねえ、考えら  
れることがあんまり多くねえんだ。今は正直言っ、あの子のことで  
いっぱいだ。だから、連れていきたくない」

「……………。はああああ、貴様は女たらし、というやつなのか？ スバ  
ル」

でっかいため息をわざと吐き出して、うろんげな瞳でスバルを見  
た。

「お、おお女たらしちゃうわ！ 異性経験値がゼロに近い俺に言っ  
ていいセリフじゃないぞラルたん！」

「……………いつかは清算せねばならぬのだぞスバル。我は一步たりとも退  
くつもりはない。よいな？」

「え、あ、はい」

「さて、いくか！ 主人、邪魔したな」

そろそろ爆発しそうな雰囲気の中、八百屋主人を一応なだめおいて、ラ  
ルトレアは歩き出した。強引にスバルの手を引っ張って。

「ちよいちよいちよい！ ねえ今の話聞いてたラルたん?! 俺の熱意  
のこもった説得はどこにいったっちゃったんだ?!」

「そんなものは捨てたのだ」

くふふつとラルトレアはその赤い瞳を歪ませるように笑うのだっ  
た。

## 第八話 『嫉妬の少女』

まだ夕刻にはならないが、少しだけ日が傾き始めた貧民街。

「よつ、兄弟。景気はどうだ?」

スバルが貧民街で声をかけたのは一回目で盗品蔵の場所を教えてくださいました中年の男だった。この無精ひげのやつれたおっさんは案外重要なことを教えてくれることをスバルは知っていた。

「フェルトにちよつと用があつてな。どこにいるかわかんねえ? 住み家でもいんだけどさ」

「フェルトの奴のねぐらなら、そこの通りを二本奥へ行つた先だ」

「感謝するぜ。助かつたよ、兄弟」

「気にすんなよ、兄弟。——強く生きろよ?」

そう言つて、苦笑しながらおっさんが去っていく。フェルトの住み家は判明した。まだフェルトが盗品蔵に行く時間にはまだ早いはずだ。待ち構えていれば会えるかもしれない。

「スバル、本当にその盗人はねぐらに戻るのか?」

「わからねえ。正直自信はない。ただ、盗品蔵で待つには少し時間が余るんだ。できることならロム爺より先にフェルトに話をつけたい。なら、どこで待つかつていえば、ねぐらしかない」

ラルトレアの言うことももつともだ。フェルトが戻つてくるという確証はない。

「ふーむ、手探りだのお。それなら、泥棒娘はスバルに任せるのだ」

「え? ラルたん、いずこへ?」

考えて踵を返したラルトレアに、スバルは疑問符を浮べた。

「戦というのは始める前に決着しておるのだ。心配するでない。準備が終わったらちやんと盗品蔵へいく」

「いやいやいや！ 盗品蔵へ行く前にフェルトと交渉するんだってばよラルたん?!」 えっ、なに？ 信頼されてないってこと?!」

「そのフェルトというのはきつと金にがめつい娘っ子なのであろう？」

「いやそうだけど……よ、よくわかったなラルたん」

「なら、そういうことだ。スバルが買い取ろうとすると、ふっかけてくるのではないか？ その盗人は」

「ラルたんすっごい……どこかで見てたん？」

ラルトレアが分かったのが不思議で不思議で仕方ないという様子のスバル。スバルからあらかたの流れを聞いたラルトレアには容易に想像できることだった。

スバルは余りにも世間を知らなさすぎる。

逆にラルトレアは貧富の差をもつ “人間” という生き物をよく知っていた。

「貧しき者をよく知らんのだなスバルは。エルザに依頼された盗っ人は、スバルという新たな取引相手がやってくれば、値段をつり上げることができると踏むであろう。その引き際を競うのが商人というものだ。貧しき者ほど、その欲は大きく引き際を知らぬものだ」

「は、はへー……」

「だが交渉する価値はあるのだ。だからスバル、がんばってみよ。我はその後に備えて盗品蔵で待っておる」

「ラルたん……全然俺に期待してないよね？」

「スバルに能力を期待して隣にいるのではないからな」

「ぐっ、なんか嬉しいような悲しいようなフクザツな気分だぜ……」

ラルトレアからすれば、能力で見ると、スバルは即切り捨てるような人材だ。でもそうはしない。メイドでも執事でも騎士でもないのだ、スバルは。ラルトレアにとって、スバルは共に道を歩むパートナーに他ならない。

特別一緒にいる理由はない。損得勘定が発生しない関係。それは家族であったり友人であったり、もしくは恋人であったりする。一緒にいたいから、一緒にいる。それだけなのだ。

「さて、我は行くぞ。気になるからといって後を追うでないぞ。あまり見られたくはないからの」

「そんな言い方をされると、すっげえ気になるのが人間でありまして——いや追わないって！ マジで本当に100%！ 乙女の秘密は守る！ 可愛い女の子ならなおさらだ！」

「くふふつ、そうかそうか。もっと褒めていいのだぞ？ では、またあとでな」

「お、おう。笑顔が墮天使級だぜラルたん」

スバルの変な甘言を聞きながら、ラルトレアは踵を返して貧民街の路地へと進んでいった。その顔はゆるみきっており、ニマニマとしている。

お仕置きをしたことで怒りが薄れ、今の甘い言葉ですべてチャラである。少しばかり褒め言葉としてスバルのセンスはどうかと思うが、ラルトレアはそれを気に入っていた。

さて。

「さっそく見つけてしまったの」

歩いているとそこかしこにうろちよろしている。排水溝、どぶ川、草の茂みのなか。ゴミを漁っているのもいる。

ドブネズミだ。

そのでつぷりと太った胴体をすばやく引つ掴んで絞め殺す。そして雑巾のようにしぼって、血を吐き出させた。直接口につけたくはないのだ。

「獣の血はさすがに不味いな、いけて二十四匹か。それ以上飲むと吐いてしまいそうだ」

獣の中でもネズミは格別にまずい。まるでゲロを食っているようだ。腐っているし臭いもひどい。最悪だ。だが背に腹は代えられない。

勝手に殺してもよくて、そこらじゅうに割といる小動物なんてこのドブネズミくらいなのだ。スバルの手前、人間は殺せない。

「スバルの血をもっと吸ってもよかったが……ぶっ倒れられても困るのだ」

口からこぼれた血を手で拭って、それを舌で舐めとっていく。貴重な血だ。あと少し。あと少しで、ともに戦える状態になれる。男をもった女というのは苦勞するものだということラルトレアは改めて感じていた。

こんなにも我慢して尽くしているからには、それ相応の振る舞いをしてもらわないと割に合わない。

「ましてや他の女にうつつを抜かすなど！」

あつてはならない。だが、ラルトレアにはもつと許せないことがある。

スバルがもし、このままなあなあ関係を続け、銀髪女とラルトレアをどちらも囲おうものなら――

「ま、そうはならないであろう」

ラルトレアには自信があった。女としての自信だ。

女として優れたラルトレアに必ず男のスバルは惹きつけられ、絶えず愛情を注いでくれるに違いない。いやそうでなくてはおかしい。

まさか、ラルトレアを側室の一人として扱うなんてことはないだろう。

「我を側室にするとなるとスバルにはこの世の帝王となってもらわなくてはならない！ ふふふっ！ おかしな話よ」

そう笑いながら、十四目のドブネズミから血をすべて搾り取った。干からびたネズミをそこらに放り投げる。口にため込んだ血をすべて呑み込んで胃へと流し込んでいった。

「——ふう、こんなものか」

ようやく人間一人分くらいの血液量にはなっただろう。使える血の量は限られている。このストックをどう配分していくかが問題である。

人間まるまる一人分を使つて一度は使える『血霊器具』は、1番から51番までのものだ。

52番目の『血霊器具』、五十二式『領域吸血』は最低でも人間三分は必要になってくる。決めた範囲内の生物すべてを問答無用で吸血するという、とても便利なものだが、燃費が悪すぎる。こんな人が少なそうなところで使うものではない。

それに、『領域吸血』を使うのはラルトレアが本気で人間を滅ぼす勢いで戦うときだけだ。今はその時ではない。

基本的に血の消費量が激しい『血霊器具』しか持っていないラルト

レアだが、ごく少量で発動できるものも、なかにはある。

15番から24番までである『弱点解除』だ。これは一度につき一つの弱点しか無効にできないポンコツ『血霊器具』であるのだが、血はほとんど消費しない。

あとは、五式『吸血存在』と二十五式『鏡映反射』という、吸血鬼のオーラを消して、その副作用である鏡の無反射をまた打ち消すという、あまり意味のないものくらいか。

これらの消費量の少ない『血霊器具』は自働的に発動することになっていて。だから、あとは何に使うかだ。

残りを全部使って、五十式『血之終焉』という、ラルトレアが触れた血を爆発させるだけの一回ぼっきりの大技を使うのもいい。

だが、持久戦になるとラルトレアの負けは確定する。使ったら必ず一撃で仕留めなければならぬのだ。

と、なれば。

『吸血解放Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』と『暗黒沼』の組み合わせしかない。あとは武器だが、三十式『吸血之剣』で十分だろう。防御が薄いからあと一つ使うとして、それらを使うと考えると、『吸血解放』が『Ⅱ』までしか使えない。

「この肉体だから……うーむ、少し不安ではあるな」

『吸血解放Ⅳ』なら文句はない。この幼女形態でも十分にこの世界では戦える。というか、負ける相手の方が少ない。

ただ、『吸血解放』を使わないとラルトレアは下手したら、というか当然ただの幼女であるのでスバルよりも弱い。

『吸血解放Ⅰ』を使ったところでスバルと良い勝負、『吸血解放Ⅱ』で

スバルをフルボッコにできるレベルだ。不安でしかない。

『吸血変化』を使うか？ いや、あれを使うのは馬鹿か……」

使つて幼女から少女になるのはいいが、なつたところで、という話だ。他の『血霊器具』が使えないのでは意味がない。ただの足手まといだ。

「よし、これでいくか」

戦略はまとまった。結局はバランスタイプだ。

これが一番安定する。

ラルトレアはネズミを踏んづけながら、盗品蔵へと向かう。日はもうずいぶん傾いてきたころだ。もうそろそろ、夜が来る。

★★  
★★  
★★

盗品蔵の前、前を歩いていたスバルを発見した。静かに近づいて隣に並んで、にやりと笑つてやるラルトレア。

「スバル、我は信じておつたぞ」

「くそつ、ああそうですよ失敗しましたよチクシヨウ！ ラルたんの「やっぱりそうなのだな」っていう生暖かい眼差しが痛い！ 恥ずかしくて全身で痛い!!」

「おい兄ちゃん、悶えてつとこ悪いけどそつちのチビは誰なんだ？」

スバルの隣に居た金髪の少女がラルトレアを一瞥する。その八重歯とラルトレアをチビ呼ばわりしたこと、その顔だちすべてが気に食わないラルトレア。

「チビではない。このチビが。我はラルトレアⅡデイルⅡカルトスだ」

「どう見てもおめーの方がチビだろうがチビ！ 偉そうな名前しやがって！」

「ちよいちよい！ 二人とも喧嘩はやめてくれ！ これから大事な場面なんだから台無しだ！ ラルトンもここは我慢してって、ラルたん、フルネームそんな長かつたん？」

そういえばスバルには言ってなかったな、とラルトレアは得意げになる。腕を組み、無い胸を反らして金髪の少女を見下ろそうとする。ただ身長は足りていない。

「そう、我の名前なのだ。ぷつ、そんな小娘と違って我は尊い存在なのだ。名前からにじみ出てる」

「アタシにだってフェルトって名前があんだよ馬鹿にすんな！」

「貴様がフェルトだということを知ってて言ったのだこの馬鹿が！」

「だ、だれが馬鹿だこの馬鹿！ 馬鹿って言った方がバカなんだよバーカバーカ！」

「何だと貴様！ 我に向かって馬鹿を連呼するとは許せん殺してくれらる!!」

スバルの眼前で繰り広げられるまさかまさかの低レベルの争い。

背の低い女の子と、幼女が口喧嘩をする様子は見方によつては微笑ましいものではあるが、なんだかラルトレアの方が本気で殺気立ってしまっている。

ここは止めないと、とスバルは二人の間に割って入り、

「よーしそこまでだ！ いいか二人とも、争いは何も生まない。どつちも傷つくだけで終わって、いいことなんて一つもない。みんな仲良く、みんなハッピーが一番なんだぜ、わかったら仲直りの握手を——」  
「うるさい!!」のだ!!」

スバルの両側からほっぺにめり込むパンチ。まさかの両面攻撃と貧血がかさなって、スバルの視界がぐるぐる回る。

思えば、なぜかこうも不幸な立ち回りばかりなのだろうとスバルは自らの運命を嘆いていた。

「いや、時間もねえしぎ。な？ 早く行こうぜ、ラルたん」

「む、確かにそうだ。時間はないのだ。早く案内せよ、フェルト」

「え、偉そうに……ま、あとで覚えてろよな。兄ちゃんの付き添いってことでいいんだな？」

「そういうことにしておいてくれ」

フェルトに何とか納得してもらうと、三人で盗品蔵の前に立った。フェルトが扉をノックして、しばらくしてから何やら合言葉のようなものを言い出した。

ラルトレアはすかさずそれを記憶しておく。

フェルトと同時にスバルも合言葉を言っていたことから、前に似たような状況があったのだろうと推測できた。

「——変な合言葉を言っておるのは誰じゃああ！」

バアンツと勢いよく扉が開かれ、入口に頭をぶつけそうな禿げ頭の巨人が出てきた。この図体のでかい老人が、スバルの言うロム爺だろう。

「そんな怒ると血管切れちまうぜ？」

「それならなおさら怒らせるんじゃないわ！ なんじゃお前！ 帰れ！」

苛立つロム爺を、スバルの後ろにいたフェルトが現れて。

「悪い、ロム爺。この兄ちゃんもアタシの客なんだ。入れてやって」

ため息をつきながら、仲裁に入るフェルト。

そのすぐそばで、焦りを誤魔化すためか、スバルがヒューヒューと悪びれた様子もない顔で口笛を吹いている。

「老人、我とスバルには時間がない。入れさせてはくれぬか」

「ちっこい嬢ちゃんもおるのか……まあいい。とつとと入れ」

投げやりに許可をくれるロム爺。中へ戻るその巨大な背中が続いて、埃っぽい空気の中をフェルト、ラルトレア、スバルの順で進んでいった。

ラルトレアが室内の様子をくまなく確認する。他に誰か潜んでいないか、何か罠が仕掛けられていないか。幼女の目では判別もしにくい。ラルトレアの長年の勘が無いと告げていた。

そのかたわらをフェルトは、自分の家みたいに、カウンターのの上に腰掛けて、ミルクを勝手に飲んでいた。スバルはといえば、ソワソワと不安そうにしている。

——そこまで恐ろしい相手かの、エルザというのは。

ラルトレアが見たのは一度だけ、ほんの一瞬だ。腹部を切られて死んだふりをして、スキを窺っていた。

スバルは二回目でもあの女に遭遇したというし、死因もエルザだという。怖がるのも無理はない。

怖気づくパートナーを引っ張ってやろうと、ラルトレアが率先して話を進めようとしたが、先に口を開いたのはスバルだった。

「で、爺さんや。時間がないんだ、すぐに本題に入りたい」

「厄介そうな予感がしてならんが……なんじやい」

「頼みたいのは俺の持ってきた『魔法器』、これの鑑定だ。値段をつけてほしいんだ。その値段でフェルトとのやり取りが進む」

言いつつ、スバルもジャージのポケットから携帯電話を取り出した。その初めて見るような形状に、ラルトレアの興味がそそられる。

テーブルに置かれたそれをロム爺は一度見てから、確認するようにフェルトを見やり、フェルトが頷くのを見ると視線を戻した。

「これが魔法器……見るのは初めてじゃが……」

「たぶん世界でオンリーワンだ。あと、繊細な魔法器だから扱いには注意な」

ロム爺がそのごつい右手で、折り畳み式の魔法器をゆるやかに開く。すると、そこには精緻に描かれた金髪の少女の絵がある。ラルトレアは後で聞こうと考えながらも周囲の警戒を怠らない。

「この絵は……」

「題して、フェルトちゃんの日、だな。この魔法器は時間を切り取って、そこに閉じ込める。人の手じゃ、到底できない真似できない綺麗さだろ?」

「スバル、あとで私の絵も!」

「はいはいわかりましたよラルたん様。で、どうだ爺さん」

「これは確かに恐れ入ったのお。もしも儂なら、聖金貨で二十枚は下らずにさばいてみせる。それだけの価値はある」

キラキラとその灰色の瞳を輝かせるロム爺。

スバルはフェルトへとドヤ顔で鼻を鳴らし、

「とまあ、こんな感じだ。さつき言った通り、聖金貨で二十枚以上。これで徽章と交換だ」

「その顔、ムカつくなあ」

面白くないのか、フェルトは不満げな顔つきをしているが、聖金貨二十枚以上手に入ると聞いてその喜びは隠しきれしていない。

「万事即決即断！ 全てにおいて速さが優先されるんだ！ さあ早くその徽章とこの価値が確か度高価な魔法器とエクステンジイ!! お前には速さが足りない!!」

「あー、はいはい。なんでそんなに急いでんだ？ てか、そもそも……」

スバルは焦っていた。フェルトが喋るたびに、死が少しずつ近づいている気がして、気が気でないのだ。

フェルトはその瞳を細めると、核心をついてきた。

「なんで兄さんはこの徽章を欲しがんだよ？」

問われたスバルは思わず言葉が詰まった。完全にやらかした。そんな絶望感丸出しのスバルを、ラルトレアは横から見ていた。すかさず助け船を出してやる。

「我が欲しいと言ったのだ。露店で我が目をつけておったのに、先に買われてしまったのだ」

「ふうん、そんなに欲しいならすぐに買えばよかったじゃねえーか」

「そのときはあいにくと持ち合わせがなくてな。我はお忍びで来ておるのだ。スバルに無理を言っつてな」

「そ、そうだぜ。いやあラルたんの為ならこのナツキスバル、月だっ

て取ってきちやう！」

——スバルう、大根役者ではあるが……まあよい。  
大体のストーリーができたなら、あとは穴をふさいでいくだけだ。

「依頼人の姉さんはわざわざアタシを使ったんだ。売られてたんならその必要はなくてねーか？」

「知らんな。我は銀髪の女が露店でそれを買うのを見て、交渉して譲ってもらおうと思って後をつけていたのだ。その貴様が盗んだのだ。手間をかけさせおって」

「そんなにこの徽章が欲しかったのか？ いや、ってことはこいつには、見た目以上の価値があるんだ。魔法器を出すっていうことから考えて、それ以上の金になる」

ラルトレアは目の前の貧者をひどく冷たい目で見ていた。引き際をわかっていない者を見下すものだった。

そこで焦ったのか、またスバルが口を出した。

「待て待て、フェルト。お前、その考えは……それだけはマジにやめとけ」

スバルの額に嫌な汗が生まれ、顎を伝ってズボンに落ちる。

——やばすぎる、ラルたんの目がやばい。ここで止めないと本当にヤリかねないだろこれ。

スバルの第六感が、隣の少女がスーパーダーク少女に変貌していることを告げていた。事実、スバルが口を開かなければラルトレアはフェルトを殺していた。

ラルトレアの頭にはスバルと、スバルがやろうとしている『銀髪女の救出』ということしかない。フェルトなんていう盗人はもはや障害物でしかなかった。

——エルザが来るかもしれねえつてのに、どんだけ八方ふさがりなんだよこれ！

「聖金貨二十枚で手え打つとけ！ それ以上は欲しがるな！ ……お前の依頼人だって、それ以上は出してこない！」

「アンタがなんでそれを知ってたんだよ」

「あばばば……」

一度やらかして幼女にフォローされ、また完璧にやらかしたスバル。

「語るに落ちてるってやつだな。——関係者の兄ちゃんよ」

もはやこの交渉に意味はない。ラルトレアはそう判断した。スバルに任せようと思っていたが、あまりこちら方面でも才能はないらしい。

疑いはじめたフェルトはスバルの言葉を信じない。

「いいようにやられとるのう、小僧っ子。年下の小娘に情けない」

「あんたのせいだろ……手強すぎて泣きそうだ……」

スバルもきつと強引に奪うしかないと考えているだろう。ラルトレアはそう判断した。そしてゆつくりと、『暗黒沼』——自分の影へと存在感を消しながら沈んでいく。

もがくスバルに気を取られて、まだロム爺とフェルトはそれに気づいていない。

「フェルト、頼むよマジで……一生のお願いですから神様フェルト様」  
「ダメだ。交渉相手としては認めるけどよ、依頼人の方も聞かなきゃフェアじゃねーだろ？ この徽章のことをぶちまけて、それに見合っ

た対価を用意するなら話はちがってくるけどよ」

フェルトの瞳には貧民街で生き抜くための強さがあった。スバルの言動から、懸命に徽章の真実をもぎ取ろうとしているが、無意味なことだった。スバルにとって徽章を欲するのはエルザとは違い、『恩を返す』という理由だけだ。

その思いを、スバルはいつの間にか口からこぼしていた。

「俺は……元の持ち主に返したいからだ」

「は？」

「それをあるべきところに返す。だから徽章を欲しい」

スバルは本音を吐き出し、頭を下げた。

「……フェルト。僕には嘘だとは思えんのじゃが」

「ロム爺も冗談だろ？ 兄ちゃん、騙したいなら説得力のある嘘をつけよ。アタシは騙されねーよ。そうだ、アタシは……アタシは騙されない」

「フェルト……」

決意を確認するように、フェルトは繰り返す。その苦虫を噛み潰したような表情は痛々しく、スバルは言葉をかけるのをためらってしま

う。つまるところ、交渉は失敗した。

「——誰だ」

そのとき。

ロム爺が表情を陰しくして、入口の方を睨んだ。

膝をついていたスバルは呆然としていたが、そちらの方を見やろう

として気づいた。

——あれ？ ラルトさんは？ ラルトさんどこいった？

「アタシの客かもしれないねー。まだ早い気がするけど」

だがラルトレアの不在よりも、スバルの脳内は今の状況からある答えを導き出した。——夕刻の盗品蔵、扉をたたく音、フェルトの依頼人——エルザだ。

「——開けるなフェルト！ やられるぞ!!」

だが、少しばかり早すぎる。

窓からの光はオレンジ色になりつつあるが、日没ではない。

エルザが出現するのは日没後なのだ。

——くそつ、ラルたんは消えちまうしエルザは来るし勘弁してくれよ!!

その言葉はスバルの心のなかで留まるに終わり、外に出ることはなかった。フェルトは扉が開かれて、夕日の光が薄暗い盗品蔵へと差し込んだ。

だが、踏み入れてきたのはエルザではなく——

「——やられるとか、わたしそんな物騒なこと、すぐにしないわよ」

影の中のラルトレアが歯ぎしりを立てる。

——このぶりっ子銀髪女が！

ラルトレアを苛立たせるのは女の表情だ。スバルに媚びるように（ラルトレアには見える）、唇を尖らせて、仏頂面を演出しているのだ。

——それを可愛いと思ってやっておるのか！ ええ!?

ラルトレアの嫉妬が再燃した瞬間だった。

## 第九話 『正義もまた遅れてやってくる』

ラルトレアは盗品蔵へ入ってきた銀髪女の後頭部を見ていた。正確にはその首筋、うなじの辺りを。

口を開き、成長した牙が影の中で披露される。

「……いた。今度は逃がさないから。絶対に返してもらおうわ」

日も暮れ始めた盗品蔵、その入り口に銀髪の少女は立っていた。その姿を見たフェルトが悔しそうな表情をしながら、一步、後ろへ下が

る。

「しつっこい女も嫌われるんだぜ」

「大人しくすれば、手加減くらいはしてあげる」

まさかの偽称サテラの登場に、スバルは驚かざるを得ない。一回目のときよりも、明らかに登場が早まっている。

銀髪の少女は出口を塞ぎながら手のひらをこちらへ向けてくる。

パキンツパキンツ。

という氷がひび割れるような音が室内をこだまする。スバルはそれが彼女が魔法を発動しようとしているものだと思っていた。

だんだんと室内の温度が低くなっていく。

「私からの要求はひとつ。——徽章を返して。あれは大切なものなの」

彼女の前方を、氷の柱が何本か浮遊していた。

致命傷を避けるためか、刺突ではなく打撃武器にしたいからかは分

からないが、先っぽが丸みを帯びている。

一発でも発射したら殺す。絶対に殺す——ラルトレアはそう決めていた。狙いがスバルであろうとなかろうと、あとでスバルには「スバルを守るためだ」と言えればいいのだから、殺さない理由はない。

それを知ってか知らずか、スバルは汗が背中を流れるのを感じていた。でしゃばらないようにただ無言で目の前の光景を見守ることに徹する。

——一体どうなってんだ。てかラルたんどこよ?!

「……ロム爺」

「ただの魔法使いなら儂も臆したりせぬが……この相手は」

ロム爺は銀髪の少女を見やり、

「お嬢ちゃん。……あんた、エルフじやろう」

ロム爺の口から出た単語に、スバルは思わず顔を上げる。

——エルフ?! あのファンタジーものでお馴染みの?!

その問いに少女は小さく息を吐いてから答えた。

「半分は違う。……半分はエルフだけど、半分は人間だから」

「銀髪の、ハーフエルフ!? まさか……?」

「違うわよ! ……私だって、迷惑してるんだから」

ハーフエルフ、という単語にラルトレアはどこか納得がいった。た。

——何かと思えば半端者ではないか。

純血のラルトレアはハーフを蔑視すると言う悪癖があった。彼女のメイドであるクリスのおかげで、多少は偏見が軽くなっているもの

の、先入観というものは簡単にはなくならない。

会話が流れていく間もフェルトの表情は固いままだ。

さっぱり事情が理解できないスバルに、フェルトは自嘲気味に笑うと、

「兄ちゃん。よくもアタシをはめてくれたな……」

「は？」

「持ち主に返す、とかほごくから怪しいとは思ってたんだ。ハナっからグルだったんじゃないか」

「……？ どういうこと？ あなたたち、仲間なんじゃないの？」

フェルトとの諍いに困惑する偽称サテラに対して、フェルトはそれを小馬鹿にするように鼻で笑って、

「猿芝居してんじゃないよ。こっちは詰みだ。さつきと徽章を取り返して、アタシを笑えばいいじゃないか。ああ!! クソが!」

苛立ちに頭皮を掻き毟ってしまうフェルト。

それを見て、眉を寄せる偽称サテラ。

そんな二人の間にスバルは「まあまあ」と割って入り、

「もういいじゃねえか。フェルトは徽章を返して、銀髪の君はお家に帰る。盗られないようにちゃんと手に握りしめてな」

「その優しさが逆に不信任をかきたてているのがわからないの？」

「釈然としねーのはアタシもだ。兄ちゃん、どういうことか説明してくれよ」

フェルトは金は貰えないが命は助かる。偽称サテラは徽章を取り戻して殺されない。みんなで助かる、ハッピーエンド作戦は崩壊し

た。

二人の注目を集めてしまい、事情を言えという、何とも返しの困る攻撃を受けるはめになった。こんなどんづまりな時に助けてくれるスーパー幼女はどこに行ったのか。

そのときラルトレアは自分を求めるスバルの視線に気づいていた。しかしここから飛び出て上手く乗り切るには、もはや全て説明するしかない。うまい言い訳がラルトレアにもすぐには思いつかなかったのだ。

飛び出すか、飛び出すまいか——その一瞬の躊躇が、一つの狂気の接近をラルトレアに知らせていた。

盗品蔵の入り口から、にゆうつと、流れるように黒い狂気が現れ、先ほどまでラルトレアの狙っていた銀髪女の首筋に迫っていた。

ラルトレアの位置から見れば、殺人鬼の首筋が丸見えである——

その瞬間。

「——パック！ 防げ!!」

スバルが叫んだ。

忍び寄る狂気——黒い装束の女が銀髪女が首を刎ねようとした時、その首元に青白い魔法陣が展開された。

黒い女の持ったククリナイフと魔法陣がぶつかり、金属質な音を立てる。鼓膜をふるわせるその音を聞きながら、ラルトレアは飛び出した——

「我ごと殺せパック!!!」

『吸血解放Ⅱ』。

微弱ながらも肉体能力を底上げしてから、ラルトレアは黒い女の首

元にしがみつき、その両腕を後ろから引っ掴んでひねりあげた。  
ラルトレアは両足で女の腰に巻きつき、パックの攻撃が当たるように女を固定する。

次の瞬間、氷柱の連撃が黒い女を襲った。その余波から逃げるようにまた陰に潜み、スバルの足元へと戻った。

「えっ、ラルたん?! パックやめろ!! やめろって!!! ラルトんまで死んじやつたらどうすんだ!!」

「我ならここに居るぞ?」

「——いや何言っただって、はえ?」

まるで幻覚でも見ていたのかといった感じのスバル。だらしない顔をしてラルトレアを見つめたあとに、目をゴシゴシこすっている。だが何度見てもそこにいるのは黒髪の幼女である。

「どっちも、ベストのタイミングだったよ。まさか影に潜んでた君が味方だとは思ってなかったけど。ありがとう、助かったよ」

「感謝するがいい」

「え? あれ? どういうことラルたん?」

まだ状況についていけないスバル。

情けない彼の代わりに、ラルトレアは彼の真似をしてサムズアップ。

そして。

不意打ちを邪魔された挙句に反撃をくらわされた殺人鬼はというと。

「——ふふふ、素敵。精霊に、可愛いお嬢ちゃんは一体何かしら。いえ、さばいてみたらわかることね」

だらりと垂れさがった両手にククリナイフ。だが、全身を串刺しにされたはずのエルザが無傷で立っていた。

「――備えあれば憂いなし、ってね。要らないかと思ったけど、着てきて良かった」

黒い外套を脱ぎ捨てて、ククリナイフをくるくると回して遊んでいく。ラルトレアは地面に落ちたその上着をじっと見ていた。

――魔法を防ぐものか、便利なものもあるのだな。

反撃が失敗したことにラルトレアは何とも思わない。どれだけ準備しても全てに対応できるとは限らないのだ。すべきことは、現状で持てる全てを出せる準備だけだ。

エルザはうっとりした顔で室内を見回して、ひとりひとり獲物を確認していく。パツク、偽称サテラ、ラルトレア、スバル、ロム爺とみて、最後にフェルトを冷めた目で見て。

「商談は不成立。この場の関係者は問答無用で皆殺し。徽章はその上で回収することにするわ」

エルザは聖母のように薄く笑って、フェルトに告げる。

「――あなたは仕事をまともにできないゴミよ。死になさい」

「――ッ」

「てめえ、ふざけんなよ――!!」

エルザに怒鳴ったのはフェルトではなく、スバルだった。

その言動に、さしものラルトレアもびっくりしてしまう。ラルトレアだけではない、この場にいる全員が驚いていた。

「小さい女の子いじめて喜んでんじゃねえよ！ この内臓大好き異常

性癖者が!!　というかどうかというタイミングで出てきてんだよ、今か今かと外で待ってたのか!?　マジで恐いんだよ顔も見たくねえ!　俺がどれくらいお前が会いたくなかったかっていうとなあお前に会うくらいなら毎日ゴキブリ千匹とエンカウントする方がまだマシっていうレベルなんだよ!　つまりお前はゴキブリ神だ!　いやそれは違うか!」

「……なにを言ってるの、あなた」

「恐怖と焦りで頭の中フルバーストしちまったせいで何言ってるかわかんなくなってきたんだよチクショウ!　そんな盗品蔵ですがお暇な皆様はぜひ寄ってみてはどうでしょうか!」

意味のないスバルの怒声。

幼女の前だから訳分らないことは言わないでおこうという、というストップパーさえ今ではぶっ壊れてしまっている。

スバルはその流れのままに、

「よし大体これくらいか——やってくだせえ、パック閣下!!」

「惚れ惚れする無様さだね。だから、期待に相應としよう」

浮かび上がる氷柱。

エルザの四方八方を囲むように二十本ほどもあるそれを見て、ラルトレアはふたたび影の中にもぐった。隣に居るスバルは気づいていないが、エルザはそれを見ていた。

「ボクの名前はパック。——名前だけでも覚えて逝ってね」

次の瞬間、氷柱による砲撃が射出されたと同時に、ラルトレアはエルザの足元に出現してそのくるぶしを掴んだ。ラインハルトには通しなかった技だ。

念のために、『吸血之剣』を生み出して、ラルトレアは口にくわえる。いつでも射出できるように構えた。

だが。

「——ッ！」

両手が、手首から切り落とされていた。

エルザはパツクの一撃を避けるよりも、屈んでラルトレアへと攻撃を与えてきたのだ。影から地上へと出ると、壁際に血まみれのエルザが立っていた。

切断されたラルトレアの手首からダバダバと血が流れだし、口にくわえた『吸血之剣』が吐き出された床に刺さった。

「正気ではないの。腹にどでかい穴を開けてまで我を斬りたかったのだな」

「——ふふふ、ええそうよ。精霊もいいけど、あなたの方がよっぽど興味があるの。できればお腹を切り開かせてほしいのだけど」

「ラルたんツ!!」

「静かにしておれスバル。こやつは我が殺す。安心するのだ」

後ろを振り返らなくとも、狂いそうなほど心配しているスバルのことを感じることが出来る。

——ああ、この手だ。この手があったのだ。男は女の弱いところに惚れる。こうして我が傷つけば傷つくだけスバルが我の事を見る。

笑って、ラルトレアは生えてきた“新しい左手”で『吸血之剣』を掴んだ。エルザの方も、腹にぶっ刺さった氷柱を抜いている。おびただしい血の量が床に飛び散っていく。

「ボクとしては女の子同士がそんな血みどろで戦うのは感心しないんだけどなあ」

「ふふふ、女の子扱いされるのなんていつぶりかしら。精霊さん、あな

たも混ざってきてちょうだい。一緒に踊りましょう?」

言って、エルザがラルトレアへと突進してきた。ダツと跳ぶように距離を詰めてくると、幼女の小さい首めがけてククリナイフを一振り。しかしラルトレアの小さな体はまた影の中へと沈んでいく。

エルザが不意打ちを読んで後ろへとナイフを振った瞬間。

「よそ見はよくないなあ。お望み通りボクも混ざってあげるよ」

背後からのパツクの連撃を強引に体をひねって打ち返していく。だがすべてははじけず、一部は太ももや二の腕に突き刺さっていく。

さしものエルザも対応が間に合わない。

そのねじれた背中を、一つの影が移動した。

「――『吸血之牙』」

ガブリツと、エルザの肩の肉を噛み千切らんばかりにラルトレアが襲い掛かった。『血霊器具』二式を発動させ、牙がエルザの肉に食い込み、凄まじい勢いで血を啜っていく。

だがエルザはその吸血をもともせず、ククリナイフをある場所へと投げつけた。

盗品蔵の隅っこで戦いを見守るスバル、フェルト、ロム爺の方向へと。ナイフは回転するたびに、スバルの額へと向かっていった。

「――貴様ああああ!!!」

絶叫するラルトレアは牙を外してすぐさま影に潜った。地上を走るよりも影の中を潜行する方が圧倒的に速い。

回転するククリナイフが呆けるスバルの額に刺さろうとしたとき。

ガギンツ。

間に合わない、と判断したラルトレアが影から飛び出し、顔面ですれを受け止めた。勢い余ったラルトレアが木の壁に突っ込んでいく。ポロポロツ……と壁を破壊したラルトレアが木くずを舞い上げながら立ち上がる。彼女は猛烈に怒っていた。

口もとを触ってみるとわかる。

牙が折れていたのだ。

「『同種』の貴様には分かるであろう……牙を折られる悲しみを、この怒りを……」

「牙がなくなれば爪で。爪がなくなれば歯で。歯がなくなれば骨で。骨がなくなるのなら命で。それが私のスタイルよ」

「救いがたい馬鹿だ。死ぬがいい」

反吐が出る気分だった。

牙を折られたのはこれで二度目。同じ吸血鬼に折られたのはこれで初めてだ。万全の状態ならばこんなカスなど簡単にミンチにできるというのに。

——これが献身か。愛なのだ。人を殺せば簡単に勝てる相手に、スバルの為にこうも苦労を重ねる……これこそが愛。

「——『吸血解放Ⅲ』」

エルザが吸った血で解放段階を一段階上げる。剣術なんてまとも知らないラルトレアが見様見真似で『吸血之剣』を構えた。

「スバル、その者どもを連れてさっさとここから逃げるのだ」

「ぐつ、ラルたん。お、お俺も——」

「——足手まといになっておることが何故分かん?!! さっさと行くのだ!!」

時には厳しさも必要なのだ。ラルトレアはそう言い訳する。

これ以上スバルを狙われると本当にやられる。いくら強いラルトレアでも、血が無くなればただの童女に戻ってしまうのだ。そうなれば待っているのは死だ。

いくらスバルに尽くしても、死んだらそのお返しを受け取れない。

パキンツ。

逃げようとしたスバルたちを狙うエルザの側面から、パックとエミリアが攻撃を与える。間一髪で三人は扉から外へと脱出していった。

「パック、まだいけそう？」

「ごめん、スゴイ眠い。ちよつと無理そうだ。」

——毛玉が限界か。ということは我と銀髪女でやらねばならぬのか。

パックの輪郭が段々とぼんやりとしていき、

「あとはこの子と一緒にがんばるから。今は休んで。ありがとね」

「君に危険があれば、オドを絞り出してでもボクを呼び出すんだよ」

パックの体が霧となって消え失せる。その様子を黙ってみていたエルザが、残念そうな声を出した。

「——あら、もう終わりなの。もつと、もつと、楽しませてちょうだい！」

エルザが標的を変えて銀髪女へと切りかかった。もう一つ持っていたらしいククリナイフを振り下ろすが、それを奇妙な魔法陣が妨げている。

その側面に、『吸血之剣』を構えたラルトレアが突進していく。だがそれをエルザは刃を滑らせるようにして逸らし、その勢いのままに銀髪女へと蹴りを繰り出していく。

力自体は拮抗しているのに、現状はエルザに押されている。

原因は明らかだ。二人がまったくと言っていいほど連携していないこと。ラルトレアが、隙あらばエルザに偽称サテラを殺させようとしていた。

ラルトレアは慢心していた。この女など自分だけで殺せると。エルザとのつばぜり合いも力では負けていない。ただ、技量が圧倒的足りていなかった。

だから。

「――がぼっ」

ラルトレアの小さな口から血の塊が流れ落ちた。腹部に刺さったエルザの腕が、内部をひつかきまわすようにして動き回る。

「ふふふ……ああ、いい。いいわ。ちよつと冷たいのね、あなたの内臓って。まるで死んでいるみたい」

ククリナイフを手から弾いたラルトレアは完全に油断していた。

――ぬ、ぬかったか……だが、まだだ。

銀髪女も目の前の惨状に動きを止めている。エルザもまたラルトレアの中身をいじくることに夢中になっている。

この場にはもうスバルはいない。まとめて二人とも殺してしまおう。

五十式『血之終焉』。

当初の予定では防御として『吸血之壁』を使うつもりでいたがその必要もなくなった。

今床には大量のラルトレアの血が付着している。この量ならこの盗品蔵ごと木っ端みじんにできる。

だが。

「うおおああああああ!!!」　ラルたんから離れろやああああああ!!!」

スバルだった。

釘を何本も刺した棍棒を持ち上げながらこちらへと突っ込んでくる。

——スバルう……ああ、スバルう……

エルザはラルトレアから腕を引き抜いて、スバルと対面する。エルザが血をなめとりながら、微笑みを浮かべた。

その血がラルトレアのものだと気づいたスバルは——

「どれもこれも俺がビビったせいだ何をしてるチキッてんじゃねえ！俺だってやればできるんだよお!!　男の子だからなあああ!!!　今助ける!!!」

スバルが棍棒に引っ張られるようにスイングをかましていく。

それをいとも簡単にかわしていくエルザは遊んでいるようだった。まずは、ラルトレアからエルザを引き離すとラルトレアを抱き起し、

「だ、だ大丈夫だ。俺が来たからには万事解結全て問題ナッシング!」

「くふ、ふつ。馬鹿なやつなのだ。愛しておるぞ、スバル」

「ちよつ、この場面で愛の告白?!　いやいやあと数年、せめて数年!

って言ってる場合じゃねえだろ!　血!　腹から血が止まらねえって!」

「——?　なんだそんなことか。ほれ、触ってみろ」

「いや俺ちよつと実は血が苦手で……ってあれ、傷は?」

切り裂かれたダークドレスの腹部。その血にまみれた部分をラル

トレアに手を掴まれたスバルがまさぐってしまう。

だがいくら触っても、血の感触があるだけで、幼女のなだらかなお腹には傷口が見当たらない。

「はあああよかった……またやり直しかと思ったぜラルたん。——いやいや！　なんで？　なんで治ってんの？　どういうこと人間技じゃないよねこれ絶対！」

「それは我が人間ではないからの」

「……マジで言ってるの？　幼女じゃなくてスーパーダークネス幼女だ、とかいうオチじゃないよな？」

「そうではない。我は正真正銘の吸血鬼なのだ」

エルザに偽称サテラが応戦しているなかで、驚愕の真実を伝えられるスバル。エルザが優勢な中で悠長なことはしてられないのだが、なかなか放置もできない事実だった。

氷魔法とククリナイフのぶつかる音がまた響いた。

「吸血鬼さんだから、今まで俺にかぶりついてたど？　ってことは何だ、俺はいつの間にか眷属とかにされちゃったりして、強大なパワーを?!」

「いや、しておらんが」

「あ、そっすか……」

——眷属にしてほしいのか？　スバルは。

ラルトレアは眷属になったスバルを想像をしてみるが、スバルが多少は強くなるものの「あーうー」としか言わなくなる未来が見える。スバルだと自我を保てなさそうだ。ラルトレアはすぐに却下した。

「さて、そろそろかの」

「あら、お腹の穴がふさがってしまったのね。では、また空けてあげましょう！」

「その必要はない。貴様が取れる選択肢は二つに一つだ。逃げるか、負けるか」

「うふふ、どの口が言っているのかしら。まずはあなたの四肢を落とす後に、そのすぐ横でその男を——」

エルザがラルトレアを挑発しようと、邪悪な提案をしてくるが全ては無意味だ。ラルトレアにはわかっていた。スバルと一緒に居た二人が助けを求め、そして、誰がやってくるのかを。

一度ラルトレアを負かした、カイザーと同じオーラをまとう男。いくらか血を吸ったラルトレアの察知能力ですぐそこまで来ていることが分かる。

そして。

盗品蔵の天井を破壊しながら、一人の赤髪の男が現れた。

「——そこまでだ、『腸狩り』」

正義を体現した男が盗品蔵の床に降り立った。

その空色の双眸をまっすぐエルザへと向ける。

「危ないところだったようだけど、間に合っただけだ。さあ——  
ファイナーレというか」

微笑みを浮かべるイケメンは、燃えるような炎色の髪をかき上げて  
声高にそう宣言した。

## 第十話 『一日の終わり』

屋根の壊れた夜の盗品蔵。

エルザとラインハルトが対面していた。ラルトレアは傍観者となったスバル、銀髪女の間にはすかさず割り込んで、スバルの腕をがちりと掴んでおく。

エルザが口を開いた。

「赤い髪に空色の瞳——あなた、騎士の中の騎士、『剣聖』ね。嬉しいわ、素敵な相手ばかりと出会えるだなんて」

「二応聞いておかなくてはなりませんね。投降する気はありませんか？」

「無理なオーダーね。私はもう我慢できないの」

「あまり女性に暴力は振るいたくないんですが……」

ラインハルトは壁際に立てかけてあったボロイ両手剣をつかむ。その感触でも確かめるように数回振って、

「こちらでお相手させてもらいます。ご不満ですか？」

「——いいえ。良い、良いわ。それでわたしを楽しませてちょうだい！」

両手剣を構えるラインハルトは一步を踏み出した。その一步で強烈な風圧が盗品蔵のなかをひっかきまわした。エルザの体勢が少しグラついた、かと思えば、次の瞬間には彼女はナイフを投げていた。計四本、同時だった。

「これはどうかしら？」

エルザはナイフを投擲するとともに、大きく跳躍。空中で天井に張

り付かんばかりに宙返りして、天井を足場に、ラインハルトへと突き進む。

「――飛び道具では、僕を傷つけられない」

その直後、ラインハルトを狙っていたナイフの射線がいきなり逸れ、壁へ突き刺さった。エルザもそれを見て襲撃をやめ、近くの床へと着地する。

「うふっ、矢避けの加護ね」

「生まれつきのものでね……卑怯だとは思わないでほしい」

投げナイフでの遠隔攻撃は意味をなさない。そうになると、残る選択肢は近接での一騎打ちしかない。ラインハルトは真正面からエルザへと剣を構えた。

その構えを取った瞬間、ラインハルトの周囲を力の渦が包んだ。まるで空気中の魔力が彼に味方しているように、ラルトレアには見えなかった。

――やはり格が違うのだな……敵に回れば打ち取られるのは我だ……。

「――やっちまえ！ ラインハルト！」

勝利フラグが立ったと見たスバルはすかさず口を挟む。

ラルトレアはお調子者の彼を見ながら、やらわかく微笑む。そこには勝者の余韻があった。エルザとのバトルというより、もつと別のことの。

「見たい、なにを見せてくれるの？」

「――『剣聖』の一撃を」

エルザの問いかけに、ラインハルトが短く答えた。

瞬間、盗品蔵の空気が一気に引き締め、スバルでもわかるほどの重圧がのしかかってきた感覚に陥る。

それに押しつぶされたのか、銀髪の少女がスバルの方へよろめく。そこをラルトレアという障害を簡単にかわして、支えることに成功する。

「ちよつ、おい。大丈夫か？」

「ごめんなさい……ちよつと、肩を貸して」

スバルは体重を預けてくる少女にどきまぎしながらも、必死に抱きとめる。

幸い彼女の体は細く、スバルでも支えることができている。その様子を見上げる少女が一体。その鋭い眼差しにスバルは気づいていなかった。

何が原因だと考えて、スバルには一つしか思い浮かばなかった。ラインハルトが取った構え。その威圧感、それが全てだ。

ラルトレアも嫉妬にまみれながらも、目の前の男の力量を感じていた。

『剣聖』と呼ばれるラインハルトが今、力を解放している。ラルトレアはその力に心地よい敗北感を感じざるをえなかった。

『剣聖』、ラインハルト・ヴァン・アストレア」

『腸狩り』エルザ・グランヒルテ」

名乗りを上げる両者の間、空気が限界まで張りつめていた。

殺意と剣気がぶつかり合い、大気を震わせているのだ。

貧民街の盗品蔵で、殺人鬼と英雄が向き合い、

「——ッ」

破壊の嵐が巻き起こった。



嵐の後の静けさのなかで、ラインハルトの持っていた両手剣が粉々に砕けていった。もはや砂状になったそれは風に流れて消えていく。それほど威力を持った一撃。それを正面から受けたエルザの姿はどこにも見当たらない。だが、このときラルトレアは気づいていた。

——血の匂いが残っておる。

「髪の毛一本も残らないとかえげつねえ……」

スバルは、ラインハルトの圧倒的な力に呆けているようだ。ラインハルトの方は、観察してもエルザの生存に気づいているかどうか判別できない。

「これにて一件落着いてか……?」

銀髪女の方も、またスバルと視線を合わせて媚びを売っている。卑しい女だと愚痴りながらも、ラルトレアは周囲の様子を探っていた。目ではなく、鼻で。

「無事に、終わったの?」

「ああ、どうにかな」

会話する二人をラルトレアは少しばかり思考から除外することにした。そのこともあつてか、スバルが少女のことをじろじろと見つめたことは見逃される。

「どうしたの？ 黙って見つめて、すごく失礼だと思うけど」

「首はちゃんとついてるよな？」

「……当然でしょ？ 何を言っているの？」

「そうなんだよな、当たり前だな！ よしラルたん今夜は宴だ！ 祝勝会だぜぱーつと行こうパーツと！ もう全財産つき込んでいくらいだ！」

「——む？ そうだの。散財と浪費は我も嫌いではないのだ」

スバルは吸血鬼の幼女の頭をがしがしと撫でてから、この窮地を救ってくれた英雄へ向き直る。

「ラインハルト。マジ助かった。裏路地でのことといい、俺の救命信号を受け取るアンテナでも持っているのかよ、友よ」

「そんなものがあつたのならもつと早く来れたのだけれどね、スバル」

ラインハルトは少し苦々しい表情をしてから、顎で盗品蔵の入り口だった場所らへんを指し示してくれる。スバルがそちらを見ると。

「あ」

ぼろぼろになった盗品蔵を嘆く巨体の老人と、八重歯がチャームポイントの金髪少女が縮こまっていた。

「助けを呼ぶというスバルの判断のおかげであり、僕を見つけた彼女のおかげでもある。僕は最後の後始末をしたただけだよ」

「いやでもホント助けられてばかりだぜ、もう一回いうけどありがたいな」

「当然の事をしたまでだよ、スバル」

イケメンスマイルのイケメン。もはや嫉妬を越えてあきらめの境地だ。これが本物の英雄というやつなんだろうとスバルは勝手に納得する。

そんなスバルとイケメンが話していると。

「あの子は……」

偽サテラがフェルトの姿に気付いたようだった。彼女からすればフェルトは盗人、こんなことに巻き込んだ張本人である。

スバルはフェルトの前に回り込んだ。

「ストップストップ！ フェルトがラインハルトを呼んでくんなきゃ、俺たち今死んでたぜ？ ここはどうか一つ！ 俺の顔に免じて、許してやっちやくれないか？」

「あなたの顔に免じてって……むう」

スバルの発行する免罪符がどうやらお気に召さない様子の偽サテラ。

ぷくーっと頬を膨らませ、怒りを表現しているつもりなのだろう。それを見たスバルの表情筋がいついっ緩んでしまうが、唐突に襲いかかってきたつま先の痛みで引き戻される。

「——いててて痛いってラルたん！ つま先をグリグリすんのはやめてマジで！ 爪が、爪が剥がれちゃう！」

「我が居ながら他の女に見惚れるとはどういう了見だ？ 答えろスバル」

「ちよつなにラルたん?! いきなり思春期反抗期真っ盛り?! さすがのスバルさんでもロリ女房属性とかはまだちよつと理解できねえってあだだだだだだ!!!」

つま先を踏みながら二の腕をつねるラルトレア。

そんなやり取りに微笑ましきでも感じたのか、ラインハルトは爽やかに笑った。そして英雄はフェルトへとゆっくりと歩み寄っていた。

爽快すぎてもう何も感じない。持てるものと持たざるものの違いとしか言いようがないレベルなのだ。

フェルトも逃げようとはしない。そんな二人をスバルは静かに見守っている。

「——スバル！」

唐突に踵を返した英雄の叫びに、ぞっと背中に悪寒が走った。

「——ッ!!」

痛んだ木材の下から黒い影が出現する。その挙動を、ラルトレアはじつと見ていた。ラルトレアがスバルとじゃれ合って、ラインハルトが離れた瞬間を待っていたのだろう。居ると分かっていればそれくらいは予測できる。

問題はエルザは誰を狙うか。

エルザが向かったのは銀髪女の方角。

ラルトレアにエルザを止める気はなかった。しかし——

「やらせねえええええええ！」

ラルトレアが予想していたより早く、スバルが動き出したのだ。

石を置いて足を引っかけられることも、服を何かに絡ませる余裕もない。

スバルはあの女を庇うように、棍棒をすぐさま拾い上げ、とつさに腹をかばうようにガードした。

エルザの打撃を受けた棍棒はスバルごと壁に激突。

「この子はまた邪魔を——」

「そこまでだ、エルザ！」

「かならず！ 全員の腹を斬ってあげる。それまでに十分腸を労わっておいて」

バネのように跳躍して逃げ出すエルザ。

戦闘続行は色々支障が出ると判断したのか、ラインハルトはその背を追わない。

銀髪女がまつさきにスバルへ駆け寄って、

「ちよつと大丈夫?! 無理しすぎよっ」

「何を大げさに……傷くらいすぐに——この銀髪！ それ以上スバルに近づくな！」

「くおおお……美少女と美少女に囲まれてるぜ。二人の顔を見ただけでげ、げげ元氣百倍よ。ま、さすがに俺も命を張らないとな？ もうエルザはいなくなったよな？」

「すまない、油断していたよスバル。君がいなければ彼女を……」

「おつとラインハルト、皆まで言うな！ つて、ラルたんなんで睨んでの?! 可愛いお顔が台無しだぜ？ な？ スマイルだ、すま〜いる！」

「むむむ……まあ、今日だけは見逃してやるのだ」

謎のお許しを貰ったことだし、とスバルは銀髪の少女と向かい合った。

一回目、裏路地でスバルを助けてくれた少女。このちつとも甘くない世界で、損過ぎる生き方をする女の子。根はとても優しいけど、あまり素直になれていないスバルの恩人。

スバルは精一杯のカッコつけポーズを決めながら、

「俺の名前はナツキ・スバル！ いっぱい他にもあるんだけど、俺は

ずっと聞きたかった一番知りたいたいことがある！」

「な、なによ……」

「俺はたった今、というか一度目の不意打ちの方もそう！ 命の恩人、君というヒロインを助けた主人公さんなわけですが、そんな俺に相応の礼があつてもよくない?！」

「……わかつてるわよ。私にできることなら……だけど」

「ならば！ 俺の願いはあまねく星の中でも唯一無二！ 一つだけだ！」

スバルはもったいぶつて間を開けているとき、

「そういうえば女、お前の名前は何だ？」

「エミリアよ」

「——うおおおいいい!!! おいおいおいラルたん!!! ねえ今、俺史上最高に格好いいシーンの超絶イケメンセリフを奪わなかった?! ひどくない?! さすがにひどくない?! ほわあああ!! キレちまったぜ、久しぶりにキレちまったよラルたん!! 見逃してやるとかいう約束はどこに行っちゃった?!?!」

過去最高で、というか人生で一回あるかないかというシーンが全て台無しだ。せつかく指を鳴らして、親指を立てて決め顔を作ろうとまで考えていたのに。

「スバル」

「ラルたん、ラルたんは知らないかもしれないけどさ、世の中にはやっていいことと、やっちゃだめなことがあるんだよ……」

「血、出ておるぞ」

「……へ？」

スバルはラルトレアが指さす先、ジャージをまくると、腹部に打撲したのか、紫に変色しているが、そこに赤い横線が引かれているのだ。

「やばい。やばいラルたんエミリアたん助けて」

まず刃物特有の鋭利な痛みがこんにちはし、その直後——スバルのお腹が横にぱっくり割れた。ブツシヤアアと血の噴水の出来上がりである。

「——スバル!？」

自分の名前を呼ぶ女の子を聞きながら、スバルの意識は切れていった。そうして、スバルの長かった一日がようやく終わったのである。

## おまけ 『風呂問答』

メイザース領、ロズワール辺境伯の邸宅。

その広々とした浴場にラルトレアの姿があった。生まれのままの姿で、両手を広げて寝そべるようにお湯につかっている。

風呂は嫌いではない。熱い湯に肉をひたらせ筋肉をほぐす行為だ。吸血鬼には生きる上で必要としないものではあるが、そういう趣向をラルトレアは好んでいた。

とくに、チェスと風呂は格別だ。

自分の駒を動かし戦を俯瞰できるチェスと、心地よい空間を演出してくれる風呂は前の世界でも時々行っていた。

「奇妙なものだ……我がこうして人間の貴族の世話になるとは……」

以前なら考えもしなかった。

ラルトレア自身が同族を支配していた頃、何度か人の貴族と顔を合わせたことがあった。

ラルトレアとしては全くもって人間の身分には興味がなかったが、彼らが「罪人を提供するのを人を襲うのをやめてくれ」とか、「鉱山の採掘を許してほしい」とかいう願いを言ってきたのだ。

だがラルトレアはそれに真面目に取り合わなかった。

使者を殺した上で、支配下に置いた吸血鬼に襲わせていた。それに対処しにきたのが聖騎士の連中である。

「我も丸くなったものだな。それもこれもスバルのせいだ」

つぶやいて、ラルトレアは水滴の張り付いた天井を見上げる。

「寝床としてエミリアの提案を受けて入れた方がいいが……スバルはど

うするつもりかの。傷が癒えて目が覚めたのならすぐさま立ち去る、  
ことはないか。スバルは人間だ。衣食住の心配をする、のだらうな」

盗品蔵での攻防のあとで、エルザに腹を斬られたスバルを四十三式  
『吸血治癒』と、エミリアの治癒魔法で合わせてどうにか命を取り留め  
た。

おかげでラルトレアの血のストックは尽きかけている。

スバルの治療もそうだが、ラルトレア自身が負傷したせいで四十二  
式『吸血回復』が勝手に発動したためだ。

血の量が少なすぎて、完全上位互換である五十五式『無限再生』が  
発動しなかったただけまだマシではあるが――

「それにしてもこれからの血の調達をどうすべきか……スバルから吸  
うにしても限りがあるしのお。うーむ」

湯船の中で、頭を悩ませるラルトレア。

血のことばかり考え込んでいたせいで、浴場の外からの気配に気づ  
くのが遅れる。もとより幼女形態にそこまでの察知能力はないが。

「――私も入らせてもらうね」

エミリアだった。

素っ裸の銀髪女が浴室に入ってくる。その裸体をくまなくラルト  
レアは観察して、口をへの字にゆがませる。

「……えっと、その、あなたも、体の調子は大丈夫？ どこか変だった  
りしない？」

エミリアが掛け湯をしながら、こちらへ問いかけてくる。

「我は常に万全だ」

不完全な幼女形態であつても、それが今のラルトレアの姿であるならその形態での全力を出せることこそ万全。いつでも万全を出せるのが強者の務めなのだ。

「それに、我は人間ではない。わきまえよ、半端者」

「……ごめんなさい」

「ふん、盗品蔵での威勢のよさはどこにいったのだ。毛玉がいなければ強くあれぬのか貴様は」

活動時間外のパックは出てこない。おそらくは依り代の中で眠っているのだろう。それをいいことに、ラルトレアはエミリアを攻め立てる。

——まったく、スバルはなんで、よりもよってこんな女を

「おい、エミリア。勘違いするでない。我は貴様自身のことを嫌っているのではない。貴様の態度が気に食わんだ。これよりスバルを惑わさない、と誓うのであれば、優しくしてやらなんこともないぞ」

浴場の隅に隠れるように小さくなっているエミリアを見つける。エミリアは不思議そうな顔をしながら振り返って、

「スバル？ どうして今スバルの話が出てくるの？」

「——ん？」

しばし考え込むラルトレア。

「うーむ……エミリアよ」

「なに？」

「貴様は男女の恋仲というのを理解しておるのか？」

「わ、わかるわよそれくらいっ」

ムキになって答えるエミリアにラルトレアは、まさかという考えが思い浮かぶ。もしかすると、今までのエミリアの媚び売りはわざとではなく、素から出たものではないか、ということだった。

——ありえん。なぜあんなわざとらしくできるのだ。なぜ我がこんなにもイライラせねばならないのだ。

エミリアが少し離れた位置から湯に足をつけている。

「なんか、不思議な感じになるの。ラルトレアちゃんと話しているとヘンね」

「ちゃん、はよせエミリア。そのような年でもないのだ」

「え、そうなの？　いくつなの？」

「数えだしてから百と七年か。あまりアテにはならんが」

「おなじ！」

「——は？　何がだ？」

「年よ！　ラルトレアと私って同じ年よ！」

まさかの返答に、ラルトレアもぽかんと開いた口がふさがらない。きやつきやつと嬉しそうなエミリアがじりじりと近づいてくる。

「……うれしい。私もスバルみたいに、ラルたんって呼んでいい？」

「ぼっ、ふざけるなこの女狐め！　我は騙されんぞ決して騙されぬ！

よくもまあ純情を気取りおって！」

「……そう、残念。そうよね、お友達って少しずつ仲良くなっていくものって言うし。そうよね、きつとそう」

「——おい、何を勝手に妄想しておるのだ……」

自分の世界に閉じこもって、何やら不穏なことをつぶやきはじめるエミリア。

「あ、こちらラルトレア。ダメよ、お湯に髪を入れちゃ」

ついには要らぬ説教までしてくる始末。

たしかにラルトレアはその腰にまで伸びる黒髪を一切気にせず湯船につかっていた。

「ほら、お風呂に入るときくらいは結ぶべきよ」

「貴様は私の母親か……」

調子を崩されるラルトレア。

手を伸ばそうとするエミリアから逃げて自らの後ろ髪を引っ掴むと、それを伸ばした爪で切り取ってしまう。

「これで文句はなからう」

「え。よかったの？ 髪切っちゃって」

「こんなもの、すぐ伸びてくるのだ」

その気になれば『吸血変化』で髪の長さは調整できる。

ちょうど長い髪がわずらわしいと思っていたのだ。肩のあたりで一直線に切りそろえてしまっても問題はない。

黒髪おかつぱ幼女の誕生である。

「ふん、我は髪がなくとも美しいのだ。髪ごときで私の魅力は測れん！」

「そうね、とても似合ってるもの」

「おかしいのだ……まったく嫌味に聞こえぬ……」

エミリアからは悪意を感じられない。

こうして面と向かって二人きりで話してみても初めて分かったことだ。

——この女、頭が弱いのではないか？ 戦いではそうでもなかった

が。

「そもそも大事なものを盗まれるくらいだからの。きつとのろまなのだな、エミリア」

「あ、あれは私のせいじゃなくて、手癖の悪い子のせいよ！」

「慌てるくらいに大事なものなのだろう？ あの徽章は。我なら絶対に手から離さぬがな」

「ずっと構えてると疲れるじゃない！ そう、そうよ。仕方なかったのよ。盗まれたのが徽章じゃなかったらあきらめたのに……。あれは替えが効かないものだから」

「ほう……。そういえば、聞いてなかったの。あの徽章とは一体なんなのだ」

「えっと、ラルトレアは今ルグニカに王様がいなくて、知ってる？」

「何なのだ馬鹿にしおって。知っておるわ。それがどうした」

——初めて聞いたのだ。

ラルトレアは自分の情報収集の甘さを痛感する。だがその弱みをエミリアに見せるわけにはいかない。流れるように嘘をついた。

「それでね、私はその王候補の一人なの。徽章は、その証」

「……貴様が王候補だと」

「うん。情けない話だけど、今は勉強している最中。ロズワールは私の後见人よ」

ロズワールという辺境伯の援助を得られることから、何かしらのコネクションがあるとは思っていたが、まさか王か。

ラルトレアは驚愕とともに、腹が立っていた。

「エミリア、貴様に王は向いていない」

「わかってる……。でもどうしても王様になりたいの」

「——それは幼稚な望みなのであろうな。聞くまでもないのだ」

言つて、ラルトレアは湯船から立ち上がった。

素っ裸のまま、エミリアの眼前に立つ。ひと睨みしてから、背中を見せた。

「——王とはむやみに謝ってはならない。

王は臣民を、臣下を責めねばならない。

王は臣下をはいつくばらせなければならぬ。

王の靴を舐めさせ、貢物を献上するよう命じなければならぬ。

王は臣民を戦へと放り込み、殺さなければならぬ」

自分でもめちやくちやなことを言つておる、という実感はあつた。

だがラルトレアはそれほどまでに苛立っていた。

自分を馬鹿にされたような気がしたのだ。王としての自分を。

「格の違いを！……王は見せつけなければならない。そうしなければ、人を支配する資格など、王となる権利など、ない！」

覚えておけ、と告げてラルトレアは湯船から出た。そのまま浴場から出て、メイドに体を拭かせた。

ラルトレアは客室へと戻つても、そのむしやくしやは収まらなかつた。

その後、ラルトレアの怒りが自分で発散されることを、怪我から目覚めていないスバルは知る由もない。

## 第二章 血にまみれた一週間

### 第一話 『嫌な朝』

「うーむ……嫌な朝だ……」

きらきらと光り輝く朝日が窓から差し込んでいた。

ラルトレアの居る客室からは屋敷の正面、広大な庭園が広がっている。人が見れば、感嘆の息を漏らすであろう景色に、ラルトレアは苦々しい顔をした。

太陽、その日差しなど吸血鬼にとって大敵だ。

ザコの吸血鬼がまともに浴びれば、灰となって死んでしまうほどに。

「ま、朝日をあざ笑いながら飲む血は最高だがの」

ラルトレアは手に持ったグラスの血を飲み干した。

2リットルビンにたっぷりと入れられた紅い血潮。それを次々に胃の中へと流し込んでいく。

空になったビンは七本。

まだ中身の入っているビンは十本以上置いてあった。

それはラルトレアがメイドに用意させたものと、途中でラルトレアが買い占めたものだった。

王都から屋敷へと戻る途中と、戻ってからできるだけ多く収集した。

次に血をいつ調達できるか、わからない状況だ。

「やはり山羊の血はマシなのだ。人間の方が良いが、仕方あるまい」

人間の飲みたくなったら、スバルのを飲めばいい。されど、これから山羊の血も手に入れられるかは分からない。最悪、豚の血も飲まなければならぬだろう。

「だが、しばらくは血のストックに困らないだろう」

今のストックなら、ほとんどの『血霊器具』を発動できる。

それでもいくつか、量が足りないため使えない、バカみたいに燃費の悪いものがあるが、それを使う状況になることは少ない。

ラルトレアは考え込む。

「んー……疲れたのだ。我は考えてばかりだ。少しくらいぐうたらしても良いだろう」

ラルトレアが脱力をして窓辺にしなだれかかる。ほつぺたに当たるグラスの冷たさが心地よい。

そんな余韻に浸っていると。

コンコン。

「お客様。当主、ロズワール様がお戻りになられました。どうか食堂へ」

メイドの声が聞こえてくる。

双子のメイドの、どちらの方だろうか。ラルトレアが扉を開けると、水色の髪が頭を下げていた。

「おい、メイド。スバルはどうした」

「すでに食堂へ向かわれております。ロズワール様がお客様方と朝食を一緒に一緒にしたいと」

「ロズワールが、か。ふむ」

——あのピエロのような珍奇な男は考えが読めない。警戒、すべきなのであろうな。

はあ、とため息を吐き出しながら、昨夜初めて会った人間の貴族、もとい魔術師を思い浮かべた。

「では行くのだ」

ラルトレアは食堂へと向かった。

★★  
★★  
★★

廊下を歩いていると、向こう側からスバルとエミリア、桃色髪のエミリアがやってきた。

「おっ、ラルたんおはよう！ 今日もおつかぱ頭が可愛いな——って、あれおかつぱア?! いつの間にか髪切っちゃって幼女力がアップしてやがる?!」

「くふっ、おはようなのだ。スバル」

「ラルトレア、スバルが寝てる間にいきなりお風呂で切っちゃったのよ? せっかく綺麗な黒髪なのに」

「うるさいのだエミリア！ 我がしたいようにする！」

「おうおう、朝から俺のエンジェルたちがキャツキャウフフと、仲が良くて結構——ん、お風呂?」

「ラルトレアと一緒にお風呂入ったの」

「くそっ！ なぜ俺はその空間に居なかったんだ!! ドリルロリのせいで眠りこけているとか、神よ。なぜ俺を起こしてくれなかったのですか——」

「スバル、起きていてもスバルがあのお風呂に入れることはない

と思うけど」

言い合いをしながら、スバルとエミリア、そのあとにラルトレアが続いていく。食堂へとたどり着くと、道化のような男が待っていた。

「あはあ、おはよう。目が覚めたんだねえ。よかったよかった」

ロズワールは、スバルを見て嬉しそうにしている。

親しげにスバルの両肩を叩いて、至近距離で見下ろし、そのまま視線をラルトレアへとずらしてくる。

「やあ、昨日ぶりだねえ。山羊の血はお口にあったかなあ？」

「ああ、美味であった。感謝するのだ、ロズワール」

「――へ？ 山羊？ ラルトレアどういうって、ああ、そーいやそうだったな」

聞きかけて、途中で気づくスバル。ラルトレアが吸血鬼だということ、今思い出したのだろう。

スバルは本当にラルトレアに対して警戒しないどころか、自然体で接してくる。ラルトレアはそれがたまらなく嬉しかった。

「あはあ、どういふことなのかあーって聞きたいところではあるけどお、大体予想はつくねーえ」

「おうよ、うちのラルたんは特別製の幼女なんだ。くれぐれも丁寧に扱ってくれよな」

「もちろん、そうするつもりだあーとも」

ロズワールがラルトレアに気持ち悪い視線を向けてくる。生暖かい笑顔をわざと作っているのが見え見えで、吐き気を催してくる。

だがそれにかまうことなく、ロズワールは。

「そおれえにいいいてえもお……」

次に、しげしげとスバルを上から下まで観察する。顔をしかめるスバル。

「どおーもフツーの人っぽいねえ。そればかりはちよこおつと残念」

「おいおい、このやばい幼女を連れて、エミリアさんの命を助けた俺がフツーだと？」

——たん？

ラルトレアは自分の耳を疑う。まさか、エミリアにも「たん」という至高の愛称をつけているのではあるまいな、と。

「あはあ、ごめんごめん。種族的な意味で、フツーってことだよ。よお。私てつば『亜人趣味』の変態貴族で通ってるからさあ」

「やべえ、なんか堂々とし過ぎて逆に惚れ惚れする変態っぷりだぜ」

「レムとラムもそうだし、エミリア様を支援するのも同じ理由さあ」

——それにしても亜人か。エミリアはハーフエルフ、あのメイドらも薄々と感じていたが純粹な人間ではないということなのだな。

ラルトレアはそのとき初めて、この場に居ないメイドの双子へと意識を向け始めた。

「っていうか、支援ってどゆ意味？　そもそも二人の関係性が俺にはちんぷんかんぷんなわけだけど」

「あれえ？　事情を知らないなんて、不思議だねえ。まーあ、朝食でも食べながら説明してあげよーおじゃないかあ」

事情。王候補であるエミリアと、その後見人である宮廷筆頭魔術師のロズワール。

そういえば眠っていたスバルはまだ聞いていないのか。  
ラルトレアが説明しようかとも思ったが、ロズワールが話すらしい。

スバルが鷹揚に頷いている。

「おう、頼むぜ。俺ってば朝ごはんどころか、たぶん昨日の昼前からなんにも食ってねえしな」

「そおれは重畳。おおーつと、そう言っている間に、用意ができたよーおだねえ」

ロズワールがそう言って上座に座り、その右手にエミリアとスバル、対面する左手にラルトレアが座る。

食堂の戸が開かれ、

「失礼いたしますわ、お客様。食事の配膳をいたします」  
「失礼するわ、お客様。食器とお茶の配膳を済ませるわ」

台車を押し、食堂に入ってきたのはあのメイドたちだ。外見的特徴からはラルトレアと同様に分からない。耳が長くないことから、エルフではないだろう。

匂いからは、分からない。

嗅いだことがない匂いだった。

ラルトレアが考えている間に、配膳が終わっていた。  
ラルトレアの前には血のボトルとグラスが置かれる。

「おほー、いいねいいね。いかにも貴族的な食卓だ。……てか、ラルたんの食事がマジで血でリアル感はんぱねえな」

「リアルカンとは何だ？ スバル」

「そしてこの好奇心溢れる知的幼女！ラルたんが、墮天使級の退廃感と見た目の可愛さがいまって最高って話」

「ふふっ、まあよいのだ。スバルの言葉はとても心地よいからの」

ニカツと、歯を見せて笑うスバルに、ラルトレアは頬が緩むのを感じる。

対面する二人の間に、気持ち悪い声が割って入ってきた。

ロズワールだ。

「あはあ、喜んでくれてなによりだあーよお」

「おうよ、うまそうな朝ごはんに、可愛い女の子。これを喜ばずして何を喜ぶというのか！ そうだろ、ロズっち」

「あはあ。ひよつとして、ロズっちというのは私のことなのかーあな？」

「他に誰がいんだよ。ロズっち。いいじゃん、響きがさ」

「……まあ、そうだあーねーえ。では、そろそろ食事しよう。——木よ、風よ、星よ、母なる大地よ」

手を組み、目をつむってロズワールは呟き始めた。

メイドもエミリアも同じようにしている。スバルも慌てて真似ているようだが、ラルトレアは何もしない。

吸血鬼にそのような習慣は皆無だ。

黙って、様子を見守ることにした。

「それじゃ、スバルくん。いただいてみたまえ。こう見えて、レムの料理はちよつとしたものだよ？」

「む……普通以上にうめえ」

皆が食事を始めるなか、ラルトレアはグラスに血を注ぎ、口をつける。少しずつ、少しずつ味わうように飲んでいく。

がつついていては、スバルに嫌われるかもしれない。

そう考えてのことだ。

スバルは食事の最中でもよくしゃべる。

とくに、双子のメイドたちに話しかけていた。スバルは彼女らのど

ここに興味を持っているのだろうか。その髪色とか、容姿だろうか。もしくは、スバルの世界では双子が珍しいのかもしれない。エミリアまでメイドのことを褒めている。

「二人はすごいよ。この大きい屋敷の維持をほとんど二人で回しているんだから」

「今、エミリアさんが屋敷の使用人が二人しかない事って、たんだけど」

——やはりスバルがエミリアに「たん」をつけておる……！

話の途中で、しつかりと聞こえてしまった。

スバルが、ラルトレアと同様の愛称をつけていることを。だが、ラルトレアの怒りは気づかれず、話は続いていく。

「ああ、現状はそうだねえ。ラムとレムしかいなくなっちゃったよ」「二人だけとか馬鹿じゃねえ？ 仕事量多すぎてブラック確定だろ。過労死すんぜ。——それとも、これ以上雇えないみたいな状況ってこと？」

——くそお、イライラするのだ。

エミリアが王候補なのだから、間者の可能性を考えれば雇うなど不可能であろう！ と、事情を知らないスバルに怒りが向く。

その怒りを知ってか知らずか、ロズワールが呑気な声を出す。

「本当に不思議だあーね、君は。ロズワール・L・メイザースの邸宅まできて、事情を知らないってえいうんだから。よく、王国の入国審査を通ってこれたもんだね？」

「……それは……まあ、俺もラルたんも密入国みたいなもんだからな……」

入国審査もクソもない。

いきなり王都のど真ん中に召喚されているのだ。ラルトレアは。スバルからは聞いていないが、同じようなところだろう。だが、そんなどうでもいいことにも、ラルトレアは口を出してしま

「ふんっ、我は正規のルートで入っておる。しかしその必要はなかったようだな。スバルを見逃すとは王国もずさんなものだ」  
「つええラルたんそうだったん?!」 俺だけ？ 俺だけ知らない間にやばいことしてたのか?!」

「呆れた。あつさりと喋っちゃって。私たちが報告したら、スバルは牢屋に押し込められて、ぎったんぎったんにされるんだから」  
「ぎったんぎったんて、きょうび聞かねえな」

——あああ！ イライラするのだ!!

わざとではないだろう、と思っけていても、エミリアの言葉遣いに、スバルがそれに興味を示すことに、苛立ってしまう。

グラスの血を飲み干し、貧乏ゆすりをどうにか封じ込める。

スバルが自分だけを見ない。

スバルが自分だけを特別視しない。

スバルが自分だけのものにならない。

スバルの「たん」が自分だけのものにならない。

ラルトレアの強欲と傲慢、独占欲に火がつきはじめる。

自分以外の他者を支配し、それ以外の関係性を持つてこなかったラルトレアに、他人をおもんばかるといふ気持ちは少ない。

スバルという対等の相手を得て、ラルトレアはどう接していいか分からなくなる。

ラルトレアの頭の中は単純で明快だ。

——我がスバルを特別としているのに、なぜスバルは我を特別にしないのだ。

自分の想いを言葉にすれば、それが相手に必ず届き、自分の思い通りになるというラルトレアの考え。

人と真面目に接し始めてまだ日があまり経っていないラルトレアは、それを改めることができない。今までずっと独りぼっちで、誰かを支配し誤魔化しつづけきた代償が、今現れている。

黙りこくるラルトレアを置き去りに、周囲は会話を進めていた。

「王様不在だと国ってどうなるんだ？ 王族がいなくなると民意優先で総理大臣選出するのか？」

——総理大臣、という単語にラルトレアが反応する。

スバルの言うように、ラルトレアは知的好奇心が強い。スバルのことなら尚更だ。

ただ、それを尋ねる気にはならなかった。

「——王不在の王国など、あつてはならない」

「そりゃそーだ。んで、王不在の王国は新たに王を選ばなきゃならない。でも血族はほぼ壊滅。なら国の誰もが納得いくような形で、王様を選び出さなきゃならん」と

「——ホント、スバルって変な子。なんにも知らないのに、そうやって頭が回るんだから。まさに賢い愚者って感じなのよね」

「そう褒めんなよ。褒められ慣れてねえからすぐ好きになんぞ」

——ぶちっ。

ラルトレアは自分の頭から血管が切れる音を聞いた。

ただ、それを表には一切出さない。前髪で表情を隠し、ちびちびと血を飲み続けている。

「あはあ、そんな彼を引きつけるのはひとえに貴方の魅力なのでしょーねえ、エミリア様」

「さつきから、ちよくちよく気にはなっていたんだが……屋敷の主が、エミリアたんを様付けで呼ぶ？」

「自分より、地位の高い方を敬称で呼ぶのは当然のことだあーからねーえ」

意地悪く微笑むロズワール。

「——えっと、エミリアたんてばつまり」

「今の私は、ルグニカ王国第四十二代目の『王候補』。ロズワール辺境伯はその後ろ盾よ」

エミリアの言葉に、スバルが一瞬、ぽかん、としてから。

「——……え？　つてことは何か、エミリアたんは未来の女王様かもしれないって？　となると、俺ってばその女王様の命の恩人な上に、王選敗退を防いだ救世主！　つてことだな」

「認めよう、事実だからねえ。で、その上で問いかけよう」

ロズワールが席から立ち上がり、その長身でスバルを見下ろす。

それを勇ましい眼差しで見上げるスバル。

「おう、聞け。耳の穴は掃除してある」

「君は私になあにを望むのかな？　どんな金銀財宝を、あるいは酒池肉林でも。徽章の紛失、その事実を隠ぺいするためなら何でもしよう」

「へっへっへ、さすがはロズつち。話がわかるじゃねえの」

——いったい、スバルは何を望むのか。

隠れた前髪の奥から、ラルトレアはその様子を見ていた。くちびるからグラスを離し、テーブルに置く。グラスの持ち手部分をもてあそ

びながら、その言葉を待った。

スバルは偉そうに腕を組んでから。

「じゃ、俺を屋敷で雇ってくれ」

スバルの言葉と、ともに――

パリンツ。

ラルトレアの持っていたグラスが粉々に砕け散った。

## 第二話 『ふて寝で終わる一日』

——じゃ、俺を屋敷で雇ってくれ

ラルトレアはスバルの言葉に耳を疑った。

——雇ってくれ……は？ やと、は？

パリンツと、いつの間にか持っていたグラスを手で割っていた。つうーっと赤い血が白い右手からあふれ出してくる。

スバル、エミリア、ロズワール、メイドの双子の視線がラルトレアに集まっていた。

「……少し、手元が狂っただけなのだ。して、スバル……雇われるというのは、屋敷の使用人ということか？」

「いやまあそうなるわけだけど、ラルたんも一緒ってわけじゃない。俺はジャージから執事服にフォームチェンジってなわけだが、ラルたんもよければメイド服に……はっ、もしかしてメイド服着たくないとかっ?! それで何かぶんぶん丸になってんの?!」

「……スバルは我にメイドになれと……?」

「別にそうじゃないって！ ただメイド服も似合うと思ったんだよ。ダークドレスも良いけど、メイドラルたんも……! いや、待てナツキ!! スバル。違う! こんな不純な理由じゃないはずだ! そう、労働! 働いて衣食住を安定させる! 健全な肉体に、ほどよい労働にこそ健全な精神が宿るってことだ」

「……………」

「ま、心配しなくてもラルたんは俺が養ってやんぜ。三食昼寝付きだ。毎日ぐーたら生活で、血もがぶがぶ飲み放題。どうよっ!」

ラルトレアにはスバルが分からない。

なぜそんなことを言い出すのか。それはスバルの引きこもり経験から出たものなのだが、ラルトレアには想像もできないのだ。

ラルトレアにとって使用人とは、メイドとは、執事とは支配される人間だ。

誰かに使われ、誰かに搾取される側なのだ。

ラルトレアは支配者だ。

彼らを支配し、上に立つ存在であり、そのことに誇りを持っている。ラルトレアはスバルを対等の存在として見ている。そのスバルが使用人になる。

——ありえない……

この屋敷に留まるという選択肢も選びたくないくらいだというのに。金と生活ならラルトレアならどうとでもできる。多少強引な手段ではあるだろうが、スバルとなら上手くやれるだろう。

それで二人で生活して、この世界でのんびりすればいい——ラルトレアはそう、考えていた。

スバルと長く生きるために、スバルの寿命を延ばす方法にさえ頭を悩ませていたくらいなのだ。

「ああ。それなら雇われなくても、食客扱いとかで構わないじゃないか」

「——あつ、そんな手があったのか!? ロズワール!?!」

「最初の要求が有効だねえ。男に二言はない。だろおう?」

「あつ、あああそうだよそうだ! 男は二言とかしないもんね!?!」

そんな会話もラルトレアには届いていない。

メイドが割れたグラスを片付ける間、ラルトレアはずっと自分の手を見ていた。自分の小さい手を。

血は、もう止まっている。

「でえ、そおいうことだけど、どうするのかなあ?」

ロズワールがこちらを見ていた。

ラルトレアの答えはすでに決まっている。

「我を食客として遇せ。スバルが雇われている間だけ」

その要求にロズワールはうなずく。ここまでのやりとりを聞いていたエミリアがここで口を出してくる。

「ラルトレアの方が妥当よスバル。今からでもロズワールに間違えませんでしたごめんなさいして変えてもらったら？」

「いや曲げねえ！ 決めた、俺は使用人ライフをエンジョイしてやる！ ラムちーとレムりんだけで屋敷の維持も大変だろうし、下男的ポジションからスタートだ」

「……スバル、あなたは欲がなさすぎるわ」

エミリアがスバルにぐいつと詰め寄った。

「……パツクのもそうだし、そもそも、盗品蔵でのことだって茶化して……。スバルは感謝の気持ちがあつてないのよ。……あんなことで、命を救われたことへの恩なんて、全然返せない……」

エミリアが、弱々し気な顔をつくる。スバルはその表情に心苦しさを感じているようだった。

ラルトレアは、そのスバルの表情を、その瞳をじっと見ていた。

「エミリアさんはわかつてねえな。俺は、心の奥深く、心の奥底一万マイルぐらいから、その瞬間瞬間でマジで欲しいもんを望んでるんだぜ？」

「——え？」

「あの瞬間、俺は君の名前が知りたかった。ガチで。信じる神はいないけどさ、神に誓ってもいいくらいにな。メチャクチャ腹空いてたし、プレッシャーと不安で立つのもやつとだった。もつと他にやりようはあつたし、落ち着いて考えれば他に望むものもあつたと思う。――」

「でも、俺は自分に嘘はつかない男だ」

スバルは言った。

使用人になるという望みは、本心から出たものだ。

スバルはまだ口を閉じない。

「俺は超欲張りな男だよ。——だってそうだろ？ 美女とひとつ屋根の下を合理的に獲得するうえに——」

——がたん。

ラルトレアが椅子を倒して唐突に立ち上がる。スバルが言葉を止め、視線が集まる。が、気にせずに食堂の扉へと向かった。

「うえっ、ラルたん?！」

乱暴に扉をあけ放ち、ラルトレアは足早に廊下へと飛び出した。後ろから、スバルが追ってくる気配を感じる。

スバルに追いつかれる前、ラルトレアはつぶやく。

今にも泣きそうな顔だった。

「……なぜだ……なぜなのだ……」



ロズワール邸、廊下。

「ラルたん急にどうしたんだよ！もしかしてエミリアさんに格好つけてたから怒っちゃったのか?！」

「……スバルはうるさいのだ」

スバルに肩を掴まれて、ラルトレアは振り返った。その顔に表情はない。

見れば、若干焦ったような顔のスバルがいる。

「なぜなのだ？ スバルはなぜ、この屋敷に留まりたいのだ？」

「ラルたん……？」

「メイド服などと茶化すでないぞ。今回だけは軽口は許さないのだ」

「……いやふつーに屋敷にいたいんだよ俺。ラムもレムも可愛いし、なによりエミリアのそばに居たいんだ。あの子が俺に負い目を追ってるようにさ。俺も同じなんだよ。あの子を二回も死なせてるんだ。一回目はラルたんだって見ただろ？」

「……」

——またエミリア、またエミリアなのだ。

スバルは同意を求めるようにラルトレアを見るが、それがなおさらラルトレアの怒りを掻き立てていく。

「——だから、俺は」

「……それが何なのだ」

「ラルたん？」

「それが何だと言うのだ。あんな女放っておけばよからう！ 路地で助けられたからとか何なのだ。この世界ではなかったことであろう！ そんな存在しない恩など忘れてしまえー！」

「……っ」

「……他の誰でもないスバルの力で、あの恩は消えたのだ。あの事実をスバルと我以外に誰が知っておる。何を気にする必要がある。使用人などならなくてよい。さっさとこの屋敷から出て我と——」

「……ラルトレア」

「——っ」

「それでも、俺はこの屋敷で使用人をやるよ。一度言ったことだしな？ 食客でもよかったかなと後悔しないでもないけど」

「……ここまで言っても意思は変わらぬと言うのか。……それなら、好きにするがいい」

スバルが後ろを向いて食堂へと戻っていくのが分かる。ラルトレアは用意された客室へと小走りで戻った。

後ろの方でスバルとエミリアの声がした。

それをかき消すように、ラルトレアはベッドの中に飛び込む。布団にくるまって。

「——しばらくは……口をきいてやらないのだ」

いつの間にかラルトレアはそのまま眠ってしまった。そうしてラルトレアのロズワール邸二日目は過ぎ去っていった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

スバルは食堂へと戻る途中で、エミリアに出くわした。

「エミリアたん……なんで俺意固地になっちゃったんだ……巻き戻して言い直してえ……」

スバルはさっそく後悔していた。

スバルが繰り返した世界、死んだ世界での出来事を否定され、スバルは思わず使用人をすると言い張ってしまった。

今思えば、本当に食客で良かった気がする。

後悔することだらけだ。

食客ならラルトレアもそこまで怒らなかつたに違いない。

でもスバルが死に戻りした世界のことを覚えているラルトレアだけには、言つてほしいセリフではなかつた。

『路地で助けられたからとか何なのだ。この世界ではなかつたことであらう！ そんな存在しない恩など忘れてしまえ！』

幼女にそう言われて意地を張ってしまった。

明らかに年下の女の子にムキになる自分が嫌になりそうだ。

「ラルトレアを怒らせたんでしょ、スバル。さっきの真剣さはどこにいったの。どつちつかずが一番最悪よ」

「あばばば!! エミリアたんからもこの評価！ 天使と墮天使に嫌われて踏んだり蹴ったりだよ！」

こうして、スバルの使用人ライフが始まった。

### 第三話 『絵本とシャトランジ』

ロズワール邸、ラルトレアの居室。

スバルが目覚めから二日、時刻はもう昼を過ぎている。

布団にくるまって動かないラルトレアと、ベッドに腰かけてそれを見下ろすエミリア。

「ラルトレアが怒る気持ちもわかるけど、このままスバルを無視するのもよくないと思うの」

「ふん、知らないのだ」

スバルが目覚めた日、使用人に言い出して聞かないスバルをラルトレアは完全に無視していた。スバルが何を言おうとも、そっぽを向き、一言も口を開かない。

ラルトレアの頑固さもあるが、スバルが「メイド服だのエミリアたんだのレムだのラムだの、ロズワールだのパックだの」、ことごとく的外れなことばかり言い、地雷を踏み抜いてきた結果が今だった。

「でもちよっぴりスバルと話したいんでしょ？」

「……っ、な、何を言っているのだ。あんなやつ全然まったくこれっぽっちも話したくないのだ」

「うそ。ラルトレア、無理してるもの。ご飯もあんまり食べてないし」「余計なお世話なのだ！ それに、我は血だけを飲んでいればいいのだ!! さっさとどっか行けエミリア！ しっしー！」

布団にくるまったままラルトレアが起き上がり、エミリアを扉の方へと追いやるうとするが。

「だーめ。さ、まずは顔を洗って髪のお手入れからね」

「——ぬわっ?! こらっ、おろせ！ おろすのだ！」

「いい子にしてたらおろしてあげます」

布団装備のラルトレアを両手で持ち上げて、そのままベッドの方まで持っていくエミリア。

その布団の塊を横に寝かせてから、布団を引きはがして中身だけを取り出す。それでも元に戻ろうとする中身が、必死の抵抗を見せる。布団にしがみつくるラルトレアの首元をがっしりと掴んで。

「こら、往生際が悪いわよっ！」

「——く、くびがしまるう……」

そのまま洗面室へとラルトレアを連行していった。



「ね、ラルトレアってどこの生まれなの？」

「——む？　いきなり何なのだ」

ラルトレアの髪をクシで梳きながら、そんなことを聞いてくる。エミリアはラルトレアの闇のように染まった黒髪に目を向けながらも、「だって、スバルには聞いたけど、ラルトレアにはまだ聞いてないから。興味があるの。二人はどこで知り合って、どうして一緒にいるのかなって」

「……。スバルは何て答えたのだ？」

「大瀑布の向こう側からって。スバルのことだからまた冗談なんだろうけど」

「冗談ではないぞ」

「え？」

「大瀑布というのはこの世界の果て、なのだろう？ それならその通りだ。スバルはこの世界の果てからやってきた」

「ラルトレア、本気？」

「なぜ嘘をつく必要がある？ 考えてもみよ。スバルの言動、知識、言葉遣い、服装。すべてが未知で常軌を逸しておるのだ。それはこの世界の常識が通じぬところから来たと考えるべきであろう？」

「……たしかにスバルはすごい変なところがあるけど」

ラルトレアの言葉に、エミリアは納得しかねているようだった。ラルトレアはそれが不可解でならない。

なぜ、『ラインハルト』という存在が居るのに、世界をまたぐ者の存在を疑うのか。

「まあ、スバルがそうだとは思いつらいのか」

エミリアに世界をまたぐ存在を想像できたとしても、それはおとぎ話や伝説の中に出てくる勇者とか、英雄、賢者なのだろう。

「我には精霊の方が不可思議でならないのだ。魔法ならまだ構造がわかるがの。精霊はさっぱりだ」

ラルトレアが振り向いてエミリアを見る。すると、その答えを教えてくださいるようにエミリアの銀髪からひよっこりと、パツクが姿を現した。

「ボクには君に興味があるね、ラルトレア」

「いきなり出てきおって……我はスバルのように貴様を愛でる気はないのだ」

「ベティーがやたらと君を警戒してるんだから気にもなるもんさ。ボクには君が何かをするようには思えないんだけどね」

「ベティーとは誰なのだ？」

ラルトレアはつい聞き返してしまう。この屋敷の住人で「ベティー」と呼ばれる存在とは出会っていない。

その疑問に、パックに代わってエミリアが答えてくれる。

「ベアトリスはこのお屋敷にある禁書庫の司書さん。契約で禁書庫の番をしているんだけど……」

「ほう、禁書庫があるのだな。どこにあるのだ？」

「どこって聞かれると、屋敷のどこかって答えるしかないの。『扉渡り』、簡単に言うくと屋敷の扉のどこことでも、自室に繋がられる魔法を使ってるから」

「なおさらそのベアトリスとやらに会ってみたいものだな」

禁書庫にも、そんな魔法が使えるベアトリスとも話をしてみたい。

純粹に知的好奇心をくすぐられるのだ。未知の世界の、未知の魔法。前の世界ではからつきしだったが、こちらでは使えるかもしれない。

知とは力だ。血もまた力。『血霊器具』というラルトレアご自慢の力。

支配者にとって、力がすべてなのだ。

身近にあるのなら手に入れるに越したことはない。

「禁書庫なら暇つぶしにちょうどよさそうだし」「ベティーが嫌がるからよしたほうがいいかもね。ボクは責任を取れないよ」

「むう、つまらんのお。さすがに娯楽が少ないのだ。チエスはないのか？ 風呂もいいが何度も入るものではないしの」

「チエスって？」

聞き返すエミリアの様子を見るに、チエスが無いのだろうと判断す

るラルトレア。それに似た遊戯はないかと聞いてみることにする。

「二人で駒を操り、互いのキングを取り合うボードゲームなのだ」

「それってシャトランジみたいなもの？」

「シャトランジだと？」

ラルトレアの期待通り、チェスに似たものがあるらしい。幸いなことに、屋敷にもあるという。ロズワールの所有物らしいが、あんな変態にかまうことはない。

しかし、ここで問題が出てくる。

シャトランジはチェス同様、二人用の対戦ゲームだ。

今までラルトレアの相手は執事のアズベルトが務めてきていた。これまでの戦績は、ラルトレアの9876戦、9875勝、1引き分けだ。

自分ひとりでも指すことができるが、それではつまらないし、なにより飽きている。自分の思考に自分を戦わせるとなると、必ず先手が勝ってしまう。

結果の見た戦いほど、つまらないものはない。

ラルトレアが考えあぐねていると。

「ラルトレア、そんなにシャトランジしたいの？」

「……エミリアは弱そうだから相手にならないのだ」

「む、知らないのにそんなことを言われるのは心外。見てなさい、こてんぱんにして後悔させてあげるんだから」

「こてんぱん……」

エミリアの妙な言い回しに違和感を覚えつつも、ラルトレアはその提案に乗ることにした。もちろん、負けるつもりはない。

エミリアがどこかからボードと駒を持ってきて、さっそくエミリア

の居室で対戦することになった。  
テーブルにボードを置き、それを挟むように椅子を置いて対面する。

エミリアとラルトレア。

ラルトレアはエミリアから駒の特性と簡単なルールを聞いて、駒を並べていった。

幼女と少女が真剣に盤面へと目を向けている。ラルトレアがにやりと笑いながら、口を開いた。

「ただの勝負ではつまらん。賭けるのだ。エミリア、貴様が負ければ今日はずつとシャトランジに付き合ってもらおう。王選の勉強など放り投げてしまえ」

「ずいぶんと自信があるのね。私が勝った場合を考えているの？」

「そうだな。何でもいぞ。貴様の望みを聞いてやろうではないか」

「うーん、そうね……。あっ」

「何だ？」

「今夜、ラルトレアと一緒にベッドで寝ながら絵本を読み聞かせるわ」

「……………は？」

「それで今夜は一緒のお布団で寝ましよ。文句はないわね？」

エミリアの、気の抜けてしまう望みにラルトレアはぼかんと口を開けて呆れてしまう。まるで勝負というものを分かっていない。

緊張感が一気に消えて、台無しだ。

「……………まあ、我が負けることはないがの。だが、戦うにあたって、生ぬるい気持ちはいただけないのだ。よいか？ エミリア。このキングが我であり、そちらのキングがエミリア自身なのだ」

「キングじゃなくてシャー、よっ？」

「分かっておるわ！ 我の知ってるチェスではキングと言うのだ。とにかく、貴様は王であり、他の駒を動かす。動かし陣形をつくり、戦場へと駒を動かす。二列目にある駒は、エミリア、貴様の民だ。人だ。

国民から徴収した兵なのだ」

「歩兵、バイダクね」

「いちいち説明を入れるでない。興が乗らぬであろう！ 王であるエミリアは、兵を死地へと追いやり、死なせるのだ。そう考えてみよ」

ラルトレアがそう言うと、エミリアは意外にも真剣に考えているようだった。顎に人差し指をあて、「うーん」と可愛らしく首をかしげている。

ラルトレアは、それを隙あり、と歩兵の一つをつまみとって。

「何を悠長にしておるのだ。常に戦場は動いておる。悩み遅れた分だけ、敵は動いておる。——先手必勝なのだ」

歩兵をエミリアの陣地へ向けて、2マス先へと置く。歩兵は戦の開始とともに、戦場を駆け抜ける。

先手を取るというのは、チェスでも、このシャトランジでも有利に働くだろう。あれだけ大きい態度を取っておいて、絶対に負けるわけにはいかないのだった。  
だが。

「あ。ラルトレア、反則よ。歩兵は1マスしか進めないもの」

その日の夜、ラルトレアはエミリアとともに絵本を読んだ。

## 第四話 『絶望の音』

真夜中。

ロズワール邸、ラルトレアの居室。布団の中。

「うー……熱い、熱いのだ」

エミリアの拘束をほどき、ラルトレアはベッドから這い出ていた。エミリアがラルトレアを抱きしめたままに絵本を読み、そのまま先に寝落ちしまったのだ。

迷惑な事、この上ない。

「はあ……」

ラルトレアは窓から見える月を見上げて、息を吐き出した。時間は分からないが、もう日をまたいでいるだろう。

時間が経つのが遅い。

そしてラルトレアは暇を持って余していた。

シャトランジも、初戦こそ反則負けしたものの、その後三度エミリアと戦って全勝している。まるで戦い甲斐がない。エミリアは弱すぎた。

何かないのか、とラルトレアは考える。

シャトランジの他に、暇をつぶせるものは。

「文字でも学んでみるかの……」

エミリアが持ってきた絵本はさっぱり読めなかった。絵本だけでなく、魔法の本や歴史の本にも興味がある。

こちらの世界の住人に読んでもらってもいいが、自力で読めた方がいいだろう。

こちらの文字は簡単だ。

基本のイ文字と、ロ文字とハ文字の三種類しかないという。前の世界での人間の言語は十二種類の文字があった。

それをすべてラルトレアは学習していた。

文字を覚えるのにさほど時間はかからないだろう。

「スバル……」

窓辺に寄りかかって、ラルトレアはつぶやいた。

その吐息は、陰鬱に満ちていた。

まだ朝は来ない。

夜の帳のなかで、ラルトレアはまた、ため息をついた。

「……スバルが使用人を辞めるまでなのだ」

無視するのも疲れる。

疲れる上に、スバルが居ないと日々がつまらない。だが、ここでラルトレアが折れるわけにはいかないのだった。

そして、次の日は言語学習に費やし、スバルと視線すら合わさない。ラルトレアの日々は、流れるように過ぎていった。

★★★  
★★★  
★★★

ラルたんと話せないままに、また一日が経った。

とうかラルたんの近くに居たがるエミリアともほとんど話せていないし、スバルの活力ゲージが赤ゲージへと突入していた。

「なあレムりん、俺はいつたいどうすりゃいいんだ？」

「スバルくんは使用人としても人としても未熟ですからね」

「……ねえ、なんで俺こんなにボロボロにされてんの？俺が何したっていうの？」

スバルの使用人生活も四日目、スバルはレムと買い出しに近くの村落へと向かっていた。

その村落は辺境伯、という立場にあるロスワールが保有する領地だ。だから、村の人々は当たり前のようにこちらの顔を見知っているようだった。

特にメイドは買い出しの機会も多いのか、通りがかかるたびに声をかけられる。

その一方で意外とスバルのことも知られていた。

顔を出したのは初めてであるにも関わらず、友好的に迎え入れられたのは普通に嬉しかった。

なにより屋敷で冷たく当たられている分、ここが癒しにも思える。そう一瞬は、思っていたのだが。

「どーしたー、スバルー」「何言ってるんだー？」「だから噛まれるんだぞー？」

立て続けに反応する声は、スバルの背後、というか背中から届いた。首だけで動かして、その小さな人影を見やる。

茶髪の少年だ。

年齢は十歳ぐらいの、小学校低学年。ラルトレアよりは少年上だろうに、雰囲気がるで違う。

「犬に噛まれるわ。鼻水つけられるわ。おい。お前らちよつとは年下のラルたんの華麗さを見習えよ」

「ラルたんー？」「誰のこと言ってるんだー？」「年下ー？」

始めに背中にしがみついた少年。連鎖的にスバルの足や腰やらにまどわりつく小さな影が口々に聞いてくる。

「ダークエンジェル、ラルたんだ。ラルたんはお前らと同じくらいちよつと年下なのに、もうオーラがギツラギラよ。俺でも睨まれたら怖いくらいだからな。ちよつと特殊な種族つてのもあるんだろけど、それにしてもあれはやばい」

「なに言ってるんだー?」「頭ぶつけたー?」「噛まれたトコまだ痛いのに?」

「やばい上に可愛さMAXってことだ」

そしてそんな墮天使幼女にスバルはただ今絶賛シカトをくらっている。華麗なまでに存在を無視され、食堂でも廊下でも相手にされていない。

スバルには、どうやったら機嫌を直してくれるかさっぱり分からない。

「はあ。こんなに鬱なのに、やたらとガキに絡まれるし」

肩車した子どもに頬を引っ張られる。

「なぜ神は俺に美少女とダークネス幼女とうまく接する才能を与えてくれなかったのか……!」

そう愚痴りながらも、子どもをあやす。

きやいきやいと高い声が響き、「次はオレだ!」なんて声があちらこちらから聞こえてくる。げんなりしてきたスバルは、

「あ! あつちにスーパーダーク幼女が!」

「えー?」「どこー?」「あ、ホントだ!」「いこーぜー!」

テキトーに茂みの方を指さして、その隙に子ども群れから脱出を図る。思いのほか、うまくいってしまうスバルは首をかしげる。

「野生のスーパーダーク幼女でもいたとか？ 流石にそれはねえか」

——まさかラルたんが来てるわけじゃないしな。

きつとでつかいカブトムシみたいな昆虫でも居たんだろ、とスバルは勝手に結論づけて、少し座って休むことにした。

田舎特有の大自然の空気を十分に堪能することしばらく、スバルのもとに買い出しを終えたレムがやってくる。

両手で紙袋を抱えていた。

「スバルくん、お待たせしました。……大丈夫ですか？」

「ん？ ノープロブレム。レムりんも、買い物終わり？ それ持つぜ」

スバルが荷物を受け取る。

「はい。買い物は問題なく。スバルくんは、色々大変そうでしたね」

青髪の少女は風に目を細め、その表情をわずかに強張らせてスバルを見ている。

泥と埃、そして鼻水で執事服を汚しに汚したスバルの方を。

「ひとりで転んだんですか？」

「いや俺だけドジッ子?! たしかにこの世界でまだ会ってないな。あれ？ 何か怒ってる？」

「いえ。それで、スバルくんは何をしていたんですか」

「村の子どもたちに包囲されてな。気が付けばこの有様だ。やっぱりレムの買った物に付き合っつりやよかったよなあ」

買い物ではまるで役に立たないだろうが。

今の沈んだ気分で子どもを相手するのは精神的にも肉体的にも疲れる。まだ買い物なら荷物持ちくらいで、何も考えなくていいだろう

う。

スバルはそういうふうを考えていたのだが。

「やはり姉様も含めて三人で来るべきでした」

「そんなに俺の役立たず度半端ないっ?! いくら俺でも荷物を持つぐらいはできるよ?! あの姉に超越した買い物スキルがあるようには見えねえんだけど」

「姉様があえて本気を出さないんです。ほどほどにすれば、スバルくんが自分の無能さに気づいて落ち込むこともないですから」

「いや今の言葉で十分落ち込んでるんですがそれは……。というか、姉に対する評価が俺以上にポジティブすぎて逆に怖いわ。姉への崇拜心が並大抵じゃねえぞ、マジ鬼がかってんな」

「鬼、がかる……。?」

「神がかかるの鬼バージョン。鬼がかかる、なんかよくね?」

「どうして、鬼なんですか?」

「だって神様って基本なんにもしてくんねえけど、鬼って未来の展望を話すと一緒に笑ってくれるらしいからな」

スバルがそう言うと、それまで少し険しかった表情がふわっと和らいで、レムの顔に薄く笑みが浮かんでいた。

スバルは指を鳴らし、

「その笑顔、百万ボルト」

「エミリア様に言いつけますよ」

「口説いたのと違うよ!」

スバルが必死に両手を突き出して許しを乞う。すると、神の怒りでも買ったのか——バキィツとスバルのすぐ横で細い若木がへし折れる。

「…………え? 神罰? もしかしてリアルタイムで神罰が下ってきてま

す？」

倒れた木がスバルに当たることはなかったが、それでもタイミングが良すぎた。周囲を見回しても木こりも熊も居やしない。

スバルは天を見上げて、手を組んだ。

「俺に癒しを、アーメン」

スバルの祈りは空へと消えていった。

遡ること二時間前、ラルトレアはスバルが屋敷から出ていくのを偶然発見した。窓から景色を眺めていたら、あの青髪のメイドとともにどこかへ出かけて行ったのだ。

ラルトレアはエミリアが居ないことを確認してから。

「――ダイク・スワンフ暗黒沼」

影の中へと潜り、素早くスバルの後を追った。

不安だったのだ。

自分を置いてどこかへ行ってしまうのか、という不安がラルトレアの中に生まれた。

「一体どこへ……村？」

二人の後を、影の中にずっと潜りながら進んでいく。その先に着いたのは小さな集落だった。300人ほどの人間たちが生活している。ロズワールの屋敷から近いことから、あの変態の領地の領民といったところか。

「ふむ、アーラム村か」

影の中から耳を澄まし、情報収集をしていく。

村での人間関係、村長の老婆、ムラオサという老人、青年団と呼ばれる若人たち、小童どもの名前まで。

どんな仕事をし、どんなものを食べ、どんなものを売っているのか。青髪のメイドは何を買っているのか。

それらのことを、大方調べつくしたあとに。

「スバルが小童に懐かれておるのだ……」

茶髪の子ども——たしかリユカという名前のやつがスバルの背中に飛びついている。それに続く、カインとダインというらしい兄弟。そんな彼らとスバルがじゃれ合っているのを、ラルトレアはぼーっと見ていた。

影から出て、茂みに隠れながらその様子をながめる。

「子どもか……」

——スバルは子どもが好きなのだろうか。

ラルトレアは、あまり好きではない。愚かで無知な生物だ。人間のなかでも特にラルトレアには合わない。

その血は美味であるが。

今は別に吸う気なんてない。

それに、スバルが子どもが好きと言うなら、それもいいかもしれない。

「ふつ、我は子を創れぬというのにな」

吸血鬼のなかにも子を産むことができる者はある。ラルトレアのメイドだったクリスがそうだ。クリスは人間とのハーフだが、彼女の

母親は純血だ。

そもそも、男の吸血鬼のなかにも、人間の女を孕ませたがる輩は多い。

それは圧倒的に女の吸血鬼の方が強いからだ。

そして、強ければ強いほど、つまりは『血霊器具』の数が多いほど、妊娠しにくい。ラルトレアは絶対に子を孕むことができない体だ。

でも、今まで自分の子がどうだ、なんて考えたことなどなかった。

「スバルめ……どれだけ我を惑わせれば気が済むのだ。我が……我がぐらついておる……子どもなど……使用人など、ありえぬのだ……ありえない、はずなのだ……」

ラルトレアは自分の声が震えていることに気づいた。

「くっ……我は、我だ。スバルは、スバルだ。だが、我はスバル、を……。ぐぐつ、我が折れると？ 対等の関係というのは、こういうことなのか……？」

わからぬ、わからぬ——と嘆くも、答えは出ない。

「……スバルが、悪いのだ。全部スバルが悪いのだ……！ 我を……我をこんな気持ちにさせておって……っ！ もどかしい……ああ、苛立たしいのだ!!」

今まで感じたことがない感情が胸の真ん中からあふれ出してくる。次々と、とめどもなく。

その感情の前で、ラルトレアはどうしようもなく無力だった。

「我が……取り乱している？ 不安になっておる？ なぜだ……？ スバルう……我を苦しめるのはもうやめるのだ……もう、よいのだ」

ラルトレアは自力で立っていれなくなり、近くの木に背中を預けた。そのままズルズルと、木を伝うようにして、スバルから離れていく。

子どもたちの、うるさい声が小さくなっていく。

そして、いつの間にかラルトレアは隠れることを忘れていて、それで。

「……ラルトレア様？」

声が出た方に、ゆっくり向くとあのメイドが居た。

「貴様は……」

「ラルトレア様、どうしてこちらへ——」

「使用人の分際で我に問い掛けるでないのだ!!」

ラルトレアはイラついていた。

スバルを大切にしたいという気持ちがある。だが、ラルトレアの考え、誇りもある。スバルにも考えがあつて、行動している。

でも、ラルトレアはスバルの行動が許せない。使用人になるのは、支配者という誇りを持つラルトレアには選択肢にすら入らない。

しかし、スバルは対等なパートナーであり、愛すべき存在であり——

そんなジレンマが、ラルトレアをこの上なくむしゃくしゃさせていた。

ラルトレアを今まで支えていたもの——支配者としての誇り、知力、武力、『血霊器具』、力を持つものと持たざるもの、支配されるものと支配するもの。

前の世界で、ひとりぼっちのラルトレアを支えたものは力だった。そして支配だった。

それがいま、ぐらぐらと音を立てて、崩れようとしている。

ラルトレアを、ラルトレアたらしめているものが、無くなるようにしているのだ。

無意識のうちに、それを守ろうとして叫んでいた。

——使用人の分際で。メイド風情が。

短く罵って、ラルトレアはメイドの前から姿を消した。そのまま、森をうろついて、またスバルのもとへと戻っていく。

「ああ……我は情けない女なのだ……こうも、こうも弱ってしまう……」

スバルと知り合ってからというもの、心を揺さぶられることが多い。

聖騎士団に滅ぼされ封ぜられたから、というのもある。

だからといって、それをいつまでも引きずるラルトレアではない。根本の原因は違う所にあるのだ。

それがどこかは明らかだ。

「はあ。我も本当に小童になれたらどんなに楽か……」

ぼやくラルトレア。すると、それに答えるかのようにスバルの声が聞こえてくる。

「あー！ あつちにスーパーダーク幼女が！」

「えー？」「どこー？」「あ、ホントだ！」「いこーぜー！」

茂みから覗いていたはずラルトレアを目ざとく発見し、ダツダツダツと子どもらが一斉に駆け寄ってくる。

「——む？ わっ、おい。なんじゃ、なんじゃ」

ラルトレアが二メートルほど飛びずさって距離を取るも意味がない。またすぐに駆け寄ってきて、ラルトレアを囲んでくる。

「もしかしてラルたん？」「お、スカートだスカート！」「いやドレスだ！」

四方八方、360度全方位をぐるっと囲んでいた。それにラルトレアは腕を組んで、ない胸を反ってから。

「ふんっ、何なのだ小童ども。我に近づくでない。我はスバルと違って相手をしてやる気は——」

「よしめくれー！」「オレだオレだ！」「オレだって!!」  
「は——？」

大声に気を取られたラルトレアの背後。

茶髪の少年がラルトレアのダークドレスの裾を引っ掴んで、勢いよく持ち上げる。軽い生地でできたドレスが抵抗できるわけがなく。ふあっさあとドレスが巻き上がった。いた。

その奥には、ラルトレアの白いあんよと、黒いおぱんつがある。

「貴様らあああああ!!!」

「逃げろおー!」「逃げろ逃げろおー!」「スーパーダークが怒ったぞおー!」

「許さぬ許さぬ許さぬのだあ!!!」

そこからラルトレアと子どもたちの鬼ごっこは始まった。もちろん言うまでもないが、ラルトレアが鬼である。





日が沈み夜がロズワール邸を覆っていた。

ラルトレアも、スバルとレムが買い出しから帰るとともに屋敷へと戻った。その帰り道にもまたラルトレアが腹を立てて、罪のない木々に八つ当たりをしていたのだが、それを知る者は少ない。

スバルが自室で一息をつき、ラルトレアとエミリアが一緒にお風呂に入っているとき。

屋敷上階中央にある執務室に、ロズワールは居た。

「そおれでまずはあ、スバルくんの方はどんなもんだい？」

革張りの椅子に腰掛けながら、囁くように問いかける。彼は従者からの報告を待っていた。

その従者かというと、ロズワールの膝の上で、その小柄な体をさらに小さくして横座りしている。桃色髪のメイド、ラムだった。

「あれから四日と半日。そろそろ見えてくるんじゃないかね？」

「全然ダメです」

「ああ、そうかい」

「バルスは本当に何もできません。料理も掃除も洗濯も。できない尽くしです。洗濯なんて鼻息が荒くさせて仕事にならないので、どれも任せられません」

「それは使用人としてダメだねえ」

「はい。どうして使用人を望んだのか謎です。食客のほうがよほど良かったはずですよ」

「食客ねえ。——それで、彼女の方はどうだい？」

「エミリア様と仲良くしているようです。ただ、分かりません。時折姿を消すことがあります。警戒すべきかと」

「容姿に似合わず、というやつだあーねえ。彼女が相当な武力を持つ

ていることは間違いないだろうねえ。魔法ではない、ということしか分からないってえいうのはあ、不安が残るねえ」

ロズワールは「ふうむ」と顎に手を当てて思案顔だ。

「それでラム、肝心の話だ。——それで、問者の可能性はどうかかな？」  
「否定はできませんが、バルスの方はかなり低いと思います」  
「ふうむ、その心は」

「どちらも、特にバルスは目立ちすぎです。当家に入り込む手段もその後も……彼もそうですが、ラルトレア様の方は屋敷から去りたいという様子も見られます」

「なるほど納得。となると、彼は本当に善意の第三者で、彼女は彼の付き添い」

ロズワールが椅子を回転させて、大窓の方へと体の向きを変える。月明かりにオッドアイを細めて、

「しいかし、彼はあまり彼女を見ていないのだねえ」

見下ろしているのは、屋敷の庭園だ。柵と木々に囲まれたその場所に、エミリアとスバルの姿がある。

「微笑ましいものだ。ラルトレアは気の毒だがね」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

ロズワール邸、夜の庭園。

スバルがお願いとポーズをとりながら、エミリアに頼みごとをして

いた。それはスバルのここ最近の鬱の種、ラルたんのシカトを解決するということだ。

「よかつたら明日とかに頼めないかな？　可愛い小動物見学でもしてラルたんの機嫌も直したいっていうか。というか、そろそろ精神的にキツイ」

「そう、ね。私もどうにかしたいと思う。協力するわ」

「よっしゃ！　そうと決まれば二人の仲直りラブラブデートだ！」

「でーと、つて？」

「ふっ、男と女で出かければそれがデート。女の子がふたりだろうが、イケメンの加護がある俺には何の問題もないのさっ」

「……ほとんど何を言っているかわからないのに、最低なことだつてわかるのつてある意味すごい残念。私は本気で心配しているのに」

「じゃ、行こうぜ！」

「本当に大丈夫なのか、不安になってきたんだけど……」

「よしわかった、行こうぜ！」

「……ちゃんと聞いている？」

「当たり前よ！　この俺がエミリアたんの言葉を聞き逃すわけねえだろ!？」

「スバルなんて大つきらい。ラルトレアにずっと無視されてなさい」

「あー！　あああああ！　急に突発性難聴がぁー!!　聞こえないぞお!!」

　耳を塞いで走り回り音をシャットアウト。

　前言撤回を即座に行う切りの良さに、エミリアは毒気を抜かれたように笑う。

「じゃ、明日ね。ラルトレアに話してくる。何が何でもあの子を引っ張ってくる」

「おお、頼もしいエミリアたん！　よろしく頼みます女神さま！」

女神に祈りをささげてから、スバルは自室へと足を向ける。  
夜のロズワール邸はとても静かだ。

「村まで行って、ガキどもを相手して、子犬と触れ合ったあとに見晴らしのいい場所でも来てもらって仲直りのハグとか。花畑がいいな。ラルたん案外可愛いもの好きそうだし……やっぱり、人間じゃなくても年の近い子どもと遊ぶと、心も晴れるっつもんだ。冴えてる俺！」

——そのあとは、美少女と美少女に囲まれていちゃいちゃウハウハ！  
スバルは変な妄想をして、鼻の下を思いつきり伸ばしている。  
スキップするように赤い絨毯の敷かれた廊下を進んで、

「俺の明日に希望を満ちているのさ、ぐふふ」

ルンルンとスキップしながらスバルは自室へ戻ろうと急ぐ。早くベッドに飛び込んでパックを数えながら明日を最高の状態で迎えたところだ。  
しかし。

「——ん、さむっ。寒すぎるだろ」

自室へたどり着く前に、スバルは異常な寒さを感じていた。先ほどまで浮かれていた気分が消え去り、熱も引いていく。  
自分の肩を抱き、温めようと体をこする。

「は？ 寒すぎるだろおい……なんでこんなに寒いんだよ！」

ゴシゴシと、ジャージで乾布摩擦を試みるも、やってもやっても寒気が引くことを知らず、それどころか眠気まで襲ってくる。

——おかしい。

「おいおい……そんな季節じゃねえんだ」

屋敷の気温はそこまで低くない。それに、体が異常を訴えていた。

——寒いどころじゃない、苦しいほどに。

外気温に反して、どうして歯の根が噛み合わないほどに寒いというのか。

「ヤバい、しやれに、なんねえぞ……っ！」

震えに寒気でなく恐怖を感じ、スバルは慌てて床に手を着く。

ガクガクと震えが止まらない。

三十秒近い時間をかけて、どうにかやつと立ち上がる。しかし、少しでも気を抜けば、すぐに崩れ落ちてしまうだろう。

全身の血が吸い取られ、そのまま固まってしまふような倦怠感。思考さえ鈍っていく。

「……ラ、ラルたん」

現状に対処できそうな彼女を呼ぼうとして、声が掠れる。

マズイ、とそれだけがスバルの脳裏を支配する。

「はあ……はあ……っ。おえええ……おえああ」

込み上げる吐き気に我慢できず、胃の中の全てを嘔吐してしまう。痛みと気持ち悪さに、涙をこぼしながら、這うように前へ。

「……あ」

キンキンと耳鳴りが止まらない。

だがその耳鳴りを通り抜けて、一つの音が聞こえてくる。  
鎖の音。

それがスバルの足を止めた。途端、体を支え切れずに、スバルは床に崩れ落ち。

「——え？」

次の瞬間、凄まじい衝撃がスバルの体を吹っ飛ばした。床に這いつくばろうとしていた胴体がコロコロと床を転がり、壁際へと追いやられる。

「なに、が……」

何が起きたのか。

スバルは体を起こし、うつ伏せの体を持ち上げようとする。だが、震える両腕は地面を掴んでも力が入らない。

右腕にはまだ少し力が入る。ただ、左腕が何も反応を見せない。薄暗い廊下。

何かに挟まっているのか、とそちらに目を向けて、視界がぼやけ、歪んだ視界の中、スバルは、力を出さない左腕に視線を向ける。

——自分の左半身が、肩から千切れていることに気付いた。

「——？ つ、あああ!! うえおええあああ!!!」

スバルの絶叫が屋敷に響き渡った。

それを合図に、スバルの長い長い、一週間が幕を開ける。

## 第五話 『遅すぎたスバル』

ロズワール邸、ラルトレアの居室。

日は沈み、夜がラルトレアを出迎えていた。光をすべて消して、月明りを浴びながら物思いにふけていた。

と、そこに。

——コンコン。

「ラルトレア？ 入ってもいい？ ちょっとお話があるの」

「べつに。かまわないのだ」

「じゃ、失礼するね」

ラルトレアと同じ年だという銀髪の少女——エミリアが入ってくる。お風呂のあとは微精霊と話すとかで外へ出ていたはずだった。

ラルトレアも誘われていたが、微精霊というのがあまり好かないラルトレアは拒否した。

「何の用なのだ」

「えっと、スバルのことなんだけど」

「……………」

「ラルトレアにもいろいろあると思うんだけど、スバルに誘われてね。

明日、でえと？ に行かないかって」

「…………でえと？」

「うん。男と女で出かければそれがデートって、スバルは言ってたけど——」

「——なぜ、それを我に言うのだ」

エミリアの言葉をもう聞きたくなくて、ラルトレアは部屋を飛び出した。追って弁解してくるエミリアを完全に聞き流して、廊下を走っていく。

「待つてラルトレア！」

「——どいつもこいつも、うるさいのだ……」

ラルトレアは影の中に沈み、姿をくらました。案の定、パツクを呼び出せないエミリアはラルトレアを見失い、とぼとぼ自室へと戻っていく。

イライラというよりも、むなしさがラルトレアを支配していた。むなしくなつて、屋敷の中をぐるぐると徘徊した。ゆるやかな脱力感と、怒りすぎて疲労感さえある。と、そこに。

ジャラジャラジャラ……。

ラルトレアの耳に、鎖の音が届いた。

——なんだ？

と疑問が生まれると同時に。

「——っあああ!! うえおええあああああああああ!!!」

スバルの声が、スバルの叫びが響いた。その瞬間、ラルトレアの鼻腔に濃厚な血の匂いが入り込んでくる。

この匂いは。

嗅ぎ慣れたこの血の持ち主をラルトレアは知っている。

考えるより早く、ラルトレアは動いていた。影の中を猛スピードで駆け抜け、血の発生源へとたどり着く。

そこには。

「……おい貴様……メイドの分際で何をしておる」

視界に入ってきたのは水色髪のメイドと、鎖のついた鉄球。そして瀕死のスバル。血を垂れ流し、腕がもがれている。

あの鉄球だ。トゲの鉄球。それがスバルを――

その鉄球を投げたのは、レムとかいうメイドで――

「――誰の許しがあつて、スバルを殺しておるのだア!!!!」

ラルトレアが声を張り上げ、メイドが戦闘態勢を取る。

そして――ラルトレアの視界がぐにやりと曲がつて――



「……………」

きらきらと光り輝く朝日が窓から差し込んでいた。

ラルトレアの部屋から広大な庭園が広がっているのが見える。人が見れば、感嘆の息を漏らすであろう景色に、ラルトレアは無表情だった。

すこし日差しのせいで肌がひりつく。

「……………スバルが、死んだ……………」

ラルトレアは手に持ったグラスの血を見た。

ヤギの血だ。

そしてずらりと並ぶ7本の空ビン。まだあと十五本くらいある。

それらにはたつぷりと血が入っていた。

「あのメイドが、スバルを……」

あの水色髪のメイドがスバルをいたぶって——巻き戻った。

瀕死状態のスバル、ゆがむ視界、そしてこの状態。

それしか考えられなかった。

巻き戻った分の時間は綺麗さっぱり消え去り、スバルとラルトレアだけがそれを覚えている。それが、スバルの力。

ラルトレアはグラスの血を飲み干し、ビンに口をつけてその中の血を全て吸い込んだ。一本、また一本。

あれだけあった血のビンが次々と空になっていく。

そして。

コンコン、とノックがした。

「お客様。当主、ロズワール様がお戻りになられました。どうか食堂へ」

メイドの声が聞こえてくる。

声だけでは双子のどちらかはラルトレアには判別できない。しかし、それはどうでもいいことだった。水色の方だろうと、桃色の方だろうと。

——どちらでも変わりはない。

ラルトレアが扉を開けると、水色の髪が頭を下げていた。

「……スバルは、どうした」

「目覚めると同時にどこかへ行かれましたので、姉様が探しております。見つからないとなると、おそらくは禁書庫にお隠れになっているのかと」

「…………ふうん」

スバルは禁書庫、ラムはそれを探している。エミリアはどこか分からない。ロズワールは食堂。

そして今、ラルトレアの前にはレムがいる。

屋敷にいるのは、これで全員。

「では食堂に案内しろ」

「はい」

メイドが水色の後頭部を見せながら、前を歩く。赤い絨毯の、ながい廊下を。

一步、また一步。

メイドの歩みをラルトレアはじっと見ていた。

最初は歩調を合わせて、少しずつ、少しずつ速めていき――

ラルトレアがメイドの背後に忍び寄った。

「――あ」

ラルトレアの手刀が、メイドの心臓を貫いた。

「お前など要らないのだ」

ぽたり。

血の雫が絨毯に垂れ落ちる。ラルトレアの指先から、ぽたりぽたりと連続して落ちていく。それは止まることなく、続いていって――

ラルトレアは――腕を横に振り抜いた。

すると、メイドの胴体がバランスを失って、どさりと床に横たわった。

血まみれになった右腕、その右手についた肉の欠片をぺろりと舐めとる。

「――まずいのだ」

ペツと。

ぽつかりと穴の開いたメイドの背中へと吐き出した。もう血なんて飲む必要はない。十分に飲み干している。

『吸血解放Ⅳ』。

童女の形態のまま、肉体を最高レベルにまで高めていく。

――……これであるエルザでさえひねり殺せるくらいになつたろう。

「スバル……我が間違っていたのだ。我は我。我のやり方で、お前を手に入れるのだ」

そう、この力。

吸血鬼の力。血の力――『血霊器具』で奪い、支配し、勝ち取るのだ。

――我は強いのだ。強い我が、なぜ苦しまなければならないのだ。

「……ふんっ、最初に来たのは貴様か」

「よくもレムを……ラムの妹を……ッ!!!!」

惨劇にかけてきたのはメイドの姉だった。桃色髪の方。双子の片割れが死んで、嘆き、怒り狂っているのだろう。

前のめりにいきり立って、強くラルトレアを睨み付けてきた。

だが、使用人ごときが、そのような目を向けることすら烏滸おこがましい。

「思い知るがいい。支配者の強さを。――来い、五十九式」

桃色髪のメイドが仕掛けてくる前に、先手を取る。  
すべては先手必勝。

ラルトレアは倒れた片割れのメイドを踏んづけ、そしてそれを溶かした。メイドだった肉を、メイドだった血を使って。

この世界にラルトレアの騎士を創造する。

「——我が騎士ボルフォーンよ」

メイドの死体から、ラルトレアの血を混ぜ込んで二メートルを超す大男が出現する。

その者は屈強だった。

磨き抜かれた肉体に怨念をまとっていた。

銀色に近い白髪を短く切りそろえ、その手には血の色をした刀剣が握られている。

それを見ていた桃色髪のメイドが怒りに任せた絶叫する。

「絶対に殺してやるッ!!!」

「ボルフォーン、その者を——殺せ」

ボルフォーンは一瞬でメイドとの距離を詰め、刀を振り下ろす。それを遮ろうとメイドが魔法を発動させる。

だがその風の魔法はボルフォーンに触れる否や掻き消えていった。騎士である彼を止めるものは何もなかった。

その斬撃が、すっぱりとメイドの首を跳ね飛ばす。

「——クケケケツ、弱いのお弱いのお。魔法なんてものを信じすぎるからそうなるのだ」

引きつるような笑いを浮かべながら、ラルトレアはメイドの頭を踏

みつけた。何度も何度も、踏みにじるように、あざ笑うように。

その余韻に浸っていると、ボルフォーンが視線を巡らしているのを感じた。高笑いをしている主人の命令を待っているのだ。

「——ん、何だ」

ボルフォーンの示す先に、廊下の先に呆然と突っ立っている黒髪の少年がいた。弱く、もろく、口がよく回るお調子者で——

ラルトレアが支配すると決めた相手——スバルだった。

「……なっ、なにやってんだ……おい、ラル——」

「待っておったのだ、スバル」

キョドキョドして落ち着きのないスバルへ、優しく諭すように言う。

「——さてスバル、どこへ行こうか。南か北か、東か南か。国を陥落させて乗っ取るというのでもいいかもしれないのだ。だがまあルグニカはあきらめよう。ラインハルトには勝てないのだ」

「な、なッ、なに言ってるんだ——」

「んふふっ、スバルは長生きをしてもらわないと困るのだ。いつまで力が続くかもわからぬしの。できるだけ死の危険から遠ざかって、我とゆつくり時を過ごすのがよいのだ。こんな屋敷になど居てもつまらぬであろう?」

ラルトレアは絶句するスバルに近づいて、その顔を両手で掴んだ。ぐいっとスバルの顔に自分の顔を寄せる。

スバルの焦るような、不安がるような鼻息が頬に当たる。

「我が！　スバルを愛し、スバルが我を愛す。永久に、永遠になのだ！



第六話 『血の力、愛の力』

「静かにせよ、スバル♪ ——五十七式『ブラッティ・ラブ血之魅了』」

その言葉が発せられた瞬間、グシャツとスバルは心臓を掴まれた—  
—のような感覚に襲われた。

圧倒的な力が、理不尽な暴力がスバルの精神を、スバルの心を驚掴  
みにしてくるのだ。このときスバルが抱いた感情は一つだった。

——怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

!!!!!!

逃げたくて逃げたくてたまらない。だが、逃げることができない。  
そんなものはスバルに与えられていないのだから。

そうしてやがて恐怖という感情さえ無くなっていく。

スバルの全てはラルトレアのものであり、ラルトレアはスバルの全  
てを決定できるのだ。感情も言葉も、すべて。

ラルトレアが望めば恐怖という感情は消え去るのだ。

「我はスバルを愛しておるのだ。スバルは我を愛しておるだろう?」

「……………」

カクンとスバルは頷いた。頷くしか、なかった。

★★★  
★★★  
★★★

「我はスバルを愛しておるのだ。スバルは我を愛しておるだろう?」

血まみれの廊下で、ラルトレアは愛の告白をする。そうして支配の力を使い、スバルを領させる。

恥ずかしくて、あえて言葉を喋らせることはしなかった。

「ふふふッ……スバル……スバルう……」

膝立ちで呆然とするスバルを小さな胸で抱きしめて、ラルトレアはスバルをゆつくりと持ち上げていった。

「――『吸血化身』。さあ、行くのだ。どこか遠くへ……」

メキメキメキイとラルトレアの背中から、肉をかき分けるようにコウモリの翼が飛び出した。

翼を大きく羽ばたかせ、その風圧で窓が吹き飛ぶ。

バツサバツサツ。

ラルトレアの羽音が屋敷中に響き渡る。

だが、そこに邪魔者が現れる。優雅な立ち振る舞いをするピエロが、角を曲がってきて姿を見せた。

「――ふん、出てこなければ捨て置いたものを」

「んふう、我が家の使用人が殺されているんだあーよお。そんな状況で当主が怖くて出てこれないだなんて不甲斐ない話じゃあないか」

「敵討ちに来たと？」

「あはあ、それはどうーかな。私としては、そのナツキ・スバルくんを見とおきたかった、という所だあーねえ」

「……そういうことか。ボルフォーン、殺せ」

命令を口にする、それはすぐさま実行された。

ボルフォーンという騎士は魔術師に対してめっぼう強い。いくらロズワールが優れた魔術師だろうと関係ない。

そのための、ボルフォーンだった。

「――抵抗しないのか。魔術師というのは奇妙なものなのだ」

ボルフォーンにされるがままに、切り伏せられるロズワール。死ぬ直前まで奇妙な笑いを浮かべていた。

「……ハア……なんだか興がそがれたのお、スバル」

ラルトレアは自分の腕の中に収まったスバルを見やる。  
うつろな瞳。

表情のない顔。

すぐにそれが、瞳に光が差し、柔らかな表情に変化していく。  
ラルトレアが念じればすぐにそうなる。

これが『血霊器具』の力だった。

「うふふッ、これからは苦しむことはないのだ……」

五十七式『血之魅了』。

目を見るだけで相手を支配することができる。ただし、ひとりだけ。

自我を崩壊させず、意のままに操ることも、本人の意思に戻すこともできる。

「ボルフォーンよ、エミリアを殺したのちに我を追ってこい」  
「――」

大男は無言で頷くと、手に持った刀剣を投げつけた。ブウンと空気を切り裂きながら斜め後方へと飛んでいき、壁を破壊しながら突き進んでいく。

その貫通した穴の先に、銀髪が揺れるのを認める。

「……何だ、おったのか。探す手間が省けたの、エミリア」

「——ラルトレア」

意を決したように、姿を現したエミリア。彼女を守るようにふわふわとパツクも浮いている。

真剣な面持ちで、ラルトレアを睨み付け。

「私は、あなたを許さない」

「ハッ！ 貴様の許しなど要らぬわ、このたわけ」

「せっかく……お友達になれると思っていたのに」

「我に友など要らぬ。ましてや貴様を友と思ったことなどないわ！」

「な、なんで……ラムを、ロズワールを殺したの……ッ！ スバルを、スバルをどうするつもりなの?！」

「貴様に関係のないことなのだッ!!」

エミリアへ反発するように、ラルトレアはスバルを強く抱きしめる。しかしラルトレアの短い腕ではスバルの体は大きすぎて、ずるっとこぼれ落ちていく。

必死にエミリアを拒否するラルトレアは、その状態に気づかない。

「貴様に……貴様に我の何がわかる……ッ!!」

ぼて、とスバルの胴体が床に崩れ落ちて、だらんとした四肢が広がる。無表情な顔が、光のない目がエミリアの視界に入った。

「スバルは、スバルは置いていきなさい……っ！ そのままだとスバルが可哀想よ」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れええええ!!!」

手放してしまったスバルを放置して、エミリアへと飛びかかろうと

するラルトレア。だがエミリアはそれを気にも留めずに、スバルへと一心に優しく言葉を投げかける。

「スバル、スバル……返事をして、スバル!!……」

「うるさいうるさいッ！ 消えるがいいッ!!!」

突っ立つボルフォーンの横を飛んで、ラルトレアは二式『吸血之牙』を発動させる。もつとも原始的に、もつとも痛みと恐怖が伴う方法でエミリアを黙らせたかった。

だが。

「……あ……え」

スバルが、声を発した。

「……は……っ？」

血霊器具、五十七式『血之魅了』がかかった状態のスバルが、声をあげたのだ。

声をあげた。

自分自身の意思で。

ラルトレアがそれを望んでいないというのに。

立ち止まって。

振り返って、呆然とするラルトレア。

「……え、えみ……えみりあ……」

そして、ずるずると、床を這うように。スバルが動いた。

ラルトレアがそれを望んでいないというのに。

「……お、こ、こわ、い……あたす、け、て……え」

ラルトレアの開いた口がふさがらない。

視線はスバルを見ているのに、ぐるぐると視界が回り始める。  
力が。

ラルトレアの支配を体現する力が。

「——わ、れの力が、わ、た、あ、」

ぐらりと。

足元が泥のようにぬかるみはじめて、まともに立てなくなり——  
ずるずると後ろに引きさがって、背中が壁につく。

嫌だ嫌だと。

首を振りながらラルトレアはスバルを見る。その口がまた開いて  
いた。

「……え、えみ、りあた、たす、けて……」

その音を境に、ラルトレアの世界から音が消失する。

「!!!!!!」

ラルトレアの精神が現実を拒みはじめ、その口が言葉にならない音を吐き出し続ける。髪を血が出るまでかきむしり、周囲へと暴力を振るい始める。

目の前をいち早く壊したい。

それだけだった。

——壊せ壊せ壊せ壊せ。

壁を破壊し床を破壊し、天井を破壊する。徐々に屋敷自体が崩れていった。

——殺せ殺せ殺せ殺せ

ボルフォーンがその命令を忠実に実行する。

騎士が銀髪の少女に襲い掛かり、黒髪の少年の首をぎしりぎしりと締め始める。その動きがなくなると手を放す。

動きはじめると、また首を絞めていく。

足をそいで手をもぎとって、血を限界まで吸ってなお、死なせない。

意味のない音を叫びながら、少年の全てを支配しようとする。何としても、少年の意思を捻じ曲げようする。

少年の全てを奪い、手のひらに掴み取ったと確信するまで、やめることはない。

そして、ついに少年は息絶える。

やり過ぎたラルトレアが、無意識に蘇生を始めようする。だがその前に、視界がぐにやりと曲がり始め——

少年の死を起点に、時間が巻き戻っていった——

そして少年とラルトレアが迎えた三周目の世界。

ロズワールの屋敷から、ラルトレアは姿を消した。

## 第七話 『三週目のスバル、そして四日目』

「——うううあああああああッ!!! ハッ、はあ、はあ、はあ……」

スバルは手を前に突き出して、襲いかかってくるラルトレアを引き離そうとして虚空をつかんでいた。

体を起こし、荒い息を整えることに専念する。現状はちゃんと把握できている。使用人の時の部屋ではなく、一番初めの客室へ戻っていた。

「ッ、ふうー……戻ってきた……いや、戻ってこれたって言うべきか……」

傷の消失はそれを意味する。スバルは巻き戻されたことを確信していた。その証拠に、傷の他にも、目の前の二人の存在がある。

「なんか……ごめんな。それと、おはよう」

抱き合っつてこちらを警戒しているレムとラムの姿だ。

まるで見知らぬ男が急に目覚めて絶叫したのを目の当たりにしたかのように驚きようだ。いや、まさにそうなのだろうが。

気の抜けた挨拶に対しても、二人が返事をしてくれない。なので、一発元気百倍になる挨拶をかますことにする。

「ご迷惑をおかけしました。ナツキ・スバル、ただいま起床します！」

ベッドから唐突に跳ねあがってからのダイナミック自己紹介。

そのままの勢いで部屋を飛び出して、二人を後回しにしてスバルはある場所へと向かった。

「ラルトレア……」

廊下を突っ走って、その客室の前にまでたどり着く。しかしドアの前で立ち止まってそのまま動けなくなる。

ガクガクと足が震えだす。

——最後の記憶を思い返す。

『!!!』

ラルトレアが醜く泣きながら、何かを叫んでいた。狂気に染まった顔をぐしゃぐしゃにして、スバルの首を絞めつけながら。

痛みと恐怖で、スバルは彼女が何を言っているのか分からなかった。

ただただ、怖くて、苦しくかった。

「クソツ、何だっつてんだ。ワケわかんねえんだよ……」

苛立ちが募る。

スバルには分からなかった。

ラルトレアが何に怒っていたのか、なぜあんなことをしたのか。

一度目でスバルは死んだ。何者かの手によって。それに何かしらの形でラルトレアが関わっていたことだけは確かだ。

「二度目は俺の体調が悪くなって、鎖の音がして、殺された。襲撃者がいたんだ。屋敷の中に」

そしてスバルの死とともに、巻き戻った。

『死に戻り』だ。

ラルトレアはそれを覚えている。一度目の記憶をスバルとともに保持している。そのラルトレアが急におかしくなった。

「考えても埒があかねえぞ！」

なけなしの勇気を振り絞ってスバルはドアノブをひねって、部屋に入った。ラルトレアがいるはずの客室。

しかし、そこには。

「……ラル……いな、い……？」

誰もいない。

あるのは空の2リットルビンだけだ。カーテンが開けられ、朝日が差し込んでいた。ベッドも使われた形跡はない。

窓辺に立って、屋敷の外を覗いてみる。見晴らしの良い場所らしく、広大な庭が一望できる。

「……一体全体どうなってるんだよ」

ラルトレアが居ない。

その事実に対しホツとしているスバルがいた。ラルトレアが居てくれなくてよかった。そう思ってしまうほどに。

怖かったのだ。ラルトレアの瞳を見た時、スバルは人間として本能的な恐怖を感じた。これまで何度も死んだが、あれほど怖いと思つたことはない。

これまでで、死にたくないと思え切れないほど思つたことはある。腹を切り裂かれて死んだ時は必死に飛び出た内臓をかき集めた。そのときは生きたいという一心だった。

焦りと不安感にまみれていた。だが、あれは違った。

抗いようのない巨大な力が、素っ裸のスバルをギュウウウと握りしめた。逃げる隙間など一つもなかった。

焦りとも不安感とも違う。

あのとき味わったのは強烈な拒絶感だ。もうやめてくれ、と。何度も願った。

怖いのだ。

裸の自分を、どうしようもなく巨大な手が握りしめてきて、どうすることもできない。

怖いのに、逃げることもできない。

怖いという感情、逃げるという意思さえもその巨大な手は掴み取るうとしてくる。

それでも怖くて怖くて、そして希望の光に縋り付いた。逃げたいという意思が消されても、何度でもその意思は蘇ったのだ。

そこに声がした。

エミリアの声だ。

『スバル、スバル……返事をして、スバル……』

その声だけを頼りに、強大な力から全力で逃げた。だがちつともスバルは前に進めない。100kmくらいは進んだらうと思っても、スバルは1mmしか前に動いていない。

まるで誤差みたいなものだった。だがスバルはあきらめなかった。

「どうするナツキ!!スバル……数日後には襲撃者、ラルトレアはどこにいるか分かんねえ。ああッ! くそ! どんづまりじゃねえか!!」

ラルトレアを探す。

おそらくラルトレアは何かを知っている。何かを知ってあんなことをした。スバルには考えられなかったことだ。

ここにきて、ラルトレアの本性が出てきた。

「人間じゃ、ねえんだな。わかつてはいたけど、軽く考えすぎてたつて

ことだよな……」

あのとときのラルトレアはラムをまるでゴミのように扱っていた。あんなことをできてしまうということ自体に恐怖さえ感じる。

スバルはラムを殺しているのを見たとき、ブルツで少し漏らしてしまっただけなのだよ。

そのあと、ラルトレアはスバルさえも殺した。

腕を引きちぎられ、足をもがれて、血を吸われるのも恐怖と痛みでスバルの心はぐちゃぐちゃだった。

「……………」

恐怖を思い出しながら、スバルは両手で顔を覆って黙り込む。落ちて着くために窓辺に腰かけると、何か置いてあったのか床に落としてしまう。

パリンツ。

甲高い音が聞こえて、指の間から見てみるとそこにはグラスがあった。割れて、その中身をこぼしている。

血だ。

血の入ったグラスが割れていた。

吸血鬼。血を吸う人外、という認識しかスバルにはない。

ラルトレアは吸血鬼だ。

自分からそう言っていたし、血を飲んでいるのを見る限りそれは本当なのだろう。そして――

コンコン。

「お客様。当主、ロズワール様がお戻りになりました。どうか食堂へ」

スバルの思考を遮るように、開いた扉をレムがノックしていた。部屋の中を覗くように、首を回している。

おそらくはラルトレアを探しているのだろう。

そこである考えがよぎった。

——レムは、レムはどうしたんだ。

ラムは死んでいた。ロズワールもエミリアもどうなったのかスバルには分からない。知っているのはラムが殺され、エミリアの声があったということだけだ。

「お客様、お連れのリルトレア様はどこに行かれたのでしょうか」

「——ラルた、いや、ラルトレアならたぶん、屋敷を出てったんじゃないか。もともと、気まぐれな子、だし、な」

スバルは自分の顔が引きつっているのを感じていた。無理に笑おうとして笑えていない。

それをレムは不安げに見ながらも、それでこの場は納得してくれるようだった。先を歩くレムについていきながら、スバルは食堂へと向かっていく。

「……………」

ただ無言で廊下を歩きながら、スバルはこれからのことを考えていた。自分はどの行動すべきか。ラルトレアにはどう対処すべきか。

ただ、どれだけ考えても、うまくまとまらない。

焦りが焦りを呼び、ラルトレアのことを思い出そうとして首を振った。

今のスバルには、噴水の前でラルトレアと出会ったとき、あのときの彼女の寂しげな表情を思い出すことはできなかった。





ロズワールとの初対面を何事もなく迎え、食堂で朝食を取っていた。レムとラムが配膳を行い、ロズワールを上座に、エミリアとスバルが向かい合うように座る。

誰も殺されていない。

ラルトレアは姿を現さなかった。何もせずに、どこかへ消えた。

おそらくはベアトリスも襲われていない。禁書庫の司書という名のあの引きこもりドリルロリは健在だろう。そもそも二回目でも襲われているかも怪しいところだ。

何はともあれ、スバルは内心安堵していた。引きつった笑いが出なくなるぐらいには。

ラルトレアの不在、スバルの表情が固いということ以外は、一回目と何も変わらない朝食の風景が広がっている。

そしてまた同じ会話の流れになっていく。途中ラルトレアのことを何とか、というか結構怪しまれながらも誤魔化したあとに、エミリアの徽章の話になり、彼女が女王候補であること、スバルへのご褒美の話になる。

「じゃ、ロズっち。数日でもいいから屋敷に泊めてくれ。そのあとは別の場所に行くから、ちよつぴりの饞別を」

「ふうむ、ちよつぴりというと……家が建つぐらいかな?」

「いや。純粹に、一週間ぐらい衣食住に苦労しないぐらいでいい。あとは勝手に生きてくから」

「エミリア様の言う通り、それはそれは……欲のない話だよお?」

「いいんだよ。ラルたんが向かった先にもアテがあるし。そんなに迷惑はかけられねえからな」

エミリアも、誰もラルトレアがどこに行ったのかということ問い

かけることはない。早口でまくしたてることで、それをさせない雰囲気  
気をわざと作っていた。

エミリアもその言葉に何事か考えているようだった。

「そこまで言うなら仕方ない、聞き届けましょ。ラムとレムに用意さ  
せておくかあら——滞在は、三日でよかったかな。他に何かあれば聞  
くけど?」

「そだな。んじゃ……紙と羽ペンと、童話貸してくれ。読み書きの練  
習は続ける約束なんだよ。こう見えて、俺ってば約束は守る主義なん  
だぜ?」

——一応は、三度目になるロズワール邸。二度目は一日目の朝しか  
過ぎていないため実質二度目というべきか。

今回は使用人ではなく、スバルは数日限定の食客となった。

「呪いと鎖……ラルトレア……これじゃ何もわからねえ」

わかっていることは、一度目の四日目の深夜に何者かの襲撃があ  
り、それがラルトレアを凶行に走らせたということ。

今の何も分からない段階で、忌避してしまうラルトレアではある  
が、襲撃者とラルトレアがグルだとは、まだ、思いたくはない。

「だから、今回は、情報収集の一点賭けだ。正直、最初から諦めてるっ  
ぽくて選びたくない作戦なんだが……」

情報が不足しすぎて何が起きているかさっぱり分からない。襲撃  
者のこともラルトレアとの関係性も手がかりすらない。

なら、ラルトレアが話をしに戻ってきてくれる可能性と、情報を掴

むことに徹する作戦しかない。

「パツクにはそれとなく、エミリアたんを守るよう伝えてあるしな。あとはあのロリと、ロズワールにそれとなく……それとなくってどうやんだよ。対人スキル低い人間に求める内容じゃねえぞ」

羽ペンを耳の上に挟んで、ぐつと背筋を伸ばす。考えるべき問題の多さと複雑さに頭が痛くなる。

「どうしたもんか……と」

「失礼するわ、お客様」

コンコンと戸を開いたのは、桃髪の鮮やかなメイド姉——ラムだ。彼女は手にお茶の載ったトレイを持ち、机に向かうスバルを見ると眉を寄せ、

「あらお客様、本当にお勉強しているのね」

「おい、超失礼だな。仮にも客人、ゲスト、VIPですよ俺」

「という名の居候。そういう認識よ、お客様」

毒を吐かれるも、使用人としての日々が綺麗さっぱりなくなってしまうた今となってはこれも嬉しい。

だから、スバルは出されたお茶を口に運んでゆつくり味わい、

「うん、マズいな」

「お屋敷で出される最高級の茶葉を、罰が当たりそうな感想ね」

「苦いもんは苦い。ダメだ、やっぱ葉っぱだわ。一緒に飲む相手がお前じゃ見栄張る気にもならねえ」

「ずいぶんと馴れ馴れしいお客様だわ」

「ずいぶんと馴れ馴れしいメイドに言われたくねえよ」



彼女はずっとラルトレアが気掛かりなようだった。

スバルに問い掛けたのだろうか、スバルはそれをずっと封殺してきた。持ち前の空気の読めなさを発揮し、いきなり大声を出したり、変な行動を取ったりもした。

「そおれじゃスバルくん、息災で。短い間だあつたけど、楽しかったよお？」

手を差し出してくるロズワール。その握手に応じて、

「おう、こつちこそお世話になりました。土産も持たせてもらったし、至れり尽くせりだったよ」

次にロズワールの背後の双子に向ける。無言の二人に、スバルは上げた手で肩を叩き、感謝を告げることにした。

レムについては仕事を褒めることができたのだが、姉様に至ってはどうも褒めるところが見当たらない。

無理やりに絞り出した称賛と感謝の言葉にも毒を吐かれながらも別れを告げて、背を向ける。

玄関の扉が開くと、一直線の街道が広がっていた。

「——じゃ、またな」

「……うん、気を付けて。ケガしないようにね」

少し元氣のないエミリアをできるだけ見ないようにして、スバルは街道へ一步を踏み出す。

街道をひとり、しばらく進んだところで足を止める。

スバルは周囲の様子をうかがってから、道を外れて森の中へと突き進んでいった。

草木を掻きわけて森の奥へ向かう。斜面を上り、そのまま数十分ほど山中をハイキングしたところで。

「よし、ここだ」

急に視界が開け、高い空が見える。スバルは山の中腹部にある丘に辿り着いていた。そこから見下ろして、ある建物を視界に入れる。

「屋敷がよく見える。なにかあれば……」

すでに四日目の朝を過ぎている。一周目から考えると、あと残り十時間ほどでタイムリミットがくる。

「あとは、事が起きるのを待ち構えて、見極めるだけだ」

十時間程度ならば、スバルでも張り込みできる。

そうしてそれだけ待てば、おのずと結果は見えてくる。情報が来るのをスバルは待っているだけでいい。

だが、屋敷の中ではそれもままならないことがあるだろう。

襲撃者の攻撃——もしくは呪いを受けて、スバルの意識が飛んでしまう可能性だ。

それゆえに、今回スバルはエミリアたちを囮にした。

もちろん、スバルは彼女らをむぎむぎ見殺しにするわけじゃない。何かあれば屋敷を走り回り、敵襲を知らせるつもりだ。

だがそうはいつでも、間に合わない確率の方が高い。

リスクとメリットを天秤に置いて、彼女らを苦しめるであろうという悔しさを噛みしめながら、この数日を過ごした。

「ラルトレア……いるんなら今出てきてくれよ……」

スバルは身を低くして体を隠し、木々の間からロズワール邸を監視する。冷や汗をぬぐいながら、時が過ぎるのを待った。



スバルを見送ったあと、エミリアは自室に戻っていた。スバルの異常さとラルトレアの不在が気掛かりで仕方がなかった。

「パツク、本当にラルトレアがどこに行ったかわからないの?」

「もともとあの子の気配は薄いんだよね。残念だけど本気で隠れられたらボクにもお手上げだよ、リア」

「そう……なら、しかたないのよね」

申し訳なさそうにするパツクはエミリアの銀髪の中へともぐりこんで、エミリアをそっとしておくことしたようだった。

それを感じながらも、エミリアはいまだ納得がいつてなかった。

そんなエミリアさえ気後れさせてしまうほど、スバルはおかしかった。

もともとスバルはふつうではないけれど、いつも以上に、言動が常軌を逸していた。あまりの見ていられなさに、ロスワールもレムもラムも黙っていた。

でもスバルがどうしてほしいかはわかっていた。

絶対にラルトレアには触れないでほしい、そんな一心であんなへんなことをしていたんだと思う。

いきなり叫びだしたり、変なダンスを踊りだしたり、必要以上に姿を出さなくなつてずっと部屋にこもっていたのだ。

「私はどうすれば――」

椅子に座って、つくえの上で腕枕をしながらつぶやく。その独り言

に、誰も反応することはない。その、はずだった。

――。

「――え？」

何かが聞こえた。

ふわっと背後から、何かが忍び寄ってきて、エミリアにささやいたのだ。

感情もなく、狂ってしまったように平らかな声で。

――しねばよい。

次の瞬間、エミリアは影に引きずり込まれた。

## 第八話 『ささやかれる愛』

——『影之牢獄』。

真つ暗闇の中にエミリアはいた。何も聞こえない。何も見えない。風も吹いていないしパツクの存在も感じる事ができない。

……ここはどこなの？

声を出そうとした。だがその自分の声さえ聞こえなかった。喋っているという感覚だけはあった。ただ、それだけだった。

手を動かそうと言う感覚はある。ただ手は動かないし、手も足も見えない。

見えない、というより目が無くなったといった方がいいかもしれない。

聞こえない、というより耳が無くなったような——

「」

誰かがエミリアに話しかけた。耳がないはずなのに、その声だけはとても鮮明で、しかしそれがどういう意味なのか分からなかった。

思考がまとまらない。自分とは違う言葉をしゃべっているような気がしたのだ。

「」

また何か言った。今度は短く、まるで嫉妬にまみれているような声で。

そしてエミリアは見た。

見ることができた。

目の前に、女の子がいた。

黒い髪の毛、おかつぱ頭の女の子。

冷めたような赤い瞳。

とても可愛いのに、とても寂し気に、狂ったようにつぶやいている。  
ぽっぽっ、と。

「——うらやまし〜」

背の低いその女の子がエミリアを見下ろしていた。そうして女の子が覆いかぶさってきて、その小さい体にエミリアが溶けていく。不思議な感覚だった。

女の子の体の中へと入っていくのだ。まるで泥沼のように、ゆっくりとゆっくりと。



スバルはじつと時がくるのを待った。

バクバクと心臓を警鐘を鳴らし続ける中、スバルは息を殺し続けていた。

すでに時間は六時間が経っている。

「……屋敷に異変なしっつと」

スバルは目を凝らして再確認する。そして安心してから道具袋から竹製の水筒を取り出し、冷たい水で喉を潤す。

「気合入れろナツキルスバル。情けねえ。集中力切らしてる場合じゃねえんだ」

思い切り両頬を叩いて、意識をはつきりと覚醒させる。

ここで意識が飛んでいては、本当に危機が来たときに駆けつけられない。そうなってしまうては全ての努力が水の泡だ。

気合を入れて見張りを続けなければ。

そう、スバルが気持ちを切り替えた、その瞬間だった。

「——きやがったか！」

何かが空を切る音。

わずかなその音を感じた直後、スバルは横へと飛んだ。

全感覚を投入した上での、事前に決めていた通りの回避行動。その勢いのままスバルは駆け出し、一気に崖下へとジャンプ。

高所からの落下。

急激な浮遊感のあと、その勢いは急停止。腰を締め上げるロープがスバルの肉に食い込んだ。

「逃げる逃げる……ッ！」

言ってナイフで命綱を切断。ロープから解放されるとすぐさま山中を駆け抜けた。少しでも前へ進むために道具袋も投げ捨てる。

降りて一瞬のためらなく走り続けて、だんだんと息が切れてくる。

草木をスバルの進行を阻んでくる。それを避けながら直前のことを考えていた。相手が使ってきた武器。

しつかりと聞こえた。

鎖の音だ。

そして緊急回避したスバルのすぐ横を通り過ぎたのは。

鉄球だ。それも凶悪な棘のついた。

考えをまとめながら走っていたスバルは木の根っこに足をとられてしまう。

「——うあっ！」

つまづいて、上半身だけが前へと傾いてしまう。斜面を滑りながら転がるスバルの、その頭上を鉄球が通っていく。

あれが当たればスバルの頭は今頃木っ端みじんだ。

だがそれを回避できた喜びを味わっている暇はない。

横に転がり、体勢を整えて走り出す。方向感覚など無くなったが、立ち止まるわけにはいかない。

だが体が思うように動いてくれない。

息が切れて肺が痛みだす。足はまだまだ動けるのに、スタミナが切れ始めていた。いくら運動力があっても持久力がなければ、こんな山道で逃げきれはしない。

「……までって……ことかよ……！」

目の前に、崖が立ちはだかっていた。

当然、この石の壁を上る方法をスバルは持ち合わせていない。

どうするどうする、と考えても思考だけが空回りして答えを出してくれない。ただ落ち着こうと考えて深呼吸をした。

だが心臓が高鳴りを続けている。

その反面、やけに周囲が静まり返っている。木々たちが夕焼けをさえぎって森には闇が佇んでいた。

スバルの影もぼんやりとしている。視線を上げてゆつくりと振り返る。来るであろう敵を見るために。

次に繋げるために。

——瞬間、鎖の音。ソレは高速で飛来した。

受けても構わない。その覚悟で体を丸めて受け止めて、死んでも相手が誰なのかを確認しようとした。

鉄球がスバルの腹部にめり込み、岩壁へと激突させる——ことはな

かった。必死に漏らしそうにながら構えたスバルに、衝撃が襲ってこない。

来るであろう痛みにはビビッて下していたまぶたを、ゆっくりと上げる。

「な、なんだ……これ？」

スバルの前に、赤い何かがあった。赤い液体が、スバルを守る楯のように突っ立っているのだ。

触れてみると血のような液体が指に付着する。たらりと垂れてるように地面に落ちる。

血だ。

この血の触感をスバルは嫌なくらい知っている。

この血が、血の壁がスバルを守ったのだ。一体誰が、と考えるまでもなく、スバルは黒髪の童女を探していた。

だがその姿はない。

ビツシヤアと音を立てて、血の壁が崩壊する。

すると血に濡れた鉄球が、モーニングスターが地面に落ちた。まるで血の壁にめり込んで、今落下したかのような光景だ。

スバルはその鉄球を操る相手、鎖の伸びる方向へ視線を向ける。

「——面倒なことになりました。何も気付かれなまま、終わっていただけの一番でしたのに」

鎖の音が鳴る。鎖が緩んで、その先にある光景にスバルは目を見開いていた。

「うまくいかないものですね。こう油断させるのがあなた方の策ですか？」

森の闇の中からと彼女が歩いてやってきた。

ホワイトプリムとエプロンドレス。小さい手に鉄球と繋がる鎖の柄を握りしめていた。彼女は青い髪を揺らし、無表情で首をかしげる。

「嘘だろ……レム」

そのとき、空白がスバルの脳内を覆っていた。思考回路が動作を止めて、白いペンキが何もかも塗りつぶされていた。

呼吸すら忘れ、心臓すら鼓動を止めたかのような停滞。だが構うことなく呆然とするスバルに、レムは冷たく言葉を発してくる。

「お連れ様はどこですか。お客様」

スバルの意識が呼び戻されて、なんとか声を振り絞る。

「さ、さあな」

「……」

苦しい誤魔化しにレムが目を細める。僅かな沈黙に耐えられず、スバルは口を開いてしまう。

「どうしてこんなことを……って、ありきたりな台詞言っていていいか？」  
「そう難しいことでは。疑わしきは罰せよ。メイドとしての心得です」

「——ラムは、このこと知ってるのか？」

「姉様に見られる前に、終わらせるつもりです」

「つまり、独断だな？ ロズワールの指示じゃないと」

「ロズワール様の悲願成就に、障害となり得るものはこの手で排除します。あなたも、その中のひとつというだけのこと」

ロズワールの悲願。

それは何か。エミリアの後見人として、エミリアを王にしなければできないこと。たぶんその中身は関係ない。その前段階である王選に、スバルの離脱が不利益だと考えたのだろう。

目の前の少女——レムは。

ロズワールのためだと考えて、スバルを殺そうとしている。

独断で、双子の姉であるラムにも告げずに決行していると——

——それはつまり。

「——そんなに、俺が信用できなかったのか」

「はい」

躊躇なく頷かれて、スバルは胸の奥に痛みを感じた。

今までの日常が、今はもう既にスバルの中にしか存在しない一周目の想い出が引き裂かれていた。

拒絶したかった。

一周目の時も、スバルはあんなに楽しかったというのに、ずっと疑われていたという事実を認めたくなかった。

スバルはただ、自嘲するように口の端を歪めて、

「ざまあねえよ、俺。うまくやってたなんて、勘違いしやがって」

「——ッ！」

スバルが言うのとレムの表情が驚愕に染まった。その反応はとても不思議だった。スバルを殺そうとしたレムが、そんなつもりはなかったと言ったところでレムが驚くはずがない。

疑うはずだ。

独断専行してしまうようなレムがスバルの表情を演技としないわけがない。

それなのに。

レムは驚いて、一步下がって、そして鎖を力強く握りしめて構えていた。

「は……おいおいいきなり血相を変えて何だって——」

「いつまでとぼけていれば気が済むつもりですかッ!!!」

レムが戦闘態勢に入り、スバル目掛けて鉄球を投げつけようとしてくる。スバルは咄嗟に避けようとして、気が付いた。

違う。

レムはスバルのもつと背後を見ていた。背後の何かを見て驚いて、攻撃をしかけていた。その鉄球がスバルの斜め後方、裸足の足音がスバルの鼓膜を叩く。

トゲ鉄球を避けるように、その足音の主は森の茂みの中に突っ込んでいく。必死にスバルはそれを目で追おうとするが、追いつかない。

ただ、白いコートがちらっと視界の端に映る。

その僅かな光景が、ある人物の姿を思い起こさせる。屋敷の中にいるはずの人物の笑顔が脳裏によぎる。

だがそんな思考さえも振り捨てて、事態は進行していく。

「——ッ!!!」

レムが鎖を振り回し、遠心力を伴ったトゲ鉄球が次々と木々をぶち倒していく。地面をも削って、森に破壊の嵐を巻き起こすが、標的に当たった様子はない。

スバルは目で追うことができない。ただ、白いコートを着た誰かがエルザ以上のスピードで獣のように駆けまわっていた。

そして。

レムの放ったトゲ鉄球がピタリと停止する。闇の奥から鉄球の破壊される音が聞こえてくる。じりじりと下がるレムが見える。

残った鎖を振り回しながら、森の奥から歩いてくる。

裸足で、ぴた、ぴたと音を立ててやってきた。

「……………エへへッ」

美しい銀髪の少女だった。

腰まで届く長い銀色の髪をひとつにまとめている。

身長は百六十センチほどで、白いコート羽織っていた。ただ、コートを羽織っているだけで中には何も着ていないのだろう。

素足と所々破れたコートから白い肌が見えていた。

その立ち姿全てがある少女だとスバルの記憶は告げている。

だが圧倒的に違っている部分がある。

顔は理知的というよりも鋭く威圧的で、つり上がった眉は優しさよりも気の強さを表している。

そして、なにより――

瞳が赤った。

「……………あ、ら、るとれあ……………」

「キヒヒ――安心せよ、我が守ってやるのだ」

銀髪の少女――まるでエミリアのような姿をしたラルトレアがその白い牙を見せた。レムのことなど構うことなく、じりじりとスバルに歩み寄ってきて。

固まって動けなくなるスバルの前で踵を返した。

おそらく――レムの方を見ている。

レムは破壊されて、半分の長さになった鎖を握りしめている。

「不屈き者が！ メイドの分際でこのようなこと。万死に値する――」

ラルトレアが右手をレムに向かってかざして、何かをしようとする。それを見ていたスバルは無意識に少女の肩を掴んでいた。

肩を掴まれたラルトレアが機械のように振り返って。

「――なんだ？」

「……だ、ダメだ。殺すのは……ダメだ！」

「ふうん、そうか」

何とか振り絞って言葉を紡ぐスバルに、ラルトレアの反応はいやにそっけなかった。表情が薄笑いのまま、ずっと変わらない。

スバルが何と言つても、ピクリとも動かなかった。

だが。

ヒュンツ――

鋭い風の音がスバルの耳を打つ。その直後、血飛沫がスバルの顔に降りかかった。一気に視界が赤く染まる。目に入った血がドロリと顎へと垂れていく。

まばたきもできずにスバルはソレを見た。

ぱつくりと真つ二つに割れたラルトレアの右手を。

中指は粉碎されて、肘まで綺麗に両断されている。そこから絶え間なく血があふれ出し、地面へと垂らし続けていた。

そこに声が投げかけられた。

「――エミリア様だけでなくレムにまでも……死になさい、吸血鬼」

桃色髪の少女が茂みの奥から姿を現した。怒りに満ちた声で、その体に風の渦がまどつていた。双子の姉であるラムだった。

「姉様——」

「離れなさいレム。こいつはエミリア様を殺した。紛れもない敵よ」

……エミリアを殺した？

ラムの言ったことがいまいち理解できない。

言葉としては分かっているのに、現実として把握できないのだ。

スバルはそれを否定してほしくて、ラルトレアを見た。

だがラルトレアの外見こそがそれを裏付けていた。

ラルトレアのカツラみたいな銀髪。ボロボロになった白いコート。

それを見るたびにラムの言葉を証明しているように見えてくる。

そして。

「間違っておるのだ、メイドども。エミリアは、ほら——ここにいる」

スバルの前に立つラルトレアが、コートを開いて中をレムとラムに見せた。それを見た二人の表情が、また驚きと怒りに染まる。

一体何があるのか——

それを知る前に。

スバルの頬が冷気を感じ取った。上空から氷塊が落ちてきたみたいなその感触に、スバルは思わず尻餅をついてしまう。

へたり込んだスバルが上空を見上げ、そこにパックがいた。

そして。

「——娘を返せ、ラルトレア」

鋭利な氷塊がラルトレアを貫通した。狙いましたようにラルトレアの首と胸の中心に突き刺さり、ラルトレアが大量の血を吐き出した。

ぼちやぼちやと血反吐を口から吐き出しながら、ラルトレアがゆつくりと振り返る。そのときに見えた。

見えてしまった。

ラルトレアの白い腹部、その中心にエミリアの顔があつたのだ。目と鼻と口。まるでラルトレアのお腹とエミリアの顔だけが融合してしまったような――

「お、えおおああおええええええええええええええええッ!!!!」

胃の中にあつたもの全てが急激にせり上がってきて、口から吐き出された。

嘔吐するスバルの前を、何もなかったかのようにラルトレアが歩いていく。血を垂らしながら、首と胸に氷柱をぶっ刺してなお、止まらない。

「キケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ――」

掠れるように笑いながらパックを見上げて、それからのぞき込むようにスバルに顔を近づけてきた。

銀髪がたらりと垂れて、スバルの手の上に乗った。その髪の毛の感触もまた吐き気しか催してこない。

そして、スバルの耳元に口を寄せて、ささやいた。

「スバル――愛しておるのだ」

## 第九話 『化け物の愛の中で』

「スバル、愛しておるのだ」

愛の言葉がまるで調整の狂ったピアノの音みたいに聞こえてきた。本来ならば美しい音を奏でているはずなのに、致命的にバランスが崩壊している。

そんな狂った、甘くトゲトゲしい声が、スバルの耳に吐息と共に吐き出された。

どうしても顔を上げることができない。

ドバドバと、ラルトレアが血をこぼして、その血がスバルの頬へと飛び散ってくる。たらりと垂れ落ちるそれを感じるだけで、スバルは何も考えられなくなる。

ふたたび訪れる完全な思考停止。

さらに今回はエミリアの死というどうしようもない絶望も添えられている。

スバルは動けなくなった。

ボチャツ。

地面しか見ることができないスバル。その視界の端に何かが落ちた。人間大の何かが血の塊とともにラルトレアが吐き出していた。

「——あ、ぺ、ぺとら……」

アールラム村に住む少女が、スバルの鼻先で虚ろな目をだらんと倒れていた。

血に塗れたその体は何も衣服を身に着けておらず、魂が抜けきって肉体だけがそこにあるかのようにだった。

なぜここにペトラがいるのか。それすらもスバルは考えられない。

パツクの声が聞こえた。

「気配を誤魔化すためだけに、その人間の少女を取り込んで魂まで喰らったのか。まさしく下種だね。救いがたい行いだよ」

「——貴様は心が読めるのだろうか？ それならそれ相応の準備をするまでなのだ」

「もういいよ。死ね」

ヒュン——グシャツ。

四つの氷柱がラルトレアの四肢をぐちゃぐちゃにしながら地面に張り付けにしていく。スバルのすぐ横にラルトレアの頭があった。

だがラルトレアはそんな攻撃などお構いなしに、スバルを見ていた。首をかしげて、薄く笑ったまま固まっている。

——あいしている。

まだ、そうささやいていた。

「君をそうまでさせているのは——そうか、スバルか」

パツクの冷徹な声が届いたと同時に、スバルの意識は現実と切り離された。だがすぐに温かみに包まれていく。

死とは違う。

まるで何か大きい存在の中に取り込まれていくような、それでいて存在が確立されているという安心感があつた。

三周目におけるスバルの記憶は、そこで途切れた。

★★★  
★★★  
★★★

「ああああああアああア——！！」

スバルはずっと意味のない音を漏らし続けていた。

自分が終わった瞬間というのを全く知覚できず、何か巨大な化け物の中でずっと絶望を叫んでいた。

ラルトレアがエミリアを殺し、レムとラムが自分を殺しに来る。ラルトレアはスバルに愛をささやいて、レムとラムを殺す。

ラルトレアに何を言おうと言葉が通じず、姿すら見せてくれない。

どんづまりだ。

襲撃者、呪い。レム、ラルトレア。殺されるエミリア。殺されるスバル。

ワケガワカラナイ。

何がどうなってああいうことになっているのか。ラルトレアがスバルと同じ記憶を持っているがゆえに、行動パターンがさらにデタラメで、スバルが思いもつかないような凶行に及んでくる。

それを止める力を、スバルは持っていない。

無力と絶望がないまぜになって、スバルを支配していた。そして何も考えられなくなる。

イタクナイ。

シニタクナイ

そんな言葉が機械のように口から通り抜けていく。しかしそれは誰にも届かない。なぜならば伝える相手がない。

答えなど望むべくもなかった——はずなのに。

「」

なにかが聞こえた。誰かの声が聞こえたのだ。  
意味は通じない。意味はわからない。意味をわかりたくない。

それでも少しずつ世界の色が明快になっていく。

白い天井。どこか見覚えのある天井。

なんだか嗅いだことのあるような匂い。

そして気付く。

喉から血が出ている。

爪が割れていた。爪が剥がれるほどに腕を掻き筆っていた。

両足を、両手を周囲へと振り回して、一心不乱に叫び続けていた。

恐怖しかなかった。

四方八方を絶望に取り囲まれて、どうすることもできなくて、いつの間にか何かに包まれていて、それすらも恐怖でしなかった。

やがてその巨大な力も何かに引き裂かれて、スバルは解放されて今ここにいます。

全てを拒絶したくて暴れまわっていた。

そのスバルの全身を何かが力強く、しかし優しく抑えつけていた。  
もう暴れなくていいと。

ラルトレアが以前使った巨大な手のような力ではない。あれはスバルの意味さえももぎ取ってしまうものだけれど、これはそうではない。

スバルを一つの個として認識して、優しく柔らかく、誤った道から正しい道へと引き戻してくれているのだ。

そうして、スバルは目を覚ました。

自分が仰向けに寝ているのだと気付き、そこがベッドだと考えて、

すぐさま死に戻りのことと関連づけた。

戻ってきたのだ。

一日目に。

だから、暴れる自分を体を張って制していたのは、

「お客様。すこしは落ち着いていただけましたか？」

「お客様。発狂するのは迷惑だからやめてくれる？」

何度も耳にした双子のメイドの声が重なり合うように聞こえてくる。

スバルの鼓膜に入って、先ほどの光景が思い出してくる。

レムがスバルを疑い殺しにかかってくる。あのシーンを。

思い出して、スバルの奥からは。

「……は、はは」

乾いた笑いが出てきた。

——なんか、一周回って振れ切れちゃった気分だ。

四週目の一日目、ロズワール邸の廊下をスバルは歩いていた。

なんだかもう全てがどうでもいい。

スバルは死に戻りを行うことで、誰も感じたことない狂気と恐怖を味わうという経験をした。

しかしその量が大きすぎてスバルの精神は耐えられないどころか——おかしくなりすぎてむしろ正常に戻っていた。

あまり目の前の光景が突拍子がなさすぎて脳が理解できていないとも言えるかもしれない。

「ごっち、か……」

ただたどしい足取りで、スバルが真っ先に向かったのはラルトレアの部屋。二周目のようなことがあるば、それでもうスバルはお終いだ。

周囲の全てがどうでもいいけど、死にたくはなかった。

死ぬのはつらい。何度死んでも死にたくはない。死に戻りできるとしても、その感情は変わらない。

キイイイ——ガチャ。

「……………いる、のか…………」

窓際の血だまりに、小さい女の子が突っ伏していた。

何の血かと思えば、空のビンが割れて中身をぶちまけていた。大量の血溜まりにうつ伏せに顔を突っ込んで、ピクリとも動かない。

カーテンが開けられ、差し込む朝日が女の子を包んでいた。

「……………ラル、トレア」

スバルはラルトレアへ抱く感情がよくわからなかった。

エミリアを躊躇なく殺すヤツなのだ。人を人とも思わず、残虐なことを平気でやってしまう。

そんな吸血鬼、人外、化け物なのだ。

なのに、スバルはどうしても憎むことができない。

何度も何度もラルトレアはいうのだ。

スバルを、愛していると。

スバルを、守ってやると。  
狂っている。何が愛しているだ。守ってやると言ってラルトレアはスバルを一度殺している。

「……………」

愛している。

思えば、その言葉をスバルは軽く受け止めていたかもしれない。ラルトレアの言う愛と、スバルの感じていた愛とでは、言葉の重さがかけ離れているのかもしれない。

ラルトレアの凶行を思い出して、ふとそういう考えが浮かんだのだ。

——もし、ラルトレアがスバルのことを死ぬほど好きで、全てを犠牲にしてもいいと考えていたら？

まさか、と思う。

そこまで自分が好かれる人間だとは思わないし、ましてや小さな女の子なのだ。年も離れている。

誰かを殺すのも、何かを壊すのもスバルのため。

人間じゃないからこそ、ラルトレアにとって人間の命というのは思った以上に軽いのもかもしれない。

そんな強烈な愛。

強すぎて、重すぎる愛をスバルは受け止めていなかった。

それにラルトレアは苛立っていたのだとしらどうなる。こんなにも想いを寄せて力を尽くして守っているというのに、なぜ振り向いてくれないのかと。

——守る？

今思えば、それが変だ。二周目の世界においてラルトレアは急に暴れ出した。ラムを殺して――

「……………どうして、ラルトレアはラムを殺した……………？ あのとキレムはどこにいたんだ？」

ふと、スバルの脳裏に考えが浮上してきた。

もしこれが正しいのだとしたら、ラルトレアは本気でスバルの目的を思いつて行動して、それがうまく伝わってなかっただけということになる。

やり方が残忍すぎて、人であるスバルの価値観から離れすぎていて、理解ができなかっただけで。

「鎖の音……………一周目で体調のおかしくなった俺を殺したのはレムだ。三周目でそれは明らかになった。それで、ラルトレアは俺と同じく記憶を引き継げる。一周目でレムが俺を殺すのを、ラルトレアが見ていたとしたら……………」

一周目で、スバルが覚えているのは自分の体調不良と鎖の音だけ。

二日目では、ラルトレアがラムを殺したことだけ。

三周目で、レムがモーニングスターで俺を殺そうとした。

「なら、俺が知らないだけで、二周目でラルトレアはレムを殺していた？」

ラルトレアは一周目でレムがスバルを殺すのを目撃し、巻き戻った瞬間怒り狂ったラルトレアが暴走してレムを殺害、そのあと現れたラムをも殺して――

そこに運悪くスバルが駆けつけて、歯止めの利かなくなったラルト

レアはスバルにさえ攻撃した。

スバルの為を思つてレムとラムを殺したのに——そんなことを考へて。

「ははっ、そんなまさか。ありえねえよ、ラルたん」

口で否定しようとも、三周目がそれを裏付けている。

ラルトレアは現れたのだ。レムに襲われているスバルの前へ。守ろうとして、やってきてくれて——

しかし、エミリアを殺していた。

一体あれは何なのか。重すぎる愛。スバルの心はエミリアに向かつていたから、やきもちを焼いていた——そんなありえない考えも出てくる。

「わかんねえ。なあ、教えてくれよ……」

どうしてそんなことをするのか。

きっと人間と吸血鬼では相容れないのかもしれない。だけど、スバルはこのとき初めて相手との違いを知った。

そして、理解しようとして一歩踏み出した。

横たわるラルトレアに近寄つて、その小さな体を抱き起した。うつろな目には何も映っていない。

「ラルたん……そんなに俺が使用人になるのが嫌だったのか？ なんでもそこまでしてくれるんだ？俺がちやんと大人扱いしなかったから拗ねてるのか……？」

小さい肩を揺さぶつて、その顔を覗き見た。まばたきすらせずに、

ずっと虚空を見つめたまま固まっている。

「なあ……」

ぎゅつと抱きしめて、スバルは固くまぶたを閉じた。  
情けなかった。

何も分からないことだらけで、周りは敵ばかり。絶望に満ちていて、明日への手がかりすらない。そんな状態で、スバルはこんな幼女に泣きついていた。

ふたたび、まぶたを押し上げて真っ直ぐ見た。

だが、そこには変わらぬ無表情のラルトレアしかない。その瞳には光さえ宿っていない。

まるで全てが遅すぎたとしても言わんばかりに、スバルに更なる絶望を突き付けてくる。

ぼとり、と。

不意にだらんと垂れたラルトレアの右腕がスバルの膝に落ちて、握りしめた拳の中から何かが落ちた。

それは白い牙だった。

ラルトレアの、吸血鬼としての牙。スバルはそれを拾い上げて、強く握りしめた。牙が肉に食い込み、血があふれ出てくる。

しかしそれだけで、何も起きやしない。

何もかも、思い通りにいかない。全てがスバルの意思に歯向かって進んでいく。

「……くそッ!!!」

何度何度も、牙を握りしめた拳を床に打ち付けていた。



解決策なんて思いつかなかった。ラルトレアを呼び起こして誤解を解いて、レムとも信頼関係を築いて、エミリアを守り抜くだって――？

――無理だろ、そりゃ。

無理ゲーすぎてむしろ笑えてくる。

それをするくらいなら、目標を低く設定してイージーモードでいきたい。ただ、スバルだけが生き残ればいい。

だって、どうしようもないのだ。

救う手立てが見つからない。自分の命を守ることできない奴に何ができるといえるのか。

ラルトレアが関わらない一周目の死。

それはレムの鉄球と、謎の体調不良だ。

体調不良については二週目にベアトリスから少し話を聞いている。

『そーいや、お前って見た目そんなでも魔法使いなんだろう？』

『魔法が使えるという意味ならそうなのよ。でも、そんじよそこらの二流どころと一緒にされたら困るかしら』

『対象を衰弱させてじりじりと殺す魔法……とかつてあるか？』

『あるかないかといえば、あるのよ』

『あるのか』

『魔法というより、呪いの方に近いかしら。魔術師より呪術師の方が得意とする術法にそんなものが多いのよ。陰険な呪い師らしいやり方かしら』

一周目では呪いで弱ったところをレムに殺された、のだろう。

問題はスバルはいつどうやって呪いをかけられたのか――そして、誰が呪いをかけたのか。呪いをかけたのがレムだとするのは早計だ。

そもそもレムの力なら呪いだなんて回りくどいことをしなくてもスバルを殺せるはずだ。それこそミジンコ並みだろう。

それに、三周目ではスバルは呪いをかけられていない。

ラムもラルトレアも確率は低いと考える。

なら呪術師は誰なのか。

レムの凶行は呪術によって弱ったスバルが屋敷をうろついて疑心を募らせたとすると、襲撃者とレムは別。

そもそもロズワールに忠誠を誓うレムとラムだ。

主の害ともなる襲撃者に加担するはずがないし、その忠誠心は本物だろう。

だとすれば、スバルは呪術師だけを恐れればいい。

レムにスバルを襲うきっかけを与えずに、呪いをどうにかする。

どうにかするため、スバルは扉を開いた。

そこにいるであろう金髪ドリルロリを頼るために。

扉渡りを破って禁書庫へと踏み入る。

「ノックもしないで入り込んで、ずいぶんと無礼な奴なのよ」

「……俺を、助けてくれ」

スバルは全身全霊の土下座を披露した。

## 第十話 『コウモリの牙』

「……四日後の朝まででいいんだ。俺を、守ってくれ」

そう言い切って頭を床へとこすりつけた。

「いきなりノックもなしに入ってきたかと思えば何かしら。死ぬほど不愉快だからとつとやめるといいのよ」

ベアトリスのトゲトゲしい言葉が降りかかっても、スバルはさらに土下座から五体投地へと移行していく。

何が何でも聞き入れてもらわなければならない。

ここで断られたら全てがお終いだ。

「……頼む」

罵りの言葉は無視して、祈るような気持ちで待ち続けることにする。

「——臭いのよ。さっきよりもつと濃くなってるかしら」

「——は?」

「臭いの話かしら。鼻につく、最悪の香りなのよ。もしそれと関係あるのだとしたら断るのよ」

鼻をつまみ、手を振って悪臭をアピールするベアトリス。

「俺からなにが臭うって?」

「魔女の臭いななのよ。鼻が曲がりそうかしら」

「魔女……嫉妬の、魔女か」

「今の世界で、魔女と言われてソレ以外のなにがあり得るのかしら」

「どうして、その臭いを俺から感じる?」

「さあ？　魔女に見初められたか、あるいは目の敵にされたのか。どちらにせよ、魔女から特別な扱いを受けるお前は厄介者なのよ」

——特別扱いを受けている。

嫉妬の魔女だなんて会ったこともないし、まともに知ったのは童話で読んだ時だ。エミリアが嫉妬の魔女、サテラと名乗ったことはあるけれど直接の関わりはない。

なら、どうして自分に嫉妬の魔女が付いているのか。とスバルは頭をひねって考えてみる。

「ちよつと待て……さつきより臭いが強くなってるのか？」

「そう言っているのよ」

さつき、ということはスバルの死に戻り地点の数時間前、初めて禁書庫を訪れてマナドレインされた時のことだ。

そしてそれ以降、二周目と三周目でスバルはベアトリスと会っているがそんなことを言われた覚えはない。

——なら、どういうことなのか。

これまでループと違っていることがあるのだ。スバルがこうしてクソ真面目に頭を下げていることもある。ただ、それだけで魔女の臭いが濃くなるだろうか。

死に戻り。

スバルがこの世界に来て得た力。嫉妬の魔女から特別扱いを受けているとなれば、それしかないのではないか。

「まさか、嫉妬の魔女が俺を——し」

思いついた可能性を口にして、ベアトリスの前で話そうと思った瞬間、それは訪れた。

一瞬にして音が消えた。

世界から音が消失していた。音だけでなく、時間までもその進みを止めていた。一秒が何億倍にも引き延ばされ、次の瞬間が訪れるのが遙か彼方にまで追放されていく。

——なん、だ？

音が消え、時間が止まり、スバルの意思が強制的に停滞させられる。ふいにやってきた理解を越えた現象。

意思だけが存在し、言うことを聞かなくなった体のまま考えだけが走り続けていく。

だが終焉は唐突にその姿を現した。

——スバルにはそれが、黒い掌のように見えた。

黒い手——その指先がするりとスバルの胸へ忍び込む。

そして、入り込んできたその黒い手はスバルの中身を一通り撫でていき、やがて人体においてもっとも重要な器官へとその指先を届かせる。

そうして、スバルの心臓を、ぎゅつと掴んだ。

命を奪われる恐怖に、スバルは声を上げることはできない。痛みを震わすことすら禁じられている。

ラルトレアの使った巨大な手とはまた違う性質。彼女のものはスバルの精神を丸ごとを支配しようとしていたが、あれは命を剥奪するものではなかった。

「お前、何をしたかしら」

「——あ？」

「また、一段と臭くなっているのよ」

ベアトリスが怪訝な表情でスバルを見下ろしていた。床に這いつくばったままのスバルは、その仏頂面をぼうっと見上げることしかできなない。

「お前がベティに魔女から守ってほしいと言うなら無理な話なのよ。ベティはあんなものに関わりたくないかしら」

「……ち、ちがつ、ちがう！」

「じゃあ何かしら」

「へ？」

「お前は一体、何に恐れてベティに守ってほしいとほざいているのかしら」

「の、呪い……そうだ！ 呪術師から、守ってほしいんだ」

スバルの突拍子もない発言に、ベアトリスがまた眉を寄せる。

「——よく分からないヤツなのよ。魔女と言ったり呪いと言い出したり、一体何がしたいのかしら」

突き放すようなセリフに、スバルの焦りが高まっていく。このままベアトリスの協力を取り付けられないとなると、スバルはどうしようもなくなる。

いつか来るであろう呪術師の攻撃から、守る術がなくなる。

「いいから……つべこべ言わずに俺を守れってんだよッ！ 俺が死ぬかもしれないんだ！ 死んじまうんだよ！ なあベアトリス!!!」

「……ベティは、お前が死んでも関係のないことかしら」

「……頼む、頼むから俺を守ってくれよ……ッ！」

グリグリと必死になって額を床にこすりつけた。哀れでもいい。情けなくてもいいから生きる道が欲しかった。

誰もかれも守れなくて、自分の命だけでもどうにかしたかった。その一心で。

「呪いが。呪いに俺だけじゃどうしても対処できないんだ。一日だけでいい。力を、力を貸してくれないか……」

「……………」

「そうだ。呪いを解いたり掛ける方法とかを教えてくださいだけでもいいんだよ。今の俺じゃ、俺だけじゃ無理なんだよ!!」

「……………」

「なあ！ 頼む…………この通りだ…………」

みつともなく、ベアトリスの足元で膝をついて手をついて、頭を下げた。どんな目で見られているか恐ろしくて上を見ることもできない。

ただ、一言。

「…………一日、だけなのよ」

その言葉を聞いて、スバルはただただ安心して、涙がこぼれた。

ベアトリスはそんなスバルのもとに近寄って、しゃがんでその小さな手でスバルの右手を取った。手のひらを上に向けて、自分の手のひらを合わせてくる。

「——汝の願いを聞き届ける。ベアトリスの名において、契約はここに結ばれる」

厳かに、そう告げるベアトリス。

「たとえば仮でも契約事は契約事。儀式の則った上で結ばれたそれは絶対なのよ。お前のわけのわからない頼み、一日だけは聞いてやるかしら」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

四周目、二日目。

ロズワール邸、ラルトレアの居室。

まるで死んだかのように目を閉ざしたラルトレアがベッドの中央で横たわっていた。綺麗に切りそろえられた黒いおかつぱ頭だけが布団から出ている。

そんな様子のラルトレアをエミリアは心配そうに見ながら。

「ねえスバル。ラルトレアに一体何があったの？」

「エミリアたん……」

「眠ったまま昨日から起きないもの。ラルトレアが血溜まりに倒れていて、スバルもずっとおかしかったし」

「ごめん……」

「まだ話して、くれないのね……」

ラルトレアの眠る大きなベッドを挟むようにして、スバルとエミリアは椅子に腰かけていた。心配するように問いかけ続けるエミリアを前にして、スバルはうつむくだけ。

何も話せない。

話そうとするとまた、あの黒い手がやってくるような気がするのだ。

スバルは昨日ラルトレアが持っていた白い牙を、手の中で転がしていた。その鋭利な輝きをじっと見つめて、ただ時が過ぎるのを待った。

——ラルトレアはこのまま起きないのではないか。

スバルの直観がそんなことを言っていた。

おそらく吸血鬼のラルトレアに睡眠なんて必要ない。排泄も入浴もしなくていいのだろう。

事実、エミリアが何もしていないのに、布団が汚れている様子はない。

当初は動かないラルトレアを介護しようとしていたが、余りの変化の無さにスバルが気が付いてやめさせていた。

ラルトレアを思つて。

と建前上はそう言ったがスバルは純粹に怖かったのだ。エミリアに介護されているときにラルトレアが起きて、暴れ出すことが。

こうしてラルトレアのそばにいることだつてそうだ。

怖いのだ。

ラルトレアが目を覚ましてしまうことが。そうならば理不尽な暴力をふるつてスバルの日常がまたたくまに破壊されてしまう。

スバルはそう、考えていた。

だから出来るだけラルトレアのそばにいた。

ただじつと、横に座つて、動きがないか見ていた。

心配する気持ちもなくはなかった。ただ、危険を恐れてという感情の方が大半を占めていた。

その証拠に、エミリアがラルトレアの手を握っているのにスバルは髪一本触れていない。

「……明日、近くの村に行ってくる。エミリアさんはあまりラルトレアに近寄らないでくれ」

「それは……どうして?」

「……………」

「……………それも、答えてくれないの?」



「いいんじゃないのそれくらい。お客様の願い出よ。もしかしたら荷物持ちになつてくれるかもしれないわ」

「おいそのメイド！ 客をパシリ扱いするんじゃないわ」

「親しみやすく接してくれと言つたのはお客様の方よ」

口の減らない姉様メイドにスバルは心を癒されながら、村への同行を取り付けられたことに口元が緩んでしまう。

「では頼むわねレム」

「はい。姉様がそう言うのであれば」

こうしてレムとスバル、一日貸し切り券を発動させてベアトリスを連れてアラム村へ行くこととなった。

できるならばレムとラム、どちらとも村へと付いてきてほしかったが、そこまで望むことはできないだろう。

暴走するレムでも、ベアトリスがいるならスバルの近くに居た方がよい。ラルトレアのいる屋敷は危険すぎる。

スバルの目が届かない所で何かされるより、一緒に連れて行ってしまおうという考えだった。

スバルは調理場を後にして、すぐに禁書庫へと向かった。といっても、扉渡りを破るだけでなので、どこからでも行ける。

気になる扉を開けて、すぐに金髪ドリルロリを発見する。

「——今日だ。今日一日、俺を守ってほしい」

「ノックくらいはしてほしいから。……まあわかったのよ。で、どこかへ行くつもりかしら？」

「ああ、近くの村だ」

「そこに呪術師がいるというのかしら？」

「確証は……ねえけどな。俺に呪いを掛けられるとしたら、この屋敷以外にあの村しかねえんだ」

スバルは攻めに出た。

自分の命の危機である呪い、その呪術師から身を守るために、あえて前へ出ることにしたのだ。

ベアトリスから無期限での護衛を取り付けられたらそうはしなかった。

ただただ屋敷に引きこもっていただろう。

だが護衛は一日だけだ。

それならいつ来るかビクビクしているより、自分から動いた方がよい。屋敷の中に潜伏している可能性は低いと見たスバルはそう考えた。

その理由は。

「呪いを掛けるには相手に接触しなくちゃならない。そうなんだろう？」

直接触れるとなると絞ることができず。

屋敷のメンツを除いたら、可能性としてあのふもとの村しかないのだ。

「間違っていないのよ」

「なら、村で決まりだ」

嫌そうな顔をするベアトリスを連れ出すことに成功した。

ひとまずはホツとするスバル。

村に呪術師がようと、レムもベアトリスもいるのだ。仮に呪いを受けても、発動前ならばベアトリスが解呪してくれる。

ふうーつと息を吐き出して、禁書庫を出る。

」

禁書庫から出る際に、ベアトリスが何かつぶやいていたが、そのつぶやきはスバルには聞き取ることができなかった。

ロズワールの屋敷から、アーラム村へと行く道すがら。

「お客様、よく道をご存じですね」

「え、あ、いや。大体こっちなかと思つてさ」

思わぬ所で地雷を踏んでしまうスバル。

勝手に屋敷から外出して疑われることを嫌つて、こうして付いてきてもらつたというのに、怪しまれては意味がない。

怪しい所はないと監視してもらはずが、こうも裏目裏目に出る。焦りが募り、手に変に汗が出てきてズボンで拭つた。

スバルと無言のベアトリスが横に並び、その斜め後方をレムが歩いている。

レムとスバルの間に流れる微妙な空気を感じ取つたのかは知らないが、ベアトリスは口を開かなかつた。レムもベアトリスの存在を十分に不審がつているようだったが、それを聞くこともしない。

——嫌な気配だ……

解決への道を進んでいるはずなのに、なぜこうも嫌な予感しかないのか。

「村が見えてきたのよ」

ようやくまともベアトリスが喋って、わずかにスバルの緊張が和らいでいく。一周目に一度来て、これで二度目のアーラム村。

「ではお客様、買い出しに行つてきます」

買い出しに行くのと別れたレムを見送ってから、スバルは周囲を見回して確認する。

特別怪しむべきところはない。

ムラオサと青年団の若い衆、尻を撫でてくる婆さん。深呼吸をして、笑みをつくつて彼らへの中へと踏み入っていく。

「今回も同じことを繰り返すしかねえ、よな」



レムと別れた後、スバルとベアトリスの二人だけになる。

「犯人の条件は——一周目で遭遇してる村人つてえことだけか。見てわからないものなのか？ 呪術師かそうじゃないかっていうのは」

「そこまでさすがのベティも万能じゃないかしら」

「なら、接触されたあとに確かめてもらうしかないのか」

「そうなるのよ」

村人に紛れている呪術師。村人でこの数日以内の外来の存在であればほぼ確定でそいつだ。

絞り込みは容易に行われる。

こじんまりとした村の景観を眺めながら、スバルは己の記憶をフル回転して過去を洗い出す。

「とりあえず記憶にあるのは……セクハラ尻撫でババアと青年団。ムラオサと、ガキ共つてどこか」

村の中で特に印象深いのが彼らぐらいになる。

彼らとの触れ合った一周目の記憶を思い出し、彼ら全員がさりげなくスバルに接触していることに気づく。

気づくも、得た手がかりといえれば手がかりがないに等しいということだけだ。

考え込むスバルのそばで、ベアトリスもただ黙ったまま動かない。

「どーしたー、そこの兄ちゃん」「お腹痛いのー?」「お腹減ったのー?」

立て続けに反応する声は、スバルは視界を下から戻して前を見た。ガキどもだ。

いずれもスバルの腰あたりまでしか身長のない、小さな子どもたち。その数はぎつと十名には届くだろうか。

「お前らは毎度毎度、周回を越えても俺に絡みにくるな……」

「なに言ってるんだー?」「頭ぶつけたー?」「お腹壊したー?」

「執拗に腹痛に拘るな。なんだお前、俺をそんなに下痢ピーにしたいのか」

言うのと、子どもたちが一斉にけらけらと笑い出す。

まずはこのガキどもだ。

できるだけ接触するように、背中に乗せたりして子どもをあやしていく。

きやいきやいと黄色い声。

「次はボクも!」なんて声を聞きながら、スバルは子ども軍団を引き

連れて村をぐるっと回ることにした。

——よし、この手で行くか。

「スバル、どうしたー」「どったのー」「ボケたのー？」

「んやあ、別に」

首をかしげる子どもたちの頭を撫でながらスバルはに愛想良く笑って。

「……俺の命がかかってんだ。ちっとぐらいは協力してくれよな？」

「——ヴィクトリー!!」

両手を空に伸ばし、全員で声を揃えて空へと叫ぶ。

こうしていざやってみると案外と気分が良い。

村人たち——子どもだけでなく大人たちからも歓声が上がリ、思わず手を打ち合った。

「お客様、一体何をしていますか？」

「何って、ラジオ体操よラジオ体操。ガキ共をまとめてあやすついでに、見てた大人が悪乗りしてきたんだよ。——まあ、思った以上の好評で俺もビビったけど。やっぱこの子どもからお年寄りまで幅広く楽しめる感じが長年支持され続けている秘訣なのではないでしょうか!」

「レムりん?」「レムりんだー」「レムりんりん?」

「……………」

買い出しが終わったのだろうレムと合流。

レムりんと呼ばれるのに、若干嫌そうな顔をしてスバルを見てくる。そんな視線から逃げるように、かたわらにいるベアトリスへと向き直り、

「今のところどうだ？」

「——安心するといいいのよ。呪いを受けている形跡はないのかしら」

ひとまずは安心。

しかし村人の大半の人間と接触しているはずなのに、いまだ呪術師からの攻撃が来ない。

——ベアトリスが居ることで警戒された、のか？

それはそれで困る。

ベアトリスがいる状態で仕掛けてきてもらわないと対処ができない。しかもそのチャンスも今日限りときている。

安堵した直後、誤魔化していた焦燥感が沸き上がってくる。

そんな感情を抑え込むように周囲に愛想を振りまいていた。そんなときに、袖を引かれた。首だけ振り向くと、茶色の髪のお下げの少女が恥ずかしげにスバルを引き止めている。

「おっ！」

思わず、驚きの声がスバルから漏れた。

袖を引く少女へと視線を合わせるようにしやがみ込んで。

「どした？ 言いたいことがあるなら聞け？」

「えっとね……こっち」

「絶対驚くって」「絶対喜ぶって」「絶対嬉シヨンするって」

子どもたちがくすくすと嬉しそうに笑い合っていた。

案内されるがままに、家と家の間を抜けて日の当たらない一角へと入り込む。

そして、彼らが見せたがっていたソレを発見した。

「あー、そういうえばこのイベントもあつたよなあ」

それは褐色の体毛をした、子犬に似た小動物だ。

生まれたばかりのようで、体長は三十センチくらいしかない。つぶらな瞳に柔らかそうな体毛がキュートだった。

しかし。

「ふがーっ」

「やっぱりこうなるか……」

スバルが歩み寄った瞬間、全身の毛を逆立てて威嚇してくる。

「いつもは大人しいのにー」「スバルにだけ怒ってるー」「なにやったんだよー、スバルー」

「できれば同じ反応するなら友好的な反応だと嬉しんだけどなあ、俺」

こどもも嫌われているとかななりへこむ。

しかし、ふいに子犬が警戒を解いたように身をほどいた。お下げの少女の腕の中で身を丸める姿に、スバルはこれはチャンスと息巻いて歩み寄る。

「では、失礼して。——うお、なかなかの触り心地じゃねえか。でもやっぱ野良は多少毛並みに難ありだな。そこは毎日のブラッシングと愛情が——あだだだだ！」

頭の10円ハゲを撫でようとしたところ、急に噛みついてくる子

犬。

がぶり、と犬歯が食い込み、慌てて引き抜こうとして——血がちよっぴり出て手の甲を赤い液体がつつたっていく。

スバルの血が地面へ、ぽたりとシミを作ったその瞬間——  
もぞもぞとポケットの中で何かがうごめいて。

バササササアツ!!!

スバルのポケットから大量のソレが一斉に飛び出した。

「——ッ!!」

一瞬にして視界が真っ黒に染まる。

羽根をもった黒い生物が、同時に羽ばたいてスバルの周囲を回るように飛んでいた。

まるでスバルを守るように、黒い生物の壁がそこにはあった。

その壁の隙間の奥に、黒い生物に噛み千切られ、ズタズタに食い殺されている子犬が見える。最後の肉片の一つまでその生物——コウモリが喰らっていく。

「な……なん、だ……」

次に聞こえてくるのは少女の悲鳴。

子犬を持っていたあの少女の声が、その耳をつんざく黄色い声が羽音にまぎれて響いてきたのだ。

——直後、コウモリを切り裂く鉄球。

鎖の音を伴いながら、トゲのついた鉄球がコウモリの壁を崩すように振り回されている。

「早くこっちへ来るかしら!!」

ベアトリスが焦ったような声を出して、その壁の隙間から小さい手を伸ばしてくる。コウモリに噛みつかれながらもその手をスバルは取ろうとして――

ギユツと。

と、伸ばしきったスバルの腕を誰かに掴まれる。

辿るようにして視線を上げていくと、そこに見慣れた童女の顔があった。死人のように青褪めた顔と、光のない瞳。

黒いおかつぱ頭と、どろりとした赤い瞳。

「――」

何も喋らずに、ただぼうつとスバルだけを見ていた。

## 第十一話 『世界の終わり』

アーラム村・昼。

子どもたちの悲鳴。土を踏む音、逃げる音。

そしてそれをかき消してしまうほどの羽ばたき。

スバルの視界を真っ黒に染めるように無数のコウモリたちが周囲を舞っていた。

——そのコウモリを切り裂く鉄球。

鎖の音を伴いながら、トゲのついた鉄球がコウモリの壁を割っていく

「——早くこっちへ来るかしら!!!」

ベアトリスが焦ったような声。

コウモリが飛び交う隙間から小さい手を伸ばしてくる。

しかしその小さい手がスバルを掴み取ることはない。その前に、ギョツと違う白い手がスバルの腕を引っ張った。

「——」

見れば、そこに見慣れた童女の顔があった。

黒いおかつぱの女の子だ。青褪めた顔に、どろりとした赤い瞳が二つあり、そのどちらにも光が失われている。

ラルトレア。

スバルはその女の子の名前を知っていた。

身長130センチくらいの小さな、可愛げのあるはずの女の子が死人のような目でスバルを見て、そうしてその小柄な体を鉄球が吹っ飛ばした。

「——お、おい、や、やめ——」

ラルトレアの胴体に棘のついた鉄球がぶつ刺さり、その勢いのままに宙をういて森の方へと突き進んでいく。  
ドンッ。

と、若木に腹に鉄球をめり込ませたラルトレアがだらりと血を流してこつちを見ていた。その瞳にはやはり感情がない。  
スツとラルトレアが右手を天に向けて――

「――『血之弾丸』」

一瞬にして手のひらの上に赤い球体が形成されて、直後ソレがレムへと一直線に射出された。

――マズイマズイマズイマズイッ！

スバルは何も動かずにただぼうっとしていることもできただろう。ただ、このときだけは考えるよりも早くに、体が動いていた。  
血の球体を受け止めるように、射線上に立ったのだ。

「このバカは一体何をしてやがるのかしら――！」

スバルの上半身を消し飛ばすはずだったのソレが、ベアトリスの手の平によって受け止められる。レムを庇うはずの行動を少女に止められるという痴態に、スバルは思わず腰が抜けそうになってしまう。

――自分は何をやっているんだ、と後悔しかけるスバル。  
だが事態はそんなスバルを待つてはくれなかった。

「ア!!!!」

ラルトレアが急に意味のない音を叫び出す。

すると周囲を飛行していた千羽以上のコウモリがラルトレアに集まり、そして勢いよくハジけた。

「——ベアトリス様ッ！」

「本格的にまずいのよ。早く逃げるかしら、メイド」

大声で話し合うベアトリスとレム。

スバルには、何をそんなに焦っているかが分からない。ラルトレアが叫んだだけだというのに。

スバルは何が起きているのか、手がかりを探すために周囲を見回した。

そして——気づいた。

レムのすぐ近く、あの子犬を持っていた少女が無残にコウモリに食い殺され、その死体からすうーっと血が漂っているのだ。

空中を血がひとりで流れ始め、その行きつく先を追う。

「——ムラク！」

ベアトリスが何事か叫び、直後——スバルの肉体がふわっと軽くなり宙をういた。そして空を上っていくと、村の様子が徐々に見えてくる。

「範囲魔法に近いかしら。でもこれほどまでに凶悪なものはベティでも初めて見るのよ」

「——あああ」

スバルは見た。

大口を開けて、血を一心に吸い込んでいるラルトレアを。そしてその周囲で倒れている子どもたちから血がドバドバと空気中へと流れだしていつている。

子どもたちだけじゃない。

村に居る全員が、老若男女関係なしに地面に倒れ、傷もないのに血を不自然に垂れ流しているのだ。

吸われている。

ラルトレアが彼ら全員の血を、触れることなく空気を介して吸っているのだ。

「こちらへ、来るのよ」

バツサバツサと羽音を鳴らしながら、小柄な女の子が空を上がってくる。その背にはコウモリのような翼を二対、大きく広げている。牙をむき出しにして、スバルの横にいるベアトリスを睨んでいた。だが。

その狙う的にしては大きすぎる翼に、鉄球が振り上げられた。背後から翼を根元から痛みつけるその攻撃に、ラルトレアが口から大量の血を吐き出す。

「——ア!!」

鉄球の衝撃を受けながらも、ラルトレアは体勢を維持しながら空を滑空しつづけている。

スバルの周囲をぐるぐると、鉄球を避けるようにして空を飛んでいた。

「——このままでは埒が明きません」

木々を伝うようにして、レムが飛び上がってくる。モーニングスターを持って、いつでも投げられるように鎖をめぐいっぱいに伸ばし切っていた。



血を抜かれて干からびた村人。血を奪われて地面へと落下していくレム。

そして宙に浮きながら、うつむいたまま動かないベアトリス。ぽつりと、ベアトリスの口から言葉が出る。

「契約だけは……守るかしら」

ベアトリスの小さな手がスバルに狙いを澄まして、力が放射される。

転移の力がスバルを多次元へと引きずり込み、遠く離れた山中へと放り出す。ゴロゴロと地面をころがっていき、小石の感触を味わうことになる。

うつ伏せになった体で、無理やり首だけを動かして音の鳴る方角を見た。

「……ラル、たん……」

そこに、ラルトレアが見えた。

空の半分を覆いつくすほどの大きい大きい一匹の蝙蝠が、地面を這って今にも飛び上がろうとしていたのだ。

黒い巨体をうならせるたびに、その巨大な口にどこからか血が集まっていく。赤い瞳を持った巨躯の蝙蝠が血を吸い暴力の限りを尽くしていく。

そして、突風を巻き起こしながら空へと羽ばたいた。

スバルとは真逆、王都の方角へと。

五十メートルを超すであろう巨大な化け物となったラルトレアが飛んだ。

★★★  
★★★  
★★★

「……………うああ」

スバルは突っ立っていた。

森の中腹あたりにたったひとり、呆然と屋敷があつたところを見ていた。

森は所々が地面ごとえぐれている。ロズワールの屋敷があつた場所には残骸しかない。村はおろか、建物として成り立っているものが地平線の限りを見回しても見えてこない。

何もない。

いくらベアトリスを呼んでも返事は返ってこない。

まるで世界でただ一人取り残されたような圧倒的な孤独感がスバルを支配してくる。そんな悲痛に満ちた叫びに応えるかのように屋敷の残骸の中から何かが立ち上がった。

遠目から見てもわかるように、

「」

一頭の獣が大地に凍てつく咆哮を上げた。

灰色の体毛を全身に流し、金色に輝く瞳を持った獣。

先ほどのラルトレアにも劣らない大きさのそれが怒り狂ったように王都へ向かって進撃していく。

「……………な、なにが……………」

「——まるで、俺が世界で一番不幸だ。とでも言いたげな顔なのよ」  
「べあとりす……………」

「そんな絶望も無意味かしら。もう、終わりなのよ。この世界は」

ベアトリスが指をさす。王都の方角だった。

夕焼けでもないというのに、空が真っ赤に染まっている。

「あの吸血鬼は世界の各地から血を集めているのよ。お前とお前の近くだけは効果を免れているかしら」

「おれ、だけ……………」

「みんなみんな死んだのよ。にーちやが怒ってじきに人間全員死ぬかしら」

「あれ、ぱつく……………なのか？　なんで——」

「にーちやが世話をしていた小娘が死んだのよ」

「——は」

エミリアが死んだ。

スバルの目の前が急に暗くなってきて、視界がぐるんぐると回転し始める。まともに考えられなくなって、すぐるように空を見た。

そして、王都の空に一筋の光が差した。光の奔流が地上から天へと一直線に伸びていく。

それは盗品蔵でラインハルトが見せたあの圧倒的な光。『剣聖』の一撃だった。

「いくら剣聖でもこんな広範囲な攻撃から人間全員は守り切れないのよ。ましてやにーちやとあの吸血鬼の——」

「——そこをどいてください、ベアトリス様」

「メイド、お前も馬鹿なヤツなのよ。この男を攻撃さえしなければこんなことにはならなかったかしら」

機能を停止しかけたスバルの眼球が、ズタボロになって血を流すレムの姿を捉えた。血に塗れたモーニングスターを手に、憎悪の視線でスバルを睨み付けている。

「契約は契約、ベティはこの男を守るかしら」

「ベアトリス様、ここは屋敷ではありません。ましてや禁書庫も今は壊れています。そんなあなたにレムから守ることなどできません」  
「……………」

押し黙るベアトリス。

鎖の音が少しずつ近づいてきて――

それでもスバルは一步も動けなくて――

ドオオオ――バサササツ!!!

何か羽ばたく音が聞こえて、その風圧がスバルの頬を撫でていく。安心せよとも言わんばかりに、スバルの上に覆いかぶさるように影をつくった。

「――アアアアアツ!!!」

突如、巨大な蝙蝠が近くに出現していた。

その蝙蝠が前足を振り上げて、地面へと振り下ろした。

ズシンツと、地響きのあと、持ち上げられた前足。

陥没してえぐれた地面のふちに、青い髪の毛が残っている。鉄くずとなった鎖と鉄球。それはレムの死を意味していた。

「……あ」

もはや言葉をつくることができない。

見上げると、大口を開けて地面丸ごと飲み込んできようとしている蝙蝠。真つ赤に染まった口腔内と赤い瞳が、黒い体表に浮き出ている。

巨大な牙がベアトリスを突き刺そうとしたその瞬間、光の剣撃が蝙蝠の頭蓋を貫いた。

血を噴き出し、横に倒れていく蝙蝠。

大きく口を開けて倒れているその黒い生物のかたわらに、赤い髪の青年が音もなく着地した。

「——残念だけどスバル、僕は世界を守るためにこの子を殺さなければならぬ。沢山の人々が死んだんだ」

「らいん、はると……」

ラインハルトが、その腰に付けた鞘から一本の刀剣を抜いた。巨大なコウモリの頭部、その赤い右目がスバルを見ていた。

うるんだその目が、ただじつとスバルの瞳を見つめていた。

口がわずかに動いて——

スバルには不思議とそれが何という言葉なのか分かった。

——さよなら。

周囲一面に飛び散った血が急激に膨張し——爆発した。



## 第十二話 『ひとりぼっちのスバル』

自分の体が自分のモノでないという感覚があった。

精神だけがふわっと宙に浮いていて、ひどく重たい人型をした肉の塊を見下ろしている気分に近い。

「……………」

ずっと正座をしたせいで足に血が通わず痺れている状態が、全身を襲っている。まるで精肉店に置かれている豚肉だ。ぼてつと腕も足も重く、動かす気になれない。

なんでこんな痛いの、この肉を神経を使つて脳から命令を発して動かさなければならぬのか。そんな疑問さえ沸いてくる。

——このままこうしていたい。

そんなふうに思うようになったのは必然だった。

四肢はある。五体満足で、スバルは地面にうつ伏せになっていた。ただ、顔が横を向いているせいで、外の景色が見えてしまっている。最悪だ。

顔を下を向いていればこんなもの見なくて済んだというのに。

「今、一日が終わったのよ。これでお前とベティとの契約は果たされたかしら」

薄ぼんやりとした金髪ドリルロリ娘がそんなことを言っていた。

返す言葉などない。

頭を下げて勝ち取った一日護衛券はその効力を失っている。もう周囲は真っ暗だ。お日様は沈んで、天辺にお月様が出ているだろう。

「……………」

ただ、スバルの目の前に突っ立っている。

契約が終わったからといって、どこかへ行く様子もない。

全身にかすり傷をつくっているスバルの治療に当たるわけでもない。

どんどんと色素が薄くなっていく。

時が経つごとに光の欠片へと溶けていって——もはやその奥の景色が透けて見えていた。

山の中腹に、大きな穴があった。直径50メートルくらいの爆発跡だった。

どうせなら温泉でも出てくればこんな気持ちも晴れただろうに、その穴の中心には何も出ていない。

「さようならなのよ」

「べあどりずうう……ッー」

すうーつと風に流されるように消えていく。

ラルトレアと同じように、スバルに別れを告げて消えていった。

「なぐんだよおこれえ!!!」

地面に爪を立てて、大地を掻き毟っていく。

体を動かすわずらわしさを勝って、スバルは無性に腹が立っていた。なんで自分がこんな目に合わなければならぬのか。

「いっただいおれがなにじだつでんだよお!!!」

涙と鼻水がとまらない。

顔をグシャグシャにしてスバルはずっとひとりで吠えていた。それに反応してくれるもの誰もいない。

ベアトリスもレムも死んだ。

エミリアも死んだ。

ラルトレアも死んだ。

ロズワールやラムはわからない。

ただ、どれだけ叫ぼうとも誰かが来ることはなかった。

近くにいたはずのラインハルトでさえ駆けつけてこない。

大地の窪みの端っこで、スバルはひとりぼっちだった。全身がポロポロになってもなお、スバルは生きていた。

ただひとり、生きていたのだ。

遙か彼方の遠くの空を見れば、何本ものの光の柱が立っている。

「……………」

——なんで、生きてるんだ、俺……

数日が経った。

陽が昇り、また陽が沈んでいく。夜が来て、また朝が来た。

スバルに生きるという意思はなかった。

もう生きていたくはなかった。

ただ腹が減って喉が渴いて、排泄行為を我慢できなくなる。

仕方なく我慢できなくなって川の水を飲んで木の実を食べて、そこからへんで用を足した。

スバルは生きていた。

一言も喋らない日々。段々とやせ細っていき、空腹が限界を突破した。

「……」

スバルは地面にうつ伏せに寝て、クレーターの中心を見つめていた。

何がどうなっただけでこうなってしまったのか。

スバルはベアトリスの協力を取り付けて呪術師を撃退するためにアーラム村へと行って、それで子犬に噛まれた途端に、ラルトレアが現れた。

スバルはふと自分の手、子犬に噛まれた部分を見た。

犬歯が刺さったあとがあるが、傷口はふさがっているし血も流れていない。

ラルトレアは何がしたかったのか。

レムの不信感が爆発したのは十分に理解できる。ベアトリスが契約の為にスバルを守ったのはわかる。

それなら、ラルトレアは何をしようとしていたのか。

いきなり蝙蝠を伴って現れて、レムの鉄球を喰らって反撃しようして、スバルが前に出てベアトリスに止められた。

そのあとはアーラム村の人から血を吸って、スバルの前に来て。

それで、レムの鉄球からスバルを庇った。

「……もしか、して」

ラルトレアはずっとスバルを守ろうとしていた。

もしかして、子犬の時に現れたのだから、アレが呪いの正体だったからではないのか。

いくら出血したからといって、今までラルトレアが現れることなんてなかった。

呪術師はアーラム村の中に居たはずだ。

しかしベアトリスは呪いを感知できなかった。

ラジオ体操をした時までは呪術師との接触はない。

それなら、あの子犬が呪いを掛けたとでもいうのか。

そうだとはいえない。

なにより証拠がない。ベアトリスに確かめてもらうのが一番の手が、それはもうできない。

子犬が呪いを掛けた可能性は低い、ありえないわけじゃない。

ラルトレアはスバルが呪いを受けたのを感知して、やってきた。そして呪いの大元である子犬を殺した。

でも、どうやってラルトレアはそれを知ったのか。

思い出す。あの瞬間を。

一体何があったのか。その後の目まぐるしく変化する現実を巻き戻せ。

冷静に正確に思い出すんだ。

「ポケット……あ、牙か」

スバルはポケットに手をつ突っ込んでまさぐってみる。

——ある。

ポケットからゆっくりとその白い牙を取り出した。ずっと入れっぱなしにしてしまっていたが、残ってくれていた。

ただそれを見ても、ラルトレアが牙で呪いを感知したという証拠は見つけられない。

もはや、ラルトレア自身に聞くしかない。

だけど、もういない。

見回しても、何も無い。荒れた土地と、わずかな森林。

ロズワール邸の残骸と、干からびた死体だけだ。

死体を見ても誰が誰かなんて見分けもつかないくらいに酷いありさまだった。

どんづまり。

スバルの腹が悲鳴を上げる。望んでいないというのに、生きようと生きようと動かしてくる。

ラルトレアと会う方法。

今のスバルには、たった一つしか思い浮かばなかった。

それをすれば、ある程度の場所は限定される。ラルトレアに本気に隠れられれば、スバルには見つけようがないが。

それでも、ここから探し出すよりは、よほど簡単だ。

そう、死にさえすればいい。

死に戻り。

もしかしたら死ねばロズワール邸の一日目に戻れるかもしれない。

「……くそ。何ビビってんだよ」

スバルの足はとりあえず、崖へと向かっていた。

断崖絶壁の上、スバルは立っていた。落差は40メートルくらいはあるだろうか。ここから落ちれば、きつと死ねる。

一步を踏み出すだけでいい。

それだけいいのだ。しかし、踏み出せない。

ガクガクと震える膝。とまらない動悸。空腹を訴えてくるお腹。

喉が妙に乾いてくる。水が飲みたい。地面に横たわって寝たい。何か食べたい。肉が食べたい。ご飯が食べたい。パンが食べたい。

くずおれるスバル。

「こんなこともできないのかよ……！」

どんだけ自分を追い込んで追いついても、体が前に行かない。

死ぬのが怖い。

死に戻りできないかもしれない。

ずっと死んだままかもしれない。

すぐに死ねないかもしれない。

痛い。

絶対に痛い。すぐに死ねず、痛いままかもしれない。

もしかして下半身不随のまま助けられて、そのままかもしれない。

死に戻っても、一日目に戻れないかもしれない。

戻るのがラルトレアの爆発の直後かもしれない。

スバルは、動けなかった。

膝について、地面を掻き毟って涙だけがぼろぼろとこぼれだしてきた。思いつきり、喉から血が出るほどに叫んだ。

どうしても、死ねなかった。

絶望に嘆いても、誰もやってこない。

叫んでも助けを呼んでも、何も起きない。死なせても、くれない。自分で死ぬしかないのだ。

早く死なないと巻き戻れないかもしれない。  
そんな焦りと恐怖と怒りで、スバルの中身はぐちゃぐちゃだった。

土の上に突っ伏して、何度何度も殴りつけた。拳から血が出て、顔を掻き毟っても何も変化が起きない。

誰もスバルを諭してくれない。勇気づけても、けなしてさえくれない。

「ああああああああああああああ」

どんだけに狂ったふりをして、世界は変わらない。

ただ誰もいない世界だけがスバルの世界だった。

スバルの世界はただ時が過ぎていく。土をなめるように四肢を投げ打って、そのまま気を失うように眠った。

そして——また朝がやってきた。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

スバルは朝日に向かって仁王立ちしていた。

「お日様、おはようございます！ お月様、またあとで！」

崖の上で過ごすこと三日が経った。

「いやあ、いい朝だよなあ木の実くん。ええ何だって早く食べるって？ 嫌だなあ俺とお前の仲じゃないか。じゃあ遠慮なく——むっ

しやむっしや」

ふうーつと一息ついて。

「旨い！ 朝に食べる木の実はまだ格別だな！ あーつはっはっは……つはっは……」

ぽとり、とかじりかけの木の実がスバルの手から滑り落ちる。

「……………」

一体、何をしているんだろうか。

——なんで生きてんだよ、俺……

ぽたぽた、としよっぱい水が頬を垂れていく。  
どうにも涙腺がぶっ壊れてしまったようで、時々涙が止まらなくなる。

「……………なにが、俺の命がかかってる、だ……」

命なんてこんなものだ。

あれだけ生きたかったと言うのに、今は死にたくて死にたくてたまらない。

でも、死ねない。

——怖い。ただ純粹に怖い。

恐怖の穴にその身を投げることができない。

「ああうあああッ！ 誰があ、誰が俺をだすげてくれえええ!!!」

叫んでも、何も起きない。

山彦さえ聞こえてこない。虚無感だけが残る。

「……………。ざまあねえよな」

コロコロと手の中で白い牙を転がす。

ぽつりぽつりと、スバルが独り言をもらす。これに話しかけても無意味だということはわかっているはずなのに、どうしてもやめられない。

少し黄ばんでしまったそれに。

「ごめん…………。もつと真面目に話聞くからさ…………もう茶化したりしないからさ…………。ちゃんと、一回、話をしようぜ、ラルたん…………」

話しかけるスバル。

牙を見下ろす視界の端にまばゆい光がにじんでくる。

フツと、西の空が明るくなったような気がした。

顔を上げてみてみれば、久しぶりに光の柱が空を貫いていた。まるで何かが終わったように、特大サイズの剣聖の一撃が輝いている。

「な、なんだ…………？」

光に見惚れているスバルの手に、ほんのりと温かい感触がやってくる。ゆつくりと視線を移せば、そこに綺麗な淡い光があった。

牙を包むように、赤っぽい光がまとわりついている。

スバルはそれを大事に大事に手のひらで包み込み、その様子をじつと見ていた。

光の粒子となった牙が、姿を変えていく。

ほんのりと紅いオーラをまとって、親指くらいの大きさの黒い生物が出来上がった。

「ら、らるとれあ…………？」

赤ん坊の蝙蝠が、スバルの声に反応して見上げてくる。

しかしまぶたを開けられないようで、つむったまま必死に首を伸ばしていた。

また、スバルの目から熱い涙がこぼれだした。

ここ最近、泣いてばかりだ。

しかもラルトレアの前でも泣いてしまう。

情けない。

本当に情けない。

小さなこうもりが口を開けて鳴いていた。

きゆう……きゆうつ。

まるでスバルに訴えかけるように。

それにスバルは、ささやくように答えた。

「もしよければこのナツキスバル、お力をお貸ししましょう……つてか」

スバルはそつと優しくこうもりの赤ん坊を包み込みながら、森へと引き返した。枯れ葉を集め、草で水入れをつくってやる。

そうして十分に温かい巣をつくってから、十分とは言えないかもしれないが、餌と水を調達した。

「さよなら、じゃなくて、また会おうだぜラルたん」

スバルは巣に背中を向けて、ゆっくりと歩き出した。

走る必要はなかった。早くしないとくじけてしまうほど、今の決意はぬるくない。

「エミリアたん、ラルたん。レム、ラム。ベアトリスもパックも。あ、ついでにロズワールもか。——とにかく、みんな、待たせたな」

一歩一歩、確かな歩みで進んでいく。

「でもごめんなみんな、正直今になってどうしていいかなんてさっばり分からねえ。ただ、何とかしよう——そう思ったんだ」

ふっと自分を笑うスバル。

「何も知らねえ何もわからねえ俺だけど、俺だけが覚えていることだっただけだッ!!!」

駆けてゆく。

「俺を舐めるんじやねえぞクソ運命様が！　こんくらい絶望、屁でもねえってんだ。障害があるってんなら全部取っ払ってえ——」

続きのない大地を踏みしめて、スバルは宙を飛ぶ。

「——みんなみんな守って助けてハッピーエンドだ  
!!!!!!!」

## 第十三話 『五周目の朝』

「——みんなみんな守って助けてハッピーエンドだ  
!!!!!!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

四周目？日目、荒れ果てた王国・??。  
赤髪の青年がその抜き身の刃を一匹の蝙蝠へと向けていた。

「……ラルトレア、もし君にまだ自我が残っているならもう止めるんだ」

黒い翼を折りたたむように、蝙蝠は身を小さくした。もうどこにも飛べない。一歩たりとも動けなかった。血が足りないせいで、再生もままならない。

しかし死ねない。

死と痛みの狭間を抜け出せずにもがいていた。

人を殺し生物を殺し、六十式以降の『血霊器具』を使ってなお、目の前の男からは逃げる事ができなかった。

ただでさえ傷ついていたラルトレアの心が、力を使うたびに擦り切れていって——パツクとの乱闘の際に、ついに意識が吹っ飛んでいった。

だが今最後の瞬間、ラルトレアの自我がわずかに浮上する。

——もう……疲れたのだ……

「残念だよ。君は殺し過ぎてしまった。だから見逃せない。暴れる意思がなくても、その身を滅さなければならぬんだ」

青年が剣を振り下ろし、その一撃が放たれた。

随分と小さくなった蝙蝠が光の奔流へと飲み込まれていき――

そして、最後の力を振り絞って、いるべき場所へと戻っていった。

――ああ……

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

――

スバルの力が発動したと気づくまでに、ラルトレアは長い時間を要した。

うつろな瞳に太陽の光が差し込んできてもなお、何も考えることができなかつたのだ。

窓辺に立つのが自分で、前方に広がる景色がロズワール邸の庭園だということさえ分からない。ただ、疲れ切った精神が体を支え切れなくなつて、重力に従つて後ろへと倒れていく。

床に倒れたつて痛みさえ感じないはずだつた。

そんなことさえ分からないのだから。しかし、ラルトレアを襲つてきたのは柔らかい感触だつた。人間のぬくもりだつた。少し筋肉質で、雄の匂いがした。

だからといって、ラルトレアの思考は止まっている。本能以外の全てが機能を停止し、最低限の意思さえ朽ち果てていた。自分を抱きとめたのが誰で、それが何を意味するかさえ分かるはずもないのだ。

心が止まったまま、時だけが過ぎていく。

何も考えられない。

でも、感じることはできた。ラルトレアの折れた牙を触る感覚がある。それを触る人間に愛おしさを感じる。彼の危険を感じることができる。

何も喋ることができない。

でも、聞くことはできた。ラルトレアの手を握ってくる感覚がある。二人いる。誰か二人が両側からしつかりと、ぬくもりで包み込んでくる。

声が聞こえてきた。

「……ラルたん、ありがとな。ずっと守ってくれたんだろ？ すっげえ感謝してるぜ。でも、まあ女の子が男を守るんじやカッコ悪すぎるし情けなさ過ぎて、立つ瀬がないと言うか立場がないというか、だな。とにかく、ラルたんは俺が守る！」

「スバルって女の子なら誰にでもそういうこと言うの？」

「——ちよつ、エミリアたんマジ命知らずだよその発言?! ダメだつて、今だけはダメなんだってこれマジのガチでリアルだから！」

「何を言っているか全然分かんないんだけど……」

「とにかく、ラルたん早く目を覚ましてくれよ。そんなもって——話を、しようぜ。俺ってば分からねえことばかりでさ。ここいらで答え合わせをしたいってわけよ。だけど！ 悪いが先手は打たせてもらったぜ」

ぎゅつと、右手が熱くなる。

「やっぱり日本人の血が流れてっからか知らねえけど、雇われ根性が染みついてるんだろな。今、俺はロズワール邸で、使用人として働いてるわけよ。お？ 怒ったか？ 怒ったかラルトレアちゃん？ 激おこぷんぷん丸なら俺と喧嘩をしようぜ。もちろん博愛主義者のナツキさん家のスバルくんには暴力NGだかんね?! そこんとこ、しくよろおー」

「ねえスバル、げきおこぷんぷんまる、ってすごく怒ってるってこと？」

「めずらしくエミリアさんに意味が伝わった?!」

ささやかな会話と優しい笑い声。

そんな温かい空間の中でラルトレアは眠った。

時だけが、過ぎていく。

——ああ……

朝日が昇り昼となって夕方となる。

夕日が沈んで夜がやってきて、また朝日が顔を出してくる。

そして二度目の夜。

夜、ラルトレアの居室。

キングサイズのベッドの上から聞こえてくる静かな寝息に、スバルはつい口角が上がってしまふのを感じる。今のスバルはクソ真面目だった。決して変態的な妄想などしていない。

小声で、誰にも聞こえないような声でつぶやく。

「ラルたんの手ってちっちゃー……てか吸血鬼は冷たいっていうイメージがあったんだけどなあ、体温的に」

「……吸血鬼、ヴァンパイア……そういえば血を吸うっていう以外によく知らねえなあ。あとにはんにくと太陽と十字架が嫌いとか？  
いやラルたんふつつーに日光浴びまくってるな……」

ラルトレアの手の指を開いて、スバルは自分の手を合わせる。

「うーん……そういえばラルたんっていくつくらいなんだろうか……七歳とかそんなくらいか？ いやでも吸血鬼を人間の枠で考えてもな……」

——……。

「ふああ……ねむい。今日も一日頑張りましたよ、ラルたん。ラムのやつが仕事を押し付けてきたけどな。さすがに二周目の俺に抜かりはない。きつちりと仕事を……いや何とかこなしたぜ。繰り返しても繰り返しても、ランダム要素って案外多いもんでな。まさか口ズつちと風呂に入るとは思わなかったな……」

——……。

「風呂……いつかラルたんと背中の中の流し……いや、……でもまあ色んなこと、ラルたんとしたって思ってたよ。ショッピングに行くとか？

世界中をぶらぶらするとか？ エミリアさんは忙しそうだしな。二人で行ってもいいかなって……」

スバルは両手でその白い手を包み込む。

「この屋敷のループを抜け出さないと、全部できねえんだぜ？ あれもこれも全部ばあーだ。でも、心配ご無用！ このナツキスバルが全部全部、ラルたんが寝てる間に解決してやんぜ。呪いも呪術師も、レムのこともな。だから、頑張ったラルたんはぐっすり——」

——ああ、心地よいのだ……。

「——おやすみ、ラルトレア」

スバルは部屋を後にした。

自分の手に残る、あの感触を確かめるように何度も握っては開いた。五日目・二日目、今日することはも寝るだけだ。

自室に戻ってスバルはベッドに飛び込んだ。

そして眠りにつく。最後に、切り傷だらけのスバルの手を握り返してくれた感触を思い出しながら。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——つてことだべア子、俺に力貸してくんね？」

「何がどうなったらそうなるのよ。目障りだからさっさと消えるといいかしら」

三日目の早朝、スバルは禁書庫へ来ていた。

禁書庫の司書さんことベアトリスが睡眠を取っているかは知らないが、彼女はいつも通り本を読んでいた。

「いいじゃねえか。俺とお前の付き合いだろ？」

「ベティーはお前なんかと親しくした覚えはないかしら。それに、会ってまだ三日も経っていないのよ」

「おいおい偉い人に教わらなかつたのか？ 大切なのは時間じゃねえ。絆の深さだ！」

「ベテイーとお前の間に絆なんてもの存在しないかしら」

「今俺のハートゲージを地味に削ったよ?! 言った俺も俺も俺もただけどさー!」

いつものようにスバルの冷やかしに、嫌々ながらも付き合ってくれているベアトリス。スバルは知っている。この金髪ドリルロリ娘が人を見捨てられない優しいヤツなのだということ。

「真剣なんだよ、ベアトリス」

「ふん。お前が勝手に付けた愛称から元に戻したって何の効果もないかしら。むしろ胡散臭すぎて墓穴を掘ったのよ」

「——くう! 甘くないな、ベア子。いやツンデレ的視点から見ても割とポイント入っているのかこれ? 分かりづらいなあベア子。本音ではこう呼んでほしいんだろベア子? なあベア子ベア子おく」  
「お前本気でぶっ飛ばされたいのかしら!?!」

ベアトリスが魔法か何かでスバルを追い出そうと、その小さい手のひらを向けていた。一旦禁書庫から突き飛ばされて扉渡りされてしまつと、今日中にはもう会えなくなるかもしれない。

ここは何としても抗いたいところだ。

そう思っていたはずなのに、スバルの心は魔法を発動させようとするベアトリスを見るだけで、しぼんでしまっていた。

悲しいというかそういうことじゃなくて、ひたすらむなしかつた。薄ら笑いが変な風に歪んで、口がへの字に曲がっていた。

「——変な奴なのよ。どうしてそんな顔をするのかしら」

ぴたりと、突き飛ばすのを思いとどまってくれるベアトリス。

そんなにも変な顔をしているだろうか自分は、とスバルは手で顔を元に戻そうとする。

「いや……なんだかいっぱいいっぱいでよ。一気に燃え上がったのはいいけど、寝る前とか飯食ってる時に冷静になっちまうんだよな。これ、詰んでるだろうって」

「……何を、言っているかしら」

「だってどうしようもねえじゃねえか！ どうすりやいいか思いつかねえんだよ!! 四方八方囲まれてることは分かっている……やる気は取り戻した。で、どうするって考えて、なんだか躁鬱状態。呪いの見当はついてるんだけどなあ……肝心の呪術師がまだ出てきてないし、当の俺に戦う方法がねえんだから……」

「……力が欲しいのならお前の連れてる吸血鬼がいるのよ」

「ダメだ。あの子からだけは、力を借りれない」

「なんでそこまで強情なのかしら。力を選び好みしている状況じゃないことくらい、お前の顔を見ればわかるのよ」

「——どうしても、だ」

男の子には意地つてもんがあるんだ、とスバルは目でベアトリスに訴えていた。

それが伝わったのか、単に呆れられたのかは分からないが、ベアトリスの表情が若干柔らかくなる。

「ここが決め時、押し時だと考えたスバルは攻めに出る。」

「よし、わかった。俺も身を切ろう。お前が俺に協力してくれるなら、お前のマナドレインを何千回でもどんだけでも受けてやる」

「本当に何千回もしたらお前は死ぬのよ。それに、言うほどお前のマナに価値はないかしら。多少は相性が良いかもしれないけど、それだけなのよ。——それとも、死んででも力が貸してほしいという覚悟が、お前にあるのかしら?」

「——ある! でも死にたくはねえ」

「……お前、本当に死ぬのが怖くないような目をしているのよ。気が狂っておかしくなっているのかしら」

「……死ぬ覚悟なんて、簡単に出来っこねえよ。死ぬのは死ぬほど怖

い。怖すぎて発狂しちゃうくらいに怖い」  
「……」

押し黙るベアトリスに、スバルは吠える。

「死にたい、だなんて言ってる奴をぶっ飛ばしたいくらいに、俺は死ぬのが怖い。けどな、死ぬほど守りたいものがあんだ。生きて守って、そんで俺は膝枕されながら死ぬ！　それが俺の人生計画ですけど何か?！」

「うるさいやつなのよ、お前は」

そう言っつて、手を差し出してくるベアトリス。これはつまり――

「一日だけなのよ。一日だけ、お前に付き合っつてやるかしら」

「――よっしゃ、それならそうと早速いくぜベア子！」

スバルはその手を取り、慌てるベアトリスを気遣うことなく禁書庫から飛び出していく。高らかに叫びながら、スバルは満面の笑みを浮かべる。

「運命様上等だあああああああ  
!!!!!!」

## 第十四話 『決戦前日』

五周目・三日目の昼下がりに。

ロズワール邸、調理場。

手こずりながらもジャガイモみたいな芋の皮を包丁で少しずつ剥いていく。

スバルは様子を窺うように双子のメイドを何度もチラ見してから。

「そういうえばラム、近くに……村があるだろ？」

「バルス、そんな情欲に満ちた目でラムを見ても無駄よ」

「おい姉様、偏見って言葉を知ってるか？」

「生憎とラムの辞書には載っていないわね」

「なら書き記しておくことだな。俺は今すっげえ困っている！　こんな俺がそんな目をするのではない。断じて——ない！」

「悩み事をそんな自慢気に言ったのはバルスが初めてね。——で、どうして村に？」

「ちよつくら不安要素を取り除きたいと思ってな。悪いけど詳しいことは言えねえし説得しようにも証拠がねえんだ。そろそろ香辛料が無くなりそうだろ？」

スバルがそう言うと、ラムは確認するような視線をレムに送る。

「レム、そうなの？」

「はい、姉様。たしかに数日中には買い出しに行こうと思っていました」

頷いて同意してくれるレム。

一周目でも四周目でも買い出しに行っている。ランダム要素はあれど、物が足りなくなるといふ事態は起こりやすい。

「そう。なら村に行くわよバルス」

「——え？ 姉様とか？」

「なに？ バルスの分際でラムが不服だというの？ 思い上がりも甚だしいわ」

「いや、そうじゃなくてさ」

言って、スバルは黙々と作業を続行していたレムへと目を向ける。それに気づいたららしいレムは横目でそれを見て。

「何ですか、スバルくん。姉様と、スバルくん……は仲良しですから二人で行けばいいんじゃないですか」

「レム、ラムはバルスが嫌いよ」

「……さつきから姉様の言葉が刺々しすぎてちよつと死にそうなんです」

スバルは包丁を操る手を止めて、レムへと一歩近づいた。

「——ってのはまあひとまず置いて。レムりんも一緒に行こうぜ、村にさ」

「……………」

「いいのか？ 俺についてこなくて。気になるんじゃないのか？ 俺が何するか」

レムの表情が厳しい。

少し驚きの色も透けて見えるが、それでもその表情を見るだけでスバルは今にも泣きそうだった。

どんなに気張つても気張つても、いつの間にか足元がグラついていく。調子のいいことを言っただけで紛らわすしかない。

「ちよつくら悪者退治するだけだ。ベア子と一緒にな」

「スバルくんは自分で死ぬつもりなんですか？」

「おいおいその返しはキツすぎるぜ……でもまあ今はしようがねえか。死なねえよ俺は。死ぬのはすつげえ怖いんだ」

「……」

「ただし！ 誰かを守るためになら死ぬ覚悟はできる。そんで守って笑ってハッピーエンドってわけよ」

「バルスはますます意味が解らないわね」

「意味不明でOK！ 俺は俺の道を行くぜ。で、どうすんだレムりん。行くのか、行かないのか」

「ここが正念場だ。」

「できればラムだけでなくレムもついてきてほしい。」

「呪術師を退治してレムの誤解も解けてくれちゃって一石二鳥。それで行きたい。」

「スバルくんがそこまで言うなら」

「よっし！ じゃあさっそく——」

「意気込んでるところ悪いけどバルス。買い出しは明日よ」

「ええー……」

「ロズワール様が外出なさるからそのお見送り。仕事もバルスがサボったせいで溜まっているのよ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「——つてことだベア子、明日になった」

「いきなり引つ張り出しておいて迷惑なやつなのよ。数時間前の記憶を取り消したいところかしら」

「ベア子、ヤクソク、マモル」

「——っ！ 本当に鬱陶しいかしら!!」

本気で禁書庫から追い出されそうなのでここらへんでやめておく。  
スバルは柔らかく笑って。

「——ありがとな、ベア子」

「急に何かしら。気持ち悪いだけなのよ」

「お前がいてくれて本当によかった。俺はお前が思っている以上に感謝してんだぜ。なにしろ十倍以上の恩があるからな」

「ふんっ、感謝くらいは一応受け取っておくかしら」

ぷいっつとそっぽを向いて素直じゃないベア子。

そんな彼女を横目に、スバルは禁書庫をあとにした。勝負は明日だ。レムとラムとベア子で呪術師攻略に挑む。

武力の面では問題はない。

ただしスバル以外で、だが。

まずはあの子犬を調べよう。

ベア子に調べてもらって、そうだったら、捕らえて屋敷に帰って帰ってロズツちに押し付ける。今日どっかに行ってしまったが、戻ってくるまでベア子に飼いならしてもらおうことにしよう

子犬をどうにかしたら、あとは呪術師探しだ。

きつと効果を確かめるために近くにいないはずだ。そいつも捕らえて衛兵に突き出そう。そのあとはベア子に頼んでアーラム村の守りを固めてもらえば全部解決だ。

一番の問題は、レムとラルトレア。

ベア子が居るっていつてもこの二人がどうにかなつちまったら止められない。取り返しがつかないことになる確率が高い。

そうなる。

ベア子の力を借りるのは最初だけだ。

子犬との接触の時にだけ、判断してもらうだけに留めた方が良く、スバルだけでやるしかないのだ。

これはできるだけスバルだけで解決すべきことだ。そうでなきゃ、信頼は勝ち取れない。スバルが実際に行動して体を張ってこそ、あの二人は抑えることができる。そう、スバルは考えていた。

「ふうー……責任重大だな、俺」

ロズワール邸の廊下を歩いて、スバルはその部屋に着いた。

コンコン。

一応ノックして返事を待つ。

何も返ってこないの、スバルは遠慮なく入った。  
ラルトレアの眠る部屋。

「今日もすやすやだな、ラルたん」

大きなベッドにおかっぱ頭が見える。

黒い前髪と、長いまつ毛。

日本人らしからぬ顔だちで、少し鼻が高くてくちびるの色素は薄い。

7歳くらいの子に、スバルは精神をすり減らさんばかりの慎重さで近づいていく。ベッド脇にある椅子に腰かけて、その寝顔をのぞき込む。

「さあて、ようやく明日だ。考えれば考えるほど自分の弱さに気づくんだよ。でも、俺がやるしかねえ。あの犬つところに目星をつけてんだ。呪術師をどうにかして、レムとも仲良くしたい」

一息。

「この屋敷に居たいっていうより、エミリアたんと仲良くしたいし、レムにもラムにも嫌われたくねえんだ。それは女の子だからってわ

けじゃなくて、この世界で俺に接してくれたしき。ラルたんもそうだぜ？俺の痛い声かけに応じてくれた時はビビったけどな」

ふうーとまた深呼吸。

「ロズっちだつてそうだ。あんなヘンな恰好しているけど俺と一緒に風呂に入った。それだけでいい。俺に関わってくれたやつらを大事にしたい。それに順番を決めるのは後だ。みんな一番でもいいってわけにはいかないからな」

スバルは布団からはみ出ている小さな手を取る。

「俺は今のところ、エミリアさんが好きなんだ。ラルたんの気持ちは嬉しい……けど、ラルたんってまだまだ小さいし、たぶん年も離れるだろう？ていうか、年とかいろいろなこと知らないんだよラルたん。そういうところも含めて、改めて話をしようぜ」

そして、スバルはその小さくて可愛い手を広げて、自分の手と重ね合わせた。

「話をしてき、よかつたら力を貸してほしい。都合が良すぎるかもしれないけど、俺ってばこの世界じゃすっげえ弱いんだわ」

寝ている幼女に自分の弱さを晒すとか本当に情けない。

しかしここぐらい、気張るのはやめたかった。

ずっとそうしていたら心がまたぶっ壊れそうな気がしたのだ。

無理して泣き出して、果てはエミリアさんに膝枕される、のは良いかもしれないが、それをレムとラムに見られたらと思うと辛すぎる。

スバルは自分の弱さを振り切るように立ち上がって、ポケットから白い牙を取り出した。

「これ、お守り代わりに持っていくぜ」

スバルが祈るように強く握って――

「……ん？」

ちくり、と。

牙を包み込んだ手のひらに痛みが走る。  
固く握りしめた拳を開いてみると。

――シュンツ。

「――うおわっ！　へ、何じゃこれ――？」

手のひらに、一メートルくらいの刃渡りの剣があった。

血のように赤く、柄だけが黒い。鏢はなく、スラリと鋭く光を反射している。

盗品蔵でラルトレアが使っていたものではない。あれよりも凄まじいオーラを放っていることくらい、素人のスバルにでもわかった。

「……かつけえ……」

牙が剣に変化するとかどこの主人公だよ。

しかもこのダーク感。

もはや負ける気がしない。

「ラルたん、これで頑張れってか……」

眠ったままの黒髪の女の子を見つめて、その開かないまぶたを凝視した。しかしぴくりとも動かない。

揺すりまくって、本当は嘘寝なんじゃないのかと確かめたいところだったが、あと一步のところまで押しとどめた。それはこの場面ですることじゃないだろう。

「……じゃ、ラルたん。行ってくるぜ」

スバルは自室に戻って明日に備えた。

午前中には行くというから、早起きしてラジオ体操して体をほぐしておきたいところだ。しっかり朝食を取って、剣を持ってベア子を持って出発。

そして呪術師倒して一件落着。

それがいい。

真剣に明日起こることをイメージして、すぐに眠りについた。

こうして五周目三日目の夜が過ぎていった。

## 第十五話 『スバルむそう』

五周目四日目、昼前。

アーラム村への道中にて。

「ほらベア子かけえだろこれ！ なあおいベア子！」

嫌な気分を紛らわそうと、スバルはいつも以上のテンションとうざさでベアトリスに絡んでいた。

お守り代わりの牙だった剣を空に掲げるスバル。

事実、ラルトレアに貰った剣はスバルの中二心をくすぐってくる。

血のように真つ赤な刀身と、どす黒い柄。

持っているだけでダークサイドに落ちてしまいそうな剣だ。

下手に扱うと指が落ちてしまいそうになるので、すぐにスバルは分厚いボロ布で包み込んで、細い紐で縛り上げる。それを慎重に左手に持った。

できることなら、漫画に出てくる剣士のように、ちゃんと鞘に入れて肩に紐で引っ掛けたいところだ。

「うるさいやつなのよ。その剣は一体なにかしら」

「お？ やっぱり気になっちゃう？」

「バルスには無用の長物であることは確かだね」

「ひっつでえ姉様だな。餞別なんだよ、ラルたんからの。おいおいレムりん、そんな怖い目をすんなって。俺ってば今、結構ぎりぎりの精神状態だからよ……」

信頼を得るには、本音を晒していくしかない。

泣きついて気張って、行動で示していくスタイルだ。ストレスが溜まってしょうがない。あの子犬のように頭頂部に10円ハゲが出来

ていてもおかしくない。

「心配しなくてもいいのよ、メイド。あの吸血鬼が屋敷で動いたらベティがわかるかしら。それに、あれは眠っているというより、心が死んでいるのよ」

「……」

フォローしてくれたベア子に、スバルは何も返せない。

「事情を知っているやつはだんまりを決め込んでいるから、事實は闇の中かしら」

「ベアトリス様は、どうしてそちらの肩を持つのですか。レムには分かりかねます」

「別にベティは味方しているわけじゃないのよ。これは契約かしら。頭を下げて頼み込んできて鬱陶しかったから仕方なしに引き受けたのよ」

素直じゃないベア子の言葉にも、スバルの涙腺が緩み始める。

「ただ、そいつが相当無理をしていることは確かかしら。ベティはそこまで非情じゃないのよ」

耐えきれなくって、スバルは歩くスピードを速めて先へと進んだ。後ろの方で、ベア子とレムとラムがついてくる気配がある。突然速く歩き出したスバルをそっとしておいてくれるらしい。

——くっそお、幼女に泣かされた……

スバルは腕でがしがしとこぼれてきた涙を拭って、空を見上げた。青く澄んだ空だ。こんなにも世界は平和そうに見えるのに、スバルの

目の前には困難が立ちはだかっている。

。。

「信じられないのなら、自分の目で確かめるといいのよメイド。あんなものを持ってきているのだから、覚悟だけは評価すべきなのよ」

「あの剣が何だというのですか、ベアトリス様」

「分からないかしら。呪われているのよあれは」

「バルスが言っていたわ、呪いがどうのこうのと」

「その呪いとは、少し違うのよ。あれにはベティも知らない魔法が織り込まれているかしら。とても危険なものなのは確かなのよ。最悪、命を削りやがるかしら」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「村が見えてきたのよ」

しばらくしてベア子とレムとラムが追いついてきて、すぐにアーラム村の入り口が見えてきた。

半円というか、アーチ状の門だ。ああいうのをたしか拱門と言うんじゃないかなっただろうか。

「それじゃバルス、先に買い出しよ」

「――。え？ 俺も？」

「それが本来の目的よ。自分の職分を忘れてはならないわ」

「あれ、姉様がまともなことを言っているような気がするぞ？ 普段

は人権を無視したことしか言わないというのに」

「ラムの言うことはいつも正しいわ。それに、めそめそ泣く男に人権はなくてよ」

「ああああっ！ ノーカン！ ノーカンでお願いします！」

——スバルにとってその村を訪れるのは、これで三度目だ。

一度目はレムと訪れ、二度目はベアトリスとレムと回った村落。

領主の屋敷のすぐ側にある村にしては規模が小さく、住んでいるのはせいぜいが三百人前後。

村人とふれあいながらも、買い出しを進めていく。

ベアトリスにはガキどもと子犬を重点的に見ておくようにあらかじめ言っている。それを言ったときには怪訝な顔をされたものだが、この際仕方がない。

犬子どもを疑ってでも、このループを抜け出したい。

「おー、これは何だスバルー」「かつけえー」「剣だ剣だー」

「おいおいガキどもそれに触んじゃねえ！」

「とつたりー」「次はオレなー」「やーいスバルこつちだぞー」

「ベア子おおおヘルプミー!!!」

情けなく叫びながらも、どうにか奪われかけた剣を取り返すスバル。

ハアハアと荒い息を整えつつも、ベアトリスの方を見て頷く。決して非難しているわけじゃない。呪術の気配はどうだ、という合図だった。

「問題ないのよ。それより、その剣をもう離さない方が良くしら」

「正論過ぎてぐうの音も出ねえよ……ん？」

スバルの袖を引っ張ってくる感触。

これはアレか。見ると予想したとおりにおさげの少女がいた。この子の案内でいつもあのガブってくる犬つころと出会うのだ。

「えっとね、あっち」

以前と同じ方向を指さしてくる少女。

スバルはベアトリスを見て。

「こつからが気合入れるところだ、ベア子」

「一番にブルツてるやつが何を言っているのかしら」

「それは言わない約束だぜ……」

と。

気合を入れなおすスバルのもとに、レムとラムが戻ってくる。

「バルス、ちゃんと荷物番はできていた？」

「スバルくん、あんまりはしゃぐのはよくないです」

「二人そろって俺をガキ扱いか。上等上等。今に見てるよ、大英雄スバル様がちよちよいのちよいよ！」

自分に自分で火をつけて無理に燃え上がっていくスバル。

しっかりと左手に剣を持って、その包みをすぐに取れるようにヒモを緩めておく。

「絶対驚くって」「絶対喜ぶって」「絶対嬉シヨンするって」

「こっちは普通に漏れそうだったーの……」

ガキたちにくすくすと笑われながら押されていって、村の外れへと移動していく。すると、見えてきた。

柵の外に、前回と同様に地面にお座りしている『子犬』が。

こいつだ。

低くても今のところこいつしか可能性がないんだ。こいつが外れれば誰が呪術師だ、ということになる。

「——ベア子」

スバルは、ふと歩みを止めて、後方にいるベアトリスへと声をかける。彼女は面倒くさそうに頷いてから。

「わかったのよ」

「調べるだけで良い。後は俺が——なんとかする」

一歩、また一歩。

ベアトリスがガキたちに囲まれた子犬に近づくとたびに、『子犬』の表情が心なしか険しくなっていく。

そして——

「ふがーっ」

「いだっ!」「あー! 逃げたー!!」「ペトラだいじょうぶ?」

おさげの少女が抱えていた子犬が飛び出して、ペトラの腕を噛んでから森へと一目散に走っていく。

「——ベアトリスッ!!!!」

「わかってるのよ!」

ベアトリスがペトラに駆け寄って、その噛み傷を調べていく。するとすぐに顔色を変えて。

「お前の、言う通りなのよ。これは呪いかしら」

「——ッ!」

「どこへ行くのよッ!!!」

「アイツは、俺が何とかする!!!」

紐を引き抜いてボロ布を取っ払う。赤黒い刀身をむき出しにして、その柄を掴んですぐ走り出した。

スバルはどんな制止があっても止まるつもりはなかった。

ここだ。

ここしかない。

解決するとしたらここしかないんだ。

「スバルくん!!」

「レム——」

「レムも、行きます」

「いや、でも」

「あれはおそらくウルガルムという魔獣です。それが入ってきたということは——やっぱり、結界が切れています」

スバルに二の句を継がせない勢いの良きで、そのままスバルとレムは森の中へと入っていく。子犬の姿はもう見失ってしまっている。

「レム、やっぱりだめだ。俺がやらなきゃいけな——」

「——ッ!!」

「——うおおおあわっ!!」

横の茂みから突然、ドーベルマンみたいな大型犬が飛び出してきた。スバルの横っ腹へと噛みつきこうとしてきた。それをレムが——どこから取り出したのか、例のモーニングスターで吹っ飛ばしていく。

「やっぱりつええ……」

「スバルくん、先に行きます」

「あの、レムさん。それはいい……」

「護身用です」

「え、いや」

「――護身用です」

きつぱりと言い切られて、これまた何も言えなくなるスバル。レムの後を追うように、スバルは駆けていく。

ベア子はペトラの解呪、ラムはきつと屋敷に戻ってロズワールを呼び戻そうとしてくれているに違いない。

あとはスバルとレムで子犬を捕まえて、結界を修理するだけだ。

それでラルたんの目が覚めて、大団円。

それしか、ない。

「いました――！」

レムが後方を走るスバルにささやく。

森の獣道を走り続けて、襲ってくるウルガルムをレムが撃退していくうちに、開けた場所に出た。

その中心に、あの『子犬』がいる。

可愛い顔をして、その顔に獰猛な表情を刻み付けていた。

すると。

「――オオオオオオオオオツツ!!!」

その小柄な体格には見合わない野太い咆哮が耳をつんざく。

見る見るうちに、『子犬』の体が巨大化していく。今まで襲ってきたエセド―ベルマンみたいな獣へと変化していった。

しかしその大きさは今までのとは段違いだ。

体躯も筋肉量も五倍くらいは違うだろう。

おそらくはあの子犬に扮していたウルガルムが親玉で――

その親玉の声に呼応するように、百以上の気配がぐるっと囲い込ん

できた。

——ガサガサガサ……。

「……困まれ、ました」

周囲360度、茂みの奥から血走ったような獣の目が何百も見えて  
いる。

「絶体絶命のピンチって奴かよ……。おそらく、あのでつけえのが親  
玉なんだよな」

「スバルくん、なにを……」

「カッコ悪いこと言うけど、周りの奴は任せていいか？ 俺が、あいつ  
を仕留める」

「馬鹿なんですか?! スバルくんが敵うはずがありません！ 逃げる  
のが最善の策です!!」

「そんなこと百も承知だ。——だけど、ここは腹をくくる場面なんだ  
よレム」

スバルは赤黒い刀身をボスウルガルムへと向ける。

——ここでやらないきゃダメなんだよ……ツ!!

「うらああああああ——ツ!!!!!!」

周囲のウルガルムが動く前に、スバルが一步を踏み出す。

一斉に、彼らの視線がスバルへと移り、何匹かがスバルの視界の端  
に映り込んでくる。しかし構うことはできない。

レムに任せるしかない。

「お前をぶっ倒してハッピーエンドじゃああああ!!!!!!」

「ダメですスバルくん——」

レムの悲痛な声が、背後からゆっくりと聞こえてくる。  
世界が——スローモーションになつていった。  
スバルの極度の緊張からか、世界の時間が引き延ばされているのだ。

そして、見えた。

ボスウルガルムの体が薄く光り、その下の地面が隆起していくのを。そしてそれは土の川のように上流から下流へ、ボスウルガルムからスバルへと流れていく。

自然の濁流がスバルを飲み込もうとしていた。

だがスバルは退くこともできない。足は前に進んでいる。

この土の波を止める方法を、スバルは知らない。食い止めるための魔法も——使えやしない。

声が、聞こえた。

——スバル……我を許してくれ

「——当たり前だあああああああ!!!」

スバルは剣を振り下ろす。

そしてその剣先から、赤黒い剣撃が放たれる。禍々しい力の波動が土の濁流へとぶち当たり、粉碎していく。

大地に亀裂が入り、風圧で襲い掛かるウルガルムを吹き飛ばしていく。

——スバル、スバル……

「俺の方こそごめんな……あ、れ……力が……」

——これはお仕置きなのだ

「あつれえ……ラルたん……これは……洒落になんねえ……つて……」

スバルの気力、精神力、体力がまるで穴の開いたタイヤのようにしぼんでいく。

脱力しきったスバルの肉体が、ぐらつとふらついて、剣を地面に刺してやつとのことを倒れるのだけはこらえた。

——さっきの月牙○衝みたいなので全部持つてかれたってことか……？

「グウオオオオオオオオオオオ——ツ……！！！！！！」

スバルの頭上に、ボスガルムの咆哮が降りかかってくる。

「——スバルくんッ！！！！！！」

レムの叫びがとても遠い。

モーニングスターを振り回している音が絶えることなく聞こえてくる。しかし、その音もまた遠い。

目の前にいるボスガルムのよだれと獰猛な息遣いのほうがよっぽど鮮明に聞こえてくる。

「やつべえ……」

あんぐりと大口を開けたボスガルムの牙が視界に映る。一瞬だ。このすぐ一瞬後に、スバルは食われる。それがわかっているのに、一ミリも体が動かない。

——スバル

「愛してるぜ……ラルたん」

棒切れみたいになった自分の腕を、最後の力で動かした。

それにつられて、絶対に離さなかった剣が横からボスガルムの顔を狙う。そんな力の抜けきった横薙ぎは牙にカチンと当たるだけで――

「いゝっでえ——ッ!!!」

グツシャとボスガルムの巨大な牙がスバルの左肩と背中に食い込んで、ずんずんと顎を閉じてくる。

喰いちぎられる——

スバルの左半身はもうボスガルムの口腔内に捕らわれていてもう抜け出しそうにない。あと二秒もすれば、上の牙と下の牙にスバルの肉が引き裂かれる。

——でも、まだ二秒もある。

スバルは感覚のなくなった腕に、その右手に全神経を集中させた。体はもう限界を超えている。だがまだ意識は保っているし、立てている。

ならまだ力は残っているということだ。

だから、その力を最後の一滴まで絞り切つて、この一撃に――

「こおんじょう入ってるかア——ッ  
!!!!!!!!!!!!!!」

——つぎ込んだ。

全身全霊の一撃が——スバルの命を削つても放った力が剣の刃となってボスガルムの牙を砕き、顎を引き裂いていく。

赤黒い波動がスバルの眼前を通り過ぎ、ボスガルムの体を貫通して

血飛沫を上げていった。

ボスガラムが真つ二つになって、地面へと倒れていく。そんな光景を最後に、すうーつとスバルの意識は消えていった。

地面に倒れた衝撃も、駆けつけてきた彼女らの足音も心配するような声も聞くことはできない。

……。

……………。

……………。

「——ウルゴーア！ あっはあ、良いところ取りつてやつだあーね」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

——真っ白い、何も無い世界にスバルの精神は横たわっていた。

見上げてみると、すぐ横に巨大な男が立っていた。二メートルか、二メートル五十くらいは身長がありそうなそのデカ男はスバルを無表情で見下ろしていた。

肩まで伸ばした白に近い銀髪と、澄んだような蒼い瞳。

その肉体は人間の限界を体現するような肉体美を放つほど鍛えられており、一切の無駄がない。

武人だ。

スバルはそいつを見て、そう思った。

だけど全く心が宿っていない。

情がなく機械のような武人みたいに見えた。

表情もなく、何も意思が感じられない。

だけどそんな彼を見て、スバルは寂しそうだと感じていた。

——名前をきいてもいいですか

珍しく丁寧な口調で、ちよつと緊張しているスバルは聞いてみた。  
すると。

「騎士、ボルフォーン」

武骨な答えが返ってきた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

目覚めて最初に視界に入ったのは、見慣れたロズワール邸の天井  
だった。

ぼんやりとした意識のなかで、脱力しきった体が布団に包まれてい  
るといふ感覚を味わっていた。何があつたつけ、とかそんなことを考  
える。

すると。

「——起きて、くれましたか」

「……すらまっぱぎ、レム」

「すらまっば……？ スバルくんの故郷のご挨拶ですか？」

スバルの右手側。

首をかしげるレムがベッド脇に座っていた。

そして反対側から聞き慣れた声が聞こえてくる。

「こら、ぼけてないでしっかりしてスバル」

「起きたら両手に女の子とか、ある意味じゃ男児の本懐だよなエミリアたん」

「まだ寝ぼけているのかしら。それとも、素の反応がそれなら死んだままの方がよかったのよ」

「ベア子お……」

「……うわつ、何なのかしらこの男。いきなり泣きそうになるとか痛すぎて見ていられないのよ」

起きたら両側にレムとエミリアたん、そして部屋の壁に寄りかかるベアトリスがいる。そんな三人に見守れて目覚めるとか主人公すぎるだろ俺、とかそんなことを考えてながら、ちよっぴり涙腺が漏れ出した涙をぬぐう。

「……とりあえず、あの後どうなったのかが聞きたいかな」

「はい。スバルくんは、どこまで覚えていますか？」

「俺が二発目の月牙○衝をボスガルドにかましたところまでだな」

「……では、そのあとのことですね」

たんたん、レムは事務的に事の顛末を話してくれる。

スバルが意識を失ったあと、ペトラの解呪が終わったベアトリスとレムによりスバルに襲い掛かるウルガルドを押し返しながら時間を稼ぎ、ロズワールの帰還を待った。その三十分後、ラムが連絡を取ったロズワールにより森にいる全てのウルガルドの殲滅が行われたという。

そのあとはエミリアたんも駆けつけて森の結界を直して、アーラム村で歓迎を受けて屋敷に戻ってきたという。

「え、俺どんだけ寝てたの？」

「寝ていたというより、仮死状態だったのよ。丸二日、お前は死んでいたかしら。マナの供給を受けて、やっと回復したのよ」

「またスバルは無理をして……どれだけ心配させれば気が済むの？」

「愛ゆえに……っていうか、俺の事はいいんだよ。で、ベア子。呪術師はどうなったんだ、結局のところ」

「お前が倒したのよ。あのウルガラムという魔獣が呪い、というより捕食行為を行っていたかしら」

「なるほど……あれ、俺噛まれたよな？」

「スバルくん、呪いが発動する心配はありません。術者であるウルガラムは死にましたので、効力が失われています」

「そうか……」

薄く微笑みながらいうレムに、スバルは目を細めた。

呪術師の問題は片付いた。

レムの方も大丈夫そうだ。

あとは――

「話すことが色々あるの、分かっているわよねスバル」

「……おうよわかっているってエミリアたん、まだ最後の詰めが出来ていないってことくらい」

「……？」

可愛く首をかしげて、よく分からないというようなエミリアたん。そうこれはスバルしか解決できない問題なのだ。だから。

。。  
。。

「すうー……はあー……」

スバルは力の抜けきった体を引きずりながら、ある部屋の前に立っていた。

深呼吸して、もう一度深呼吸。

マナーとして三回ノックしてから、ドアノブを捻って中へと入り込んだ。

大きなキングサイズくらいのベッドがあつて、カーテンが開けられて風が入り込んできている。

ベッドに近づき、その奥をのぞき込むスバル。

大きく膨らんだ布団はくるまっついていて、顔も出してくれていない。

「ラルたん……」

顔も見たくない、とかそういう意味だろうか。

冷たい夜風がスバルの頬を撫でていく。

ぽっこりと中央がふくらんだこの布団の塊をめくろうかと考えて、スバルはその手を止めた。

ベッドに座って、ただじつと見つめるだけで、手が動かない。初めの一言は何といえばいいのか分からなくなる。

ひゅーっと、風が吹いて。

「……ふふふ」

窓の方から妖艶な声が聞こえてきた。  
振り返るスバル。  
思わず、息をのんだ。

「いい夜なのだ、スバル」

「ラルたん……か？」

「我以外に、誰に見えるのだ？」

「いや、だって」

月明りを浴びる黒髪の少女がいた。

エミリアさんと同じ年くらいの、うら若き乙女が窓辺に腰かけてスバルに微笑んでいる。

腰にまで届く長い黒髪と、赤い瞳。

全身をダークドレス、両手には薄布でできた黒手袋。

とびっきりの美少女が、スバルに微笑んでいた。

「おもしろいのお、最初からこうしておればよかったのだ」

クスクスと、呆気にとられているスバルを笑っている。

「ラルたん——」

「ごめんなさいなのだ、スバル」

頭を下げるラルトレア。気がつけばスバルは先手を取られていた。

その姿勢のまま、ラルトレアは話を続けていく。

「スバル、我は独りよがりだったのだ。我はスバルを愛しておる。だからスバルもまた我を愛するのが当然なのだと考えていた。だから、スバルが使用人となったこと、エミリアなどにうつつを抜かしたこと、我の思い通りにいかぬこと全てが許せなかった……」

「いやそれは——」

「違わないのだ……断じてだ。我はその部分を思い直した。想いを言

うだけではだめなのだ……スバルは、私のことをどう思っているのだ？」

「ラルたん、俺はエミリアたんも大事にしたいし、もちろんラルたんだって——」

スバルはどちらも大切にしたいと、そう告げようとしたときのラルトレアの表情が忘れられなかった。悲しそうだった。辛そうだった。だが、ラルトレアの思い通りに、スバルは自分の感情を捻じ曲げることなんてできない。

それなら、どうすればとスバルは思いを巡らせる。

「スバル……」

赤い瞳をうるませて、ラルトレアがゆっくりと近づいてくる。

「我はスバルを愛しておる……我だけでなくても、よいのだ」  
「ラルたん……」

「どうなのだ、スバル。私の思いを受け入れてはくれぬか？」

黒いドレスをまとった華奢な少女が、スバルの鼻先にまで近づいて、そんな甘い言葉をささやいてくる。

薄い胸のふくらみに、首筋の艶めかしさにどうしても目を逸らしてしまうが、それを何とかスバルは押し殺した。

「あ、ああ……」

肯定の言葉が、思わずスバルの口から出た。

一生懸命、心のこもった愛と言葉を向けてくる少女を、スバルは拒むことができなかった。

「くふふっ、これは約束なのだ。わかっておるな？　スバルは王にな

るのだ」

「……あああ……えっ?」

「当然であろう? 我とエミリアを囲うというのなら、凡俗で許されるはずがないのだ。エミリアを王とし、エミリアと婚姻関係となり、ルグニカの王座を牛耳るのだ。そうすれば、我はスバルの女として我慢してもよい」

「……ふえ……マジで言ってる? ラルたん」

「まじ、なのだ」

キヒヒツと笑いながら、ラルトレアがスバルに体を寄せてきて、スバルの肩に顎をのせてくる。密着した二人の息遣いが自然と荒くなっていた。

ふうーつとラルトレアの吐息が、スバルの耳元をくすぐる。

「ほわあっ?! やばい、やばいってラルトレアさん?! 何か色々と流されているような気がするし!? ていうか何で大きくなってんの?!?!」  
「何もやばいことなどない。はよ王となれ。使用人でいる期間など考えれば些末な時間なのだ。我も我慢が足りなかったのだ。王選とやらがあるのだろうか? さっさとエミリアを勝たせるのだ。よいな?」  
「タンマ、一旦休憩をお願いしますラルたん様?!」

うまく思考がまとまらないスバル。

いきなり急成長をとげたラルトレアにまず驚き、スバルの言葉を潰すようにラルトレアがどんと話を進めていく。

「気にすることなどない。我は強いのだ。王選の他の候補者など殺せばよい。ただ、我は力を貸すだけなのだ。だから、我の気に入らぬことはせぬし、スバルの思い通りにいかぬこともするのだ」

ギユギユウウと腕でスバルを締め付けるラルトレア。

その腕力もさることながら、スバルは自分の胸板にあたる感触から逃れられない。

「我を思い通りにしたいのなら、我を越える英雄になるのだ。男として、我を屈服させてみよ。我を愛に酔わせ、力を使わせるだけの女にしてみせるのだ。それができないのなら、スバルは我のものだ」

「いや、あの、あれ、ちよつと何言ってるか——イダッ」

がぶり、とスバルの首元に噛みつくラルトレア。

牙がしつかりと肉に食い込んでいた。

「ちよつとした契約なのだ。それでスバル、話をするのだったな。我もスバルのことを知りたいのだ。我はラルトレアⅡデイルⅡカルトス。れつきとした吸血鬼なのだ」

「……本当に反省していますんでしようか、ラルトレアさん」

「我は心の底から反省しているのだ」

「いやまじ——うひゃっ!??」

ぺろりと、ラルトレアがスバルの耳の穴に舌を突っ込んで舐めまわす。

悶絶するスバルを見て、ラルトレアが牙を見せるように笑う。その狂ったような笑いは誰にも見られることなく、

「——キヒッ」

——月の光がただ無感情に彼女を照らし続けていた。

## おまけ 『夜伽話』

抱きついた男の瞳の中に、ラルトレアは自分の顔が映っているのを眺めていた。熱っぽく、情熱的に愛をささやいている自分がどこか面白おかしく思えてくる。血霊器具でラルトレアは自分の頭身をエミリアと同等のものに変化させていた。

『吸血変化』という力だが、幼女の体から少女へと成長させるには相応な血液量が必要となってくる。それをするだけの効果があったと、今証明されている。

「聞こえるのだ……スバルの鼓動は心地よいの」

少しふくらました胸を押し付けやると、面白いように心臓が跳ね上がっている。おどおどするスバルの顔もまたたまらない。

「ら、ラルたん?」

「——キヒツ、どうしたのだ? す・ば・る」

「いやあの何というか。この体勢だと、色々と暴発してしまいそうっていうか……」

スバルからしたらどうしたもこうしたもなく、ラルトレアが目覚めているという安堵と、なんか大きくなっていきなり抱き着いてくるというハプニングに思考が回らない。一旦、ラルトレアを引き離して二人でベッドに腰かけることにした。

横に並ぶように座って、なるべくラルトレアを見ないようにつとめながら、スバルは話を切り出した。

「そーいやラルたん。なんで、大きくなってんの?」

「もともと我は体のサイズを自由に変化できるのだ。童女の姿でいたのは、単に血の消費を抑えるためだけなのだ」

「なるへそなるへそ……え、つてことはラルたんつて年いくつ?」

「年なんて気にするのだな、スバル。それを知ったところで何になる

「というのだ？」

「いやまあ法律的なあれというか、何というか。……今もすんげえ限界なんだよ?! 年が俺が思ってた通りならまだ何とかこらえ切れるというか!」

「百七歳なのだ」

「ひゃっ……。吸血鬼って、そんなもんなん？」

「我が知っている吸血鬼の中では我は四番目に長生きなのだ」

「マジでファンタジーだな、ラルたん。いやまあ分かってたけど真剣に言われると、なんかこう違うんだなって」

「くふふっ、おもしろいの」

ラルトレアはスバルの横顔をじっと見つめながら言葉を返す。

当のスバルといえば、腕を組みながら天井を見上げながら何やらうなっているが、必死にラルトレアの美貌が目を逸らそうしていることが丸見えだ。

——キヒツ、あわてておる、あわてておる。

「で——き、ここからは真面目な話。ラルたんは俺を守ろうとしてくれたわけだろ？」

「そうなのだ」

「ラルたんは全部覚えているのか？」

スバルが問い掛けてくる。

ラルトレアはその問いにすらすらと答えた。

「我はスバルがああのメイドに殺されているのを見たのだ。そこからは感情が高ぶっておったせいであまり覚えておらん」

「俺がレムに殺されたのって、この屋敷の廊下でのことか？」

「そうなのだ」

「ってことは、俺の読みは当たってたのか……。ラルたん」

「わかっておる。スバル、我はスバル以外の生物をたやすく殺すのだ。それは我が吸血鬼だから、ではない。我はそういうふうに生きてきた

のだ」

スバルはラルトレアの告白を受けて、複雑な感情を抱かざるを得ない。

自分を守るために、レムだけでなく、エミリアもラムも殺せると言っているのだ。嬉しい反面――

「我が恐ろしいか、スバル」

「……。エミリアたんとはちよつと仲良くしてたんじゃないのか？」

「我にとつて、仲が良いから殺さないという選択肢はない。我はスバルを愛しておるし、我にとつて必要だから守るのだ」

スバルは言葉に詰まった。

暗にそれはエミリアが必要なくなれば殺すと言っているものだからだ。

「いや――俺は決めたんだ。受け入れるつて。でもラルたん、俺はエミリアたんもラムもラムも、俺が関わってきた、優しくしてくれみんなを大切にしたいんだ」

「わかっておる。わかっておるのだ。もうエミリアやメイドどもを殺さないのだ」

「そう、か。よかったぜ、ラルたん……」

ひとまず安心して天井から視線を下ろすと、すぐ真横にスバルをのぞき込むように首をかしげているラルトレアの顔があった。

「――ほわっ?!」

長い黒髪の美少女が微笑しながらこちらを見ている。しかもベツドに座つて。二人きりで。

未だかつて出くわしたことの無いシチュエーションにいるという

ことを、あらためて実感させられる。

「かわいいの、スバル」

「勘弁してくださいせえ、墮天使ラルたん様……」

童貞には危険すぎる毒だ。

しかもこうやって女の子に可愛い可愛いと言われると、自然と視線が下に落ちてうつむいてしまう。

そのさらけ出してしまったスバルの首筋に、ぬるつという生暖かい感触が走る。

「うひゃっ!?!」

ラルトレアがスバルに寄りかかって、スバルのうなじをぺろぺろと舐めていた。その妙にざらついた舌の感触がリアル感抜群で、思わず変な声が出てしまっていた。

「すばるうー、一緒にベッドで寝るのだ……」

しなだれかかってくるラルトレアの長い髪が、さわさわとスバルの胸元に垂れてきて、変な気分になってきてしまう。

「いやいやいやッ!! 何かやばいって、ラルたん?! 雰囲気の流れされそう! 雰囲気の流れされそう! スバルくんがここにいますよ?!」

「むう……うるさいすばるなのだ……」

ぎゅうーつと物凄い腕力でスバルは無理やりベッドに仰向けにさせられる。そのかたわらにラルトレアがゆっくりと飛び込んできて、がしつとスバルの左腕にしがみつく。

その瞬間に漂ってくる血の香りと、発達途上のふくらみがむにゅむにゅとスバルを刺激してきた。

「すばる……」

「やばいやばいやばいやばい……」

スバルの体はどこもかしこも硬直してしまつて、ピクリとも動かない。

ラルトレアの吐息がスバルの首筋をくすぐってきていても、緊張しすぎてしまつて皮膚の感覚もずいぶん鈍くなつてゐる。

「つかれ……たのだ……」

「やばいやばいってラルたん——へ？　寝てる？」

気を失つたように、動かなくなるラルトレア。

寝息もほとんど感じないために、寝ているのか死んでいるのか、そもそも吸血鬼は寝るのかという疑問さえわいてくる。

「……ふうー……卒業しちまうのかと思つたぜ……」

スバルはしばらく目をつむつたラルトレアにしがみつかれたまま、そのままの体勢で天井を見ていた。

「乗り越えたんだ、よな」

緊張のせいで寝れずにいると、窓の方からあわい光がにじみ始めてきた。暁の空だ。じんわりと差し込む朝日が、スバルの頬をあたためてくれる。

スバルはゆっくりと起き上がつて、ラルトレアの拘束をそつとほどいた。

今にも目を覚ましてにやりと笑いそうな少女を見下ろして、その前髪をそつと撫でる。

「おやすみ、ラルたん。ついに待ち望んだ朝が来たばかりだけどな」

そのままスバルはラルトレアの居室を後にして自分の部屋に戻った。今日がすることがたんまりとたまっている。

エミリアとレムとベア子に色々と説明しなければならぬ。そのあとにエミリアたんとラルたんを誘ってデートにでも行こう。

そんな計画を立てながら、スバルは遅めの睡眠をとるのだった。

## おまけ 『百合風呂』

にくき太陽の光が自分のほっぺたをヒリヒリと焼いている感覚のせいで、ラルトレアは目を覚ました。

「んうー……」

寝ていたというより、精神的な疲れのせいで意識を手放してしまっていた。度重なる六十式以降の血霊器具使用による副作用みたいなものだった。

こればかりは仕方のないこと、と割り切って、ラルトレアは大きく伸びをしながら起き上がる。乱れたベッドシートにぼつりと女の子座りして、昨夜の記憶を思い起こす。

「我は一体何を………あ、逃げられたのだ」

離すまいとがんじがらめにして添い寝してやろうと思っていたのに、自分の方が気を失ってしまうとは。

まあよいか、と気を取り直してラルトレアは窓辺へと向かった。そこに置いてあるグラスに、少しぬるくなっている血をボトルから注いでやる。

「平和なのだ……」

しかし望んだ平和ではない。

ラルトレアが望んだ平和通りなら、今このロズワール邸にはいない。スバルと二人きりで、誰にも邪魔されずにゆっくりと、のんびりとしていたかった。

誰も住まなくなった城でも乗っ取って、ずっとずっとスバルと二人きり。

だが、それは断られた。

スバルはエミリアのそばにいたいらしい。

力づくで奪おうとしても拒絶され、エミリアを取り込んでしまえばパックの仕返しにあう。

影の中にひきこもって、いくら考えてもどうすればいいか分からなくなる。

せめてスバルの命を守ろうとして力を使っている間に、血霊器具のせいで精神が摩耗していった。

こんなに連続して力を使ったのは聖騎士団との争い以来だった。

そこまで自分がスバルを思い続けているのに、出てきた答えは「エミリアが好きだ。ラルトレアも受け入れる」だ。

「我が……我を……」

自分の気持ちをこんな簡単に弄ぶ男がいるとは。

スバルという男を考える。

あの男はこの世界に来て初めて声をかけてきた人間の雄だ。特別頭が良いというわけでもなく、腕っぷしが強いわけでもない。

異世界の知識を持っており、そこには興味がわくが、それで好きになるほどラルトレアは酔狂ではない。

なら何か。

タイミングだ。

ラルトレアが弱っているときに、こんなやつが居たらな、と考えている通りのやつがやってきたのだ。口がよく回って、お調子者で、言わせてもいないのに可愛い美しいと褒めてくる男だ。

それが完璧のタイミングで、完璧の仕草でやってきた。それがスバルだった。

出会ったとき、ラルトレアは珍しく時の運というものを信じ始めたほどだったのだ。

そして、今もなおここまで一緒になってついてきてしまえば、ラルトレアはもう引き返すことはできない。

ここでスバルを失えば、ラルトレアはこの世界で生きる気力を失う。

それだけが嫌だ。それだけは避けたい。

——だから、こうやってスバルの甘言に騙されているフリをしている。

今のスバルに、エミリアと自分をどちらとも困うと言われても、ラルトレアはうんと頷けない。でもそうしないと、スバルの猜疑心は解けない。

あれだけ暴れまわってしまったのだ。

覚えていないとスバルには言ったが、ほとんど覚えている。

青い髪のメイドを殺し、その片割れもロズワールも殺し、スバルを力で支配しようとした。

そのあとエミリアを取り込んだり、またもやメイドやあの金髪のちっこい女を殺そうとした。

ラルトレアにとって、スバルが大事にするロズワール邸の奴らと近くの村落の住人たちの命は——等しく価値がない。

ラルトレアにとっては、スバルがいればそれだけでいい。

他のモノなんてどうでもいい。今まで欲しいものは力づくで奪ってきて、手にしていないのはスバルだけなのだ。

「こうも感情を高ぶらせるのがスバルの意図なら、大した男なのだ……」

今はこう大人しくするつもりだ。

まずはスバルを安心させて、ゆつくりと時間をかけて考えることに

しよう。

朝日を浴びるラルトレアの顔に、さやかな笑みが刻まれる。グラスに口をつけてその中身を喉から胃へと流し込んでいった。

そんな至福のひと時を邪魔するノック音がひとつ。

「ラルトレア……起きてる？ 入るわね」

不躰にも扉を開いて姿を見せたのは、恋敵となっている銀髪の女。後ろで長いその銀髪をまとめており、髪の間から少しとんがっている耳が見えている。

恐る恐るといった感じでエミリアは入ってきて、すぐに窓際にいたラルトレアを見つける。予想していた通りに、大きく目を見開いていた。

「思い通りの反応をするのだ。面白みの欠片もないぞ、エミリア」

「えつと、え？ ラルトレア、よね？」

「我以外に誰に見えるのだ」

ふん、とそっぽを向けば、鏡に映る自分の姿が目に入る。

力で支配してきていたために、今まで容姿や体格になどを配ったこともなかったが、普通の人類社会ではこういう反応をするのがふうなのだろう。

今の自分は、エミリアと似たような体格をしている。

以前は140センチほどもなかった身長が、160近くになっていくし、髪型もおかっぱ頭から腰にまで伸びる黒髪をそのままにしていた。

あとは胸が少しふくらんで顔のパーツが少し大人びたというだけで、瞳の色が変わったわけでも、声が変化したわけでもない。

服装もいつものダークドレスのまんまだ。

「何なのだ？ 我に何か用か？ 用がないなら後にするがよい。我は

風呂に入りたいのだ」

「いろいろ聞きたいことがありすぎて……あつ、ちよつと待ってラルトレア!」

「お前の相手をしているとムカムカするのだ」

エミリアがこんがらがった頭の中を整理しているうちに、ラルトレアはその横をすり抜けて部屋を出て浴場へと逃げる。

途中で会った青色髪のメイドに驚かれながらも、風呂に入ると用件を伝えるとすぐに準備に取り掛かってくれる。

追ってくるエミリアを気に掛けることもせず、ラルトレアは服を消して広い浴場へと入った。

清潔に保たれた浴場だ。まだ誰も使っていないのか、頻繁に清掃されているのか、一滴の水滴がっていない。

広々とした豪華な浴槽にはられたお湯から湯気が立ち上っているだけだ。

「有能なメイドだの。お前はよくやっているのだ」

「ありがとうございます、お客様。どうぞごゆっくりお楽しみください」

レムとか何とかといったメイドに偉ぶるためにわざとそんなことを言っ、ラルトレアはそろりと湯の中につまさを付けようとして

「——あ、ダメよラルトレア。最初にかけて湯をしなきや」

後ろの方でドアが開いた音がしたかと思えば、またそんな一言。鬱陶しそうにラルトレアが振り向くと、半裸のエミリアがいた。

また一緒に湯につかる気なのだろう。

ラルトレアはエミリアの制止を無視して、膝まで浴槽に突っ込む。

「ふん、我はニンゲンではないと言っただろう。半端者めが」

「もう……次は許さないんだからね」

「次など無いのだ！」

こんなに拒絶しているのに、エミリアは全くもって退かない。

ラルトレアはそんな反応にいじけながら、湯の中に肩まで肉を浸して、浴槽のふちに頭をのせてくつろぐ。

そこへエミリアがやってきて、ラルトレアの対面へと座ってきた。

「……えっと、ラルトレア。体の調子は大丈夫？ どこか変だったりしない？」

「我は常に万全だと前にも言ったのだ」

「でもずっと眠ったままだったし……一体、何があったの？」

聞きにくそうに、エミリアが首をかしげて聞いてきた。

四日間ほど意識を手放したままだった。その理由を知りたいのだろうが、それを伝えるにはスバルの力をまず説明する必要がある。

「スバルには何か聞いていないのか？」

「聞いたんだけど、よく分からなくて……スバルも答えようとしてくれてたんだけど、急に苦しそうになって聞けなかったの」

「ふうん……」

スバルの力は絶大だ。

ラルトレア討伐の時に聖騎士団が使っていた地点蘇生よりも遥かに強力な生き返り。

時間さえも巻き戻し、ある時間点へと記憶を保持して蘇るのだ。

その間の記憶は誰も覚えていない。なにせ無いことになった記憶なのだ。それをスバルと、ラルトレアだけが覚えている。

「お前にはわからないのことなのだ」

「……………そう」

「スバルの苦しみを分かかってやれるのは我だけなのだ」

これだけは覆らない。

いくらスバルがエミリアに好意を向けようとも、スバルの力はエミリアには分からない。いくら伝えても、エミリアはそれを完璧には理解できない。

理解できるのはラルトレアだけだ。

だから、スバルの力の事もエミリアに伝える気は一切ない。

「どうして？ どうしてラルトレアは……………ううん、ラルトレアはどうしてスバルと一緒にいるの？」

無粋なことを、エミリアが尋ねてくる。

湯の中に見えるエミリアの乳房を憎々し気に見つめながら。

「我がスバルを愛しているからなのだ」

エミリアの、ふくぎつな表情。

ラルトレアは血霊器具、『吸血変化』を使って胸の大きさを少しずつエミリアと同じくらいに近づけていった。

「素敵、よね。そういうのって……………」

「……………」

エミリアが口を閉ざしてまた何か考え始める。

風呂にはもうちよっと浸かりたいところだったが、ここにも居心地が悪いだけだ。

「……………ふんっ」

ラルトレアはそつと浴槽から抜け出して、そのまま浴場を後にした。

ぽたりぽたりと、水滴が床に垂れ落ちるのを見つめながら、脱衣所で突っ立っていた。

エミリアに事情を話しても良いとは思う。

エミリアと仲良くしても良いと思う。

だが今のラルトレアにそんな余裕はなかった。

## おまけ 『真面目な話』

昼食のあとのひととき。

ロズワール邸最上階、中央の部屋に屋敷の主とそのメイドが階下の景色を眺めていた。

アールム村の方角へ街道を歩いていく三つの人影。そのうち黒髪の少年が両脇を歩く二人の少女へと身振り手振りして話しかけていた。昼食の時の会話から察するに「でえと」というものに興じるつもりだろう。

屋敷の主はその膝に座る桃色髪のメイドへささやく。

「いばらの道を進むよおだね、彼は。あの身のひとつで何を成し遂げるのか。まあ、今のところは最小限の被害で済んだといえるとも」

「しかし最後にはロズワール様のお手を煩わせてしまい……」

「最後の後始末なんて大した手間でもなあいんだよ。それより——スバルくんのその後の経過はどうだい？」

「肉体的な損傷でいえばかすり傷程度でしたのでレムが対処しました。ただ、マナの枯渴の方はベアトリス様が処置してくださいました  
が……」

「完治はできなかった、ということだあね。あの子が肩入れするのも不思議な話だが、治しきれないだなんて一体、あの剣は何だったろおーね」

「ベアトリス様は呪いに近いとおっしゃていましたが……」

「あはあ。あれこれ推察するよりもスバルくんに渡した本人に聞いた方が早いんだけどねえーえ。どうにも私は嫌われてしまったようだよ。あの姿になってからというもの、口を一切聞いてくれないというのは悲しいものだ」

屋敷の主、ロズワールは食客として遇している黒髪の少女、ラルトレアへと視線をずらす。スバルの斜め後方を歩いてつまらなそうに空を見上げている彼女。ロズワールが一度屋敷を離れる前に見た姿

とは大きく変化している。

幼い童子からエミリアと同じくらいの少女へと変わったラルトレアはスバル以上に得体が知れていない。

「ただ、彼女の様子を見る限りではスバルくんを失うのは本望ではないようだあーね。実際、ベアトリスほどの治癒魔法の使い手がいなければ、仮死状態から復活できていないんだからねえ。それで、壊れかけのゲートを治すにはどうしたほうがいいんだろあーね」

「より高位な治癒術師に見てもらおうしかない」と

「大精霊様とベアトリスの見立てなのかな?」

「はい」

「ふうーむ。王都にいる治癒術師に依頼するしかないよおだね。スバルくんは我が家の使用人であり、二度も危機を救ってくれた恩人だからねえーえ。まあカルステン家と交渉する必要があるか出てくるかもしれないが、そこはエミリア様を買って出てくれるだろあーね」

次にロズワールが目を向けたのは、スバルの横を歩く銀髪の少女。王選候補者である彼女はスバルに助けられた恩があり、その負い目を感じているところがある。ゲート修復に治癒術師の手が必要となれば、カルステン家との交渉に出向いてくれるだろう。

「そうだ。ロズワール様にご報告しなくてはならないことが……」

「なんだい?」

「レムのことですが」

「スバルくんが体を張ったのだから、少しは疑心もほぐれたと思ってただけだお?」

「ですが、レムはまだ疑っているようです」

「それはまたどうしてかあーな?」

「バルスが少々、うまく対処し過ぎたためかと。起こることをあらかじめ知っていたかのようにも見えました。そこが引つかかるのでしょうか」

スバルは最初からあの子犬がウルガルムであるのではないかと疑っている節があった。ウルガルムと対峙するためにあの剣を用意して、村を見て回っていた。

ロズワール邸に来て日が浅いスバルがそれに気づくにしては勘が良すぎるのではないかとラムでも思っていた。

自分が思うならなおさら、双子の妹は疑ってしまう。

「まーあ、あの子が近くについて呪いに気づく前に、スバルくんは動いていたそうじゃなあい？　まだ疑うのも不思議なことでもないのかな。私としてはスバルくんを問者などと勘繰るつもりはないんだけどねえーえ。でもまあ、言ったところで疑いは止められないだろうね」  
「そう、ですね。あの子が早とちりする可能性が低まったとはいえ、あることにはあります」

「釘は刺しておこう。あとはエミリア様だね。スバルくんも大変なことだ。これからまーあた忙しくなる。苦勞をかけるけど、ラムもレムもよろしく頼むよお？」

「仰せのままに。この身はあの炎の夜からずっと、ロズワール様のものです」

スカートの裾を掴み、その場で膝を折って小さなお辞儀。

「此度の王選、なんとしてでも勝たないといけない。私の、目的のために——龍を殺す、その日のために」

剣呑な声が生まれては消えていく。

のんびりとした昼下がりの出来事。黒髪の少年と二人の少女が近くの村へと遊びに行っているときの一幕。

## おまけ 『けーたい』

ロズワール邸・ラルトレアの居室。

スバルに誘われて近くの村落へ「デート」とやらに付き合った翌日の夕方、地平の彼方へと沈んでいく太陽にラルトレアは目を細めた。昨日のデートというのが楽しくなかったといえはウソになる。

別に花畑や美しい風景に心を奪われるほどラルトレアは純粹ではないが、スバルの熱意というか盛り上げようとしてくれる心遣いが心地よかった。

ただまあ、エミリアも一緒だったのだが。

「……………。我はのせられておる……………のか？」

思ったほか、不快ではなかった。

途中でエミリアを殺したくなるのではないかと思っていたが、エミリアの態度もそうだが、自分がスバルについた嘘がもしかすると効いているのかもしれない。

スバルを許し、エミリアに好意を寄せることを許すという嘘を。

ついた嘘が自分を変え始めているのではないか、とラルトレアは真面目に本気で考えていた。

「いいや、だめだ……………」

やっぱり自分だけが良い。

——いやそれでも……………」

「くう……………悩ましい……………」

悩んでも時間の無駄だ。

ラルトレアは思考を切り替えていく。

どうやったら穏便に、スバル自身に気づかれることなく、スバルを

自分のものにできるかということ。

スバルから自ら、ラルトレアがいなきやだめだと言わせるのだ。依存だ。

スバルに依存されればいい。

ラルトレアがスバルに勝っている部分などいくらでもある。

まずはこの美しい容姿。

ラルトレアは確認するように、自分の横髪を一房つまんで、くるくると人差し指で回し始める。

「なにか違うのだ……もつと、こう直接的な……」

何かが浮かんできそうな気配がきた。

だがこういうときに限って邪魔は入るもので。

それは部屋の外、扉の方からノック音としてやってきた。

こういうときに来る相手は大抵決まっている。

「エミリアであろう？ 入ってくるがいい」

「うん。入るわね、ラルトレア」

姿を現したのは、白を基調とした衣服に身を包む銀髪のハーフェルフだ。

その髪の長さも、胸の大きさも背丈も今のラルトレアとよく似ている。

窓辺に立っていたラルトレアはベッド脇にあった椅子に腰かけて、エミリアへ首をかしげる。

「我に何か用か？」

「えっと、スバルのことなんだけどね」

「スバルがどうかしたか？」

「ラルトレアが寝ている間に、スバルが倒れてたって話はしたわよね？」

寝ているというよりは、意識を手放していたという表現の方が正しい。  
そして、ラルトレアはエミリアが言わんとしていることがわかっている。  
わかっていて、ラルトレアは放置していた。  
スバルの、体のことだ。

「スバルのゲートは今壊れる寸前の状態になってる。魔法を使ってもいないのに……」

「我にはどうすることもできん」

「ラルトレア……」

スバルがああ剣を使ったことで死んだのなら、それはそれで構わない。  
い。

なにせスバルは死に戻りできるのだ。

どの時点に戻るかは分からないが、今の状況が最善ではないラルトレアにとっては戻ってもいいと思っている。

そして、ラルトレアはどうすることもできないのも事実だ。

肉体的な損傷ならいくらでも治すことができる。しかしラルトレアが力を使い過ぎて心が弱くなっていったように、深い内面のことを治す方法を知らない。

「我にはゲートとやらが何なのかさえ分からんのだ」

「でもスバルにあの黒い剣を渡したのはラルトレア、なんでしょ……？」

「間違いないのだ。だがあれはおのれを削って斬撃を放つ代物。何が代替物になるかは、我にも分からないのだ」

「そう……でも、そういうことだったらそんな危険なもの持たせてたらダメよ……」

「我の知ったことではない。後生大事に保管しているのはスバルなの

であろう？ だったら、口を出すべきではない。そうは思わんのか？」

「……ごめんなさい、ラルトレア。私にはよく分からないわ」

心底スバルのことが心配だというような顔をするエミリア。

その裏側には何かあるのかと考えても、それが無駄だという結論にラルトレアは行きつく。

エミリアは本気で心配しているのだ。

恩人にあたるスバルに、何か自分が報いてやれないかと。

「一度、王都へ行つて治癒術師にスバルを見てもらおうと思うの」

「そうか」

「ラルトレアはどうするの？ 王都へ来る？」

「我はそうだな……」

王都へスバルへついていつて観光に興じるのもいいかもしれない。

そんな考えがふと浮かんでは消えていく。

そして、ラルトレアの頭に邪悪な考えが生まれ始めていた。

「そういうえばエミリアよ、王選の件はどうなったのだ」

「えっと、そのことなんだけど……」

エミリアは近々、王城へと呼び出されて王選について話し合いが行

われるということを語ってくれた。

それを聞いて、ラルトレアの顔に薄い笑みが刻まれる。

「ふむ、そういうことなら我はこの屋敷で待つことにするのだ」

「わかったわ」

ラルトレアはあえて王都へついていかない。

一旦スバルと離れるべきだろう。

離れて、自分のありがたさを自覚させてやる。

自分がいないと前へ進めないようにしてやるのだ。

力だ。

スバルに足りないもので、スバルが欲しているもの。

ラルトレアは存分にスバルに力を与えて、自分に依存させればいい。

「くふっ、スバルの体がよくなるといいの」

「ラルトレア……?」

椅子から立ち上がって、ラルトレアは足で動くのも鬱陶しくて影の中に沈んでいく。

その様子を呆然と見つめるエミリアだけが取り残される。

「……わからない……よく、わからないよ。ラルトレアもスバルも……」

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★  
★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

ラルトレアは屋敷の廊下を影の中に潜りながら進んでゆく。

目指すはひとつ。スバルの部屋だった。

スバルが使用人の務めを終わって、夜に自室にこもるのを見計らって会いに行くのがここ二、三日の日課になっていった。

「くふふっ」

自然と笑みがもれながら、ラルトレアはスバルの居室へとたどり着き、影の中から姿を現す。まだスバルは戻ってきていない。

だがこのスバルが暮らしている空間はとても心地よい。

ラルトレアはベッドに腰を下ろして、机の上にスバルの衣服が置いてあることに気づいた。

「む……？」

白いシャツとスバルが出会っていたときに着ていた「ジャージ」というものだ。

「……………！」

いつも同じことをしてはスバルに飽きられてしまうかもしれない。

そんな思考回路から、一つの選択肢が浮き上がってくる。

ラルトレアが素早く着替えを済ませ、ふたたび影の中へともぐりこんだ。

……。

……………。

……………。

……………。

……。

「今日も一日を労働に費やした……ラムにこき使われ、レムに時折冷たい目で見られながらも俺はこうして……」

執事服のまま、スバルは自室へと戻るなり、床でうずくまっていた。

日々が充実している。

ちゃんとスバルは生きているし、何も災いがふってこない。

幸せな日々だ。

エミリアとラルトレアでデートに行つて、かなりしんどかったけど何とかやり切っている。

幸せな、はずだ。

「足りていない……イチャラブがもっとこう！ イチャラブが足りない！」

スバルの周りにはこうも美少女ばかりだというのに、ふれ合いがもっとあってもいいというのに、なぜか満たされていない。

スバルは使用人として屋敷の仕事があるし、エミリアさんは王選の勉強とかで忙しい。ラルトレアとは会うには会うのだが、最近は夜に血を吸われるばかりであり話はしていない気がする。

「ラルたんは今夜は来ねえのかな？ いや、もうそろそろ俺の限界なんだよな……」

成長したラルトレアの吸血に付き合っているものの、最初こそドキドキしまくって無我の境地へと達していたのだが、今ではただただ貧血気味で困っている。

「血を吸われるだけじゃなくて、もっとこうアレなんですよラルたん様！」

自分だけの部屋で、屋敷内にいるであろうラルトレアへと祈る。

スバルの欲望にまみれた願望は、影の中へとしっかりと届けられているのだが、スバルはまだ気づいていない。

「はあ。というか、違う意味でも限界だ……オカズがありすぎているのにオカズを食べられないみたいなのこの状況。オカズに使ってしまうと本気で悟らせてしまわれそうだと俺の第六感が告げている……ッ」

スバルはそう言いながらも、ダイナミックに執事服の上着だけを脱

いでベッドへと放り投げた。

替えはあと何着か用意してくれているはずだ。

そのままスバルはベッドへと横たわって、気を静めるために天井をじっと見つめる。

「……………」

深呼吸。

「すうー……………はあー……………落ち着け落ち着け。今だけはまずい。今だけはまずい気がする。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。な——」

無我の境地へと達するために唱え始めたスバルの耳元へと——

——ふうーつと。

生暖かい吐息が吹きかけられる。

「——そこかラルたんツ!!」

一瞬でベッドから跳ね上がって、一息で床に音もなく着地。

臨戦態勢へと移行して、よくわからないポーズを構えてベッド上のラルトレアを見て、思わず鼻血が出そうになった。

「……………それ、俺の……………」

「借りたのだ」

「あ、そういうことかなるほどなるほど……………ええっ?!」

白いシャツを着て、下にスバルのジャージを履いたラルトレアがベッドに座っていた。

しかも綺麗な黒髪を結って、ポニーテールみたいになっている。

赤い瞳がスバルを包み込んで離さない。

「……まじっ！」

「まじ、なのだ。スバル、労働などに励んでいるおまえに我が労を労いにやってきたのだ」

「やばい……泣きそうだ」

ラルトレアが何を思っただんな恰好をしているかは分からないが、スバルには今のラルトレアが理想を体現したハイパー墮天使に見えていた。

ラフな恰好をしたラルトレアというのがまず珍しい。それにポニテとなれば破壊力も段違いだ。

「……ラルたん、その髪型は……」

「ああ、これか。エミリアがくれたのでな、気が向いたのでつけてみた。似合っておるだろう？」

「百万ドルの夜景より価値があるぜ……」

「何を言っておるのだ？」

首を斜めにかたむける姿もまた愛らしい。

そして、ふつとまた表情を変えてスバルを引き寄せて、ベッドへと座らせられるスバル。

ラルトレアは本当に掴みどころがない、とスバルは改めて感じさせる。

可愛いし女の子っぽいところもあるのに、何を考えているか、次に何をしでかすか分からない怖さもある。

そんなアンバランスさがラルトレアなのだろうとは思う。

スバルはまた怖さ半分、恥ずかしさ半分のドキドキ感で膝に手をついてじっと固まることにした。

「よし、我が癒してやるかの」

そう言っただ、スバルの背後に回り込むラルトレア。

ベッドがきしむ音がして、何やらエロい雰囲気は漂い始めるのを感じるスバル。鼓動が早まっていき、そのラルトレアの手がスバルの首筋に触れる。

びくと、反応するスバルを笑う小さい声が聞こえてくる。

そして——もみもみ、と。

「どうだ？ 気持ち良いか？」

「スウーハア……スウーハア……あ、ああ。抜群だ……」

絶妙な力加減で肩をもんでくれるラルトレア。

肩から肩甲骨へと、背中の筋肉をほぐしていつてくれる。首筋も揉むようにほぐされて、疲れがどっと溶けていくような感覚だった。

「さんきゅーラルたん。だいぶ疲れが取れたわ」

「くふつ、それはよかったのだ。それでどうしたのだ？ 何やら思い詰めていたようだの？」

「え?! あ、いやラルたんの可愛さを思い出して悶絶していた所だし。いやー見られてたか、恥ずかしー……」

「……………」

何とか誤魔化そうとそっぽを向きながら話すスバルの顔を、ぐいと首を回してのぞきこんでくるラルトレア。

じーつと美少女の視線と顔がすぐ近くにあるのを感じてスバルの顔が熱くなる。

ほん、とラルトレアはスバルの太ももに手を置いて。

「嬉しいの。ま、我を褒めたたえるのは当然のことなのだ。でも、スバルに言われるのが一番嬉しいのだ。愛しておるぞ、スバル」

「——ッ！」

スウーと荒い鼻息を天井へと吹きかけているかのよう顔を上にあげたまま下に下そうとしないスバル。

ラルトリアはそのままスバルの首筋を這うように口づけしようとして、手元に固い感触があることに気づいた。

「……？ 何なのだこれは？」

太ももあたりに、手よりは少し小さな固いものがある。

どちらかといえば長方形に近く、スバルのズボンの下からそのふくらみを主張している。ラルトリアはそれをニギニギと掴んで確かめながら、ズボンのポケットへと手を突っ込んで引っ張り出す。

「変わったものなのだ。これはスバルの世界のものか？」

「……………ほえ？ お、おう。それはケータイ電話っていう、何ていうかいつでもどこでも離れた相手と連絡取れる機械だな」

「ほおー、機械仕掛けか。我にはさっぱりわからぬな」

ラルトリアはその銀色に光る長方形の物体を弄んでいた。

スバルが言うように、それは折りたたまれており、ぱかっという子気味良い音とともに開くことができた。

開ければ、下半分はぼちぼち言う突起物がたくさんあり、上半分は何かを表示しているようだった。

「ケータイ電話の中でもガラケーって言ってな。いやまあ俺ガラケー以外をよく知らないんだけど。写真撮ったり、メール送ったり、電話したりとかでき——」

「——ほお！ 何だかよく分からぬが面白そうなのだ！ 今使ってみるのだ！ はやくするのだスバル！ どう使うのだ?!」

興奮気味のラルトリアがケータイを握ったまま離さず、説明を要求してスバルへときゅうぎゅうと密着する。

「めちやくちや乗り気だなラルたん?! でもこの世界でできることって写真撮るくらいなんだよな。写真撮るか?」

「うむー。とるのだ!。それでスバル!」

「?」

「シャシンって何なのだ?」

スバルが素人同然の、ロム爺やフェルトにした説明と似たようなことを言うと、ラルトレアはなおのこと目を輝かせて詰め寄ってきた。

スバルはカメラモードに切り替えて、高い位置からラルトレアとのツーショットを撮ることにした。

「まさか美少女と写真を撮る時が来るとは——わ、わかったって。じゃあ、はいチーズっ」と

「くふふっ」

カシヤツとフラツシユのあと、スバルはうまく撮れているかどうかケータイの画面を確認する。

画面にはでかでかと、スバルとラルトレアが恋人のように密着している画像が映し出されている。瞳の赤い、黒髪の美少女が自分を慕っているという状況がいまだに半信半疑でいるスバル。

見れば見るほど現実感がなくなっていく気分だった。

「ほおー、これが文明の利器というものか。我はこの世界ではなくスバルの世界に行きたかったのだ」

心の底から感心したといったふうなラルトレアがスバルが持つケータイに釘づけになっていた。ラルトレアがあまりにも前かがみにのぞき込むために、スバルの視線がある空間へと引き寄せられていた。

ラルトレアが着るスバルの白シャツ、その胸元の薄暗い空間。

まるでブラックホールか何かのようにスバルの視線がそこから離れない。無我の境地など、その空間の前では無力だった。

「聞きたいことが山ほどあるのだ。はいちーずとは何だ？ この機械はどういう仕組みなのかということと、あとは何だ。これはスバルの世界ではありふれたものなのか……ますます興味がわくの……む？ どうかしたのだスバル？」

「ん？ スバル？ スバル？」

ゆっさゆっさと揺さぶってみても、当のスバルは完全に硬直してしまっていてビクともしない。

ラルトレアは死後硬直並みに動かなくなったスバルをベッドへと寝かしつけて、自分もまたその隣へと身を寄せる。

「きひっ、スバルは変なやつだの。まあそれもよいのだ」

ラルトレアは目を閉じて、スバルのほっぺたに唇をくっつけた。